女學世界定期增刊
第二巻第拾貳號

# もみぢ

東京 博文館發行




三井呉服店
東京電話本局 特五二五、一二一七 一八六〇、二三三三
大阪電話東 特四七三 一六五〇
新柄流行の反物品々階上階下にこらず陳列し尚休憩室をも取設け候間ゆる〳〵御遊覧奉願上候
地方よりの御注文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送可仕候尚注文案内書も有之候

女學世界秋季增刊 第貳卷第十二號

# 初もみぢ目次

## 敍事文



## 消息文



## 名流雜俎



## 彙報

# 自邇集平仄編 四聲聯珠

元帥侯爵山縣有朋君題字
子爵榎本武揚君序文
清國紹古英繼君校訂
陸軍少將福島安正君編輯

本書は福島少將が曩年歩兵大尉として清國北京に在勤せらるゝの日公餘を以て編著せらるゝものに係り滿州旗士紹古英繼氏の校訂を經たるものなり本書の特色とする所は英人威德氏著はす所の語言自邇集中の平仄編に基き章首に同字異聲一音殊聲のものを標出し以て音聲の起源變化を分ち又其字を文中に嵌入し以て其運轉作用を示すにあり而して書中載する所は彼國人情風俗より以て軍國重事に至る迄網羅蒐討殆と餘蘊なし又文中事實の盡し難きものは一々章末に語釋を附し俗語俚言の解し難きものは別に俗語註釋一卷を編し以て學者に便せり故に獨り語學書として稗益あるのみならず併せて清國官私百般の事情に通するを得べく所謂一箭兩鳥の益ありといふべし近時清國語學書の著少からずと雖本書の如きは蓋し清國語學書中空前の大著と謂ふべきなり

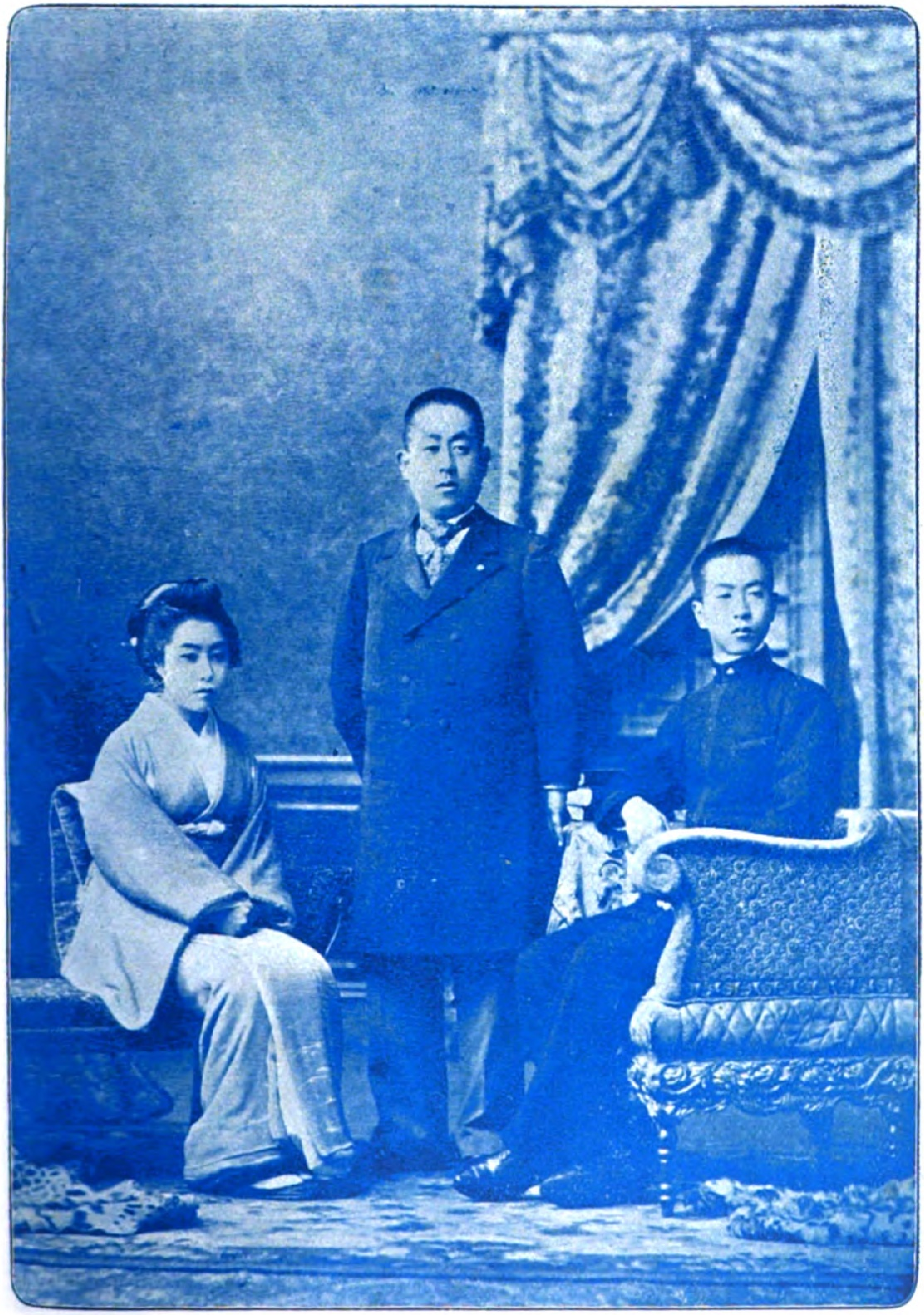
全壹冊洋裝總クロース
金字入七百八十頁
定價金貳圓五十錢
小包目方八百匁

發兌元 東京本町 博文館



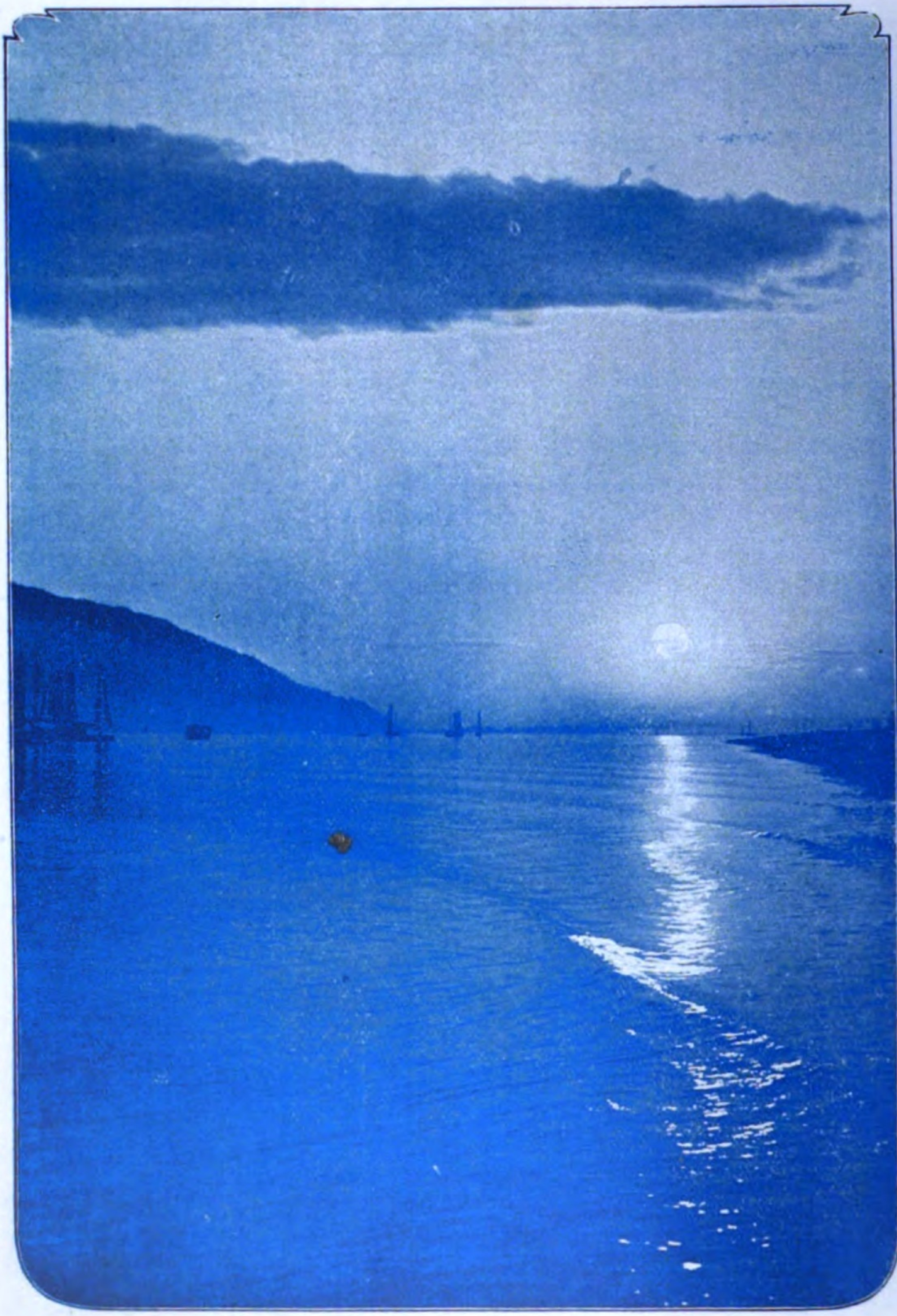
小川一眞製

獨逸皇室



德川公爵の家庭

陽夕の浦子舞



懸賞寫眞第貳等賞

(市田幸四郎氏撮影)

# 泰西名畫



チロデー畫伯の筆アッタラの死

（ルウブル宮備品）

## 新刊發賣

# THE STORY OF DON QUIXOTE.

文學士畔柳芥舟君解說
英學新報社編輯部校訂

英文 **頓機翁物語**

（製本出來）

袖珍全壹册
洋裝美製本
正價參拾錢
郵稅四錢

西班牙の文豪セルヴアンテスの傑作ドン、キホーテは世界文學の寶典なり、これ實に歐洲の武士時代を葬る吊鐘なりき。一介の平民を以て錆槍瘦馬、大勳爵士に擬する洒落の好漢キホーテ、從臣に擬する常識的人物バンザこの兩者の行動を描き出す處、騷壇曾て見るの大ユーモアなり。苟も歐洲文學に志あるもの必ずや此書を繙かずんばあらず、然るに此書素と尨然たる一大册子を成し容易に讀了するに苦しむ、即ち本社は爰に平易通俗なる英文を以てこの大著の梗概を記述したるものに就き、更に日本英學生の知らざるべからざる部分を摘拔し、加ふるに解說を以てし一册瀟洒たる美本となして出版す。

發賣元 東京日本橋區本町 博文館　東京神田表神保町 東京堂

（甲の二）

# The English Student.

# 英學新報

毎月二回
一日十五日
定期刊行

定價
壹部金八錢〇拾貳部（半ヶ年）前金九拾錢〇貳拾四部（壹ヶ年）前金壹圓七拾錢〇郵稅壹部五厘宛

**第十九號** 八月十五日發行要目

社說 **言靈論。日英婦人同盟の一擧**

英國女學生書を馳せて日本女學生との交際を求む **英國女學生**の日本女學生に與ふるの**書簡**貳種

講義 **英語の研究法** 本田増次郎述

**時報**數件 **逸話**數種

會話 **鎌倉海濱**簡易會話 米國**大學生**

註釋 **夏の雨** ロングフェロー作 **武道士** 新渡戸博士著

飜譯小說 **金色夜叉** 英譯 **哲人の死期** クオヴアヂス和譯

**英作文** 諸國物語答案修正

雜錄 ドンギホース解說（畔柳文學士）。カーライルの秘事、笑話、讀者の領分……其他。

**英國皇后陛下**の**總裁**し玉ふ**倫敦**女子大學校**學生**數十名書を裁して**日本女學生**との通信交換を求む、**本誌**爰に仲保者となり**日英婦人聯合の美**を擧げんとし**本號**即ち其委細を説明し而して**英國女學生**の贈り來れる**書簡**は大に讀むべきものなり

---

英學新報社
## 近刊書類

英文 **近江聖人**
村井弦齋君原著 在米國 高柳龍吉英譯
洋裝全壹冊 袖珍美製本
正價貳拾錢 郵稅四錢
*THE SAGE OF ŌMI.*

英文 **從軍記者**
米國戰事通信者原著 櫻井鷗村校訂詳註
洋裝全壹冊 袖珍美製本
正價貳拾錢 郵稅四錢
*A WAR CORRESPONDENT.*

---

發兌元 東京神田區表神保町三番地 **東京堂**

●賣捌所全國各地諸雜誌販賣●

（甲の三）

# 帝國百科全書

貴族院書記官兼內務省參事官
日本法律學校行政法講師法學士 小原新三先生著（既刊）

## 帝國百科全書第八十七編 行政法汎論

上製五拾錢 郵稅拾錢
並裝卅五錢 郵稅八錢

凡そあらゆる法律中に於て其範圍の浩汎なるものは行政法也、其實積の尨雜なるものも行政法也、其活動の變幻なるものも行政法也、而して國運と人民權利との消長に關すること最も大なるもの、一も亦行政法也然れども行政法學の發達は極めて晩近の事に屬し、之に關する學者の見解の如き一途に出るもの少く却て人をして之か觀念を捕捉せむと欲して而も茫然自失せしめざる者甚稀也我國に於て更に困難なる事情の一として擧げざるべからざるは之に關する其の著書の缺乏せるに在り、著者は現に立法及行政の二要部に在り且つ行政法に關し教鞭を私立學校に取らる丶もの數年夙に博識にして見地の卓拔なるを以て名わり而して文章は先生の最も得意とせらる丶所なり本書の行政法理を斷するは恰も快刀亂麻を斷するが如きものあり學者及實際家の志を行政法の研究に寄せらる丶士の苟も一讀せざるべからざる良著也

### 續刊

●養蠶及製絲論 農學士 井上正賀先生著
●心理學 文學士 速水滉先生著
●行政法各論 法學士 小原新三先生著

發兌元 東京日本橋本町 博文館

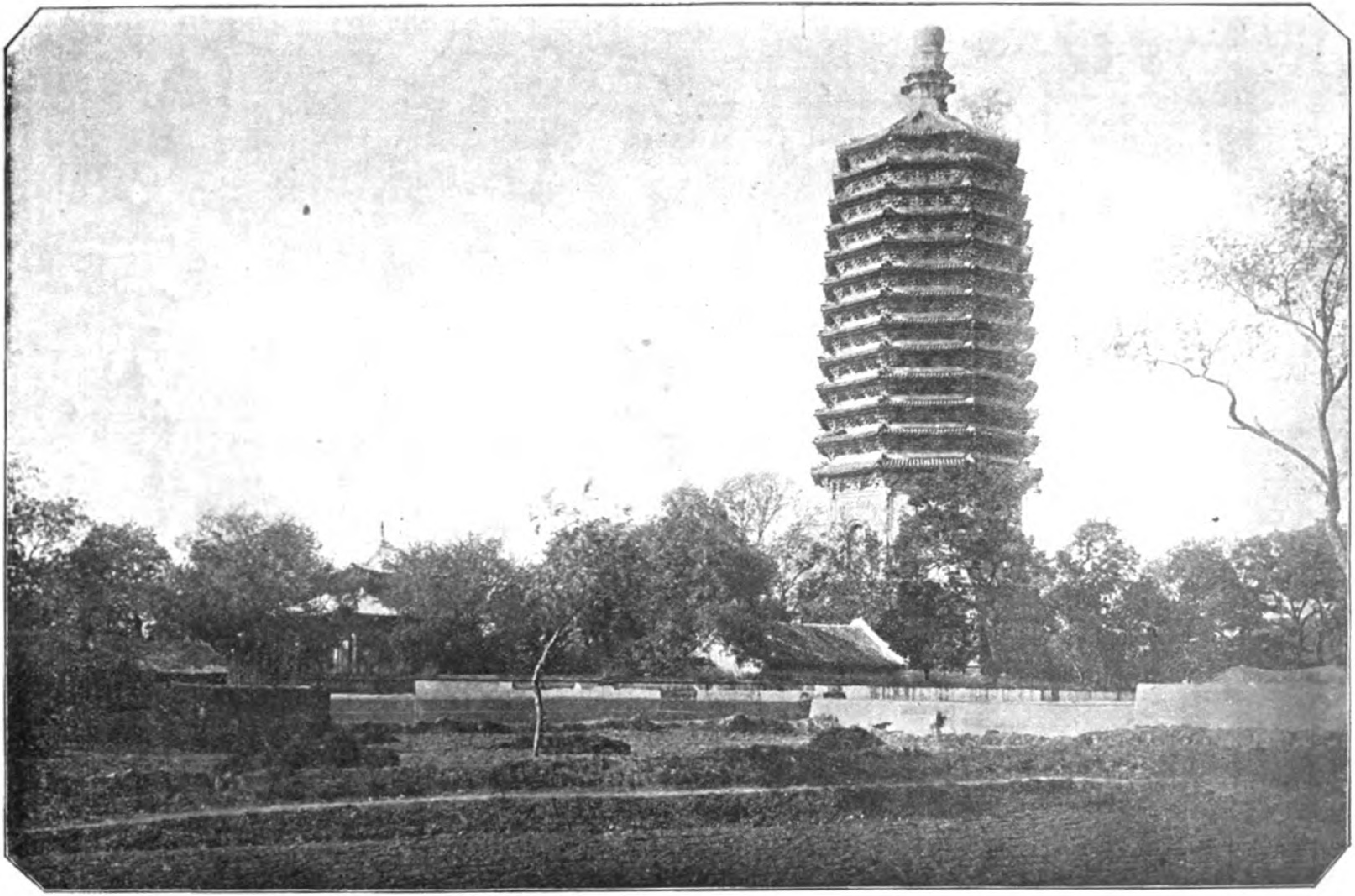
（甲の四）

# 泰西名畫



佛國畫伯ペリイン氏筆

# 北京風景



（隋の煬帝の建立）

天寧寺の塔

法學博士 有賀長雄著（東京專門學校藏版）

早稻田叢書

# 國法學

全二冊

有賀博士の名著國法學は曩に上卷を發刊し江湖の喝采を博したるが今や**下卷**稿なり全部**完成**を告ぐるに至たり今下卷の**特長**とする所を擧れば第七篇に於て自治制の國家に於ける地位を明かにし第八編に於て法律命令の原義を說き第九編に於て大權行政及び準則行政を區別し第十編行政監督の部に於て訴願幷に行政裁判に關し政府が本年議會に提出したる法案に就き長短を論じたる等他の學者の未だ論及せざる處を說明し其學徒を裨益する至大なり蓋し**上卷**と共に**斯學**の**一大寶典**たらん

上製脊皮金文字入
紙數千三百餘頁
上卷 定價金一圓七十五錢
上卷 郵稅金十八錢
下卷 正價金一圓二十五錢
下卷 郵稅金十四錢

發兌元 東京本町 博文館

---

東京帝國大學醫科大學教授 醫學博士片山國嘉先生閱
王子病院長 門脇眞枝君著

# 狐憑病新論

全壹冊

洋裝上製
金文字入美本
正價五十錢
郵稅六錢

本書は著者が多年東京帝國大學醫科大學精神病學教室に於ける研鑽の餘滴にして狐憑病を精神病理學上より觀察し精心細緻なる斷論を下したるものなり書中狐憑沿革史あり詳細なる病例あり正確なる統計表あり文詞勤めて通俗平易を主としたれば流石に幽玄なる精神現象を輕々說き來り古來因習の久しき奇怪なる迷信を論破し頗る痛快を感せしむ其社會に貢献する處豈鮮少ならんやされば醫家心理學家教育家宗教家は勿論一般人士必讀の良書なり

發兌元 東京本町 博文館

（その一）

（乙の二）

# ◉最新治療藥着荷

帝國大學病院賞用、効驗著大なる獨逸醫學界新發見の貴重新藥、數十種直輸入着荷致候、需要廣大の品のみ便宜上掲載致し候、價格及び送料は往復端書にて御照會次第即刻回答可致候

（藥名）

◉オルトフオルム
◉燐酸コデイン
◉鹽酸ヘロイン
◉トリオナール
◉パラアルデヒート
◉キセロフオルム
◉アイロール
◉タンノフオルム
◉プロタルゴール
◉イトロール
◉イヒタルビン
◉アスピリン
◉タカヂヤスターゼ
◉ザリピリン
◉ミグレニン
◉タンナルビン
◉トロポン
◉スペプシ子
◉次撒里ピスミット
◉ザロフエン
◉單寧酸オレキシン
◉純ペプシ子
外數十種

（病名 ◉左記病症特効各專門新藥あり）

◉下痢 ◉虫刺 ◉足勞 ◉頭痛 ◉痔疾 ◉腋臭 ◉脊痛 ◉胃弱 ◉痳病
◉便秘 ◉引風 ◉氣絶 ◉虫歯 ◉火傷 ◉打撲 ◉潰瘍 ◉衰弱 ◉貧血
◉汗疹 ◉田虫 ◉疥癬 ◉陰萎 ◉月經 ◉子宮 ◉催眠藥 ◉痢病豫防 ◉痳病豫防 ◉梅毒豫防

**發賣元** 東京日本橋大通り本石町角電話本局二八六番 内外藥舗販賣品直輸出入御小賣 **大橋博愛堂**

---

# ◉子供ある父母よ

**象印コンデンスミルク**は、現に内務省東京衛生試驗所、及び帝國小兒科醫學界、幷に内外遠洋航海所にて、實驗御公告の通り、彼の米國鷲印ミルクト比較し、其滋養成分は遙に優等にして、消化善良、且つ腐敗の憂なく、殊に直段は、**三割**余も**廉價**なるを以て、小兒養育又は虚弱家の强壯滋養品として、眞に完全無缺、全世界第一の優等煉乳なりとの賞状を得たり、故に世間有觸の自畫自贊の曖昧品とは雲泥の違なり

内務省 東京衛生試驗所 實地分析成績

## 對點表

| 品名 | 脂肪 | 含窒素物 | 乳糖 | 蔗糖 | 無機鹽類 | 水分 | 品評 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （象印） | 一〇、六二五 | 九、六二五 | 一〇、九八八 | 四二、七六八 | 一、八四〇 | 二四、一五四 | 優等 |
| （鷲印） | 九、四六〇 | 八、三九〇 | 七、六五〇 | 四一、二九〇 | 一、八八〇 | 三一、三三〇 | 普通 |
| （人形印） | 四、七五〇 | 八、二二〇 | 九、八四〇 | 四四、一四〇 | 一、八〇〇 | 三一、二五〇 | （劣等） |

定價 一鑵百廿匁入金廿五錢一打以上割引致候市内は無料即日配達地方は送料送附を乞ふ

**發賣元** 東京日本橋區本石町三丁目角電話本局二百八十六番 藥種貿易商 **大橋博愛堂**

特約

神田三河町二丁目 博愛堂分店
日本橋本町二丁目 近藤利兵衛
牛込市ヶ谷柳町 佐藤忠五郎
京橋區築地二丁目 清水龍之助
横濱市松ヶ枝町 加藤回陽堂
新潟古町通六番町 味方利平
陸中石ノ卷橫町 菊屋善治
函館辨天町 國領平七

◉賣捌は全國有名藥舗及び洋食料品店にあり若し最寄取次店に品切の時は直接御注文を乞ふ即送す

（乙の三）

(乙の二)



橫濱高等女學校生徒

泰西名都



巴里アウベル街の光景

（丙の一）

# 萬籟

●本誌は文壇の社會黨也●

毎月壹回發行
壹部金八錢
壬寅第八號

要目

矢野龍溪に與ふる書（穂村生）高山樗牛と姉崎嘲風（丘村生）詩歌俳句等例に依て清新寄書の材料豊富にして氣焔頗る昂る

●本誌は文壇の虚無黨也●

發行所 芝區今入町十六番地 萬籟社

---

奏効確實 器械不要 **簡易複寫インキ**

蒟蒻版及び寒天版其他の印類又は器械藥品等を要せす此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに同一の文書圖書數十百枚を印刷し得べし○即ち此インキを以て書したる原稿より直接他の白紙へ字痕透徹する者にして一枚の原稿より凡五六十枚を寫し一瓶のインキにて原稿百數十枚を作り復寫數千枚を得るものなり（使用法説明書を附す）本品は既に諸官衙及郡區町村役場等の御用品たり

●定價 二オンス堅裝瓶入送料共 金四拾錢 郵券壹割增●

發賣元 東京神田區末廣町三十八番地 中村屋商店

---

獨逸伯林萬國衛生會考案

◎歐米汎用 **救急函** 價 金一圓以上金貳拾圓迄

救急箱は、歐米文明國にて戸毎に常備せらる、自他危急救助上缺く可らざる必用品にして、救急用藥及び繃消毒材料品一式を、一函中に完備せし者なり

◉内外旅行携帶用◉家庭、學校、商店、工塲、旅館常備用、御注文次第即刻調製可仕候

日本一手發賣元 東京日本橋大通り本石町角電話本局二八六番 内外藥舗販賣品直輸出入卸小賣 大橋博愛堂

---

生徒六十名募る望者九月廿五日迄履歴書持參
高等小學卒業又は之に相當者滿十七歲以上
東京駿河臺袋町十三番地 **東京産婆講習所**

---

●**繪畫通信教授** 規則郵券貳錢 東京麻布區飯倉四ノ四 木田寛栗

肉筆手本を用ゐる新式獨特の方法を以て叮嚀親切に敎ゆ

---

☞●毎日午前七時半ゟ午後五時迄

**大橋圖書館**

☞●三大節及毎月末日は休館す

麹町上六番町

（丙の二）

明治法律學校長 岸本辰雄先生序文

リツサンシエー、アン、トロワー
東京帝國大學法科大學教授五大法律學校刑法講師、法學博士 岡田朝太郎先生校閲

明法學士 山口慶一君編纂

（近刊）

# 新舊對照 刑法蒐論

總則之部 全壹册洋装並製 紙數千頁 正價郵税金共未定

刑法改正案第十五議會に提出せられてより端なく世論の沸騰を招き賛否騒然二期の議會を經て未だ決せず此時に當り新舊二案を比較し現行刑法との利害得失を參照して立法の精神を明にするは目下法曹社會の急務たらずんば非らず而して其是非得喪を論せんと欲せば傍ら先輩大家の學説を對照して以て法理の存する處を闡明せざる可からず然りと雖も刑法に關する著書少からさるのみならず多くは浩瀚にして一々渉獵するも亦容易の業にあらず

本書は編者が玆に見る處ありて多年研學の餘暇刑法上主要の問題に付き目下法曹界に參考資料として最も多く用ひらるゝ所の我國刑法學者の意見を或は著書或は講義錄或は大學筆記等に因りて蒐め第一第二の改正案と現行刑法とを對照して其理由を擧げ各條の下亦大審院判決例を挿入して其適用を示したれは恰も各大家の一室に會して談論討議せらるゝの感あり而して特に我國斯學界の泰斗たる岡田法學博士の校閲を經たるものなれは普く講法家研讚の好資料たるのみならす高等文官判檢事辨護士等の試驗に應せんとする者の爲めには金科玉條實に無比の一大寶書と謂ふべき也

博文館編輯局編纂 ● 改正増補 帝國六法全書（第十一版）

全一册洋装上製紙數五百頁 正價金九拾錢郵税金十四錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

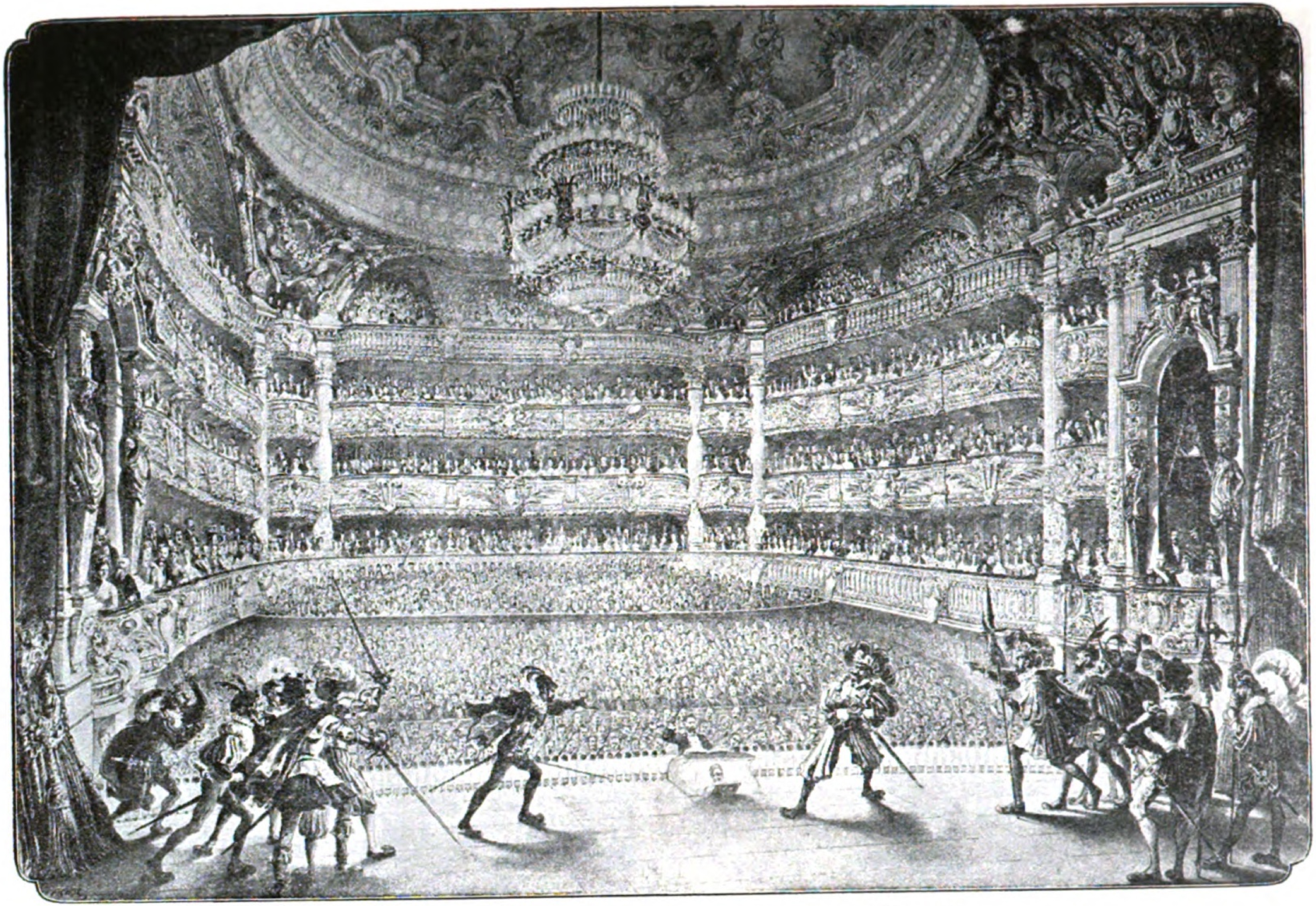
（丙の四）

松島德浦島



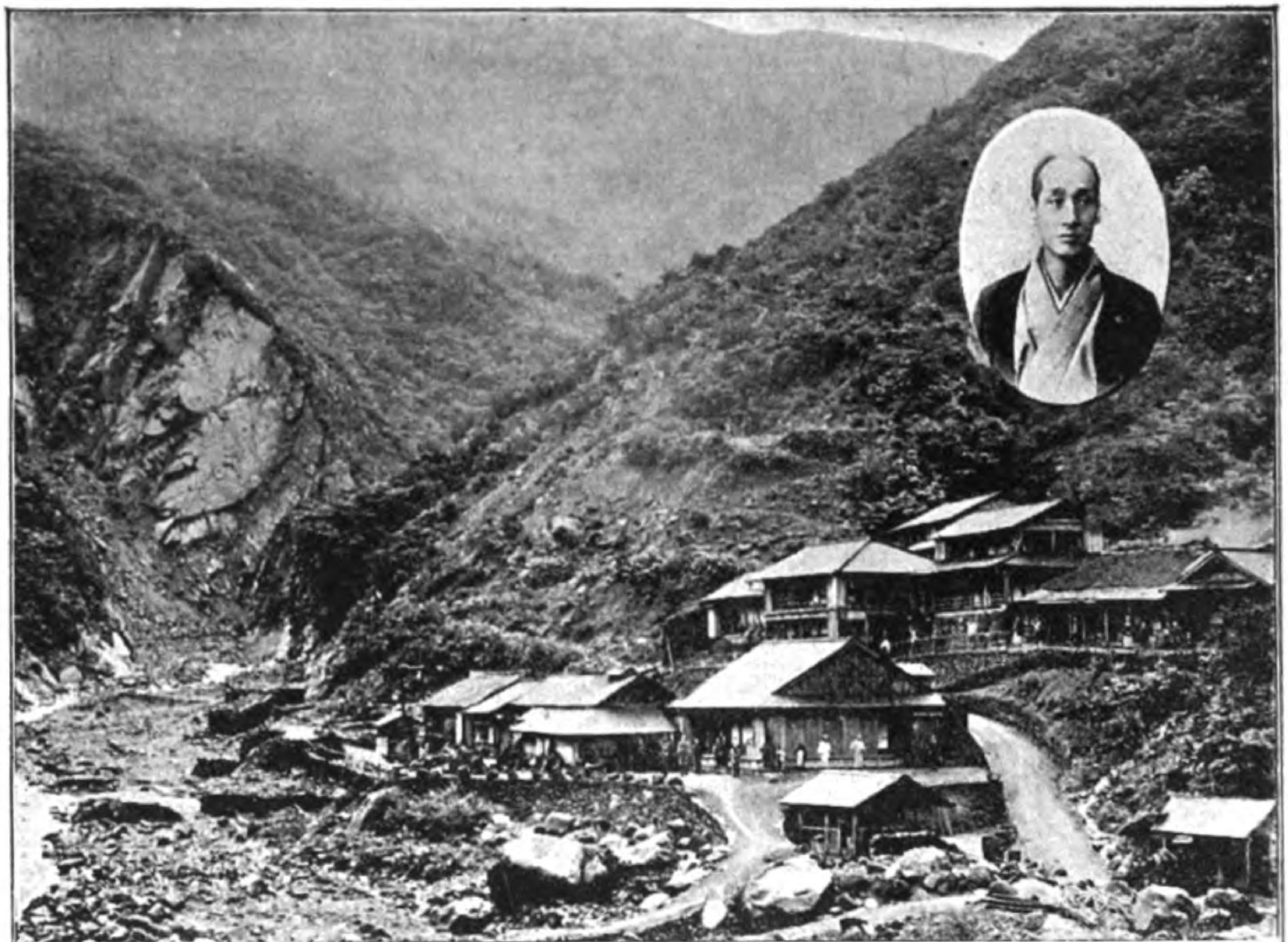
（光村利藻氏撮影）

佛國名物



巴里グランドオペラ劇塲

陸前峨々の温泉





小豆島池田村附近の景

故芳野芳陵夫人綱子



大倉光子



一區線●自上野至高崎
二區線●自大宮至白河
三區線●自白河至仙臺
四區線●自仙臺至盛岡
五區線●自盛岡至青森

山手線●自品川至赤羽
海岸線●自田端至岩沼
海岸線●自友部至小山
日光線●自宇都宮至日光
兩毛線●自小山 前橋ヲ經由シテ一區線ニ接續ス

尙本書は前掲の外前付に本社各課所在地、及び、諸般の統計、旅客の注意、入塲切符の發賣驛、定期乘車券、回數乘車券、學生の乘車賃金割引、多人數乘車券、列車仕給、旅客列車の別仕立、客車貸切、旅客の手荷物并に小荷物其他の賃金表、大貨物運賃及手數料、日本鐵道貨物取扱人名簿等、あらゆる旅行に必要なる事項は秋毫も漏らさず明細に列記して遺憾なく實に從來坊間にありふれたるものとは大に其趣きを異にせり故に旅途に上る人は常に旅鞄中本書を收めたらんには旅情の慰籍となるのみならず精細に地理人情物産等をも知悉するを得べし

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(丁の二)

文學士 漢文學科專攻 久保天隨先生述

（近刊）

# 文章軌範精義

全部六册 一册紙數 三百有餘頁 正價郵稅未定

正編 上・中・下

續編 上・中・下

正編上 九月中旬發刊 以下近次續刊

文章軌範の世に行はるゝや、既に久しく、子弟之を講習せさる者あらず、本書は元と、彼土科擧に應ずる者の爲に、特に評選せしに過ぎざれとも、正續十四卷を通讀すれば、戰國の末より、宋末に至るまで、文章風格變遷の大略を領知し得べく、千古に傳へて不朽なるもの、亦た怪しむに足らず、而して古今の註釋、紛然雜出、其多きに堪へずと雖も、徒に無用なる文法を説いて其他に及ばず、因襲の餘に出てしもの、比々として是なり、天隨氏曩に四書新釋を著はし、次いで諸子に及ばむとせしが、刻下の時勢に感するところありて特に此書の撰述を先にせらる、全篇を通じ平易流暢なる言文一致體を以て之を敘述し、周匝明白、一字を増減すべからず、就中字義の解釋と故事の説明とは、最も其意を致されしところにして、且つ篇中處々に載せし諸家の傳記と評論とは、氏にして始めて能くすべきものなり、初學者は固より論なく、凡そ文を學ばんとするもの、必ず一本を机上に備へざるべからず。

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

（丁の四）

女學世界定期増刊 第貳巻第十二號

# もみぢ

才媛詞藻 秋乃巻

小說

特賞

## 山かづら

青山南町六ノ一四七　藤田糸子

### その一

人の世の榮花は實に一代の春のゆめ覺めて果なきものなれや。日出銀行の頭取金杉守三とし言へば、一頃は飛ぶ鳥落す羽振なりし身も、生來の大酒が原因の胃の病にて、遂に果なくなりし後は生前の仕度三昧の報いは、てきめん、有り餘ると見えし黄金の花も誠に實のなき浮れ草。半年と經つか經たぬに一物も殘さずはたくとさしもの大家も支離滅裂の有樣となりにけり。さても悲しきは殘されし奥樣、孃樣の身の上ぞかし、木から落ちたとの譬へば愚痴なさ、口惜さ、耻さ唯々一時にやる瀬なく楫を捨てたる捨小舟此まゝ沈みも果てなばなか〳〵憂さもつらさもなからましと涙に袖も朽ちなん計りなり

諸式高な當世下女一人使ふにも六七圓は費るに役にも立ぬ奥樣や物いり盛りの孃樣のやツくわいは近頃大の禁物と言ひ合さねど心は同じ親族縁者、たがひに顔見合せて手出しせぬを聞き知たは奥樣が實家の兄、田舍

者がと言はれやうかと控へて居るに此の有様は何とした事それ程に邪間な親子なら私が引き取りませう決して〳〵塵一本も皆様のお世話には成りませぬと律義一片の兄直くさま二人を上州館林の四里奥なる小竹村と云ふに伴ひ行きぬ。人々これにて漸う安心とはさても憎らし。

## その二

秋立ち初めし風さむくそゞろに袂露けき夕ぐれ住みもなれぬ片田舍のわびしさに、つく〴〵我世かなしく思ひ亂るゝ少女心のわりなさよ。

あゝ此村へ來てからもう三月過たほんに〳〵私はまあ此まゝ一生埋れるのか知ら。あゝ東京。なつかしい〳〵東京。家がこんなに成たのが恥しさに、誰にも一言のお別もせずに此處へ來て仕舞ふたから嘸ぞ皆後で惡口を言て居るだらふ。花子樣。友子樣。菊子樣今は何して……それからあの昇樣はほんに何と思てゐらつしやるか其後は一度のお音信もないが。お父樣さへお居てになれば今頃は昇樣のお側はなれぬ身となつたかも知れないのに。昨夜のゆめに昇樣が美しい奥樣と馬車に乘て居つらしやるのに會てはつとして能く〳〵見れば其奥樣はあの菊子樣であつてそして二人て此方を指さして笑て何か言ふて……あゝ若やあれが眞實であつたら何とせう……いや〳〵そんな事はない皆私の心のひがみだ、昇樣に限ては、そんな輕薄な方では無い筈。いつかも仰たつけ、僕は眞の心と心との愛を尊ふ者ですから譬へ如何な事があつても貴女との愛は互にかはるまひと。だから私が今此樣に落目に成て仕舞ても決てお見捨てなさる事はあるまい。きつと今に私を救ふて下さるにちがひない。もつたいない事、昇樣も此樣な淋しい時には私の事を思ひやつて、あの涼しきお目に涙を流して下さるのであらふものを、逆い女心とやら淺はかにお恨み申ました。それにしても早く東京へ歸り度い一日も早く歸り度いものだ。都の空なつかしく、再び小さき胸の狂ひ初めし時しも芳子や、一寸こゝへと母の聲。

## その三

お芳や。今夜は、とつくりとお前に話度い事があると、先うるむ聲音をしはぶきつゝ、話と言ふは二三日前から此處の叔父樣よりのお話で直ぐにお前にとの事であつたれど、私も色々考へる事があつて遂々云はなんだ。

ねえお芳お前も知てるあの松崎様の息子さんがお前をどうぞお嫁に異れとの事……其おどろきは最もです、お前には昇様との約束もあり無理な様な事ですが、あの昇様はつい此間中村のお菊さんと御婚禮が澄だとやら。あれ程かたき約束があつたものと一時は私も氣まづく思たけれど、私も此度はしみ〴〵此世を考へました。ねお芳お前も生れ落るから花の都で育ち、ましてお父様は派出なお方、萬事が榮陽に馴た身の此様な田舍に住むのは嘸ぞいやでせうと、然の世の中にはお金で買へぬ樂みが一番尊ひもの、誠を言へば、此母なんぞも、多くの人を召使ひ奥様々々て風にも當らずに居たけれど、それお父様の御放亂の劇しさ外目ばかりは能くても自分の苦勞は中々一日も安心して過た日は無い位でした、今の世の紳士紳商とか云ふて威張て居る者は大方皆此様なのが多からう。義理や人情にかけた事して大きな面して何に成る後の世の報も恐い、其様な人の妻に成て一生を泣て暮すより手堅き人を夫に持て樂しさ苦さ心から思ひやり合て今日の業をして行たら何位幸てせうお前も彼の様な人の妻にならなかたが、ほんに幸、てした、あの松崎様は此村中の物持、百姓てこそあれ相當に教育もある方お前の爲めには、却て宜からふと思ひます、今更急に百姓の嫁に成れと言ふたら定めし情ない母と思ふてせうか、能く〳〵母様の身の上を考くらべてお見なさるが宜しい。私はもう自分で凝りました故お前には此の苦みを繰り返させ



まひと、何もかもお前の事を思ふて言ふのだから、よく心を靜めて考たがよからふよ。

## その四

さてはそれ思ひしにたがはず、昇樣は菊子樣をお嫁樣になすつたか。亂るゝ心を強てしづめて人をも疑はず何處までも、此身を愛して下さるものと信じて居たが口惜かりし。心と心の愛。うそ／＼昇樣が仰た言葉は皆僞りなりしよ、父樣の位置と寶とを愛し給ひしお心さもしさ今初めて悟りました、角田の花、上野の雪、ともに／＼と契りしお聲など未だ耳の底に聞ゆる樣なるを、ようぞ弱き女を、もてあそび給ひし、悲しや君に捨てられて再び浮び難き身となり果てぬ。まちませ昇樣、菊子樣。この芳は愚なれども生憎に恨みの數々せまき心に秘めかぬるが是非もなし。母樣もまた余りな私をあの松崎へ嫁入れと。おほいや／＼もう私はどうしても東京へ歸り度い。

朝霧いや深く立てこめて苅りほす稻穗の末ほの／＼と白み渡る曉の空、名殘の星の光も消えて物かなしき色なるに、すべなき思ひに佇む芳子。かあ／＼と頭の上を鳴き過ぐる村烏に驚ろかされ、と見れば彼方の細道を三々五々と打ち連れて、さゞめき合て行く老若男女の長閑けき姿、芳子は見るより、あなむくつけき百姓の樣。汚し汚し我も元は金杉守三が娘。たとへ死ても此樣な人の中に立ち交りてなるものか見度くもあらじと袖をかづきて脇道へと走せ入りぬ。

## その五

孃樣もし孃樣一寸待て下され、と息はづませて、追ひすがりしは、此村きつての宜い娘、名をお瀧とて芳子の此村へ來たりしより、いろはの手本を習ひ初めはや一通りのかな文は讀まるゝ才女、流石に芳子は立止り何だえ、と何がなし腹立聲につい言ひぬ、お瀧は愛相よく、ほゝと笑ひ、あの別に用ても無いの……孃樣こんなに早くから何して居たの、そして大變面色もわるい樣な。氣づかはしげに尋ぬるを憫さしどや一寸眺めて、私どうも仕ないよ。そんなら私安心した……私、同じ道へ行くから一處にね。芳子はせんなく。そのまゝ早足に歩み初めつ、お瀧は悦ばし氣に打ち笑み。孃樣や、朝の氣持はよいものね あの山の間からお天道樣の昇るとこの美しさ、私一番好よ。孃樣はいつも東京の町は立派だ見せてやり度と仰るけれど此朝の景色には大方

かなひますまひね。さも得意らしく言ひ出づるに、何をさかしら立た事ばかり、此のつまらぬ景色が何が自慢ぞ、お天道様は何處でも見える、片腹いたしと嘲笑ひつゝ、お瀧さん、おまへ達はまあ、何が樂しみて百姓なぞして居るの、朝から晩迄土堀りや、草むしり計して と誠に芳子はいぶかしと問ひぬ、お瀧はほゝと打ち笑ひほ……孃様。それが不思議てか。ほんに毎日の土いぢり樂くなくては續きませぬ。それが孃様。ま、土を堀て種を下し骨折て働ぐだけ他の村より收穫の宜いのが第一樂みて御座んす。此間村長様も仰りました。おまへ達よく働け、百姓はお國に一番大事なもの。骨惜みなく働くのは大く言へば。畏れながら天子様への御奉公ぢやぞと呉々も仰りました。それ聞た時の嬉しさ、直ぐ兄様にも母様にも話して皆て前よりも一層せつせと働くので御座んす。最も殊勝にやさしき言葉に何時か芳子は引き入れられ、そとお瀧の面をさし覗けば紅の頰が朝日、影に受けて輝き更に浮世を知ぬ顔の羨しくも懐かしくなりて。ほんに昔から住めば都と云ふ事があるから此樣な田舍にもそれ丈の樂しみはあるものかねえ。此度は靜かにかく言ひぬ、お瀧は可愛き眼を少見張りていえ〳〵住めば都とは、それや昔の話、なんて都が住み宜い事がありませう、村長様のお話にも日本一の東京では晝間日の中、生馬の眼を抜くとやら、おぼ恐い。そんな恐しい都よりは此の田舍、一村は皆親子兄弟の様なもの、若い者は年寄を親と思ふて大事にすれば、年よりは、若い者を子と思ふて可愛がつて、ほんに水入らずの樂しさ都で出來ぬ事て御座りましよ、そしてまた貴女の様な美しいお人のお出でなされたも、皆天道様が私等の日頃正直にするのを賞めておさづけ下されたのかと思はれますする、ねえ孃様やいつ迄も私等と中よくして此村のお人と成て下されませ。あまへる様に芳子の面さしのぞきて例のほゝゑみつ。

## その六

鄙に育てど、それ相應に立派な理想を持てる少女の言葉ひしと芳子の胸にしみ渡り、ほと〳〵足もたゆたひて、つと立ち止りて。思へば〳〵實に淺はか成る我心かな、塵とあくたの中に百鬼横行する都の空のみ唯々戀しく角田の櫻歌舞伎の花の仇なる色香に浮れまほしの願ひにかられさては人の世の戀に曇りし心の鏡には此エデンの園にも似たる天眞の悅び淸き限りなき美しさ

は寫らざりし、さりとては餘りに甲斐なき心なりき。十八年の今日迄を都の地に何をか學び得たりけん。かゝる山家の賤の女こそ、自然の友に交りて、美しく、健げなる決心を持ちたりけれ。あな耻しな我心、まよひの夢は今覺めたりと。遂に自然の樂みを探り得たりし芳子は云ひ知らず胸廣く覺えて、さても嬉しきは我爲の救となりし少女よとつきぬ感謝の意もて、お瀧の方を見かへれば手織の衣裳高うかゝげて白き脛あらはに、ふさ〳〵と長き黑髮根ばかり結びてくれなゐの襷かひ〳〵しう立てる姿はさながら一點の汚なく潔かりけり、我にもあらでお瀧さんと一聲其傍に走せ寄りさま其手を握りて後は涙の外あらざりし。

行く人は知るらん小竹村なる松崎家に朝より夕に至るまで、きつちやんとん〳〵と調子おかしき機の音の絶ゆる日とてはあらぬ事を。

（完）

評、花やかなる文は書きやすくして地味なる文は書き難し、事柄の壯大なるは描き易くして平凡なるは描き難し、本篇の如きその文は才華少くして捉へ來れる事柄も又平凡なり、されど篇中讀み去り讀み來りて惻々として人を動かすものあるは何ぞや、蓋し作者の眼中一點信實の溢れるに由る、如何に筆端才華の燦爛たるも、事端の壯大にして俗眼を眩燿するもいかでよく人の心を動かすに足らんや

特賞

# 片田舍

## 上

信濃國下水内郡外様村　富士子

こゝは華美なる都の手振にそまぬ片山里、太古の面影とや歌人はいふらん、住む人の心もとより善惡はまぬがれねど、怖ろしき〳〵獄屋に赤き衣きたるもなく、一攫千金の慾を願ふて、王侯の富を得たるもなし、可もなく不可もなきこゝらがあたりに朝夕人の口の端にかゝる賞めもの一人あり、名はお律といふて、今年取つて廿路の上六つとやらが眞ならんが、江戸の水にてきたひしはだのうつくしさ、田舍の姉じや人とは異りて言葉づき、身のこなし、優美におだやかに、はきだめへ鶴の譬も可笑しけれど、さりとてこの女何にたとへん、あちらにてもお律さん、こちらにてもお律さん、信心の如來樣に次ぎては、里の活菩薩、まばゆき五光が輝くやうなり。

なんてもな女の身と生れたらあのお律姉さのやうに、

茶屋奉公に限りますわい、内の娘も去年糸機械にやりましたが、何はさて食物は粗末なり、身體に暇はなし、眼は惡くなる、思ふやうに錢はとれぬものを、女で豪いではないか、着て、食べて、小づかひ使ふて後の殘りが年に百圓といふ大金、田舍の奉公人が十年身を粉に碎いても取れぬ錢を、而かもおかひこぐるみで、手足を使ふのではなし、ほんの口先ばかりのお世辭で、さうたまるとは大したもの、己らが娘も人並の顏なら村長樣から、暇取つて其江戸へ奉公にやるのじやがなア、あれでは誰も使手あるまい、せめて己に似てくれゝれは好かつたのを、女房に生寫のあのお多福、お前さんお若衆、なんても女房は美いのに限りますぜと五十ばかりの百姓が鍬をかたげての述懷聽手はどつて、笑ひこけて、お前に似ればそれこそ大變、其あばたが無いだけにお夏姉が大仕合せ、時に清兵衛さん、あのお夏さんもいよいよ結納がすんだといふではないか、何しろお目出度い事や、いづれ後からお祝ひに上がらうよと、若者等は後をも見ずして、田へ畑へくだり行く。「誰か來たぞうて垣根の下で、鳴いた鈴虫音をとめた、」と鄙びたる歌は夏の夕ぐれ、蚊遣たく軒よりもれて、お父さん待つて居ました大家樣のおかみさんが見へましてと、紅の襷かけた儘、さしまねぐ娘の小手、田の草取りにくろうそまりしが、汗にくるしとてか、ちやとかきあげし鬢の毛の濃く、白き〱腕の現はれしも婉なり。

フム何、本家のお神さん御座らしやつだか、オヽこれはようこそ、お夏お前何か、村長樣の方はお斷り申したのか、と男のくせに口數多き人や、この家の女房といへるは同じ年頃の程なれど、これはまた用の外口きかぬ女、口なしの花とはかゝるをいふならん。

こらお仙、早くお茶をもてこんか、何清兵衛さん、かもうて下さるな、實はお夏さんの事で上がりましたがな、向ふからは矢の促催、結納かすんだからにはせめて身躰だけなりよこしてもらひたい、仕度などはどうでもよいと私が家へ朝夕の掛合、こゝの處じやがな、清兵衛さん、丸はだかの嫁といふても今日びは百や二百はかゝります、お前さんのやうに、帶一つ、衣物一枚といふわけにもゆくまい其お金じやがなアどうするつもりだへ、といつても内輪を知つて居る私、分家の恥は本家の恥お律にいふて百圓借りる事にしたらどうだね、尤も私からたのむ事故高利にはさせる筈ではなし、年一割

二分位にさせてな、やるものをやる時にやらなければ虫が付いても取りかへしがつかない、女は年頃に縁のあるのが一番の出世、お仙さんさうではないか、だまつて居ないで相談にのつて返事がしてもらひたい、お夏さん早う暇貰うて仕度にかゝるがよいやらう、と本家の妻にとかれて清兵衛は青生息吐生息、お仙うまれつきの無口いよゝ音なく、お夏もまた顔うち赤めてうつむきがちなり。

何から何迄お前様の御厄介、去年の秋年貢をまけて下さつた御恩報もしないうち、又お夏の嫁入、あれも取つて廿歳いつまで百姓奉公も可哀相じやといつて、そればつかりは賣つて歩るくわけにもゆかず、それを今度のはなし、勿躰なすぎて涙がこぼれまする、あればな、お神さん二百も三百もかけて紋付の三重位はこしらへてやりたいが、この貧乏人には夢のやうな希望、お詞では御座りやすし、それてはお律殿におねがひ申して、百圓拜借いたしましよう、やせても男一匹、一生の中にはおかへし申しますからその段はお案じ下さるなど、ふとき〳〵手製の煙草、無神經の人のやうつめては飲み、つめては飲み、狭き一間さながら煙のゆきどころなきやうなり。

垣根には夕貌の花白う、春告ぐ日、脊戸のうしろに緋桃の花艶なりしが、今は小さき實を結びて一つ二つほろ〳〵と落ちくる風情、詩かく人、詩よむ人に見せしめなば、茅屋に平和の雲棚引きて、こゝのみは世のわづらひなきパラダイスの面影とや見ん、をかしや山の中とて世なりうき世なり、人の住家なり、泣かねばならぬアダムとイブの子孫なり、苦痛、熱涙、あらゆる世のたゝかひにたゝかひ居れど、心なの詩人や、平和を畫くに山家を以てす、知らずや松風の音も、きゝなれてはいとはしきを、徒らなる詩人畫師の筆、この小さき家にはこよひ清兵衛お仙、娘のお夏が貧といふものに泣いて泣いて泣きあかすべき夜なりけり。

## 中

お夏が貰はれて行く先は、某舊家の、百姓にしては田も畑も數多ありて地租おびたゞしう納めし由なるが、表向きのくらしと、勝手元のさしくりは格別のものなり、先祖代々よりの土を何の野心もなく守りて、たがやして、勞苦をいとはねば、財産を増す事もなけれどへらす心配もなく、正月の樂みに玉露位の贅澤を盡し得

らるゝを、悲しや相場といふものゝ味を知りてよりは、正直に鋤もつが馬鹿らしく今の息子が父なる人、つひうか〳〵とこの手に乘りて、初めの勝、あとの損つまりは千二千と借錢こしらへて、あはれや三千何百圓と數へられぬ、東京あたりが物持の百金二百金は、こゝらが一錢二錢とも思ふまじけれど、田舍にての千は都にての萬とも等しからん、さすがにこれを苦になしての父が臨終、當代の主いまだ若かりしが、其洞身にしみ〳〵としみて、それよりは一生懸命、家屋敷は未だ人手に渡らぬを幸、額に汗しての勞苦、嫁のお夏ももとが貧苦の中より育ちし身故、夫の心を能うくして、姑へは優しう、生みの母樣のやう孝養を盡せば何事もおなつやおなつやて目出度く、家内浪風といふものなかり



けり。

主人年は取つて卅路に一つ足らぬ程なるが、田舍には珍らしき頃迄ひとりずみ、それも誰故などのわけにてはなく、全く財政復活の道をはかりし故のみなるらんを口さがなき里人、わけはお律とどうから云々の評判かまびすしく、今時の若さに一人居なさんす新さんの心がわかりませんな、今に御らん、きつとお律さんがあの家へ乘りこんで、きつとお內儀樣になりましよう、と一人がいへば、なんの馬鹿らしいもとは村で一二といはれた家柄なれど、先代のがあんな相場に手を出したばつかり、表はむかしのまゝなれど內輪は火の車、なにが好うてお律さんがきましようぞへ、あの人も十年といふ間、東京で辛棒して

年に百兩づゝためて今では千兩の貸金もある、まだ外にあの着類私等が一生眼のまはる程稼いでも、珊瑚とやらたいまいとやらの櫛も笄も買はれまい、千兩の持參金があれば、どんな好い家へでも嫁に行つて、夫なり姑なりへの氣がねもうすく、したい放第の我儘勝手、小間使の二人も使つて、朝風呂へでもはゐり、私ならまア、何がよかろ、晝も晩もおさかなで御飯をたべ、お茶は玉露を入れさせてな、それから縮緬の坐ぶとんへ坐りこみ、オヽいやなこつた、一時間も坐りづめなら、しびれが切れて立たれまい、やつぱりかくやつて土だらけになつて、働くのが柄に合つて居ります、と姦しや三人女子の寄るとさわると人のうはさ、まことに火事場見たやうなり。

八幡樣の森に夕日名殘なうおさまりて、螢の光、草にきらめくは、おのれ腐草の生れと知らずや、折柄郭公一聲、空になのりてすぎゆくは、花橘の香やなづかしき、正行寺の鐘ゴーと響きて、ひんがしの峰にはお月樣ののぼり給ふなし、むべなり、こよひは廿三夜、夜色次第に沈みて、山本の里々燈火のかげもなく、大榎の青葉、高く聳ありて、深さ〳〵眠をおどろかす如し。折から人の足音しかも男と女の二人づれとは夜目にもしるき、浴衣の白きが二つ、今幽瞑の暗にかへりゆく魂かともおもはれて、見る人あらば生きたる心地もあらざるべし。

新さんお前さんなぜだまつて居らつしやるの、私はお前樣にだまされたのが何よりつらい、私が東京へ行つたのも、誰の爲とおぼしめす、せつない〳〵奉公をしてな、それでも操はけがされずに、十年の間死んだ氣になつて稼いだのも皆可愛い人への約束を守つたゆゑ、ヱ、新さん、だまつて居るのはまだお夏めが可愛いからか、あゝ、つまらない、あんな女にこの私が見かへられて、これでも東京で十年きたへたお律で御座んす、指をくわへてこらへて居るやうな女ではありませぬぞへ、今晩といふ今晩はあなたの決心も伺ひたし、ことによつたら生きてはかへらぬ私の量見、殺すも活かすもあなたのお詞一つ、さア早う返事をきかして下さいと、暗により合ふ四つの袖、男は頸うなだれて、お律こらへてくれい、母がなやれ貰へそれ貰への催促、私にはどうしてもお前とかう〳〵と打明けるはけにはゆかず、夢中でどう返答したものか、結納はすむ、婚禮はすむ、お

夏がくる、私は夢だやらうつゝだやらぼんやりと日をくらして居ただが禮婚の晩、うそでもなんでもない、綿ぼうしを取つた嫁の顔がお前に生きうつし、オヽお律ではないかと小聲でいつた位、大方お前の魂が乗りうつゝてきたのかしらと、己は怖ろしいやら嬉しいやら、夜があけて初めてお夏と氣がついた、其時の殘念つたら、おもひだしても涙が出ると、眞面目にものいふ男の顔をばのぞきこんで、お律は、エヽうそつきな、いつそんなお上手を誰にならつたのだへ、大方お夏にしこまれたのでしよう、それから悪くいは清兵衛が本家の内儀さん、私にせひ百兩借してくれ、遠縁の家で難義が降つてわいて、今それだけなければ一家斷滅、娘とやらがうられてゆくからと涙ながしていはれたから、そんならおかし申しましようと、奇麗に百圓揃へてね、私貸してやりました、知らなんだはこつちの不運、そのお金てお夏の嫁入仕度をこしらへたときいて、エヽ無念口惜しとうらんで見ても後のまつり、私はなぜこう、不運なのやら、兩親には早くわかれ、末は此うと嬉しい夫婦の約束も、歸つて見れば他人のもの、ためた金がどうならう、父母もない身、家もない身親類の同居人て、お前樣の家へ嫁入するは恥かしいが、十年ためたお金を持つてせめて、これをば手柄にお前の母さんにも納得して貰はうとたのしんだ甲斐もなく、見たいあいたいの故郷へ歸れば、お前とお夏さんの結納ばなし、これでも私はじつとこらへて、會へばわかる、話をした上と幾度人をたのんでも返事もなし、病氣かと案じて今晩といふ今晩おもひあまつて御家のまへ迄ゆきましたところ、神樣のお引合はせ、會はれて嬉れしいやら悲しいやろ、と、嘸今頃はお夏さんがお案じでしよう、早く話をきめておかへり下さい、夏といつても夜風は寒し、風邪をひかしてはなりません、ねい新さん新之助さん、と優しういはるゝだけ、こなたはつらく、お律の愛今更深きをおどろきぬ。月にも暗にもをかしきは、夏の夜といへど、ふたりがこよひの胸の内、悔いやらわびやら男の心も千々と亂れて、女はまして健氣に見へても女なり、父母ありての上ならばおもふ人にすてられての後も猶すがる所はあるなれ、うき世の人のつれなき時、我等が手にすがれ、膝にのれ、叶はぬ戀につゝむ涙よしや外にはかくすとも、胸にはながるゝ瀧つ瀬より滴もぬぐふにあまりある袂、つゞれなりともつれなき人がにしきの袖に

まさるぞや、とたらちねの母あらばなぐさめもし、ざとしても下されましように新さん、私はもう何もかもいやになりましたとすゝり泣、かち氣の男まさりの、且つは都にて男ぎらひが却ての評判となりて、得つる數多の黃金、それも嬉しき嫁入の料とはならずして、惡くや戀人にいはゞ敵の女に用立し事に惜しく、恨めしくやし恥かしの念つのり〳〵てうちなげく白地が肩の上に廿三夜の月、やみをてらして輝き玉ふなる、あはれやお律は十年の苦、こゝに終りの宣告をうけたらんが如し。

下

何事も罪は新之助が上にといはゞいへ、ゆめさら〳〵罪はお夏にもあらずお律にもあらず、清兵衛かお仙か、本家の内儀とて何のとがもなきを、天道樣、終りのおさばきは誰を罪者に遊ばす思し召しか。この時新之助靜かにお律をいだきおこして、何もかも私が惡かつた、こゝの八幡樣にちかつて僞は言はぬ、今夜はこれて歸る事としてまたの話は明日としよう、夜があければ人目つゝましき我等ふたり、なアお律、今迄の堪忍がなる程なら二日とはいはぬあすの夜迄まつてくれと、なだめくるゝやさしさがなか〳〵つらく、しばし戀人が手にはだかれて女は、天上界に生るゝおもひ、さめなばはかなや花の上の胡蝶、これが晴れのかたらひならばと、江戸にも氣强かりしだけありたけの淚を十年のけふといふけふながして〳〵ながし盡せしやうなり。

松本新之助、歸れば可愛いや新らしき妻のお夏、この夜更までまどろまで、行儀よくランプのもとに晝の疲をしのびての針仕事、オゝまだねなかつたる、つひ長吉が所て碁をうつて、まけたがくやしの長遊び、母さんはとうにおやすみなされたるときけば、虫のしらせか、お夏、胸に手を思案の躰あなた、私にお暇を下さいませぬか。あとは淚。さてもきかれしかこよひの話、お夏に鋭くきりだされて、夫婦の情愛さすがにそかし、八幡神社のお庭にての決心どこへやら、すまぬはお律への我が薄情、まだ貰ひたてのあれに深からぬ契りと其儘、離緣してしまへ〳〵と鬼のさけびにまかりしゝを、まのあたりに妻といふものゝ顏みればそれもならず、猶あはれさはまさりて、美くしい眉をおとしたてのお夏、白き齒くろうそめて、丸髷似合うと嬉しがらせをいふたはつかりの妻にどの、顏さげて去りゆけといはれようぞ、あゝうきよはいや〳〵、山に入りたや、死にたやと

半ば狂氣のやうになりて悶ゆる夫をつく〴〵見て、もらしあなた、私にお暇を下さいませぬか、あなたに捨てられて行處はなし、父さんにも心配をかけねばならず、友達に會ふもつらし、さアお律さんをお貰ひなさい、よう御座んすよ、どうせ私はあの人にうらまれてとり殺されましよう、それよりも先きに私は死にまする〳〵、私さへ死ねば八方波たゝず、千兩持參のお嫁さん、私のやうな貧乏人の子よりなんぼう可いかしれませぬ、とお夏は腹立しさにいひ罵しれば、こら無茶をいふてはならぬ、己がいつお律を女房にするといつた、それは子供の時からのいひなづけでもなし、あの女が東京へ行く前、夫婦約束の證文取替はしたのでもなし、よしんば口と口とでどんな事いつたが知らねど、十年前の事、今更かつぎだされて何になる、馬鹿をいはいでさアやすめ、いゝえどうしてもねません私はこれからお暇を貰ふて、本家へ行きますると猶すねれば、この夜中に行つて見ろ、鬼にくはれるぜと多愛ない事いふて臥床へ入りぬ、お夏はすねて見てもゝとより一時の腹立まぎれ、奇麗に去り狀もらひもせて、針箱かたづけ、これもまた夢の中の人とはなりぬ。

お律がいまだ分別つかぬ十六七頃、容貌よい娘を、田舍の土にするは惜しいとほめられたをまにうけて、茶屋奉公をおもひたちぬ、この折新之助十九の若盛、これも土と親しませるは惜しき程の美男、官員樣にさせて私はお前の奧樣になりまする、さうなれば田舍には居られぬから東京住居、日曜には相乘車で上野淺草に遊び步るいて、かへりは料理屋で御馳走たべたら嬉しかろ、と夢見たやうな榮華を畫いて、お律はあね樣かぶりの手拭をかしう未來を語ればおとなしき新之助はあゝ、私も其官員樣になりたいが、父の相塲で手をやいて、遺言には百姓より外のものにはなるな、ふやさうと思つたとて才なく智なきがまけるは道理、先祖のものへらさぬが何よりの智惠者といはれた其一言ねても忘られず、お前の江戸行は贊成じやが、私はやつぱり土堀さとしほれて、いひしことばいまだ耳の底に殘りて、お律も十年の憂月日これをば忘れず、新之助とて折々の手紙に、かへらば妻にといひやりし事あれど、東京より朋友等が歸りての話にお律が外目の花々しきなりふりをわたし心と疑ひ、なんでも男の三人四人もある樣子さうてなければ年に百兩といふ大金の殘る筈てなし、忘

れて了へ忘れて了へ、もう田舎へ歸つてくる氣はないのだらうに、馬鹿らしや廿九のけふ迄ひとり住みと、おもひしが最後、世に女二人を泣かせて、なけかせて、己も亦思案にくるゝは、女の操をうたがひし罪なんめり。男心に秋風ふきかよふあかつきは、色ある野邊の千草、露霜にうらがれて、やがては冬枯の寂しき現象を呈すべけれど、なほ土の中には春のなさけのひそまでやは。

さても昨日今日空しうすぎゆきて、くれぬる入相の鐘ひとり枕もとにきくお律が身は、塒を知らぬ旅烏にも劣りたらんやう、晝はさすがに恥かし、夜のみ來るともなく行くともなく、いつも彳むは松本が門、新さんの聲はときけば なつかしさにこらへかねて、茶の間の格子が少しゆるみたるあたり、幸ひ、障子のやれたるに顔あてゝ見やれば、母さんお風呂にても行かれし留守か、若き夫婦のむつましげなる、時々お律とい ふうはさ立ちてきけば男のよい加減な事ばかり、おどり入りて、うたん刺さんか、死なば諸共お夏も刺さん我々死すべしと、ある時は刄物ふところにせし事ありしが、まてよ惜しからぬ命にも惜しきはあの金、人手にわたるもいや〳〵、さればとて冥途のつれにもなりかねる、おゝよい分別、それよ〳〵と、さしてゆく手はお夏が實家ノ清兵衛がり。おとなしう外よりおとづれて、あの清兵衛さんはおうちかへ、律で御座います、一寸お目にかゝりたい事が御座いまして、と優しき江戸ことば、内には無口のお仙ひとり、流元に米とぐ音いそがはしげなり。

あのお仙さん、私ね、急に遠方へ參る事になりました、いつかのお金、あれはこちら樣でも連借人におなり下さいましたわけ、御本家のお内儀さんが、表はれて旦那樣へ知らせたくならうからとのお言葉ゆゑ、お願ひに上がりました、一二三日の中におこしらへ下さいませぬか、何二三ヶ月のところ、利子などは入りませぬ、かきあなたよいやうに願ひまするとつゝましげに話しかけしが、お仙は日頃の無口にかてゝ加へてこの相談、百雷一時に墜下のおもひして、ハア今うちのを呼んで參じます、一寸まつて下さいと、草履と下駄かた〳〵にはき、爐にくべし柴を其儘、飛んでゆく、オゝそゝつかしいおかみさん、と己はゆつたり爐邊に座りて、煙草一服、銀のきせるの上等品こゝの伏屋に似合ぬはが可笑し。

不作人の悲しさには、百兩の金、今いふて今渡すわけに

行かず、たよる本家の内儀が獨の取計らひなれば、役には立たず、お夏をやりし松本が後家さんにおたのみ申して見やうか、これは猶つらし、新之助とてまだ戸主といふ名ばかり、世間には取れる見込のないのを貸してくれる仁者もなし、こりや困つたわいと、其夜清兵衛はお夏をよびよせての相談、これはおもふたよりも安々と受合ふて、一應新之助に話して見ましよう、ことによつたら間に合ふも知れませぬと、いはれてよろこぶ父の顏、母の顏、わゝ何の御存知ないが、私はお父さん悲しい身の上、お律さんの執念にとりころされまする、一年の中にはきつと死なねばなりませぬわ、重ぬる衣のよしや一重はかるげに見へても、かるからぬ胸の内、あはれやお夏は其夜のやみになつかしき故郷をすてゝ遠き東の吉原に、自らの身をうりわたしぬ。

うれひの日を十日の後、手紙に添へて金百兩、涙にくるゝ父母がもとに届きて、金はかしぬしの手に渡りぬ。

松本が家にての戀、お律のをどろきよりも猶つらきは新之助なり。意志薄弱の男に滿腔のまことを捧げしお律もあはれなれど、お夏が身つらからずや、さても操を弄び、新之助、夜な〳〵お夏が夢と、お律のおもひつきまとふて、寢られぬ枕に軒の松風、新之助は今更のやう、女の念慮の深きをおもひ、十年前の契約、反古にせしとくやむのみ、遲し〳〵、花は散りぬ、再び梢にかへれとや、土にけがれ泥にまみれし櫻の、などてかもとの枝に萬人の讃美つなぐを得ん。お律、お夏、落花ほろ〳〵、新之助、むごや嵐の狼籍を極めて、これが一生は安らかならざるべし、むべなり、女の操を輕うおもひし罪、あすは誰がまたこの悔をやくりかへすらん。

評、文章事實共に凡俗を免かれすと雖も筆鋒健捷、才華縱橫にして中々飾り難き技倆といふべし

甲賞

# 露小袖

和泉國泉北郡太平寺、紫芳　井上登美子

## 上

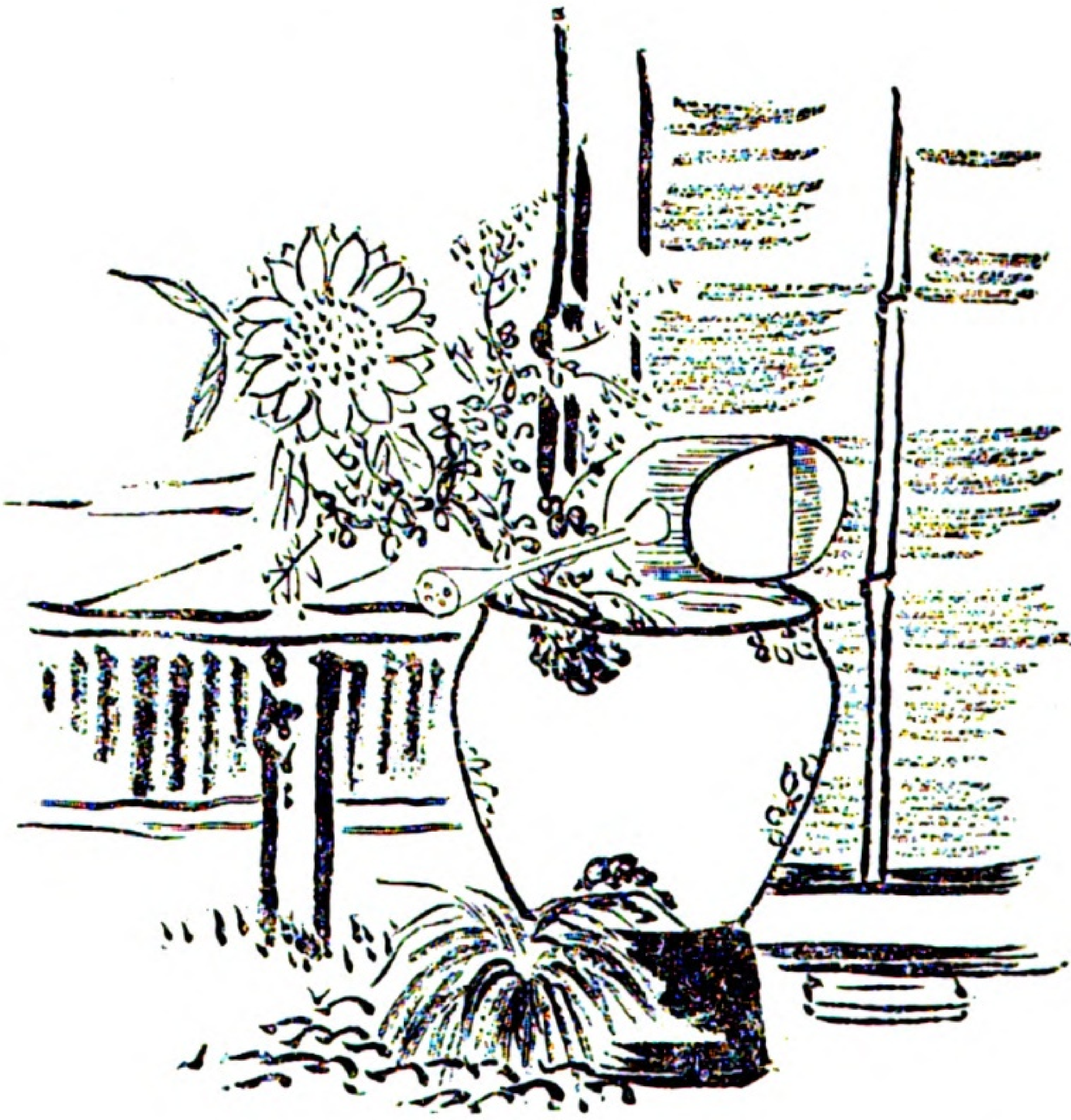
鏡臺の側の反古取りあけて油染みし手拭きつゝ、秋さんお先きに失禮、水白粉の瓶は引き出しの右の隅に入れおくよ、坊が弄るといけないからと、手水つかふ妹

をかへりみつゝ立ち上り、はァ有りがたうと返答するを聞き流して所天が便室にきたり襖をあけて、アラ未だお寢つてゐらしやるよ、もう八時過ぎたのに、晩くなりますまいかと獨り言てば、やう〳〵此方に寢返りたれど、南向の表座敷折柄障紙に映す日影の眩さに、細目に妻を見てまた直ぐ閉眼ぐを、お起きなさいよ九時半ですよヲホヽと打ち笑めば、まだ早いと又あちら向きに寢返りうつに、眞個にお起きなさいよ又お客さまがいらつしやると出られなくなりますから。何處に行くんだ、何處に行くのか。可厭てすよ貴郎、秋さんも私も最うちやんと支度が出來てゐますよといふ時、襖の外に裾さばきの音サヤ〳〵と、徐かに內の樣子を伺ひ手を突きて、姉さん開けても宜うござんすか、アラ姐夫さんお早うございますと靜閑に辭義する秋子、歲はとつての十九なれど、顏の色飽くまて白くて肉付き豐かならぬ方なれば二十と見たる人もあるべし。秋樣には能くぞ御入來、そこは闕起し冷えの無ならんを、不慮の事あつては預り奉つる我等、主人公に申わけなしと、戲言るゝを、秋子は淋しげに笑みそめて直ぐ俯むきぬ。アラ秋さんもう着かへたの、おや白粉は塗けないの、いくら色が白くても少しは塗けた方が顏が優しくなるよ、ねえ貴郎もつと塗つた方がようござんすねえ。左樣さ、ふむ秋さんよりお前の方が餘ほど濃い、酷いね、お前の塗りかたは。頸にぶつ〳〵が出來て斑點になつたところは宛然搗きたての粟餅に取り粉をつけたやうだ。ダッテ肌脫いで寒かつたてすもの、何だか知らんが化け物だよ宛然、二十四といふ年增をして厚壁塗りは見ッともよくない至極だ。まアそんなに白くつてと妹の方に顏を向くれば、イーエ些とも白かありませんよ、丁度ようござんすよ。さうと妹の顏をつく〳〵見て、お前のはあんまり淡いよ、まるで塗けないやうだよ、一躰塗けないの。イエ自家にゐては大抵揚卷で、滅多に圓髷に結ふことはありませんから白粉も……。つけないの、さう、何故、一郞さんが嫌ひなのかい。まア——そんなことまで八釜しいの。イーエと冴えぬ返事、アヽお牛乳が燦まつたてせうとツイと座を立ちて次に下がりぬ。

お父ちやん何、これ、エ・何、これと父に攙かれて、煉歯磨の蓋を取りてそれを不思議さふに弄ぶ幼兒は、やう〳〵四つばかりの、手足まる〳〵と肥えて可愛らし

き男の子なり。喃々見るものごとに尋ぬるを父は繰り返し〳〵教へて煩ささうの色もなく、やがて妻の持ち出す膳に座りて、親子三人の笑ひ聲賑かなり。

秋子は只ひとり表座敷の椽側の日射よき柱に凭れて庭の面を見やれば、何時いかに變るや知れねど、秋霖晴れて後の小春日和一層あたゝかきに誘はれて、何處よりか秋の蝶一つ飛び出でたるが、美はしく咲ける山茶花に羽を休めぬ。そを眺むるともなく恍惚としたる秋子の耳に、幼兒の何をたはふれしか、他愛なく笑ふ兩親の聲一しほ高く聞ゆるに我にかへりて、アヽ姉さんは羨ましい、姐夫さんのやうな優しい人に嫁付て毎日面白さうにしていらつしやる、私も可愛い兒でもあつ



たなら何程氣六ケしい方でも、少しは兒にまけて優しくして下さるだらうし、私も心の慰むだらうに、アヽ情けない私は………私は眞個に死にたい、けれど未だ全く離縁されたのでもないからもしお機嫌の直つて呼び返して下さることもあらうかと思ふけれど………紅葉狩りに連れて行からと云つて下さる姐夫さんや姉さんに、すまぬけれど私はいつそ恨めしい、もう今日は斷つて行くまいか知らと獨りごつ折しも、下女が來りてお文がと差し出すは、東京の母よりなるに、兼ねて待ちたる吉凶いかにと顫ふ手さきに開き見て、讀みゆくこと半ならで忽ちハタと投げやりて、吐息と共に流るゝは、露か涙か。

## 中

秋子が嫁ぎし園田一郎といふは、大學出身のさる省の技師にて、敏腕家としてはゆるしがたけれど事務の勉强にかけては省中に無類、二三の助手を相手に、いかな日も中途にうちやることはなく、局長の點檢を受けるまでは扇つかひの隙も惜しめば、下役の者は陰で大こぼしにて、あの奴始終にが虫を嚙み潰した樣に默りこんて、冗談を一つ云つたことなく、時々氣味のわるい眼つきで見られるのは災難だ、其癖局長にはぺこぺこ頭を下げるからして感心に受けがいゝから愈々吾輩は恐れるよ、併しあの養えきらぬ性質では細君も辛からう、役所で不平を忍んでゐるだけ家内では嘸ゝゝゝわたるだらうから、梶の取り樣が困難だと、飛んだところで心配する人おほし。

良人は出勤し、姑も珠數と經本とを懷にして、後世をお願ひに出かけた後では、十五六になる良人の妹を相手に自分が學校にゐたときは、土曜日の午後には自宅に歸つて、お母さんにお酢もじをねだつた時、七片たべて兄さんに笑はれたの、その歸りにおさつをふかして貰らつて、お友達に分けたら一人前半分にも當らなかつたの、寄宿舍にはお風呂が一つしかないから、定時晩れて行くと垢でどろ〳〵した湯が底の方に少しゝかないの、試驗前に寢てからお友達と暗記物の問答をして、舍監のお媼さんに叱られたの、どうしたのかうしたのと話しては隨分笑ひ興ずることもあれど、根がおとなしき生れの、早く父親にわかれて母の手に育つたれば、女學校出には珍らしき柔らか物なれば、嫁ぎても好き程に良人の機嫌をとりて、何事もはい〳〵と從つてゐるゆゑ、氣六かしき一郎の左程のことなく、元々自分の望みで迎へたる妻の、初め一年ばかりは優しかりしが、例の性質なれば役所から下がつてきても母親に鳥渡會釋するばかり、着がへをすませば直ぐ書齋に引籠りて、妻が持てきたる茶菓を机に凭りかゝりしまゝ無言にて取り上ぐるのみ、振りむきもせぬを、稍々呼吸を吞みこみし秋子は、當りさはらぬやうに一言二言云ひ殘して何げなしに座をすべり出てつ、六疊の便室に裁紙を廣げ出ても流石に弱き女心の、行く末を思ひ煩ひては針の運びの鈍ることもありし。

その年は暮れて、墨田上野に紅雲をたなびかせし花も色なき葉櫻とかはりたる四月頃より、秋子は月經を見

ずなりしかば、兩方の母親は大喜悅にて、これは產生神の御神符わざ〳〵母が頂いてきたのなればとて送りこせば、此方の姑は襁褓はこれ產衣は何をと、早や臨月にてもなりしやうに立ちさわぐに、久しく望みし子のやッとて出來さうなのに、さうせか〳〵して反て血の上ることもあつては、玉なしにするわけ、お神符もよからうが醫者に診てもらふが第一なり。生れつき弱き身なれば持藥用ゐでは叶はざるべしと良人の注意に逆はず良人の知る何某の醫學士に診せしに、まだ夫れと決めがたけれど、藥は兎も角もと極めて確かならぬ口ぶり、一郎心安からず押して尋ねたれども、今は未だわからず今二月も經なば何とか成るべしと、詞をば濁せり。醫師の診察著るく、恰も二月目に秋子は一夜腹痛をおぼえたる曉方に、痛く流血して素の軀となりしが、それより良人の機嫌いよ〳〵惡しくなりゆきけり。

## 下

媒酌人の青山何がし秋子の母親に向ひて、それは最初から承知て貰つたお秋さん、今になつて敎育が無いの財產がどうのと云ふは園田さんが無理だ、又お秋さんが脆弱いといつてもまた足かけ三年になるやならぬに不姙症とも限りません、園田さんだといつて壯健といふ質でないのに、自分のことは棚に上げて此方ばかりを責めるのは片手落の云ひ草ですと、煙草を吸ひつけて、さてそこで貴母や英夫（秋子の兄）さんのお考へはどうです、素よりまだあちらで斷然離緣狀を渡したと云ふのでないが、お戾しなさるおつもりか夫れともお引きなさる心かと問ふに、母は叱りて、引とりますとも〳〵、悴が何と申しましても私はもう〳〵あちらへやることはいやでござりまする。まアよく考へて見て下さいまし、素々こちらで貰つてくれろと賴んだわけではなく、あちらから人橋かけてやい〳〵と一方ならぬ望みでございましたので、それてはと申して遣はしましたものを、身代がどうの敎育がどうのヤレ今から一年の中に子が出來なければ妾を置くのと、云ひたいまゝの得手勝手、園田もあんまりではございませぬか。それは昔から子が無ければ妾を置くのもありますし、又殿方の腕でございますゆゑ、妻は何處までも妻として立てゝおいての妾ならようございますが、あのやうな意氣地のないぐうたらの質では到底そのきりもりは出來ませぬ。その中に妾が男の子て

も生みますればえてして功名面に本妻風を吹かせますさうすれば娘は躰の好い若隱居て一生頭の上がることはなく、泣いて〳〵泣き死に、まあ靑山さん親の身で娘一人見殺しに致されるものでございませうか、今の中に思ひきつて引きとりますれば、まだまんざら散りきつた花でもございませず、あんなものでも又それ相應の片づけ塲もございませうから、是非離緣いたす樣に貴郞から園田の方へお願ひ申しますと、息まき前後をかへり見ぬ母の心は子煩惱なり。

成程それて貴君のお心はわかりました、英夫さんも貴母に御同意として、さて本人のお秋さんはどういふお考へなのか、やはり彼方に歸へるのはお可厭なのでせうなわざと斯う云ひ出てたるに、私の困るのはそこでございます、お秋はまだあちらに氣が殘つてゐるかして今一度適りたいと申します、お秋とて今暇をとれば世間の人に後指をさゝれますし、私初め兄姉に心配かけるのもなんだとか申しまして、お妾をお置きなさるのは異存なく、軀だけ置いて吳れることなら歸りたい、それともたつて私や倅が取り戻すと云ふことなら泣いて離緣して頂きますが、假令直ぐ貰ひ手があつたとしましてもそれが惡るいとも限らねば又乾度善いとい倘かぎりませぬ、どうせ榮輝榮華は夢にも思はぬ身の、二度耻をかゝうより、彼方さへ許して置いてくれますことなら、もしもあちらから離緣されたらもう〳〵何處にも適きませぬと申しますと、淚まじりに話す母親の言葉に、靑山は膝を打ちて、ア、見あげたお秋さん、貴母、女性はさうありたいてはありませんか、どうでせう貴母がお秋さんを可愛相と思つて引きとるとお云ひのも尤だが、假之こつちから離緣を求めてからが、お秋さんがその決心ではとても他に緣付きはなさるまい、それてはやはり若かい身を一人朽ちさせるやうなものそれよりも園田さんにお適歸りなすッたらお子の出來ることもありませう、さうすればもう占めたもの、ナンノ園田さんが六ケしいの八釜しいのと云つたところがそこを取りもつて行くのが女房の役ゆゑ、貴母も眞底から可愛相とお思召すなら曲げておかへしなさる方がよからうてはありませんか、まアよく皆さんとも御相談なさい、兎に角私も園田さんに逢つて、何處が氣に入らぬのか、何が不足なのか、離緣するか、せぬか、確かな所を聽いて見ませうと、これも詞をあやふやにして

歸りける。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此程園田一郎が某縣參事官に榮轉したるを、同僚の誰彼奢らせてやらうと訪づれたる話の末、君は細君をどうした。里にかへしてあるか。病氣ででもか。イヤ別にと云ひしぎり暫らく何か考へてゐるやうなりしが、不意に、併し那翁も美人の徐世賓を去つて美人の路易斯を迎へたため、男子が生れたではないか、其末路の憐むべきは別に故ありさと云ひて、苦笑するのみ。

（評）輕妙の筆、皮想の見、

## し　賞

# 薇薔花

岩手縣盛岡市四ツ家村三三　金田一隆子

あはれ如何にもして成蹟の良かれかし、試驗の海安々と渡れかし、と祈りつゝ夜半過ぐる迄まばゆきランプの前に、明日の試驗の恐き世界史去かと握り、睨む文字の怪やいつしか消え果てゝ、夢魂忽ち飛び出てしは得も知らぬ里なりき、亂れし髮を嬲る夜風の醒く、名も知らぬ草は紅に、目馴ぬ木々の茂り合いたる葉がくれに、ほのめける細き月影の物凄さ、冷々としたる惡魔の今か手を延さん景色なるに、思はず慄ふ我前に奇怪や顏色さながら雪の樣、黃金色の髮長く垂れたる者朦朧と立ちぬ、こはそもと呆るゝ我背を撫でゝ、怨を呑みて失せし悲さに、身は白刃の銹と消えても、猶立ち上る焰胸を焦して遣る瀨なき身に侍るを憐み玉へ、人種こそ異なれ同じ宿世の塵の子と生れし緣も有ものを、幾八千年の昔の世には、斯かる乙女の有りけるものぞと、光輝く日の本の優き媛達への土產になりとも思して、悲き胸の思を寸時きゝて玉はれ、幾年の其昔ぺりクルスとて隆盛を極めし代も有鳧と、悲き母か夜半の寢ざめの物語りを、誠さる代も有けるかとも思はず、夢とさゝ流せし事も侍りしぞかし、げにさはかり寂しう知れしギリシヤの南岸、アゼンスの片隅に小さき伏屋を構へ朝な夕な通る人の情を得てひくゝも烟を立て糸より細き玉の緒をつなぎ留むる、運命はつらき酒屋の娘に侍るぞかし、委くは知り侍らねど祖先は、妾が身には戀きスパルタに住せしなりとか聞きつれぞ、祖父に

至りさる故有りて、住み馴れしスパルタを後にして山々遙かに遠々と、敵の住かと見なされしアゼンスに遷りすみ、果敢なしや酒屋を業とし、兎も角も露の命を支へしに妾四才の時、不圖風邪の心地とて伏したりしが遂にとはの眠につき侍りぬとかや獨の兄上は勇々しき軍人にぞ侍りける、誇るにも有らねど母は世類稀なる容姿美しき人なりけり、あゝたゞ悲しきは父上よ、如何なる人にやおはしけれ絶えてみ影だに見しこともなきに稍物心つきてよりは日に月に戀さの遣るせなくて、何も知らぬ幼心の、折にふれ父上に一目なりとも逢せてたび玉へ、あはれ父上何處と母上の膝にまろび袖に縋るを、なだめすかして我頭を撫てつゝ見つめ玉ひし目に、不思議や屋洩る雨か、あふれて妾が頬に落つるをさりげ無うかくし、唯スパルタにスパルタにとの玉ひて伏し玉ふに、小さき胸のたとへしのみ悲うて、妾は父上に逢ひたう侍らず、免させ玉へ母上よ喃と、幼心にもいぶかしとは思ひつれど、母が悲げなる顔みん事のつらさにしいても問ひ侍らざりしに、近處の翁媼などの折々妾が小さき耳にほのめかすを、聽きてぞ始めて母上が憂の源因こそ知り侍りけれ、そは先に語り參らせし妾が祖父の未だおはせし時、或數年間何か用事ありとて母上獨に家を預けて、ふと行衛しれずなり玉ひし事の侍りしよ、其留守の間に、スパルタ人なりとて若き軍人の、いぶせき埴生の小屋をも厭はで度々來られたりしが、誰憚る人も有らざりし故、妾が母の花の齡にてしかもうるはしきに、深くも迷ひ、母も彼方の秀でたる姿に、熱き初戀の血しほ波立ちしより、仇なる契は結ばれて樂しう月日を暮し侍りけるとか、あはれ其軍人こそ慕はしの我父上にこそおはしけれ、さる程に祖父は或る年暮がたの雪靜かにも降り積り、乳房をさぐる幼子と添寢の夢長閑にも更くる夜半、偶々柴の戸音づれ歸りますや否、我怨みある處の人を容れし惡さよ、いぶせしとて汚れなき此家に一足も踏み入れさすまじきぞ、とくとくとて哀や思ひ思はれて、はや幼き者さへ出てたる二人が中を裂かれしは、兄は四才妾は未だ母の胎内に侍りし時なりしとぞ、あはれ其訣別の時よ、今宵限りのとなれば名ごりはつきねど、さらばとて立ち出て玉ふ父が後姿の、淒くも澄める片破月のまばゆく雪に照りあいて、いつ迄も見ゆるに母は堪へかねて、今日か明日かと許なる重き身をかゝへ乍ら、後慕ひゆきと

ても角ても添ひ遂げんとのおぼ束なう、さりとて今更別れ侍らば、命の中に又と逢ひ參らせんも心もとなきに、幼き者をは如何にし侍るべきと、泣きくづをるゝ樣のいぢらしけれど、弱き心を見せては叶はじと取りつく手をふり拂ひてはたと睨まへ、汝とて今は軍人の妻ならずや、さる女々しき者ともしらで契りし我愚さよ、悔しさよ夫婦の緣も今を限りと思へとて、はや走り玉はんとするに、免させ玉へかまへて歎き侍るまじいと良うあきらめ侍らん、男子をは君が御血統繼がせ侍るべき樣天晴なる軍人となし侍らむ、み心安うおはせかしと誓ひ玉ひしに、父は如何許嬉うおはしけん、さてこそ我妻なれ、よしや再び逢ふよしなくとも死出の



山路は必ず同じに越へなん、さらは未來も變らぬ夫婦ぞとかたみに寫眞とり交し、必ず共に肌を放さじ、さらは共にさきくとそを名ごりに見かへり勝に別れしより、涙に明かし涙に暮す程、月滿ちて安々と生れしは妾よ、さても母上獨の御手にて二人の幼子養育玉はりし御恩惠いつの代にかは忘るべき、斯くて二人はいとも健かにおいのび、ひま行く駒の足早く、妾は十九兄は二十三の春を迎へ、共に力を合せてみ心安めまつりて、其御笑顏し玉ふを見參らすをこよなふ樂み侍りき、さるにても父上もいまさばとのみ慕はれて人知れず袖の干る間もあらず侍りき、斯くも果

敢なき母子三人を、猶足らずと手玉のやう弄び玉ふ運命の神こそ恨めしけれ、そは外ならず同じ年の秋の暮、豫よりほのかに胸痛う思ひ侍りし我祖父の故郷しかも今は、父上の住居し玉ふスパルタと我里との親み良からで、年々小さき戰の侍りけるが、遂に大うなりてペロポ子サスの戰となりければ、我兄上は心ならずも慕はしき處の人と鋒を交へ玉はねばならぬに至り侍りぬ、其より母上はさせるとなけれど頭重しとて臥し玉ひしまゝ、夜晝衣帶も解かで看護のかひもなく、日に増し衰へ玉ふのみに侍りき　此戰の勝敗はげに二つの都の運の定まる所に侍りければ、烈さいはん方なく血煙世に滿ち、妻は夫に子は親に、別れさ迷ひ泣き叫ぶ聲耳につきて無慘といふもあまりあり、我住家はいと片隅なりければさまで恐うも侍らず、一向兄上の恙なく歸りませとのみ母上の枕邊に侍りて祈り居り侍りき、さる日の夕暮何となう心なき雲の行かひにも目とまりて夕陽沈むも知らで眺め居し時、不圖心付きて耳澄ませば、此處かしこに聞へし閧の聲もはや遠ざかり、音なき暗の其半を此方さして走り來る軍人あり、兄上かといへば妹かといはるゝに、まさきくておはしけるかと、はや嬉さに堪へかねて、血などにや冷々としたる腕に思はず縋りつ、母上には看護の甲斐の聊かも見へ侍らで其のみ悲うといへば、汝獨にてさぞな疲つらめ、されど世には我等が如き幸なき者いくらも有るぞ、さな歎きそ、其につきて今日はゆくりなきと敵の老軍人に賴まれて、ことならめとは思ひつれど、身に思ひ比べてはすげなう返さんもいとほしう、云ふにまかせて持て來ぬ、此美からすやと一葉の寫ゑ取り出しぬ、妾は怪さに唯見て居れば、からからと笑ひてこは全く人に賴まれたるなり、うたがひの晴れずば、つばらに聞さん、さしも烈かりし戰も晝少過ぎに止みたれば、我獨荒野を逍遥い居りしに、何處よりか五十路許なる敵の軍人我前に現はれ健氣にも向ひたれば、艮しと心を定めあはや一討に倒せしに、彼は苦き息の下より切々に云ふ様、慈悲深きアンゼスの軍人よ我が懷かしき妻子はアゼンスに住居せり、明日をも知れぬ老の身もて、遙々と敵地深う來りしも、いかで今一目遭はやの願に外ならず　男兒は軍人となりつと聞き居れば定めし君も知りおはさめ忘れもせぬ廿年前の冬、よしありて四才の時別れたれば顏はさだかに覺えねど、確に廿三才の筈、女兒も有

りつれどそは見しこともなし、別るゝ時に後の記念にもと互に取交せし此寫眞、寸時も肌を放さゞりし可憐の我妻、我今君が手にかゝりて死すとも知らで、身の果、子の行末を案じつゝ吾を待ちてあらむ、此美しきうつし繪を共に我と朽ちさせんは堪へ難し、いかで君が情もて我が心中を汲み玉ひ、我子に逢ひ玉ひし時、父が遺物ぞと一言添て此を、といゝしまゝあへなくなりぬと語り玉ふに、さらばはやうたがひの晴れ侍るをそはあまりに美しければいで母上にも見せ參らせん、斯かる妻君をのこして失せ玉ひし人のくやしさ如何許にや、兄上もあまり情無き事し玉へるものよと語りつゝ家に入り、枕邊に膝まづき玉へば、何ともの玉はで、たゞやつれたる面輪に少笑ませ玉ひぬ、まづとて寫眞見せ參らすれば、そも怪見るみるみ顏色靑う、握り玉ひし手いみじう打ち顫ひぬ、こは如何にし玉ひし、み心惡うならせ玉ひてかと問ひ參らすれば、絶えだえに、此をよこせし軍人如何にせしとの玉ふに、兄上、敵に侍れば先程我手にかけてと云ひ終へぬに、アッと叫びし一聲を名ごりにはやいらへを爲玉はずなり侍りぬ、あはれ悲や思へば其軍人こそ片時忘るゝ暇も非ざりし我懷しの父上におはしましゝよ、如何に泣けばとて歎けばとて返らぬ者を、いざ妹此處も何時敵に踏み荒されんもはかり難し、なきからなど汚されなばくやしからんとはげまされて、とみにあきらめつ、夜の中に片付けて、さて兄上の共に來よとの玉ふに何とは知らねど今は賴とするは廣き世界に兄上獨り死すとも生くとも共にと誘はるゝまゝにきらめく星の光をしるべにして、何處とも無く辿りし道は一里か二里か足も早疲果てたる頃不圖止まり玉ひ、彼見よ如何に敵とは云へ、四年の間撫愛しみ玉はりし父上を廿年見えざりしとてみ顏全く忘れしとにも非ざりけんを、現在我手にかけてとは噫何たる不孝者ぞ、母上の果敢なうなられしも我爲も同然、父をなき物とし母を無き物とし如何で我身長らへ居らるべき寸時も早く御供仕らむ、さらば妹汝は生遺りて我等三人を同處にとて自失せんとし玉ふに、兄上寸時待たれよや君なくば如何で血の雨茂き世に孤兒と爲りて長らへ侍るべき、哀と思しまげて思ひ留まり玉へさらずば後にて直に跡追ひ參せんと、有るたけの力出して手しかと握れば、噫如何にせんと頭垂れ玉ふ、噫如何なれば斯も幸なく生れし我身ぞや、生れ落しより父の顏

見しとなく、十九の長き年月忘るゝ暇なく戀ひ慕ひまゐらせしものを、斯かる淺ましきみ姿にま見ゆるとのうたてさよ、來し方の悲さ行末の果敢さ、胸に餘る千々の思を誰にか泣きて語るべき、あはれ願はくは一語娘と呼び玉はれと、血にまみれたる死體に取り付きて現心もなう泣きくづをるれば、哀と答ふるは枯木にそよぐ夜半の風のみ、折しも暗の遠より軍馬の響此方さして……兄上は屹と身を起し睨まへ玉ふ、次第次第に近づくあはや二人が目の前に現はれしは、幾百萬の敵の武士にぞ侍りける、などさは戰さ玉ふ、果敢なき幾年の昔の我身の上語さこそ倦き玉ひけめ、ただ唯憐み玉へ、幸なき兄弟二人が同日同斷頭機下の露と消え侍りしを……と語り終へて、そと涙を拭ひつゝ世界史の紙かき分けて、消え入りしと思ひしはそも夢かや現、しをれたる白薔薇グリーンの表紙にハラハラと散りかゝりて、テイクタクの音のみさやか。　（をはり）

《評》經國美談一流の筆もて十八世紀に行はれし西洋小説の一節を翻譯したるものなり、いさゝか時節後の氣味は免かれれど後れ初物として掲載しぬ、



# 埋れ木

## 上

志摩　山崎ひさ子

往さ來るさの人をしてひとしく目を聳たしむる村端の一構は小倉長之進とてこの界隈での舊家で主人の在世には家運も榮へて二人の愛子の行末幸あれかしと案ずるより外苦勞と云ふ事知らざりしに月に叢雲の譬に洩れず幾程もなく妻を先立てゝより打續く商法の損失に次第に家の傾くを苦に病みどつと病の床に臥して年の中ばも過ぎぬ間に先妻の紀念なる男女の子と其前娶りし後妻の生みし一人の男子を殘して此世を去つたで間もなく親戚の某が後見を名として入こんで其頃小學を卒へた計りの長男は直に東京の中學へ入學せしめたが其處をも卒へて高等學校へ入つた其年の中に脚氣衝心で俄然これも父母の後を追ふたのである此の悲報に接して絶え入るばかり嘆いたは妹のお妙と其乳母で密に笑んだは繼母と後見人の痴者とであつた其後小倉家には聞も忌はしい惡評の立つたのみか忠實なる乳母は罪

なきに放逐されてしまつたお妙は重ね〳〵の悲運に會して身も心も共に怪しう亂れ初めたやさき淺間しき母の亂業は日ましに募り只一人力と賴む乳母との中さへせかれて文さへかはす事だに絕えてはいよ〳〵浮世を果敢なみて一日亡き母の遺せし短刀をそつとかくし持ちながら「オヽあの櫻の本を死塲とせう」と獨り點頭いて背戶の棹杓へ夕陽が映して野面歸りの百姓の小うたの聞えそめた時庭下駄のまゝ千々の夏草の思ひ〳〵に咲き匂ふ間を縫ふて楓の木を掠めて行き過ぎんとしたが流石名殘惜しさに四邊を見回した花壇には芍藥燕子花芥子葵果ては西洋種の種々な草花が互に色を競ひ合つて若葉しげれる楓は懷かし氣に已が身を蔽つて泉水に浮み上る魚も何となう別れを悲しむ樣に思はれ暫し茫然と佇立で見つめながら「あゝ今一度乳母にも逢つてそしてあの優しい弟にも……けどもそれもせんない樣言」と愁然として「私が淺ましい最後を遂げたと聞かば嘸驚き嘆くであらふと思へばそれが〳〵」潸然とほとばしる泪を手巾で拭つた時パタ〳〵と細かな足音を立てゝ驅來りながら「姉さん」と不意に聲をかけたは弟の光雄であるお妙はハッと驚いて振返つたが何

事とも分かず今しも近づいたその紅葉の樣な手を取つて引寄せた「光ちやん」お妙は早や涙せき上て云ざしたまゝ低頭れた何も知らぬ彼は至極天心爛熳て「姉さんまた翁の櫻の所へ行の姉さん彼處大好なのね私も好ッたらないわ今直連つて頂戴な」早くも姉の纎弱な腕にからみついた「姉さんはは今日は行かないのよなせッてもう嫌になつたんだもの」「ぢや明日も」「その明日はね………」溢るゝ涙を見せじと顏を背けた時何に驚いてか楓の木にありし三四羽の雀は一時に飛出して何處より舞ひ來つたか一疋の鎧蝶が二人の邊に暫し彷徨つて居たがやがて花壇の中にかくれ去つた「あれ蝶が」鈴の樣な聲で叫んで駈け出さうとする光雄の肩に小と手をかけて引止めながら「光ちやん」姉はきつぱりとした聲てかう云うて其栗々と太つて愛らしい顏を呢と目守つた「光ちやんもし姉さんが居なくなつたらねお母樣に孝行をおしなさいよそして私にかはつてお母樣のお心のお直りなさる樣神樣にお願ひ申すんですよ」「だッて姉さんはお家にゐらつしやるのでせう姉さんいらつしやらなかつたらもう學校へも行かないや、え何處へも行かないでゐて下さいなそして乳母も如何したん

だらふね姉さん何處へ行つちやつたの」圓く瞪つた目には早や涙をさへ湛へてゐるお妙は聞く事毎に嘆を増して「光ちやんはそれ程迄に私を……」思はず手巾を顔にあてた時彼方より足早に近づきし新參の下女二人の前に恐る〳〵小腰を屈めて「あの坊ちやまお母樣のお召で御座います」

## 中

「姉さんもいらつしやいよ」と促す光雄を強て下女に伴はしめて其の小さき後姿の緑深き木蔭に見えずなる迄見送りてはら〳〵と涙を落したがゝくてはと心を勵まし足早に木の間をくゞりぬけ現心に裏庭の枝折戸をあけて家の後に出た其邊りは一つの古池を圍んで一面の田があつて蛙の聲がこゝかしこに滿ち渡つて少し隔つて籔の中ばを巡つて薊の花の薄紅の色鮮なのと野薔薇の垂下つて房々した雪の樣に白い花とが配合よく咲いた下をくゞつて來は彼方の溪間にそゝぐ小川の流れがちよろ〳〵と神の秘密を私語くが如く鈴の樣な音を立てゝゐる川の邊には一本の老ひたる櫻があつて今は昔何でも其櫻の本に只雨露をしのぐ計りの茅葺の伏屋をしつらへて一人の翁が住んで居たが櫻の盛りの頃には行通ふ人も立止つて眺め遂には其の家に迄入つて賞したが花散り果てし後は再び訪ふ人は愚か見返る者さへなくつたから「わが宿の花見がてらにくる人はちりなん後ぞ戀しかるべ」きと古歌を認め葉櫻の梢につるして世の浮薄を憤り我は躬恒と同じ事であると嘆ちしとか其後誰となく躬恒の翁とよびそめて翁の櫻と云へば誰知らぬ者なきに至つたが間もなく翁は老病の爲愛樹を殘して此世を見捨てたのみならず其茅屋さへ後かたもなうなつてしまつたに主なき花は何も知らぬ氣に年々昔の色を繰返して數多の人の眺むるに任してゐるのであるされど今は其誇るべき花とてはなく咲きも殘らず散りもそめぬと賞せられし昔忍ばし氣に緑の色のみ濃き梢を夜風にそよがせて居るお妙は四邊に氣を配りつ蹌踉く足を踏しめて其櫻の本に辿りついてほつと息をついた日は既に暮れ果てゝ彼方の小逕を二三人の里人が何やら高々と語り連れて過ぎ去つた跡はまたもとのしづけさに返つて十三夜の月が澄み渡つた叢に虫が清い美妙な歌を奏てゝ幽玄な天地は宛然我一人の爲に占められしかの樣其處此處にさき亂れた夏菊の花はもう眞玉の如き露を宿して暗にをくれし一

羽の鳥が急がはしげについとそれた「思へば去年の春丁度この花が爛熳とさき亂れてゐる時であつた中學を卒へた兄上の高等學校へ入らんとして一寸お歸りになつた折いつも二人で暮れ難い春の日がその殘り惜しさうな夕日をあの山の端に暫し漂はしてゐる頃から朧月が花の梢に高くかゝり初むる時迄語り續けて互に幸なき身を慰め合ひしが」と今更の樣に太い息を吐いた彼方では白薔薇の花が一つほろり音もせず落ちて土橋の下を囁く水の音が一層耳立つて聞えた「忘れもせぬ此處にて最後の別れを惜しみし夜此の木に身を凭せて代悲白頭翁の唐詩を高やかに吟じ給ひしが其中の句の明年花開復誰在 恨を長く殘さんとは露程も思ひかけざりしを夢にも思ひまふけぬ悲しい電報を此の手にふれし折の驚き乳母との別れの嘆きも皆過去つた一夢である怪しう亂るゝ胸を双の手にしかと押へて白く泡立つ小川の面を屹度見た「あゝこの流は昔に少しも變らない櫻も薔薇もこのあたりの小草の花も歳々其色を繰返せど共に眺めし人は何處……」卒然として月を仰ぐと螢がついと汀にそふて飛んだ暫時蔽つた薄雲は全く拭ひ去られて蒼黒く晴れ渡つた瑠璃紺色の天には一輪の月が皎々と照渡つて蒼白い光を宛然女神の如く清く神々しき彼女が全身に浴せ掛け叢に映る影を益々鮮に書き出した



## 下

「死々世に死程樂しく心安きものがあらふかいざ快く其御神の手につかんと靜に獨言たが雪を欺く繊弱な手にはいつしか明皎々たる刄が握られて居た「乳母には眞實にすまないけれど兄さんも私も皆

神のめぐみに預らぬ薄命兒とあきらめて私の罪を免しておくれ」としとやかに小草の上に坐したが身に泌む計りの風が颯と吹いて櫻の梢からばたり〳〵と白露が一しきり雨かと紛ふばかりに悲哀の情に溢ち渡つたお妙の蒼白き頬を掠めて地に滴れた世には恨めしき人もなければ惡しと思ふ者もなし今迄は夜毎に我を慰めくれし翁の櫻よやさしき流よさらば我身は喜んで双親の君と兄上の御側に至らん光芒一閃あはや其玉の緒はたゝれんとせし時何者てあらふ姿は見えぬが「冬を凌いて咲く梅の花死んで花實は咲きはせぬ」とうたふ聲が宛然すきとほる樣に冴え渡つた瞬間お妙はハッと我知らず刄を地に落して翻然と立上つた「あゝ眞實にさうだ死んで花實は咲きはせぬ」と繰返して云つたが何をか深く考へに沈んだ

「私が淺ましい自殺を遂げたときかばまた乳母迄ひよつとあゝひよつと心得違をせぬとも限らぬに…………そしてまた此刀はお母樣が身の守りにとて下すつた品決して玉の緒を絕たん爲のたまものならず今暫し死する命を生存て厭世遯俗の庵を結び亡き人々の後世を吊はん乳母の家はこゝより三里如何に短い夏の夜ても明けぬ間にいつくてあらふ一度逢つた上また何とても出來やうから」と思はず限なき月の光に向つた夏菊の花を見下すと何者が捨てたのであらふ一本の古筆が斜によりかゝつてゐるのをみとめたお妙は何に感じてか莞然して再び白刄を取上て此度は側の櫻に向つて削りそめた一片二片三片細やかな手に削り出された木片はハラ〳〵と亂れ散つたがやがて最後の一削を加へてホッと息を洩しつ右手に刄を持つたまゝ左手をしげ〳〵と眺めて流石にためらつたが遂に意を決して其小指を切落したそして彼の古筆を取上て眞白き手に流るゝ紅の血汐を浸しながら細長く削られた櫻の幹に何をかすら〳〵と認めて靜に其處を立去つたやがて畔路を辿る彼の姿は暫し墨畵の如く月光に映じたがいつか叢竹の間に其影を沒した翁の櫻の邊には一しきり螢が飛び巡つて月は愈々光をまし淸き流にそが影を碎いて「螢こい〳〵其方の岸には鬼が居る此方の岸に飛んてこい」と呼ばふ無邪氣な高い愛らしい聲が何處からともなしに四邊の寂莫を破つて聞えて櫻に生々しい血汐てかゝれた一首の古歌は「思へどもいはでの山に年を經て朽ちや果なん谷の埋木」と顧げながらよまれた折から牧

笛の音が遙に聞えたが次第に近くまた遠く終に仄に消えて了つた後はまた一層のしづけさて虫のみ獨り其淸い音をほしいまゝにしてゐる

【評】作者の筆は前途多望なり須らく沈重を要す

## 丙賞

# 澁の溫泉の華

神田柳原三、荒木方　楠　眞子

(上)

「左樣て、未だ一里半は充分でぜいやせうよ」

持て來たる澁茶を客の前に差し出したる媼は尙も言葉をつぎぬ、

「それで何かね、お前樣、溫泉に久しく逗留してござらつしやるかね。彼處には此頃恁う云ふ話がでぜいやしたが」

古びたる腰掛に倚りて茶を啜り居たる旅人は、年の頃二十五六、脚絆草鞋に身は固めたれど、色白き細面に戴けるパナマの帽子、さては物の言ひ振り、何れ東京の人なるべし。茶碗を置きたる手に煙草を抓み出しつゝ、それは何ぞと言はぬばかりに媼が話に耳そばだつるなりけり。

「全體斯う云ふ譯でね、まあお前樣、可愛想なのは死んだ男だあね、それだに女の方は洒々したもんだ、平氣の平左で湯女とかやつて居るそうだが、何でも馬鹿に美しいのだそうで、お前樣見たいな立派の方がござらつしやると、必然もうだまされつちまうのだそうだ、昔から菩薩樣の面を被つた鬼夜叉とか云ふが、ほんに思へば憎らしい阿魔女奴」

さも口惜しげに語りつゞくる話は更に要領を得ざりければ、旅人は怪訝の面、

「一體春さんは何話してるの、何う云ふ談話なの」

「あゝそうだつけ、あんまり憎らしいもんだて。そうだそうだお前樣にや初つから話さなきや駄目だつけ」

穢ろしき前垂に口のあたりを拭き終りたる媼が、一息つきて語りいだしたるは即ち次の物語なりき。

澁溫泉より一里程山の頂に水涸れぬ三つの池ありとか。最も大なるを靑池と云ひ、他は一を尼池、一を霧池と呼べり。今より一ケ月程前のある曉、靑池に女の死

骸の浮び出でたるを、折から通りかゝれる山賤に救ひ上げられて、再び浮世の風に蘇生りたるを、澁の主人が湯女にとて連れ歸りたるは、此物語の主なる女なりけりさる。男と共に入水したるなるべしとは、男帶の身に纏ひつきたるにて知られたりとぞ。あらぬ嵐に誘はれて少女心の分別なく鬼まれ家出はせしものゝ、さて何處を夫れと便らむ術なければ、其三日前とかや道に迷ひて山深く分け登りたりき。雨風の夜の黒白も別かず、ひた走りに走りぬけむとて、やがて夫の青池がほとりに出てぬ。二人は此處に泣きつ歎ちつ、轉た浮世を果敢なみて、儘よ一度は失すべき命、ながらへて愁じ切なき思を殞たむよりはとの淺き淺き心定めの遂はさる事とぞなれる、三つの池の何れも山の頂なれば固より流れ入る水とてはなけれど、古より湛えられたる水は今の世も涸るゝ事なく、色は常に澄み渡れど水底は窺ふべくもあらず。近きわたりは大地鳴り響きて物凄さ言はん方なし。かくて流れ出づる水もなきに、人々の行きて籾糠うち流せば、山を遠く七里ばかり亘りたる諏訪の湖に現はるゝとかや。

扨共に入水せしてふ男の骸は、人々普く求めたれど、さ、怪しき池に詮術なくて止みぬ。救はれたる女は泣きに泣きて再び水に入らんず氣はひさへありし程なれば、共に入水したる男の名はもとより生れし國も村の名も更々語ることなかりき。樣々になだめ訓されて、理をや悟りけむ、其後の動靜の反對に、人々と共に笑ひどよめきつゝ、今は澁の溫泉の花と仇名さるゝ身とはなれりしとぞ。

山の奥深く設けられし溫泉の、湯治に來る客とては、血の病骨の病などになやめるものゝみなれば、噂のみにうち過ぎて公の沙汰ともならで止みたるならむ。

語り終へて媼は再び茶をすゝむるなりけり。

「ハア面白い咄もあればあるものだな、夫れで年は。

「何でも十七とか八だそうだが、えらあ別嬪さんだちうこんだ、別嬪さんが何でも死んだ男に回向一つも仕つこなしに、助けられたを善い事に若い衆の生血を啜るとは酷い奴だあね。向うの源公なんかも、家へは御蠶樣の三百枚もおつ擴げて置て其奴に入り浸りだそうだが、お前樣なんかもちと御氣を附けさつしやらなけりや何てすぜ」

「ハヽヽ僕なんか大丈夫の保證附だ、永くて一週かそこいらだもの」

「えヽ一生居るってね」

「ハヽハヽ一週って七日の事よ、夫れじゃ此の道を眞直だね」

「まあ、お茶代なんか、お前様どうも御氣の毒でございやす、何處までも此道へついて行かっしりゃ最う此處から一本道だあね、鹽の温泉は一軒きりしきやねえだから、何うもありがたうござい やした」

若人は數へられたるまヽに、鎌塚を右に見つヽ森下の徑を分けて廣らかなる野原に出てぬ。盛夏の日は既に二時を過ぎたるなるべし。徑を蔽ふ靑草は流れもせぬ暑き空氣に蒸されて、湧き騰る地の氣は鎔鐵爐の息吹に接したる如く、背を照る日の光は赤熱せる鉛を骨肉の間に注がるヽ如く覺えつ。寒國といふ信濃も流石に暑き夏なりけり。

十數町にして件の徑は禿山を登るなりけり。

やがて徑は稍平坦となりて松の數尺なるが立ちはびこりぬ。

顧れば諏訪湖を巨てヽ遠く木曾の山々、著るく高く聳えて白きは雪を戴く御岳なるべし。前面には立科の山脈遠く蟠りて、目指す處早近きならむ、谷の石に白く色づきたるは湯の鹽のつきしと覺ゆ。道のべに野菊咲折れて美しき虻は翅ならしつヽ飛びかふ。

石楠木の群立ちたるは深山の兆なるべく、草深くなりて徑かくせるは人の通ふこと稀なる故にや。

若人は其名を濱田啓一と呼びて、東京のさる美術學校に籍を置くものなりけり。父なる人のいたく嚴かにて幼き時上京したる以來、業遂ぐる迄はとて如何なる場合にも啓一が歸國をば許さゞりき。

今年の夏は中仙道を美濃に入りて、遙かに北陸の海邊を廻り、あらゆる趣を探らむとて、八月の半、都をば出てたるなりき。嶮しき和田をうち超えて下諏訪に宿りたる昨夜の程、宿の主人が、さる御志には鹽こそ宜けれと云ふまヽに、一人旅の時日吝まぬ事なければ、さらばとばかりがくは志してけるなり。

（下）

實に此處は聞きしに違はぬ奇勝絶景なりける。背に負へるは高さ知られぬ怪嚴石、的面につヾく山々は小富士、簑被、赤岳、阿彌陀、人工加へぬ自らなる谷間に、未

だ新しき旅館、大きやかなる湯槽仕つらはんたるは、云はでも知るき冷泉をたゝえたるなりけり。

啓一は昨日宿には着きにしかど、旅馴れぬ身の鄙の山路、いたく勞れたればとて、冷たき泉に浴して、夏とも知らぬ山風に旅の懶さをば晴らしつ。麓の茶屋にて聞きたるそれは、良と呼ばる、少女なるべし、艶なる眼元卑しげなる物の言ひ樣、さてこそと思ひはかられて吾れとなくけにくき心起りつ。されど其賢げなる眸締りある口のさま、思慮に老けたるものならむに、さりとは淺ましき心もてる娘よと思へば、眉のあたりは愁の靄に蔽はれたる如きさまにも見ゆ。世事には初心なる啓一もそれとはなしに同情の寄せらるゝ心地してそゞろさしぐむ思しつ。常に輕快洒落との評を受けたる啓一の、やがてはつねのこゝろにかへり、只眼に映ずる異風奇勝に其心をうたるゝのみにて其日も暮れぬ。三日目といふに啓一は山の頂に登りぬ。其處に疊八疊ばかりなる大石あり。石上に登れば遙かに佐久平を見越して、碓氷の山續きより煙噴く淺間の山を眺めやるべく、踵をめぐらせば諏訪平木曾の遠山又一眸のうちに收むべし、げに高見石の名に背かずとこそおもひしか。脚下に横るはこれぞ彼の青池なるべく、左につゞきて小さき二つは霧ヶ池尼池なるべし。歩を移して池邊に佇めば、きゝしが如く地下に轟々と鳴り響くさまなり。草は虎杖の生ひ叢りたるのみにて山は突兀たる石塊に疊み込めら。れつ世をはかなみてかゝる池の中にあたら命を沈めむとしたる少女が身のそゞろに忍び出でられて、果ては悽然たる氣の充ち罩むるが如く覺ゆるに、暫くも止り得かねつ。足をかへしてさきに登りし岩松づたひ、賽の河原をすぎて己が宿にとかへりつきぬ。きけば其朝より、良と呼ばれし少女は氣分すぐれずとて床に就きたりとか。

＊　＊　＊　＊　＊

隣室の戲言端唄とりに〳〵おかしく、都の塵に浴び飽きし啓一はかくて五日となりぬ。

今宵は舊曆の十五夜、澄み渡りし空には一團の晴光轉じ出して、獨り籠り居ることのわびしさに、山上の月の光や如何ならむと、稍闌けし夜をひとり啓一は旅の館をそゞろ出でけり。石楠木の木石を漏るゝ月陰に涼しき草を踏みなしつゝ、山の頂に到りたる時ははや十一時も過ぎたらんかし。萬籟聲をひそむとはかゝる折て

ぞをとほくそ笑みつゝ、唐歌倭歌低く唱ひ出せば、月は特更に身に逼り来るやうにも覚えつ。下界の様はさだかならねど、壺の間に見つる山々の青空に接して劃然と聳えたるがわけて嬉しなど思ひつゝ時のうつるを知らざりけり。

果然！夫れよ怪物！

五体のすくみたるかと覚えて息を殺したる啓一は、眸を定めて見下したり。そは今かの青池のほとりを立ちて此方に歩み来る如き白き物を認めたるなりけり。

さばれ、為すがまゝに任せて見むと決心したる啓一は身動きもせで其方を見詰め居たり。

近づくは人の形か？

音するは草のそよぎか？

瞳を凝らせばそは白き浴衣の女なりけり。病ときける少女なりけり。やゝ心落ちつきたる彼は倘語を發せざりき。



「まあ貴郎何うして、私喫驚したわ」

おどろきたるは此方なりけり。

「何だ貴様か、己あ又人魂かと思つた。悪い事を仕やあがる」と苦りこみぬ、

「ホヽ、御免くださいな夫れはそうと貴郎真實に明日御出立なさるのですか」

「最う今夜にも行つちまう」

「あんな御串戯を、ほんとうですか」

故に月に背きたればあらはならねど、かの嬌なる眼元は赤く泣き腫れたかの如く、鈴の如かりき双眼け朧に霞みて見えつ。病の故のみに非るべし。

「ナニお前のやうな人が居るんだもの、一年でも二年でも居らあな」

「………アノ濱田さん（オロ〱聲に）最うおきゝてしやうが、妾は一度此池に入つたのですよ………夫れて今夜が丁度御命日。どうも今迄は吾儘ばかり申上げましたがどうか不憫に思つて下さいまし。浮世は矢つ張り何處までも浮世ですわ。國には父母もありますし、現在自分の目の前が………、が、一旦不義淫奔の皮を被れば化物同然、最う自分で人間とは思ひません、だがまあ御聞き下さいまし………」

滴の如き涙は其せき度を知らざりしが、稍ありて彼女は入水の始末を斷續せる言葉のうちに語り了へぬ。啓一も今は共々に泣くなりけり、よにも哀れの女子おもひしなるべし。

月ははや傾き初めぬ。そゞろ風さへ加はりて。

＊　＊　＊　＊　＊

今は秋の初つ方、谿の溫泉の花の名は彌ひそがりに高まりぬ。

濱田啓一が肉身の妹に逢ひ乍ら知らで別れたりとは、十五夜の月の外には知るもの絕てなかりけり。（完）

（評）事柄おもしろさうにして遂にその要領を得ず前後の關係を今少し明瞭にせられたし

# 行く水

茨城縣新治郡土浦本町　山口すみ子

## （一）

殘暑の嚴しきにも夕暮の風さすがに涼しき庭の面、軒端の風鈴の音も折柄の風を誘へば、打水の露はら〱としたゝる心地よさ、目覺むるばかり木々の綠色深く、晝の暑さは夢かとばかり消え薄れし泉水の邊に腰を下して老人相手に何か嬉しげなる笑ひ聲。

「乳母や私は幸福ね」と豐かな頰に笑凹を見せて、一の字丸髷重たげなる頭下俯かせ何とはなしのほゝゑみ年の頃は十九か廿か、愛嬌あふるゝ目付口付、薄化粧に口紅靑くつや〱したる齒の中に赤いてがらをのぞかせつる美しさ、撫肩のすらりとせし背後へさとはかり咲き亂れし藤摸樣の華美な浴衣に、海老茶かゝりし晝夜帶を小なく結び、雪の腕に燃へたつ如くこぼれて香ふ緋縮緬は肌着の袖か、何も〱あてやかな錦畫その

まゝの初々しき奥樣風なり。

「ほんにねえ、あの意地惡の繼母樣のお傍にお出の時は、私まで共々泣きましたが、今は最う申分は御座いませんわ、お容色の好いお方はお德で御座いますね」

と丸髷の鬆つき鬢じりの麗しきをのぞきこむ、五十ばかりの實躰なるは乳母のお時なり。藍色おなんどの單衣に黑毛繻子の帶を引掛け、地織のゴリ〳〵せし前垂れ姿、これはまた甲斐〳〵しさ。

「いやよ、容色が好いなんて、知らないわ」

「ホゝゝ、ちや旦那樣におきゝ遊ばせな、ですけど乳母も知つてをりまする、それは〳〵兩方で焦れぬいて、お嫁に入らつしやらぬ前などは我儘を仰有つたり、拗て見たり、垣の外からのぞき見なぞ遊ばしたり、あれは何誰で御座いましたやらホゝゝゝゝ」と言ひ〳〵笑へば

「アラツ、またそんな事、惛らしい」とサッと面を赤らめて、そと後より背をつく。

「まア乳母を泉水の中へ落としてお了ひなさるんですか、お孃樣、おやない奥樣、覺えてゐらつしやいよ」

とわざと忌々しげに熟と睨むる

「ホゝゝまたあんな顏してホゝゝゝゝ」とおどけなうほゝゑむ顏の、さながら薔薇に似たる色艶の美しさ、この春まで邪慳な繼母にさいなまれ、何かにつけて乳母や〳〵と足はぬ勝の我袖陰に人となり給ひて、氣の弱い沈み勝な玉枝樣が、此家へお出なされてから急に若々しくおなりなされた事よ、と思へば、何やらお眉付頰の邊もおふとりなされしと、乳母も覺えず打笑るゝ。げに玲瓏として一片の浮雲なく、玉枝の心に似たる月は高く中天に冴え渡りて、靜なる庭園を照し、その淸き光を二人の頭になげかけぬ。

「思へば思ふ程、お孃樣はお幸福で被居いますよ、あの樣なおやさしいお學問のおありなさる旦那樣をおもち遊ばして、乳母なぞは何にも出來ぬあんな老爺なぞをもちましたから、一生うだつがあがりませんわね」

「ほんにねー、耳が聞なくて腰がまがつて」

「アラ貴女、あれでも若い時はそんなおちやありませんよ、ホゝゝゝゝ」

「ホゝゝゝゝ」と思はず笑ふ

（二）

座敷の障子開け放し風通りよき端側に片足なげ出して夕暮の風情ある庭の景色を眺めゐるは主人の武川賢次

なり。庭にはちと早咲きの百日紅の花、緑の中に紅の艶なる色交るもうつりよく、築山の石燈籠には燈火の光輝きて四邊の樣をさやかにてらし、咲きくる風に一しきりざわつく葉摺の調もおかしう、折柄の蟲の音も興あり顔なるに、主は只管耳かたぶけぬ。

男らしう色淺黑き面に眉目氣高き迄秀でたるが凛々しく、賢く引締れる口本には威ありといべきか、濃き髪を短くオランダ刈にして、白飛白の上に幅廣の茶献上の帶をぐる〳〵とまきつけし、今年二十七の昨年の春大學の法科とやら鹿爪らしきを卒業せし新學士とか、さては前途多望なる人なりけり。

「貴郎、お國からお手紙が」と玉枝は湯上りのほつと上氣せし頰を片手におさへ、只かりそめに引掛けに結びし細帶姿しどけなう、今下女より受取し手紙差出せば、無言に受取て急に面白なげなる眼ざし、卦のまゝ片へにおしやりて「玉枝最う用は濟だか」とあらぬ問ひ「貴郎、お國からのお手紙ぢや御座いませんか、早く御覽遊ばせな、あの私の事いつも何ともいかてはありませんか、そしてお母樣つてどんなお方、お姉樣は貴郎に似て被居て、私いつて見たいのよ」と物足らぬらしういへば「ハヽヽ行つて逢が物はない、どれも〳〵眞黑て」「まアお口の惡いホヽヽ」と晴やかに笑ふ。

「だが玉枝」と夫は急に改まりて「お前はいつか私に誓たな、たとひ百の衝突千の打擊に出逢ふとも、私がお前を愛するといふ心を確く信じて生涯苦樂を倶にすると……即ち一生の中には思はぬ魔物が降てきて二人の愛を妨げんとも限らんが、斷じて心を動さんといふ事を」と何か懸念らしさ夫の顔をいふかしげに眺めやりつ「はいその事なら、私からこそ御念をおしたいくらいですわ、私いまだに忘れやしません、あの邪慳な母に、思ひもせぬ人に生涯身をまかせろと强られました時、悲しくて、情なくて、何故こう思ひが通らないかつて、あの闇の晩庭の隅に泣いておりましたねー、あの時貴郎が親切に慰めて下すつたお言葉、嬉しくて有難くて、今でも思ひ出しては涙をこぼしますのよ、だからたとひ何な事が御座いましても……」

「ウム決つとか」と身を反していと樂しげ。

(三)

だら〳〵坂の松原を、ステッキ片手に何やら頻に高聲に語り行く書生二人。

「ね─君、芳子孃の心中大に憐むべしだね、流石の僕も今日は覺えず落涙したなア」とステッキくるりと振りて一人のいへば「實際だ、あのやつれ方とゆつたらない、雨中の海棠宜敷といふ風情だて、アツハヽヽヽ」

「ウム女は惡魔だとゆふが實に至言だ、現に芳子孃といふ憐れの佳人を眼下に輕蔑して、今猶鈴木をたらしこむ彼女の行ひは實に怪しからん、何處までも孃を悲境へ落しいれるのだ、あんな美いな面付きして實に惡魔だ、外面女菩薩内心夜叉か」

「ふん、だが君、美しいのなら惡魔でも何でもよい、逢つ見たく思ふぢやろう」

「馬鹿な君ぢやあるまいし、たが少しく暇を得たら芳子孃を訪問してやろう、實に同情の念に堪へん」

「ヤア君よし給ひ、君が行くと穢くよ」

「何故」

「何故つて閻魔の入來」

「何」

「イヤ失敬〱ハツハヽヽヽ」と果ては笑ひに話も終りて二叉途の彼方に急ぎ行く。

「貴郎今の話を何とおきゝなすて」と夕燒の餘波を眞途面にうけて、まぶしげに夫を見上げしは玉枝なり。夕暮の散歩にか夫に手を引れしまゝ、結ひたての丸髷重たげなる樣のまたなく美しさ。

夕陽は彼方の山一面美事に色どりて飛ぶ鳥の影も靜かに、そよ吹く風は後の松林に妻琴の調をかなでぬ。

夫は微ゝゑみながら「何つて別に思はんね、我々もあの樣な時代も一度はあつたが、只無暗に人の上を評したかるもので、その實内心には何らの感じもないのだからねハヽヽ」と笑ふ顏を物足なげに熟と見詰め、

「ですけど私は、その芳子さんとかのお心が、眞にお可哀想だと思ひますわ、私にしたところが戀人の心がある女に傾いて、自分には石の樣に冷たく辛う御座んしたなら、口惜しくて〱、決つと取殺してもやりたい程てあらうと思ひますわ」

「これは甚だ險呑だ」と夫はおかしげに笑ふ、

「だつて、それが大方の女心で御座いますもの」と同情深き玉枝は何やら眼に露を宿しぬ。心地よき夕風はひいやりと二人の襟元を洗ひて田面より川面へと流れ行く、花やかなりし日の光も歩一歩薄れ行けば、早やも歸るさを促す如く、前途を急ぐ駄荷馬の鈴の音ちやら

んちやらんと。

（四）

殘暑の酷びしかりしもいつとなく薄れ行けば、秋知り顔に萩桔梗野邊に競ひ、桐の落葉の音も淋しく、朝夕も單衣の袖のさすがに冷やかにおぼえらるゝ。

今日は朝よりの空曇りにさらぬも晴々しからぬ秋の事とて、家の中只靜かなる武川の門前を行きつ戻りつせる老爺一人、幾度か陶器の表札を見上げ〳〵、

「どうも此家だて、此家に違へねえだ」と獨言ちしがやがてつとばかり内へいりぬ。年の頃は五十七、八か、昔の畫本の爺樣そのまゝの蜻蛉頭、額にはさかぬ氣の青筋あらはれて弓なりの腰を引のばしざま「賴むべー」と年にも似げなき太き聲、「コウラ賴むべーゐねーだか」とまたもや續く濁聲に「ハイ」と答へて下女は靜に障子をあけぬ。

「賢はゐますかの、國から親爺がきたからと呼んでもらいますべー」か下女は解しかねてその風躰を眺め〳〵、

「あの誰樣をお尋ねてゐらつしやるの」

老爺は面どうげに「賢次はゐますべー、國の老父がきたとゆふだに」

玄關先の高聲聞咎め書齋の内より立出る夫に從ひて、玉枝は後よりしとやかに。

「一兼どうしたといふんか」と障子越に何氣なく見やる老爺の顔「ヤアこれはお父さんでしたか、少しも知んて失禮を、まア兎も角此方へ」

と夫の語尾につきて玉枝は恭々しく頭を下げ。

「あのお父樣でゐらつしやいましたか、さ何卒お上がり下さいまし」としとやかな姿をちろりと一目。

「俺てんげな娘さんに、お父樣と呼ばれる覺えはねーだ、賢」一きは聲高う「よくも己の顔をつぶしおつたな、村のお孃樣の歎きはどんなだと思つてゐるだ、義理知らず、恩知らずめが………」

（五）

老爺は拳にて横擦りに鼻頭の涙を拂ひ、また今更に泣き伏す玉枝をいちらしげに眺めやりつ。

「あんげに怒つては見たものゝ、話しをきけば無理もねえだ、人並より優く美しい嫁殿だて、俺も何程か嬉く思ひこそすれ、何の〳〵怒りますべー、息子が氣にいつてもらうた嫁だもの、やつぱり俺も可愛だ、可愛う御座

る、その可愛い二人の間に出來た猶可愛い初孫の顏でも見たこんだら、最う死んでも怨みに思ふ事はねーだのに、何故こう世の中は思ふ樣にならぬかのー」と言ひさしてほつと吐息。

「賢、お前が惡いんだ、こんげなやさしい何にも知ぬ嫁殿を泣かせるのも、お前が惡いんだぞ………だがのー、誰も若い時には覺えがある、たとひ恩家の娘にしろ厭なものは厭だんべーよ、それ無理に何しべえとは言ねえけんど、たつた一言、何故俺に相談してくんねーだ」と情なげなる怨じ顏を、賢次は言ふべからざる苦悶の眼元に熟と見上げ。

「實に僕は濟んです、一存を以て一身の左右を決し、櫻井家へは斷然謝絶の書面を………だが」

「そこだッ」と言葉を半ばさへぎりて「その手紙見てからだとよ、お孃樣ぞえれえ心配苦勞して、床の中さアもぐり込おや毎日〳〵ほろ〳〵と泣いてるだとよ、櫻井の旦那殿も、一度は恩知らず義理知らず、あんげな奴に可愛い娘子やられねーと怒つては見たものゝ、お孃樣の悄と皮ばかりになつてまで焦れてるのを見ると、親だもの、子だもの、不憫に思ひさつしやるなア無理ちやねーだよ、そこて俺家へ禿頭さげて來て、娘の命助ける事だと思つて今迄の約束通りになつてくれつて、賴むぢやねえか、涙こぼして、手へさげて………」聲曇らせて鼻すゝり「誰も子の可愛に替りはねえだものもつともだ、己旦那樣の話して初めて知つた時、腹が立つて〳〵、宜うがす、決つと賢にとく心させて見せますべー嬶もつたと言ひますが、親々の承知もせぬ女でがすもの、いづれそこらの白頸でもありますべーつて、飛が樣にして來て見りや、やつぱり、優しい、可愛い嫁だもの………」

玉枝は無言のまゝ、はふり落つる涙と共にわな〳〵と身を震はすのみ、空はいたくもかき曇りて一點の星だになく、子故に迷ふ親の心のそれにも似たり。

「賢、己は最う決心た、此上二人を泣かせるなア可哀想てなんねーだから、お前達もこの先いつまでも〳〵中好く暮して下せえ、櫻井樣の方は俺が何にかするだアー」

「エッお父さん、何にかするとは………」といざりよる。

「何でもするわ、心配せんでもいゝだよ、矢張子は可愛いぞ」とほろり〳〵と搾るが如く落とす涙は無限の慈

情やこもるらん。

「もう、それでは、私がすみませぬ」と玉枝ははかに、顫ひ聲にて「良人、私、お情の程は一生忘れは致しませぬ」とほろ〳〵と涙をこぼし〳〵「私は、自分の知らぬ間に大なる罪惡を犯しておつたので御坐いました、さぞ、今迄は惡魔とも夜叉とも恨まれてゐた事であろうと思ひますと、空恐しうて……誓ひました言葉にそむきまする罪を、何卒ぞおゆるし遊して、私、はあなたにお別れ申しまする…………」と後はたへえず泣き伏しぬ。

夜は深々と更け渡れば萬籟全く死して、いづこか犬の遠鳴く聲。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

行く水の流れのまゝに身をまかせ、霞浦の片邊に浮世をさけし一佳人、夜々の夢路や安かりなむ。

【評】　膚俗の文、陳套の語

## 秋の夜

井上操子

さらでだに秋は物あはれなるに、千草にすだく虫の音の絶々に、かゝ雲井を渡る雁がね、砧の音のありなしに聞ゆるこそいと哀れなれ。宵より頭重ければとて、ねやに入れども眠るべくもあらず、やれまどおしあけ眺むれば、さも差し入る月の光、さやけに影の甚しさにそと庭におりたちぬ。月影の明きにまかせて、其處此處となくさまよひ出ずれば、道もせに咲きみだれたる撫子、今を盛りの女郎花、尾花の穗に出て招くは人まつ虫の此所にありとにや、其他名も知らぬ草々の悉く月の光をあびて霜の如く白く、吹き來る風に匿き流したる、白つゆの玉とみだるゝそれよりも我心はぎつ。あゝなつかしき須野の君よ、又むら〳〵と胸に浮ぶはありし日の君が事ども。去るものは日々に疎しとかや聞ける世に、それならで我思日々に深くなり夢にだも忘れ參らする折とてはなし。そも早や三とせの昔とはなりぬ、吹く風に四つの袂をふくらせつゝ照る月に心も須磨の浦ずたひ、藻汐に袖ぬらしつゝ歌や文やとからなき物語せし時の樂しさ、げに秋の哀れも打忘れたりき。其時よ、浮世の榮の衰ければとて、來ん春には必ずと契り置き、惜しき袂を分ち參らせしが、遂に相見る事のかなはずなりぬ。げに人の命は流れに浮ぶうたかたの如も、あゝ悲しとも悲し、世の中にさらぬ分れのなかりせばいかに樂しくあるならん

秀逸

# 奉納踊

徳島縣 雙池園靜子

夕月が對ひの山の一本松の上に顯はれた。今しも一頻り青田を渡つて來る風に送られて、鎭守の森の踊の太鼓か、とう／＼と響き渡つて居る。今夜は鎭守の社の奉納踊の晩なので、一年の塵埃に埋もれた神殿の扉、煤けた御幣、三寶、御神酒徳利なども、前の小川の流に洗ひ清め、奥の院拜殿も美しう飾りつけ、境内も綺麗に掃いて水うち渡すなど、村の若衆が一日懸りの骨折て、漸つと用意が出來上る。すると或霽曇りのない鏡をかけたやうな月が出る頃から、娘子どもは思ひ／＼の裝飾を凝らして集つて、茲に踊は始まるのである。

自分は此頃夏の休みの暇を得て、絶えて久しき故郷に歸省の身の、見るもの聞くものが染々と嬉しく珍らしく。何とも譬へられない美しい感情が胸に湧き上つて來るので、今宵も村人の優しい温かい心盡しの此集合を、餘所に見ることが出來ぬのである。

追々踊子が集つて來る。日に燒けた生地の見苦しい顏に白粉濃く塗つたのもあれば、いろ／＼の繪の具で可笑しく隈取つた顏に、白布たゝんで後八卷長やかに垂れたのもある。手拭とつて姉樣冠にしたもの。陣笠に面を隱したもの、と色々樣々であるが、何しろ今夜は晴の場處で、美しい娘の子は母親がつき添うて、縹緻自慢に出かけるのもある、

境内の中央には高櫓を組み立てゝ、赤地に白で若連中と染め拔いた小丸提灯數多吊り渡し、櫓の上には囃し方歌い手音頭取拍木うち、四方には見物人が黒山のやうになつて身動きも出來ぬほどで、夜も追ひ／＼更けて來ると、囃子若衆の數も揃ひ、太鼓の調子に整ひ、歌の節も改まつて、サア／＼踊つた／＼ロイヤサーコラサ、ロイ／＼と響動めく中に、一群の踊子は列を正して櫓の回りに並んで、親方酒代はどうぢやいな、ロイ／＼といふはやしにつれて踊り出す。鳳の子の振袖白絹の裾、すれつもつれつ行きつ戻りつ、彼方此方へうち紛り行き違ひ、足取り手拍子一齊に、太鼓につれ歌に合して踊る樣、さても見事なこと。

美しい夏の夜、賑はしい踊の晩。で自分は恁う思ふた斯樣な折にこそ、血の熱い青年の胸に物思ふ影を注き入れ、涙もろい乙女の胸に結ぼれ解けぬ、戀の思を知すのであろう、自然に作られた動機、其が屹度憐な戀の糸を手繰出して、世の中の苦しさと悲しさと、甘さと美くしさとを、何も知らずに親の手に縋り懸つて居る穉な胸に知らして、情の涙を立たせるのであらう。

今しも踊りは一段落をつけて、音頭取も囃方も高櫓から下りた。大勢の見物人の中に在つて蒸せ暑いのを辛抱して居た自分は、此間に汗ばんだ肌を干かそうと思ふて、社の後の森の中に分け入つた。

空氣は夜氣を帶びて濕つて居る、涼しい風がさら／＼と梢を吹き渡ると、露が何所ともなしに落ちて、寂返つた木の葉に月がしろ／＼とうつゝて居る。四邊を一度見廻して、松の木の根方に腰を下して、此靜かなる夜の景色をながめながら、心持よい風に鬢の毛を吹かせて居ると、何だか氣が悠うつとりして、今までの踊の騷ぎは、淡い夢の樣に覺えて、汗を入れに出たのだといふとさへ悉皆忘れて仕舞つて居ると、不意に足音が聞えた。何だろうと思ふた時に、自分から三間計り離れた道へ、足音の主は現はれた。

細面の夕月光を浴びた顏の色は、眼立つ程白く、劍のある切の長い眼の

後眦が上つて、すーつと高い鼻は見事に鼻筋が通つて居る、唇は少し薄過ぎるかと思はれるけれども、口下の締りが屹度して、撫肩の、痩立の、總てが何所となく意氣に見えるのは、敢て夜目の故ばかりではないらしい、髮は前髮を大きく取つて太輪の銀杏返に結ふて、衣物は華美な矢飛白、手に花笠と染分けの手拭とを提げた踊娘である。自分と同じ樣に涼みに來たのかしらんと思つたがそうでもないらしい、それは娘が前後を見廻し、四邊に氣を置いて居る樣な、そうして情を含んで居る樣な素振でも分る。

戀……然うだ。屹度戀に違いない、と思ふと急に心臟が鼓動を初めて何だか人の祕密を見るやうな氣がして、此所に自分が居る事を其とはなしに知らして遣りたくなる、一つ咳拂をして見やうか、いや其れては穩かな胸をひどく驚かすであろう、と思つて見たりする間にとう〳〵機會を失つた。娘は慾う足を爪立てゝ社の方を月明りに透かして見て、自烈耐そうな樣子をして居る、すると又足音が聞え初めた、無論忍び足で、次第に近づいたのを見ると、果して男であつた。丸顏の色の白い、眉毛が濃くて鼻が高うて、唇は少し厚かつたが、口元が小さく一の字に結ばれて居るので却て品が佳く見える。大形の瀧縞樣の浴衣を着て、娘のと同じ染分けの手拭を肩に掛けて居る。

自分はいよ〳〵罪の巷に足を踏み入れは事を覺つたが、もう仕方がない、と思ふと、僅に此所に人が居ることを知らすまいといふ氣に爲つて、松の木にぴつたりと身を寄せたが、自分の姿は彼方が明るい所から暗を見るばかりてなく、熊笹の影になつてあるので、見附られる氣遣はないと安心した。

『立つて居ては談話も出來ないから、其所らへ腰を下さうではないか。』と氣がいふと、男も無言て芝生の上に腰を下した。

『誰にも氣附かれはしないかしらん』。男は心配げに獨言いた、娘はそれを慰め樣と思ふ心を美しい姿に見せて。

『大丈夫よ』。

『然うだと佳いが』。娘は男の顏を凝と瞶つた。

『信さん。例の一件がいよ〳〵六かしくなつてね、私もう困つて仕舞て居るの、それて急に相談をし度いと思つて』

信は無言で俯向て居る、何だか悲しい思が胸に湧き上つて、其れに奮まされて居る樣な擧動が見えた。

『私も其後いろ〳〵心配もして見たが……。』と言つて、行き塞がつたが更に思ひ切つたといふ語氣て。

『お梅さん今更慾いう事をいふと怒られるかもしらぬが、私は此間初めて聞いた日から今日まて、夜の眼も合はずに考えた事だから……そらもう慾う言ふ事になつたのは、皆私が惡いのだから……能うお聞きよ。私は斯んな果敢ない其日暮しの者、お前は數多身代もあつて村では何枚といふ家の娘、到底夫婦になれる柄てはない、若し二人の仲が世間に知れやうもんなら、第一お梅さんの尊父さんや尊母さんに濟まん』。

お梅は眼を擦つて聞て居る、信は猶も言葉を續けた。

『と空恐ろしう思ふて居る矢先へ、今度の縁談が持上つたのじやないか、聞けば木に餅がなる樣な佳い口、此上此縁談を破綻ばすやうな罪がどうして作れるものか、だから……だから互に間違を大きくせぬ中に、今までの事ははかない夢とあきらめて、一旦別れ樣じやないか、私は大阪に居る朋友を依賴つて、何か手職を覺えに出たい積りもあるので……』

『信さんお前そりや本氣かへ、那樣な事が恐ろしくつて何だつて戀した譯におなりのだへ、私は知らないよ、切れはしないよ、お前に別れてこれから誰を倚賴に思ひます』。

信が取すがつて、聲を震はして悔し泣きに泣いて居たが、ふと思ひ出した様に袂を噛み裀めて少し俯目てあつた顔を振り上げて、屹度居直つた。

『信さん同時に私を伴れ往つてお呉れてはないか』。男の顔を覗き込みながら極り悪く、よと少し笑つた。

信は此大膽なお梅の言葉に驚いて目を睜つて。

『大阪へかい』。

『エヽ』。とお梅は袂を顔に押しあてた。

『お梅さん戯談言つては困るじやないか、よい加減にしてお置き、まあそんな無法なことを……』。

『戯談と想はれては私や悔しい、今更誰が何と言つたつてあんな男の家へ嫁くのは厭だわ、なんぼ私が働もない不縹緻の女だつて餘り可愛想てはないか、お前は私が斯様な嫌な心痛をしてゐるのを何とも思はないで、いろんな事を言つて叱責るのは、矢張私が厭になつたから、これを機會に見捨る心算に違ひない、イヽエ、然うてないのならなぜ、其んな厭な男の家へ嫁かんてもよい、何も此村ばかりが浮世ぢやあるまいし。と一言でもいつては呉れないの、エ信さん、默然て居るのは嫌なの、エヽお嫌て御座んすの』。

見上げた目には溢るゝ涙てある。

『まア然う急かずに、沈着いて能う考えて見て呉おれ、私ぢやとて、何て別れたい事があるものか、それを我慢して斯んな事を言ひ出す胸は、中々辛ないのだよ、お前には私の心か些つとも分らないのたな』。

『もう熟く考へたんだから、お前さへ承知して呉るなら今からでも行きたいんだわ……エ信さん、後生だから』

『困るなどうも』

お梅は[illegible]に。

『私の縁談を聞いたら意地になつて家物三昧をされたつて仕方がないのを、其れを我慢して大阪へ行くつて……それ程迄優しい心があるならいつそ連れて退いて呉れたつて……濟むの濟まぬのつて其れも心の持ち様だもの……何様な辛い思を爲たつて二人一所なら……』。

信はお梅が自分へ語るのか獨語を言ふのであるかと、其様の異つて居るだけ異様の惑に打たれて眤と見て居た。お梅も何時か已に復つたのてある、て、信の顔を見て許して呉れるか呉れぬか、其一語の善惡に心を惱ますのあつた。

『お梅さん若し私が否と言つたらお前何うする氣なの』

『ぢやあ連れて退てい呉れないの』

『いや若し私が否と言つたら何する氣なの、まあ其れを言つて見ては如何たえ』

『信さんが私を連れて往つて呉れない時かへ』。

『うむ』

『如何も爲はしない』。

『如何もしない、ふーむ、で如何するの』。

『生きては居ない積り』。

『さう』。熟と考へて。

『ては何ぢやな、命にかけても私を慕つて呉れるといふのぢやな』。

『左様てすから……』。差し含んて來た涙に聲さへも詰つて、後は言ひ得なかつた。

『よし。男冥利に同伴て逃げよう』。と信は判然而も聲に力を籠めたのてある。

『えッ』。とお梅は餘りの嬉しさに、禮を言ふべき言葉も出ず、唯もう泣

くのてちつた。

道徳の叫びと甘い戀の言葉とを、胸の中に戰はせて居た信は、終に生來皆て思ひも立たなんだ大膽不敵の覺悟を極めた、青年さ血の湧さ立つ儘に、お梅の遣瀨ない情に絆されて、殆んど前後の分別もつかぬ苦しまぎれの決斷をした。

『では何時』。と促すは二人で逃出す日取時刻、お梅はもう泣き止んで袂の先を弄つて居る。

『餘り愼慮付だから今と言つてチョイと決められぬが、兎も角も明日の晩、初夜の鐘を合圖に今一度此所へ來て、ゆつくり相談する事にせう』。

『あゝそれが佳いよ。屹度れ』。

何だか物足らぬといふ外見て、危なげに立ち上つて邊の塵を拂つて居る。表の方には今や踊の始りと見えて。ほんに思へば昨日今日――コラ、月日立つのもうわの空、人のそしりも世の義理も恩はぬ戀のみつ瀨川――ヨイ／＼。と節面白う歌うて居る。

信が社の前へ廻つたと思ふ頃、お梅も後から驅けて往つた。

自分は夢から覺めた樣に、吻と溜息を突いて立ち上つたのは、二人が此所を去つてから、物の十分も經つた後てあつたが、何だか温い樣な、氣味が惡い樣な、妙な感情が湧き上つて、もう踊を見る心もない。

此二人の行末、さて何となる事てあらう、愛の女神は慈愛深い御手を垂れさせ給ひて此戀を守り給ふてあらうか。將た浮世の汐は殘酷ない大手を擴げて、安全なる生活の保證なき若者を、遠慮なく人世行路の陥穴に導き入れはしまいか。易占者ならぬ自分に、其が分明らう道理にないが、斯様想ふと、うら淋しい時雨の夕、寒さ身にしむ雪の朝、月琴抱へて軒に立つ後姿が連想せられ、芝居の乳貰が連想せられ、果は新聞の雜報で見た、土堤下の夫婦心中までお連想されるのである。

斯ういふ事を想ひながら歩むうち、自分は何時しか我家の門まで歸つて居た、急いて書齋へは入てつ投げ出す樣に坐る、とふと眼に附いたのは讀みかけて置た徒然草の一節てある。

誠に愛着の道其根深く源遠し、六塵の樂欲多しと雖も、皆厭離しつべし、其中に唯彼の惑の一つやめがたきのみぞ、老たるも若きも、智あるも愚なるも、變る處なしと見ゆる。あゝ。げに今も昔も賢も不肖も變るところなきは戀の惑ひ！　（完）

（評）　野鄙の覊束なき戀を寫して兎も角も人を反省せしむるの力あり

# うき世

京都市　こてふ

## （一）

都を外に逃れ來て枯るゝを待や女郎花夜毎匿き添ふ其露は眞如の月を宿しつゝさるはかなづる哢の音に軒の松風迎ひては輝く空の月のみか草葉に喞く虫の聲遠山里の鹿の音も涙行きにけん秋の夜の其古事も忍はるゝ山家に水白き嵯峨の里に一擣の屋敷あり破れたる屛傾きたる軒も昔の面影殘りて床し後園はいと廣やかなる花圃なるか打違りたる樣現はなれと自ら春や知りけむ百花色を競ひて咲き亂れ芳香四邊を閉し蝶は甘き香に醉て花蔭に眠れり音にのみきく久方の天の御園も斯やと思はれぬ折しも家より小やかなる屈おして此方をさして來るあり芳紀將に二九餘り花の顏柳の柔絶世の美人なるが顏色青さめて實てはふくらかにして薔薇の色匂ひ深き靨には幾多の青年を惱殺せしぞと思はるゝ肩の頃は肉落ちて鬢のほつれ毛はら／＼とかゝりつ歩を運ふ姿たと／＼として哀れや寄をあまむく彼女の襟元骨立ちて節の樣。恋に沈む彼女の眼には此優しく樂

しき花もうら物うげに見遣りし足下に主に見られむとてや色濃やかに咲ける菫いと哀れなる摘りし手に抜き取りて懐しげに見入りぬ彼女は辿り〱てやかて年ふりたる櫻の蔭に到りしが如何なる思ひの小さき胸み惱すやらむ片手もて乳の邊確と抑へて限りなき物思ひに沈むなりけり稍暫し彼女は何に思ひ到りしならむ殘酷らしうやせ果てし面わには時ならぬ紅を散らし色なき唇には笑みを湛へつ今は早愁の雲何れへか去りぬ。折柄風なきに櫻花はろはろと亂れつ。

(二)

君よ旣にきゝ給ひつるか彼松尾……「何松尾とや彼は我大學に在りし時親しき友なりきそも何事の起りしとく聞せ給へ」こは彼少女か立てる花園より遠からぬ川邊の柳の蔭より聞ゆるなりけり松尾の一言は如何に彼女を刺激せし歟よ彼はわれを忘れて餘さす聞取らむとせる也

あゝ少女と松尾とも如何なる關係かある「さなり君と彼とは暫し乍ら甚だ親しき間なりし我等不幸にして半途に學を辭し軟々として成すなきに反し彼は其絕世の才智を發輝して螢雪の功を積みし甲斐ありて今年七月目出度卒業すとかやさるによ彼か東都に於て契りし山村光子となむいへる美人を歸鄕の後は招きよせて結婚の式を擧くるとか……」「そはいと驚き入りたる事にこそされと我は其眞なるかを疑はさるを得ず彼はさる輕浮才子にあらぬは我の斷言し得る所以にきく彼には同鄕にて振分髮の昔より堅く契りしかありて彼が歸鄕を一日千秋に待暮らすとやげに哀しきは彼が心なる哉「君さないひそ才德兼備の丈夫たも戀には心も弱か者ぞ一夕の情には胸の光明も消ゆみならひぞ男心と何とやらはかり難きは人心よ」折柄謡歌可笑う樂しげに唄しつゝ里の乙女の一群は綾羅をこそ着けねさ和になれて淸き心の物思もなき彼等が境遇の如何にたゝ愉快なるべき

(三)

首うなだれて化石の如く突立てし彼女は乙女の群の遠く彼方に隱れし時ぶる〱と身を振はして纔に顏をもたぐるを見れはあな怪しきらめくは眞玉かあらず淚のはらはらと貫きとめぬ秋の野の露と亂れて落つる也けり「過ぐる頃一度耳にせしより妾が心は有邪無邪の境に分入りて頓に望みを失ひつゝも尙一縷の綱ある心地してやゝやう今日まで來りしを今目前にて而も君の友垣なりし人ときけば僞りとしも思はれす君が日頃の睦言を信じつゝ僞りなれかしと祈りしも仇となりぬげにや男心は變り易きものとは兼て聞しかど君計りはなどさる事のあるべきと一途に君を待詫ぶるいとし妾の心をも白雪の颯が上にも閉ち吹きあるゝ風の奥なる山里に獨果てよとや宣ふ君の情なさよ斷も愚旨に過ましかはなどてかくは契りてし君が嬉しき睦言も妾が弄び給ふ一時の御心に過さりしかさはれ君と妾か語ひは尋常の事ならす思へはいと遠き事乍ら君の幼して足乳根の御親に別れ給ひしを我父君のいとほしと我家に引き取り給ひしより朝な夕な兄上〱と慕ひ參らせ春は櫻花を歌ひ秋は保津の川邊に碎くる月を詠じ出づるに四つの秋を列れ父手を引きて歸れば雛様の様なりなと今は亡き爺にからかはれしも憎からず覺へしかやか君は東都に愈深く物學びせむとて出て給ひぬ斯て四年の後妾も亦君の御跡慕ひつゝ東の空にさ迷ふ身となりしより着給ふ物など何矣と學びの隙々出來得る限り力を盡し參らせつ花の朝月の夕隅田の堤に不忍の池畔に手を取て散步しつゝ樂しかるべき未來を想ひ愉快なりし過古を忍び互に理想を語ひなどせし事の如何に樂しかりしよされと今にしておもはへはそは春の野に立つ陽炎のやがて消へなむまゝの現なりき去程に妾此地に來りしより四年過ぎし秋なりきゆくりなくも悲しき事は訪き來りて我が樂しき夢を破りぬそは他ならす瞬時も忘る能はぬ懐しの故鄕より母上危篤との電報達せし事

なりき餘りの事に魂飛び血涸れむ計りに驚き嘆きしを情深き宿の婦主に慰められて君にも告げす飛ふか如くに停車場に至り滊車に乗りしも夢現なりきやかて故郷の山水は變らぬ色に笑みて喜ばしげに我を迎へ顔なれと思に亂るゝ妾は見るも物憂く我家に近くや否轉ばむ計りに馳入りて母上か病床に至れは遲かりし愛に輝きし眼堅く閉ち情に富みし唇は色あせて結ばれたりあはれ母上かみ魂長へに何地行けむ呼べと答へぬ空蝉の母が亡骸に取り縋て泣き倒れぬ傍には幼き弟の愁然と涙含めるに汝も孤兒となりつるかと先立つものは涙なり今は東都に行も憂ければといふを今際なればと父君の切に宣ふにさらばとて用意する中にも昔を忍ぶ思ひ堪へ難ければ又ゝ弟の手をとりて母か奥城へと志しつそは程遠からぬ小山の上にあり。傾き易き秋の日の早や山の端に落なむとしゝ力もなげになける蜩の聲哀なり御墓の標なる樫の木を目當に心は急げと遲れ勝なる我袖の何にひかるゝものならむ招く尾花や濡る露何れ面白き秋の野の樣なれと悲哀の涙に溺ひし我眼には淋しき秋を共に語れといふにはあらさるか今消えて行く果敢なき身を悟れといふにはあらざるかと思はれて何をか然るべき我今仇し人の奥城に詣でむとして急ぎ行く此道のやかて我身が彼世に旅立つ時初めての旅路となるらむと思へはけにはかなき人の命やと今更に無常の斗り難き大なる力に咽ひつゝそゝろ涙の熱かりしか圖らさりき未だ一星霜も經ざる今日死の神はそか殘忍なる手もて我身を招き給はむとはかくて其年もいつしか暮れぬ妾は僅に業卒へしより歸省の事共君に告けむと君か宿へと志しつ思ひ不忍の池畔にさし掛りし頃我名を呼ひ給ふに振返れはそは君なりきこはよき所にて御目に懸り侍る誠君を訪はむとて出向ひたり巢立ちて出る鶯の中に交りし雛雀危け乍も臨り変してやう／＼業卒へ侍れは早故郷に歸らむと思ひ侍る足はぬ乍ら時折の御世話なし參らせしに明日よりはそも叶はぬこそいと本意なけれ」妾はこれより草深き里に立歸る身の心をやるへき花もなけむされと君は尙百花亂るゝ此都に在す御身の障らは落ちむ仇の野の朝の露に色勝る花に心をなやり給ひそ移り香多き君の心さはれ彼方の里に君を頼み行方樂しみて待詫ぶる乙女の心を推してよなと細々聞えつゝまさきくてとのみ餘は涙に物言はせて別れ奉りしは忘れもせじ去年の彌生半はなりき其御聲今尙耳にあり其御姿尙目にちらつけり而も其時の優しき御情の露は仇し花にのみ注かせ給ふ」扨はあらずもがなともてなし給ふ今の母上のさらても悲しきに如何なる惡覺やみいりけむ家を外なる父上の御品行せめてもの慰藉なる弟は遠き伯父上の御許に母や懸し姉や戀しと泣けるならむさるに／＼杖とも柱とも頼み參らせつる君はあゝ。さるは夜な／＼の露霜に鳴く音細り行く松虫の夫よりも今は力なき妾の病は肺と洩れ聞ては何れは絶えむ玉緒を苦き藥を努めて服し自起ちて粥を作り一日も長く世にありなむとひたぶる神に佛にねぎ奉るはそも誰の爲とや思し給ふあゝ君なくて仇し世に何望みある我身ぞやかくまで慕ひ奉る我君の仇し人と箕帚の契りを結び給ふいかて妾よくそを見得るべきや眼を閉づれば見ずして止むを得む兩手もて耳を抑ゆれは亦聞すして止むを得む。あゝされと亂れて長き黒髮の解く術もなき胸の内の思ひを絶たむ由もがな。夕に置きて朝にきゆる葉末の露よりも尙もろき妾か過越方を顧みればけに情に生きて戀に死する果敢なき／＼身なりき。

さはれ拙き運命に生れ出てし身の何を怨み何をか喞かむあはれ彼苔青く露白き石の下を長への我世と定めなは浮世の累き煩悶も絶え果てむいささらは永久に安き眠りに就かむかな。

堅く閉ぢし眼微かに開きて少女は顔をもたげたり夕陽既に西山に落ちたりと覺しく名殘の光天の一方に輝く其彩もやがて沈み行身に喩ふれは又も涙の迫り來てかよわき胸よしかすかに春や昔の忍るゝ。

宿り遅れし孤の蝶の花の薫り慕ひつゝ一夜の宿をかせとてや手にもつ菫に止まりけり折から通ふ夕風に驚きて飛去りつあゝ今宵は何處に冷き露に一夜を說明さむ其菫やがて彼女か唇にふれし時はあはれ昔しの色そなかりし。

（四）

降續きたる五月雨俄に霽れて河邊の蘆に飛ぶ螢何に思をこがすらむ過ぎゆく黒き夜の雲の絶え間にみゆる星の影今宵はいとゞ青くして思ひありげの淡き空光も弱き星一つ野末遙かに流れしは涙に絶えし乙女子やある此夕なりき風颯々と吹荒れて哀れも深き小山の上に新しき石碑一基建てられぬ石冷けき此下に眠れる君あゝ新墓の主や誰れ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

秋風一度我世を訪れてより萩が花原露しげく銀河遠く流れて夜な夜な虫の調べたけぬ。されば曾ての昔彌生の空に友どちつれて露に花に羽袖返して舞ひてけむ異粧ひし白粉は仇し野のべの露に消え誇りかなりし羽衣も吹く秋風に打ちかれし秋蝶の夢ぞあはれなる。

道芝の露に裳ぬらしつゝ盛りと匂ふ白菊の花手にしつおくれ勝なる足引き立てゝかの小山をさして急ぐ青年あり。あしたは何處の里に嵐の雨とふり行くらむ夕暮の空を急ぐ足早き雲脚行へも知れずよせ返るおどろが下に餌なあさるらむ狐の身にしむ冷風に通ひ來る見るにつけきくにつけ哀れはやがて此身よと思ひしめつらむ青年はにちみ勝なる誰の跡匂はしく香煙未た消えやらぬ彼新墓の前に到りぬ。彼は終夜空しく冷けき無言の石碑に向ひてあはれ涙と共に語り明しぬ。朝風冷かに吹き來り小萩の露と別るらし星の影瞬きそめし頃名残おしげに歸り行きぬ。

彼は其翌夜も又其翌夜も來りて曉近き頃去りぬ。

而して七日目の夜は一入愁然として見返り〳〵下り行きしが其夜の事なりけむ。彼の墓前に封の儘引き裂きたる文殻と小さき紙片と捨てたりしが其文面は鉛筆の跡もしどろに。

我半生の快樂は既に御身の亡骸と共に葬られたり。

あゝ君よ露子のきみよ御身が白百合の花捧げて遊び給ふ時も異郷の空に落花をいだきてなく失戀の男子あるを思へ。

而して文殻は山村光子よりとなりき。

其後は又かの小山の上に失戀になく青年の哀れなる姿はみるを得ざりき而かも絶えてこの山水明媚なる嵯峨の里に佳人才子の結婚式ありしとは聞かざりし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

其年十月の某新聞紙上に怪しや左の文字は記されたり。

東京帝國大學卒業生松尾秀氏は本月歐米漫遊の途に就かれたり」と

## はかな雲

下谷　しらふぢ

廣々とした芝生の處々に、若楓小松等を配合せた、瀟洒した庭の、向ふにある泉水を渡れば、合歡の可なり大きな木立の茂り合ふてる、小徑に續いて、だら〳〵上りの、こんもりと小高い築山。

其頂の中央に、緑の葉の影から、一寸許り茅葺の軒端を見せてる東屋のうち、陶製の腰掛に身をもたせてゐる、二人の女は、今西に沈まんとする、金色の夕日の光を脊に浴みて、何か語り合ふてゐるのである。

『貴女……一生獨身でお暮しなさるつて、嘘偽仰しやるんぢや御座いませんか……』。

といひさして、氣付かはし相に、對手の、廿餘りの高島田、鴇羽の絽

置れに、吾妻絞の帶、胸高におへる女を凝視たのは、同年配の束髪の娘は此邸の愛娘、花房八千代と謂て、有名のピアノの名手。

今日は、兄の英雄が、此度米國より、いかめしい學位を受けて歸朝した、披露を兼れて、其祝賀の宴を、夕暮より夜にかけて、此別墅に開ひたのである。

花のやうな妹の八千代と、其友の松原絹子との、ピアノとヴイオリンの合奏があると、案内狀に見えたので、其れを唯一の目的と集つた、若き紳士等は無慮百何十名、流石に廣大な此別墅も、恰度箱庭のやうに覺えられる。

諸の挨拶、某の祝辭朗讀と、法の如く式が濟んだ後は、入亂れた、奥の廣間で、今一曲〳〵と人から望まれて、細い指もちぎれ相になつた、八千代と絹子は、そと手をひきあふて、庭へのがれ出てたのである。

そして、彼方此方さまよふた末、胸に考へある八千代は、絹子を此東屋へ誘ひて、しみ〴〵と語り合ふてゐるのであつた。

『絹子さん、其れぢやア貴女、兄の處へ來て下さるのはお厭なんでせう……アヽ兄はまア乍麼にか落膽しませう、然れど、絹子さん、妾は、貴女がわけあつて、人には嫁けないと迄仰しやつた、其わけを、伺ひたいので……此間から、幾度々々幾度も伺つても、いつも確定な御返事仰しやらないから、今日こそは、二つに一つのお返事伺はうと、待ちかまへて、今茲へお連れ申してお聞き申せば、今申したやうなお詞、妾さつぱりわけがわからないでは御座いませんか』。

櫻鼠の絽明石の上に、紫紺の絽縮珍の帶きらびやかに着つた八千代は、玉入の指輪三つ迄輝ける細き指もて、傍に咲いてる山百合の花一輪、そと手まさぐり乍ら、絹子の面をみ上げた。

『其や最う、お約婚なさつた方があるとか、お二人限りの御兄妹故、他ノやる事は出來ぬとか仰しやるなら、妾も兄も、あきらめも致しませうが……理有あつて一生獨身で暮つて……今迄一度秘し合つた事もない、貴女にも似合はないぢやありませんか。

自分から、斯様な事謂ふもおかしいやうですけれど、兄は彼様に疎落に見えても、極くやさしい質の、而して貴女の御性質も能く知つて居りますし、母も妾も、其れは最う、お話する事もない御存じのやうな者、氣の置ける者は一人も無くて、まア妾なら一寸耳を傾ける家でせうと思ふんですけれど……妾は貴女、もう三年も前から、斯様な事思つてたんですよ、あの高等女學校から音樂學校迄、ずつと何年つて間一件に通ひ乍ら、唯の一度可厭な顏爲合つたともなく、姉妹のやうに思つてた貴女てはありますし、貴女のやうな學問といひ顏といひ缺け處のない方を、兄のお嫁さんにして、而して一生嫂さんと、呼ふやうになれば、兄は勿論の事、母も妾も、如何様に夏いでせうと、思つてゐたのでしたが、其時分は恰度、兄が彼方の大學へは入ろうとて其れ處の騷ぢやアなく、其内米國へ渡りましたものですから、それなりになつて居つたのですが：……斯うして、幸兄も學位を貰つて、歸朝ました折、其れて、貴女に願つたのでした。

兄には、妾から一寸話しましたら、其れとは申しませんけれど、最う大變滿足な様子、『僕は不足はないが、松原さんは何んて仰しやる……』かと案じ顔に申しますから、妾は『松原さん……承知なさるに極まつてますわ、常から兄さんの事ほめておいでゞしたもの……』つて、妾大變笑はれましたんですよ。其れぢやア兎も角も、妾から貴女のお心を伺つた上、公然母からお家へ……何んて色々樂しい〳〵事計り、心に描いてゐましたのに……虚僞とも思へない今の一言……獨身で暮すつて……が妾眞に解らないてはありませんか……』。

斯う謂ひ終つて、擧けた面は、少なからぬ憂が漂つて居つた。木の間を通して、ぱつと明く一つの光が、ひらめくよと見る間に、母屋も離れも上も下も、星のやうに花電燈が點ぜられて、今演說が終つたのか、拍手の音が盛に聞えて來る。

やさしい細い手を、萌えたつやうな深紅の帶上げの間に挿入れてゐた絹子は、此時やう〳〵、小羊のやうな其眸を上げて、八千代の顏を、悲し氣にみやり乍ら消え入るやうに謂さ出した。

『アヽ八千代さん、其樣に仰しやつて下さると、妾は最う、身を切らるより憂うございます、お話致なければ分りませんが……望んでもえがたい此御緣を、何故して厭だの何のと云ふ事がありませう、お兄樣のやうな方を夫と呼び、お母樣のやうなおやさしい方、貴女のやうな深切なお方を、母と呼び妹とよんで、あの温かな家庭の人となるのが、何んてく厭でありませう、妾のやうな者でも宜いと仰しやれば、願つてもない御緣で御座いますけれど……貴女、妾は……妾は、人にも話されない、悲しい秘密を持つてゐるので御座います……此間から、度々深切に仰しやつて下さる每、妾は最う、此胸が張りさけるやうな思が致して居りましたが……貴女、今こそお話致しますが、妾の家は何んと云ふ不幸な家で御座いませう、肺病と云ふおそろしい病が、遺傳致てゐまして、妾の母、姉、皆其病で亡くなりました、其れ故、妾も餘程注意致して居りましたんですけれど、どうやら去年の秋頃より、其兆があつて、今は既に肺病との事、其詞を醫師から聞きました時の心はまア如何樣で御座いましたらうか……其れからと云ふものは、唯の一度も、心のはれ〳〵する日はなく、何のおもしろいものを見ましても、聞きましても、とても永くはない命と、悲しくうらめしく、此はかない月日を送つて居つたので御座います……けれど、若此れを貴女にお話して、此仲の好い二人の間の、交を絕つやうなことがあつてはと、濟みませんけれど、謂はないで居りました……斯んな者でも、欲しいと仰しやつて下さるお心は、妾、死にましたとて、忘れられません、お嬉しう御座いますが、唯一人のお兄樣迄、若や此不幸を移し、又遂にはお家の不幸を遣る事があつてはと、つひ失禮な事を申し上げました……アヽ八千代さん、如何して斯う浮世は自由にならないもので御座いませう、何卒貴女、お家へよろしく仰しやつて下さい……アヽ如何して、妾は斯樣な不幸の身に生れたのでせう』。

絹子は、謂ひ終つて、はら〳〵と熱き淚を、其膝に落した、靜かであつた、彼方の家の邊よりは、又拍子の音がして、いひ知らず樂しげな樂の音が、風のまに〳〵聞えて來る、けれど東屋のうちの二人は、身動きだにしない、其れは泣いてゐるのであつた。

恰度今昇つた月は、松や杉の葉かげをぬつて、物の響も無い此東屋のうちにさし初めた、嗚呼月は、此紛のやうな、玆の有樣を、何と思ふて照してゐるのであろうか……。

# 胸の小田巻

志らつゆ

## 上

松杉などの植込を境に、今を盛りの楓葉の隙とに暮縫り、愛し又障子に微行く落葉の音も耳立つ離亭の様に、彼方のさゝやきな夢のごとく通り來るそよ風に吹かれて、群の足音もとみなく立寄りし障口は、総切りし障子に献したるが如き螢火のかげをさし覗きて、

「桐山、桐山君。」

主人の居らでか内には返事もなく、月の光のさし寫す我影のみ、定まらぬ足許に搖き動けば、再び呼はん力も拔け、熱き息をほとつきて、いぎたなく小椽に身を倒しぬ。

中空の月覆ふ雲もなく、今や懸らんとする庭の櫻も大方は落葉して、殘る一片二片のそれさへ危げなり。

母家の方には此家の主人が得意の謠や初りし、どよめきの音一時絶えて、例の大聲のみ獨り高く、木の間より見ゆる赤き障子には、人の影黑く一ツ又一ツ。

「あら此處にゐらつしやたの。」と云ひつゝ鼻緖の緩みし庭下駄突掛けて植込の方より走り來りしは、此家の嬢、初子とて友の桐山が妹、年は十八の顔盛りながら、兩親の手許に世間見ぬ初々しさは萬事に子供らしく、丈に似ぬ赤兒と母が口より聞きしも度々なり。藤田は元より桐山の親友とて、此家の家内とは皆心易く、訪來る折々取次の下女の奥にも知らさず通す仲なれは、今日も内祝の席に招かれ、强ひらるゝ迄もなく醉ひて、常の沈默に似ぬ高調子に人を驚し、果はならぬ口の胸苦しさに座を外して、友が書齋の離亭を目的に辿り着き、彼方の座に居しを今見て來ながら、留守の部屋呼ぶ程なれは、倒れて後は高鼾の、初子が聲も耳には入らぬなりき。

「何處にゐらッしやるかと思ッて方々尋れたのよ、何だッてこんなとこにゐらッしやるんですもの。」と走り寄りて、ひたひたと身をさし添へぬ。

「お加減がお惡いんぢやないの、え、藤田さん。」

盛装といふ迄はなくとも、紅白粉施しゝ今日の姿の、淡くさす月の光のそれも反りて配合よく、玉の腕惜し氣もなくさし延べて、心置なく藤田の肩を動せば、朧に目開き、驚きし樣に頭もたげて、危ぶ氣に初子が顔を見上げぬ。

「ヤア初子さんですか、ほ、僕は大に醉つて大層失敬しました。」

「いゝえ、お醉ひなすつたつてよござんすけれど、あの、此樣なとこにおよつてゐらつしやると御躰に毒ですから。」と又倒れ掛るを小腕に支へて。

「彼方へおやすみ遊ばせな。」

「有り難う、何、此處で澤山です。」

「あらいけなくつてよ、此處ではお風を召しますわ。」

「大丈夫です、あゝ醉つた、僕は非常に醉つてるでせう、初子さん。」

「いゝえ、そんなでもありませんわ、あらまたおやすみなすつちやいけませんよ、それぢや此部屋にお寢み遊ばせな、ね。」

「有難い、では寢ます、初子さん、僕は大に醉つたですよ、眞に醉つた、然し、大丈夫、足許は確なもんさ。」と、朧氣なる目に初子が顔眺めつゝ立ち上りしが、よろめく足の千鳥に飛びて、側の柱に倒れ掛るを危く支へ、片手に障子開きて助入るれば、藤田は優しき人の肩を力に内に入りぬ、

靑き羅紗の新しきを掛けたる机隅に寄せて、部屋一面に敷詰めたる絨毯の上に、初子が支ふる力も及ばて腰掛たる藤田は、其儘身を倒しながら、酒臭き息ふきて、今しも洋燈の心捩上げたる初子の方を打ちながめ、

「僕は實に君の親切に感謝しますよ、然し、此樣に醉つて、はたから見たら可笑しいでせう、ね、でも仕方がないさ。」

「なんの、何樣にお醉ひなすつたつてよござんすとも、今日は御祝義ですもの。」

「然り、僕も御祝義だから飮んだのだけれど、斯うお世話になつては濟ませんな。」

「あらあんな事、濟まないなんて事はちつともありませんわ。」

「そう、そりや有難い、實に有難い。」

さし許る膝の上に延べし藤田の片手靜に抑へて、帶の間より薄色の洋巾取出し、汗ばめる顔の邊拭ひ遣りつつ顔さし覗きて、

「あの、お苦しくは御座いませんか、實丹でも持つて參りませうか。」

「そう、少し苦しいけれど、藥など要りません、それよりは、み、水を貰ひたいですな。」

「はい、それぢや今掻巻と一所に持つて參りますから、待つていらしやいよ、よござんすか、すぐ持つて參りますからね。」

常に似ぬ藤田が今宵の様の、酒故と思へはそれも恠からず、側の座布團假りの枕にさせて、力なき目細めて又眠らんとする罪なき様を見返りつゝ、初子はいそき外方に出てぬ。

## 下

長き廊下右左に曲りて、角より二つ目の障子押開き、今、下宿住居の己が部屋に歸り來りし藤田は、桐山の祝宴に臨みし一夜の留守の間に、届居たりし新聞手紙などの、机の上に投げ置かれしを取上げぬ。新聞は今朝のものなるべし、其下には京都なる友よりの端書と、今一通は女文字の細きに裏見れば、國の母が許よりのにて、嚴しき封につれて常になく重きも心元なく、引割く様に開讀めば、まづ初冬の身の廻りより書出したる、厭げる色もなく常のまゝなるに漸く心落着きて、讀みては卷き卷きてはよむ右の手の、厚くなるにつれて左手の輕く、次より次と目を移しぬ。

優しき母が情をなつかしみて、心嬉し氣に讀ゐし藤田は、半ばかりより何とは知れず首うなだれて、卷く手の程も漸く力なく、只ならぬ色の顔に浮びしが、終りに近くよみさして、元堪えぬ樣に手紙を膝に、兩の腕組みぬ。

さし置かれし手紙のよみたる方は、はら／＼と膝の下に轉りて、見ゆるは終りに近き幾行の、眞は長けれど、其大畧は、（其方が夏休にて歸りし頃より話ありつる兄君の縁談、其後も諸方より媒介もありしかど、何れ長し短かしの氣に叶へるもなくて過ぎしが、此程さる人より話ありしは、其方が今の住居と同じ東京の桐山といふにて、身の程、當人の年格合も相等しく、父上初め兄君も御心に叶ひし事ながら、よくよく聞けは、兼て其方が噂もありし友人の家なるに、一入都合よく、血統其他の事は大畧此方にて聞合せたれど、當人の性質容貌は手も及はれは、妾より密に尋參らするなり。其方は元より男の身の、よくは心付かぬべけれど、親しく行交ふ家なれば大畧の事は知りつらむに、其方より善との便あらば直にも取結ぶべく、思はしからぬ報知ならんには又他を求むべし。何れとも疾く云越し給ひてよ」といふなり。

藤田が家は宇都宮といへば、京よりは左程も遠からず、父なる人一代の分限なれば、舊家とちふにはあらねど、大地主といふ格の中にも入りて、物には足らぬ事なき家の、兄なる人も早くより東京に出でゝ、某專門學校を美事に卒業し、行も正しく性質も優しければ、人の評判もよく、殊には只二人の兄弟仲睦しきばかり睦しきに、知る人の皆賞めぬはなかりき。

組みたる腕は愈堅く、垂れたる首は遂に上らで、藤田は深き思に沈みぬ。桐山の家の娘と云へば、二人とはなき彼の初子の事故、今更に思惑ふ事もなく返事し得べき筈なるに、さはなくて斯く思案に沈む胸の中には、人知らぬ苦しき思の行通ふなりなり。

桐山と藤田との交友は昨日今日の事にはあらず、中學の昔よりとて早幾歳の交際に、我家も等しく、遠慮は疾うの昔に失せ、且つは、桐山の父母も、優しき藤田が心をめでゝ隔てなく扱へは、往來も日に繁くなり、

春は歌牌の團居より、秋は月見の席にまで、遇らぬ事もなきに、人もとがめれば初子とも隔てず、表裏もなく交りて互に心知るにつれ只ならぬ心も起り、口にはいはれど互に誠も見せ合ひて、美しき戀の初花何時しか二人の胸に咲きそめ、明されど通ふ心と心には、人こそ知られ點頭き合ふ節も多かりき。

今更に何と云ひやらむ昨宵の事も思出されて、母に返事の詮術もなく、さりとて明合ひし胸にもあらねば、人の心の確にそれとも定め難きに、打ち明けて語り得るものにあらず、ましてや優しき兄君が心に叶ひしといふを、我故打消さんも辛く、又我と兄君とを批べてば、行末知られぬ半生の此身より、身につく財産多く、心も優しく、學才とても勝れし人の、行かば彼の人の幸福は明なるに、已一人の胸に此話破りて、繋がるべかりし緣の糸斷ちし後、彼の人の心此思に違ひて、我のみ燃しし炎なりなんにはいかにすべき、いはゞ愛しき人の身に向ひ來し幸を、我と我手に打消したるも同じく、心苦しき極にはあれど、さりとて日頃の優しき誠實は、心なくてもと思はれず、又若しも彼の人の心も我と同じく、我が推量の眞なりせば、母上に今明白なる返事參らせ、二方の親の心に此緣結ばれて、人の世の義理の辭まんよしもなく、愈我姉君と仰ぐべくなりなんには、心に染まぬ緣の糸の、彼の人の心の悲しさは如何はかりなるべきぞ、ましてや我手に書かれし一さしの紙面に、長き一生の悲しみ運命は定りぬと知らば、日頃の我所爲も恨めしく、情なき人と思はゞや、已一人は萬一幸なき戀の悲しみの淵に沈むとも、又喜ぶ人もありと思ひ斷念むべけれど、彼の人の上は到底も忍ばれず、さればとて我言の葉は總て偽瞞ならずと信じ居給ふ母上に、かゝる心の筆を曲げて申し上げんは、身を切らるゝよりも辛し、且つはよしや斯くて、此場の苦しみは逃こ得るとも、さる事申し上げし後には、此末の我等が緣は望むべくもあらずなりゆくものを、あゝ如何にせばよき我身ぞと、思ひみだれては又繰り返し、繰返しては一入惑ふ二筋道に、整へかれぬ胸の小田卷。

# 花ばちす

大阪　田村きん子

## （一）

梅雨の空にもにず、今日はめづらしく、朝來晴れ渡りたる上に、西北の涼風もよく／＼と吹いて、夏とはいへ、小春のやうな好天氣である。

音にきこえた、住吉神社境内の蓮花は、今を盛りと咲きほこつて、人まち顔である。參詣をかねて、公園に杖を曳く遊客も少なくない、まして、今日は日曜であるから、小倉服の中學生、海老茶袴の女學生、藝妓づれの紳士、孫つれた老人、さては會社員らしい人など、何れも樂しそうに、三々五々そこゝと散歩してゐる。

「御掛けやす」「マア一服御休觀やす」かしましい、茶店の女の呼聲も景氣よく聞える。

「ほんとに美麗だれー」思ひ出したやうに、つき添ふ下女に話かけたは芳紀十八九の美くしい若奥樣、流行の大丸髷に赤の手絡、亂れ菊の後插も、派手な髮の裝飾、身には紋御召の單衣を着て、博多の單帶を上品なお太鼓に結び、濃紫の深張の蝙蝠傘をさして居る。

「オヤまだあんな處にいらつしやるわ、何を見てらつしやるのオヽ、ヽヽ」

「旦那樣、こゝへ來て御覽遊ばせ、蓮の花が美麗にさいて居りますよ」と下女のお芳は振返つた。

旦那樣と呼ばれたは、二十六七の官吏らしい紳士である。

薩摩飛白の單衣に、黑絽の羽織、白縮緬兵兒帶に金鎖をまきつけて、絹セルの鳥打帽を被り、豐かに葉卷を燻らしてゐる。

「アヽヽヽ、お前等いつまで其處に居るんだよ、ちッとぶら〳〵歩行ぢやないか」

いひながら、こなたへ進んで來た。睦まじ氣に語らふ一對の若夫婦は一入、人目をひいてゐる中に、それ橋の許に立つて居た、二人の書生風の男は、凝乎と此方を眺めながら、何か聲高に話をしてゐる。

今しも夫にいはれて、奥樣は此方を振り向いた突端、ふとかの書生の一人と顏見合せて、非常に驚いた。帽子には工業學校の徽章をつけて、年紀二十二か三ぐらい、凛々しい面影の、何處やらに沈み氣が見えてゐる、談話の中に、英子〳〵といふのが、殊更耳だつやうに、聞えるので奥樣は堪えられない「貴郎何處かで暫く休憩なさいませんか」といひ出した、それも聞えるか聞えぬかの小聲で。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

英子は、今年の四月高等女學校を卒業して、少時ヴイオリンをある音樂教師に敎はつて居つたが、丁度一月程まへ、庭の若竹いや茂りて、綠の葉陰なつかしい六月ごろ良緣あつて、松村好太郎といふ人に嫁入つた。好太郎は司法官試補に職を奉じて居るが、父は某銀行の支配人で、經濟社會では隨分腕利の人物である。

英子の父は、もと判事を奉職して居つたが、病氣の爲に職を辭して、今では老後の慰みかた〴〵辯護士をやつて、一般公衆の依賴に應じてゐる。英子の兄三郎の友に、同じく工業學校に通つて居る、吉田繁といふ青年がある。多くの朋友の中でも、繁とは兄弟も及ばぬ程、親しう交際して居つた、妹英子も兄の親友であるから、來る每に心よくもてなして居つたが、汚れた心は少しも持たなかつた、唯少女心の、兄に對する眞心に感じて何となく慕はしく、自ら他の者には異つて待遇するやうになつたので。

（二）

軒端にそへる楓の若葉は、一日〳〵に茂りあつて、吹き渡る風なつかしい首夏の頃となつた。爛熳と咲きほこつた八重櫻も葉のみとなつて、汀に咲ける燕子花は、ゆかりの色を深めてゐる。

同窓生で同じく今年業卒へた親友が、音づれたので、英子は徒然な折柄己が居間へ通して、暫く物說をして居たが、何か急ぎの用があるとかで立ち歸つた後、文机に向つて、女學世界を讀み初めた。庭つゞきの離座敷には、朝から來客があつて、今しも酒宴の最中である。客といふのは、日常懇意にする松村陸夫々婦。

風のまに〳〵折々話聲が聞えるので、英子は何氣なく耳傾ぶけると、思掛なく自分の話であつた。

「英子も最早年頃では御座いますし、良い御緣があれば貰つて頂だかうと存じて居りましたが、恰度願ふてもない御緣で……」

「何れ英にも申し聞かせました上で……」

といつたのは父の聲である。

英子は之を聞いて、驚いたよりは寧ろ、喜んだのである。繁も年に似ず溫和な性質で、才學共に備はつて居るから、末賴もしい人であると何となく戀しく思つてゐたが、假令前途に望があつてもまだ學生の身の上、それに反して好太郎は地位もあるし、人望もある、才も學も繁には劣らない、好男子であるから、わが夫にはかゝる人こそと竊かに慕つて居つた、所へこの物語をきいたから、書見もしないで、英子は獨物思ひに沈んだ。

朝夕御傍に侍る身となれば、かれて理想の圓滿なホームを作つて、樂し

く浮世を渡ろう、其時には學校で敎はつた料理やら裁縫やら、また簿記などを利用して、チヤンと家計を整理してゆかうと、まだ實地にその境遇に立たない中から、種々の空想を胸に描いて、英子は獨り樂しんで居る。やがて一時間もたつと、御歸りといふので英子も共に玄關まで見送つたその時

「英子さん、此節は貴女も御暇で御座いませうから、チツと御遊びにいらつしやまし」

と好太郎の母がいつたのを氣の爲か、何となくなつかしう思つた。

翌朝奥樣の御召だといふので、昨日の話だろうと思ひながら、行て見ると案の條、松村からの緣談のことであつた。英子に何の異存があろう、恥ひながらも卽座に承諾した。

兩親の喜びは勿論、英子の嬉しさは譬へやうもない、まもなく二週間あまりへて、いとも愛たき盛なる結婚式は、松村家の大廣間に擧げられた。軒の雀も千代呼びて、樂しい松村の家庭はきのふにも增して一しほ光を添えたのである。

（三）

英子の恙なく松村家へ入輿してから、丁度六日目の朝、只今郵便がと、小間使の持つて來た手紙がある、見れば差出人の姓名はなく、たゞ知人よりとあるばかり、現に角と思つて、封お破り讀み下した。

『最早かく相成ては、詮なき事なれどいはでやむべき由もなければ、未練ながら一筆參らせぬ、君の兄上三郎君は世にも柔しき顏ある靑年にて我友にはこの人ごそと、親しう交際してよりこゝに三年、

君はまだ三五の愛らしき少女に在せしが、やさしき御心は兄上にもまして、君の家にゆく每に、いと篤くながき三年の間、變らず待遇給ひぬ。

その志、その情、いかに末長く忘れ申さんと思ひしが、今は早仇となりぬ、想ひ起す一昨年の秋、君が誕生日なりとて盛なる祝宴を催されし時の、かたろ遊に、我は戀を知り初めてより、二年あまりの間、君の素操にのみ目をつけ居りしに、まこと淑女といひて恥かしからぬ才學共に備はり玉へるに、一入懐かしさいやまさりて、かゝる君こそと思ひ居たりけり。さるに〳〵我に非常に驚きぬ、此度松村君と結婚の式あげ玉ひしときゝて、あはれ昔のごと朋友の間柄にしあれば、双手を擧げて君の婚姻を祝せん。さあれ我は君の慶事を祝すべき勇氣なきなり、否祝する事を得ぬなり、君の爲に未來に描きし希望も、此度の事をきゝて、全くうち消されぬ、あはれ君は我將來の望みを、悉く消し給ひし風なり。我は賴ある燈火を失ひ、唯黑闇々たる暗路をたどりて、何をか成就せん。昔文覺上人、瀧口入道は共に失戀の爲に、あたら武士をすてゝ佛門にいりぬ。あはれ我身も失戀に、生涯を味氣なく渡らんか、とにかくに我は一度東都に上らん、唯願はくは松村君と友白髮の末長く契りを結び給へ、さらば暑さに向ふ折から、英子の君よ幸くませ』

賤の男

松村英子の君

讀み終つて英子は机の上に泣き伏した、あたら有爲の靑年を數ならぬ我身のために、淺ましき失戀者と歸せしめる事の悲しう堪え難うて。さあれ我は昔の英子ではなく、今は松村好太郎の妻として浮世の生活に入つた身である、若き男らより手紙を受取るやうな……かく思切つた英子は、長々しい手紙を手にとるや否や、ヅツと細かく引破ッた。

（四）

木の下陰なつかしい七月の中ば頃、日曜を幸ひ英子は夫と共に住吉神社へ參詣した歸途、ふと蓮池の傍で出遇つたのは、都へ上つたとばかり思つて居た、吉田某であつた。

秋も暮れ、冬もすぎた翌年の彌生の春、舒太郎は東京に轉勤を命じられた。

梅田ステーション一二等客待合室にて、多くの見送人に一々挨拶をして居る立派な若夫婦がある。

今しもこゝへ這入つて來たのは、一人の士官候補生であつたが、この様をみて苦々しげに、凛々しい眉を顰めて、室外へいで去つた。洋劍の音に、人の目はこの軍人に集まつた中にも、一しほ驚いて目をつけたのは英子であつた。

# 心の花

## (上)

名古屋　片野千代子

「花井さん、ちよいと此處へいらつしやいな。」「はあ今直きよ、ちよつと退校届を出して來ますから。」と振り返りざま運動場を赴り行く十八許りの小女の風に靡ける海老茶袴を見送りて

「まあとうどう退校なさるんでしやうか。」ほんとうに惜しい事ね。」「もうたつた半年ですのに。」と口々に云ひ合したる二三人何れも十六か七か八迄の年頃。

「アノ……花井さんは臺灣へいらつしやるつて全くですか?」と三編みのお下髪に白茶のリボン止めしたるが問ひ出づるを年長の桃割に結へるが引きとりて

「えゝさうですつて彼方に居らつしやる伯母さんの所とかへ貰はれて行らつしやるんだつて、ねー吉野さんあなたよく御存じてしやう。」「いゝえちつとも知らないのよ何にもおつしやらないんですも」「あらお隱し遊ばさずといゝわあなた親友で居らつしやるじやありませんか。」「あら隱すなんてそんな事する必要がありませんもの。」意地惡氣に云ひかけられて當惑さうに差俯むけるに女目鼻立殊に鮮に口元愛しくふつくりとして艶ある額は束髮にかざせる白薔薇と照りそひてさながら春の朝日の出にも似たりし。

折から彼方より馳せ來りて

「皆さん、お待遠様今ね先生にいろいろお話爲てたもんですから。」と云へるは先程うわさされし花井と云くるなりけり之れは又賓軀の姿氣高う眉長の顔に夜會結び例の袴さへ殊の外似合ひてさながら西洋の女神とやらの繪より脱け出で給ひしもかくやと思はる。

繁りに繁りし青桐の下に肩を並べて立てる吉野と花井の餘りの美しさに今更のやう氣後れしてか例の年長なるが

「山田さんテニスしに參りませうよ。」とお下髪の可憐なるを引き立てゝ行きたる後は親しき友の唯二人顔見合せつ

「花井さんあなたどうしても臺灣へ行らつしやらなけりやならないの私お別れづらくてよ。」と花やかな目元潤ませて云へは

「ほんとうにねー私もお名殘り惜しくてねえ何だかもうお目にかゝられないやうな氣がして仕様がないの。」と之れも又無言のうちに涙をのみて

「吉野さん、私あなたにお願ひがあるの。」と云ひ難げに

「えゝ私に何?何　爲ますわ云つて頂戴な。」「ほんとうに聞いて下すつていゝえ別の何じやないんですけど。」と憚したゆたひながら

「アノ……あなたねどうぞお願ひですから靜……靜夫様を終生樂しき家庭に暮さして上げて頂戴な唯それだけでもう何にも心殘りはないん

ですから。」と思ひ切りしやうに云ひ終りて友の様子はと氣付ふ吉野の花も恥ふ初紅葉のごと耳の根少し色づきて艶なるにやがて擡上げし顏の頰をつたふぞ正しく涙の露。

「花井さんそれては濟……濟みませんわ。」「いゝえ濟まない事あなくつてなまぢつか義理立て遊はすとそれこそお恨み申ますよ、私の心をお汲み下すつて一日もお早く後生ですから。」

折しも木間をかすめて授業を報する鈴の音聞ゆ。やをら立あかりし二人つと寄り添ひし吉野の花井の手をとるかと見れば可愛き口に二度三度の接吻。

「花井さんあなたは胖様」と許り「忘れませんよ。」と強く握りて見合したる眼に無言の心、さて思ひ出したかのやう足並そろへて教室の方へひた走り。

（下）

乘る人と下る人、プラツトホームにつどひし幾百人の老若男女が千差萬別の心々を之れは已れの戀を捨てゝ友に讓れる潔き身を車窓に寄せたるは花井八重子なりけり。

廿の上を三つ四つとも見らるべき男の角帽頂きなるが力なき聲に「もう今に成つて何にも申ませんが……唯あなたの御健康を祀るはかりてす」と恰も女畫の前に跼まし小兒のそれかのやう

「えゝどうぞあなたも今申ました様にれえさうして少しも早く彼の方のお父様の祕書官とやらにお成り遊はすやう私はもう何時お目に懸ります やら」中得云はすはふり落つる涙はらいもやらて

「それはさうと吉野さんはどう爲すつたんでしやう何かお差支が出來たんでしやうかもう一度お目に懸つて御別が惜しみたいんだけど……」

折から耳をつんざく一聲の汽笛

「アツもう駄目ですれえどうぞあなたからよろしく。」「は左様ならば。」初めは緩かにやがて動きゆく列車さては身動きもせず立てる男を突き飛ばすかのやう馳せ來りし少女

「靜夫様、花ツ花井さんは。」よろよろと倒れかゝりしを漸うに踏みしめたる男「アツあすこです。」「えゝツ何處。」

早や五六間をへだゝて見送る人と送らる人、のび上りのび上りて見合す涙さては外目も擇はず

「花井さん忘れませんよ。」「八重子さん感謝します。」聞こえたりしや否眞白の手布三度振られて今は朧ろに遠ざかりゆく。



▲（撰外佳作の分）

、かへりざき（東京）推野讓子
浮き世　木下浪子
、薄命（岐阜市）山田富子
、小櫻　とき子
、孤舟（大阪市）宇野翠子
從妹の許へ（同　）同人
、鈴の響（和歌山市）藤井靜子
○繼母殺（伊勢國）河原芳子
競馬（尾張國）いし子
黄菊（高崎市）深井佐惠子
初秋（同　）堀越つる子
元はたし　しらぎく女史
おもふ友（新潟縣）越後富士
愛の心（北海道）野中しつゑ
益友（茨城縣）山本せつ
道すがら（富山縣）高田千代
秋の夜（安藝國）千代田初
、月の夜（神戸市）桂つき子
妻の諌（埼玉縣）倉林そめ
秋の扇　はる子
むら雲（本所區）眼野紫子

懺悔（埼玉縣）倉林こう
あはれの姫　すがもの子
秋の空（高崎市）日乙子
、私の夜（福岡市）島山わか
○姉の心（越後國）横山光子
下ゆく水（小樽區）高橋槿
、夫婦花（牛込區）飯田千代
右手紙（香川縣）そゝろ女
雪の夜（靜岡市）宮内榮子
影法師（長門國）村田光
行方（大阪）友子
月の磯邊（同　）いてふ
わが友（横濱）ゆかわ
車井戸（靜岡市）延子
浮世（大阪）藤井登美子
○片羽鳥（美作國）片山米子
、夢の世（秋田縣）松操女史
菊の花（羽後）菊坊
春の夢　池田松子
仇浪（三河國）本多たづ子
、奇遇　こてふ女史
小高川（東京糀町）齋藤梅子

春の曙　（大阪府）　田中しゆん
○秋の雫　（飛驒）　やゑ子
、かへり咲　（長門）　岩田章子
、まぼろし　（信州）　小林春子
○○○窓の月　（芝烏森）　道子
運命　白露
憂世　（相州）　みどり子
○大和撫子　（富山縣）　淺田こと
月見　（大阪市）　橋本いま
、秋の夜　（大阪市）　たまその
名殘の文　（芝區）　もみじ女史
若楓　（磐城國）　内山房女
運命　（越後）　前崎照子
秋海棠　（廣島縣）　扶佐子
夜の海祭　（靜岡縣）　大橋みさを
不緣阪　（越後國）　植田ゆふ子
筒井づゝ　（越後國）　玉井小夜子
○大和撫子　（筑前國）　松林歌子
○八日月　（靜岡市）　田中とり子
○ゑにしの糸　（伊勢津市）　久保まさ子
、雛人形　（岩代國）　黒河内いく子
、むら雲　（飛州）　かう子
形見の文　（長門國）　影山むらさめ

音無瀧　芙蓉
睦じき家　（長門國）　田上あかさめ
小春日　（大阪）　ときは女史
夕べの思ひ　（大阪府）　岡部ひさ子
女やもめ　（福岡縣）　川崎はな
二小花　（京都）　河原春子
長恨　（神田區）　新小枝
初もみじ上之卷　（東京）　白百合
かたみの小箱　（熊本縣）　奥田光子
幽韻　（東京）　原智賀子
萩のから風　（京都市）　なにがし女
夜あらし　（神奈川縣）　保田ゆずる
子ゆへ　（東京市）　杉原靜枝
花はちす　（大阪市）　仙田蒔
宵がたり　（神奈川）　保田ゆづる
若木人のなやみ　わがば子
日記の拔書　（播磨國）　藤田代子
從兄妹　（岐阜縣）　森田津音子
紅日記　（信濃國）　小林みつ子
理想化　（東京市）　秋山もみじ
冬の夜がたり　（同）　野口まさ子
水の泡　（兵庫縣）　辻きく子
懺悔　上野澄子

# 和歌

## 佐々木信綱先生選評

《天》　猨　　下谷區南稲荷町廿八番地　白井すみ子

空こがす山火事のあかり脊にうけて
　山を下りゆく猨のむれ

片破月を酒合したる、猨よりも恐ろしき人ごゝろなどいへるが多き中に、着想新らしくしてよし、こたびの中の白眉といふべし。

《地》　萩　　日向都城町北口廿一番地　厚地廣子

老松に夕日淋しき古寺の
　裏道つゞき萩さかりなり。

秋の意はやゝうすけれど、上句古寺のさま見ゆるやう也。

《人》　鐵道　　讃岐三豊郡上高瀬村字新右　森このゑ

汽車のゆく道のほとりの小屋住ひ
　みたりの親子旗ふりくらす

詩趣に遠き鐵道をよく詩化し得たり。

## 秀逸

●萩　　伊勢　森いと女

病む母のぬるまにしはし窓おせば
　夕日うすれて萩か花ちる

●鐵道　　河内　河崎ひかへ

たくましき黒くはをとこレールひくと
　つるはしうちて山きりひらく

●猨　　鹿島　飛露子

罪人のなきがら捨てしいにしへの
　峠のあたり猨のなく

●萩　　日本橋　清水みわ子

ぬれて折れし雨の糸萩そのまゝに
　君にさゝぐる文にそへばや

●萩　　信濃　市川豊子

繪の具とく瀧のしぶきの涼風に
　萩のちりせきれのなく

●萩　　下谷　白井すみ子

文筥もちて女の童一人いてゆきぬ
　小萩みだれ咲く北嵯峨の宿

◉鐵道　信濃　竹鼻はる子
こゝろざす停車場みえて雨はれて
夕虹懸河添のむら

◉狼　和歌山　平田紀子
おほかみの一聲たかく谷鳴りて
月影さゆる木曾の山路

◉鐵道　和歌山　平田紀子
ふた筋の汽車路遠くたそがれて
枯野さびしく秋の風ふく

◉鐵道　讃岐　有信露子
狂ひ女のしかれて死にし汽車道の
かたへの塚に百合の花さく

◉狼　弘前　住の江かほる
いくさはてし大野の末に狼の
吠ゆるも寒むし片われの月

◉萩　陸前　武島歌子
しら萩のさきたくみたるしをり戸に
友をむかふる薄月夜かな

◉萩　常陸　海老澤のぶ子
秋の野を駒のりならす小公達
鞭にかへたり萩の一枝

◉鐵道　名古屋　奥島ひて子
まかね路のくるまおそしと故さとに
老いたる母やまちつゝあらん

◉萩　神戸　菊月
垣間見る貸家の庭の靜けさに
蔭も虫なき萩の花咲く

◉萩　長門　岩田章子
もてはやす人も無くして院の御所に
盛過ぎけり姫萩の花

◉狼　相摸　楓子
何となく身うちふるひて狼の
こゑものすごき木曾の山道

◉萩　伊勢　白井德子
雨の夜を舍人めします聲のして
寮の御庭に萩の花ちる

◉萩　但馬　尾知山靜枝
戯れに猫追ひたまふ姫君の
袖にこぼるゝ庭の白萩

◉鐵道　和歌山　增井やう子

人ひとり殺されし其夜より
狐しばなく昭切のあたり　北越　白百合子

●萩

まはぎ原むらさきよするなみわけて
月はのぼりぬ鹿の音もかな　河内　大矢たね子

●狼

おほかみのとほゞえさむき木枯に
雲をはなるゝわけかたの月　横濱　長谷川さく

●狼

熊笹のそよめき寒き山風に
まかみゝたけびに日はくれんとす　信濃　金井繁子

●狼

よべもまた狼いてゝ村をさの
馬わやめつち村人さわく　河内　大矢たね子

●萩

ちからなき秋の夕日は雲に入りて
岡の萩むらすゝむしのなく　佐賀　中島日出子

●萩

傘さして萩の一枝を折りて見つ
思ふこと多き雨の夕ぐれ

●狼

かゝみゐしほだ火は消えて老人の
狼話夜は更けにけり　甲斐　小尾守秋子

●鐵道

山つきて松原つきて穂波よする
稲の中ゆく汽車の窓　信濃　竹鼻はる子

●鐵道

山かげの古道さして翁媼
昔語れる汽車の窓かな　長門　岩田章子

●狼

狼のなく音とだえし眞夜中を
月おし照れりしべりやの原　三河　本多たつ子

## 佳調

◎狼　京都　三の宮寳子
檻のうちに身はとらはれの狼のいかにせんとか牙ならすらん

◎狼　日本橋　戸野はる子
雨ふくむ雲ひろぜりてものすごく星ふる夜半を狼のなく

◎萩　大阪　三宅かれ子
牛追ふて歸る我家の夕煙垣根も見えぬ白萩の花

◎狼　長崎　原さゑ子

おそろしく凄げの空にひゞくかないたてにならむ猨のこゑ

◉萩　陸中　及川ちよ

空晴き秋の日和に賤の男がうま肥さんと萩刈り歸る

◉鐵道　越後　坪井わき

山を拔き河を渡りて時の間に千里行くべき道は開けぬ

◉鐵道　越後　井上たまの

猨のすみし昔を汽車の窓に語りつゝゆく谷あひの道

◉萩　伊豫　鎌田歐子

灯細り百物語更け行きぬ萩の花散る山寺の夕

◉猨　備前　正松たけ子

深山邊にすめるのみかは猨もちまたにひそむおそろしの世や

◉鐵道　名古屋　芳琴女史

汽車はいますぎてゆきたるまかれ路のかたへのすゝき秋風の吹く

◉猨　よし子

一ッ家にちごの泣くれのはたとやみてかすかに聞ゆ猨のこゑ

◉萩　河内　田中靜野

さすさてのあみにをり〳〵もつれけり小川の岸の秋萩の花

◉萩　河内　河崎ひさへ

水くみにおりてはからず見いてけりたにまにさける秋萩の花

◉猨　河内　河崎ひさ子

兵士のむくろ爭ふ猨のこゑもものすごし北支那の原

◉萩　名古屋　征野重子

立寄てをらんとすれば萩の花彌き出たり池水の上に

◉萩　越後　小林靜枝

二つ三つさきし萩をば見え出しぬ科なほ殘きうら庭にして

◉萩　甲斐　小尾守秋子

すゝかけのみけし露けき盧無俗の笛ぞほろ〳〵萩こぼれけり

◉鐵道　甲斐　小尾守秋子

山の背にとまや三つ四つすすがまの下にも汽車の道はつきけり

◉猨　美作　池田芳子

戰はてし大臨の末のあけ方の片われ月に猨のなく

◉萩　和歌山　彥坂しの子

あめはれて露にしたるゝ萩見れば下かげわくる人ありげなり

◉萩　鹿兒島　原田則子

月清しあばらやほそしそて垣のしろきは萩の花にやるらん

◉猨　鹿兒島　原田則子

月落ちて風治まりて深山路のはるかなる哉猨のこゑ

◉萩　信濃　小出くに子

里の子にふみあらされし白萩の倒れながらに小さき花さく

◉萩　京都　まだ子

あれはてし庭の萩はらおとなくば昔戀しき夕風ぞ吹く

◉萩　周防　朝本愛子

訪ひませる背子の衣の袖摺りて垣根になびく姬萩の花

◉猨　靜岡　井黑はま子

おほがみのほゆる深山を吹く風の凄くもあるか秋のゆふぐれ

◉猨　靜岡　井黑はま子

むくつけき猨よりも目に見へぬ人の心のたけくもあるかは

◉萩　駿河　佐藤ふじ子

眞草刈る利鎌にもれて秋の野に花のさかりの萩のひとむら

◉萩　相摸　白つゆ女

やさしくも咲きみだれたる萩の花手折らばつゆの玉はちるらん

◉猿　三河　落えふ子

旅人の行影失せて西伯利亞の平原萎里猿の聲

◉鐵道　下關　熊谷ふさ子

せこ乘りし汽車見えずなりてたゞながきレールの上に木の葉亂れ散る

◉猿　近江　岩間ふさな

まかみなく聲のひゞきし木曾の旅よたゝれられぬ山の一つ家

◉猿　近江　岩間ゆき

あれのはら夜中ものすごき月影に猿ほえて身の毛よだちぬ

◉猿　近江　横田さだ

たどりゆく谷間はぐれて猿の鳴く聲すごしみ山路の雲

◉猿　近江　横田かすえ

枯野原月かげ冴えて猿の聲ものすごく秋はふけにけり

◉萩　近江　岩間小まつ

さけばちりちれば咲きつゝおきかはる露おもしろき庭の萩原

◉萩　伊豫　田中重子

風そよ〳〵萩の花さく垣の内に鰻君たちてはさみ持ち給ふ

◉猿　下關　熊谷ふさ子

たゞ一人木曾の山みち行きくれてやまびこ返す猿の聲

◉鐵道　河内　田中たつの

あし引の三山にひけるまかな路もおもへば君の恩なりけり

◉猿　河内　田中たつの

はこね山有明月にこえくればこたまにひびく猿の聲

◉猿　河内　田中靜野

片破の月もの凄く古蹟を照らす折しも猿のなく

◉萩　宮城　千葉きみ子

しろしめす萩の月夜の神と我れかたりし戻のころ秋ぞ

◉萩　大阪　たつみ

荒れはてゝみる人もなき垣にそひ月影やどす萩あはれあり

◉萩　岡山　林良子

吹き渡る朝けの風に白露もみだれてなびく萩の一むら

◉猿　伯耆　鶴が野ゆきえ

古のいしさのにはに月冴えて生血にかまぬ猿のなく

◉萩　松江　大野松の子

亡き友と去年うゑおきし我庭に垣の萩はき今まさかりなり

◉猿　赤阪　高木貞子

山の端に住むかり人やゆめさめんこゑすさまじく猿のなく

◉萩　和歌山　桑原くに子

庭淸く鏡にまかふ池の面に咲き亂れても萩ぞうつれる

◉鐵道　河内　田中靜野

只獨り夜汽車にのりて友をおもふうらみもなかき鐵金路哉

◉猿　河内　河崎ひさし

處刑場に月かたふきて血腥き篠原のあたり猿つとふ

◉萩　河内　田中とつの

一枚折りで手向けせんなき母が手うゑの萩はさきそめにけり

◉萩　播磨　糟谷のぶ

あらごまのあらきひづめに野の萩はふまれながらも花咲きにけり

◉猿　遠江　寺岡みつ子

ふくつけくあたことしらぬ猿の樣にも似たる人もありけり

◉萩　高知　毆岡しえ

青葉かげに夏くれゆきて城あとの枯井のほとり萩の花さく

◎猿　鹿兒島　中島ふみ子

猿は夜を利鎌の月に物凄し深山の奥の猿の聲

◎鐵道　武藏　三上つれ子

なつかしき母君います故さとの見えて嬉しと汽車のまどより

◎萩　武藏　保谷いれ子

よひ〳〵に鹿の鳴く音やまぬらん今朝咲きそめし庭の秋萩

◎萩　本所　戸田柳枝

萩が枝におきそふ露の白玉はつまこひわぶる鹿のなみだか

◎猿　福島　吉井つれ子

月くらき深山の奥の谷あひの一聲え高く猿のなく

◎萩　仙臺　大内ちとせ

朝まだき庭しづ〳〵と歌ひまはる小女の袖に萩の花散る

◎萩　陸前　浜野はな子

姫君の仰せかしこみ貰ひこし野守が庵の白萩の花

◎猿　赤坂　村越さち子

荒野原奥津城二三かけ見えてかたふく月に猿のなく

◎萩　信州　西澤すみ子

手折なば散りやみだれんおく露に月やむすべる糸萩の花

◎萩　牛込　鵜島香子

秋風も月も心にまかせけり池のみぎはのの萩一むら

◎鐵道　千葉　小張耕太郎

語る間に車はとほくはせさりぬ煙たなびく県金の道

◎猿　長崎　かず子

山寺の鐘の音凄き村里の月冴えわたり猿のほゆ

◎萩　牛込　岡石しめ子

秋風よこゝろして吹け宮城野は小萩の花ぞ今さかりなる

◎萩　牛込　山田しづゑ

猪のふしとはなれて有明の月のみやどる秋萩の露

◎萩　福岡　吉本ゆき子

糸萩のさきてうつろふいさゝ川水もあやおる心地こそすれ

◎萩　肥前　樋口つゆ子

露しげき萩の小枝を折り取りて妹がかざしにさしてみる哉

◎萩　熊本　山田早苗子

をしかなく山路をくればこゝかしこ咲きみだれたゐ萩の花つま

◎萩　肥前　橋口靜子

山川に衣を洗ふ少女子の右も左も萩咲きにけり

◎萩　下谷　みき子

糸萩の枝もたわゝにおうへ露に宿れる月の影のさやけさ

◎猿　下野　田波秀子

月高く尾花の露のちる見えて聲ものすごく猿のなく

◎萩　神戸　今村たけ子

故郷の萩の花咲けどめでましゝ母のみ姿見るよしもなし

◎萩　越後　石井しほ子

きのふまで笑ひかくしゝ玉萩の秋をおそしとはころびにけり

◎萩　越後　介田かれ

ふるさとのあれたる庭の萩の花今年の秋はいかに咲くらむ

◎鐵道　岩代　菅野和子

いにしへの旅になやみし山見えてゐながらかごつあうかれの道

◎萩　下谷　みき子

うつしうゑて秋の花さかりにさけり見にきませ君
◉萩　佐賀　齋藤むら
夕月夜萩の花さく野の道を村の乙女等歌うたひ歸る
◉猨　熊本　人吉早苗子
入のこる廿日の月のかげくらき森の奥深く猨のなく
◉萩　伊勢　中島つた子
なが〳〵に露のすぐのせうらやまし清き心に世をはつる萩
◉猨　さごろも
ふみまよふ山路の奥の木のかげに猨なきて月西に落つ
◉猨　伊豫　竹本芳子
猨の涙吹えて枯野十里弦月寒く斜なる夜や
◉萩　信濃　吉澤ちか子
折り取りて我髮にさしゝ君やいづこ主なきいほに萩の花咲く
◉萩　德島　大久保愛子
仙人のかゝる山路の右左秋萩咲きて白露宿る
◉萩　伊豫　野中初江
萩々とめてよろこびし少女子戀なる萩も秋は來にけり
◉猨　大和　香山元子
猨の涙吹出し夢さめて松ふく風をひとり聞くかな
◉猨　和歌山　山林文子
曉は寂なき空もかなしきをみ山のかひに猨のなく
◉萩　福岡　大根川わす子
夜をふかみまつのとわたる風さめて月にくだくる萩の玉露
◉萩　美作　北山糸子
匂ひたる萩の花枝枯ぬるに何とは知らずうき思あり

---

◉萩　横濱　加藤もと子
昨日までつぼみと見にし秋萩の花になり行く宮城野の里
◉猨　下野　田波秀子
あらか分りし野はやみて猨のなく聲すごし明方の月
◉萩　伊勢　阿部靜枝
嬉しくも萩は流をおほふかは露の光を袖にうけつゝ
◉猨　對馬　古川辰子
片岡の一本松の月落ちて荒野の末に猨ぞなく
◉萩　對馬　古川たつ子
牛をひきて歸る乙女の通行きて夕ばえきえぬ白萩の原
◉萩　丹後　野村龍子
朝まだき姉のおくつきとふらひて露けき小萩折りてたむけし
◉萩　岡山　納所重野
植ゑまし父上今は亡けれどもかわらず咲きぬうら庭の萩
◉萩　高知　小西稚子
霧ふかき野邊のほそ道わけ行けば白萩が花につゆぞこぼるゝ
◉萩　靜岡　宮内榮子
萩折りてゆく人とほくなりにけり八千草三里霧の夕暮
◉猨　山口　宮城靜枝
夜もすがら遠きかなたの荒野邊に餓の猨すごくなくなり
◉猨　河内　櫻井喜子
狩人の雅兒失ひし此夕餓に狂ひし猨のほゆ
◉猨　周防　小河内綾子
法の師の錫杖彈くあと慕ひ行く萩やさし秋の山路
◉萩　播磨　森脇つや

こぞの秋母とながめし萩の花心ありげに咲きいてにけり

◎猿　　信濃　竹鼻はる子
何になく猿見えて暮見えて尾の上に殘る片われの月

◎萩　　本郷　北澤貞子
夕されはそよ風吹きす入日さす野邊の小川に萩の花ちる

◎猿　　陸奥　秋庭いよ子
荒き山の細路月さえてこだまに響く猿の聲

◎猿　　赤坂　青山みどり
月なり〳〵雲のやぶりに野をてらし森のあなたに猿の聲

◎萩　　上野　飯田かつの
庭もせに咲たる中に白萩の花はすくれて見ゆるなりけり

◎萩　　和歌山　宇治田秀子
文車のひゞきにつれて妹が活けし床の白萩花こぼれたり

◎猿　　大坂　平井あさ子
小川ゆるく芒の原に月はおちて髑髏二つ三つ猿の聲

◎猿　　長野　翠川太殿
山深み行手に霧の立ちこめて越え來し方は猿の聲

◎萩　　芝　津田琴子
茅屋に通ふ小道のうもるまで咲きみだれたる庭のむら萩

◎猿　　日向　厚地麗子
猿の聲吠凄く夜はふけて片われ月の影さむきかな

◎猿　　越中　想月女史
山の端に弓張月はかたぶきて木魂にひゞく猿の聲

◎萩　　河内　富田せい
ひとゝはぬ野へに靡く白萩の一枝あはれとおほされ

---

◎猿　　靜岡　宮内榮子
雲さけて三日月出でし枯れ山の嵐に交る猿の聲

◎萩　　下野　田波秀子
雨すぎし野守が庵のかきのあたりみだれて咲ける白萩の花

◎萩　　弘前　今ちか子
若き僧の遊ふ緋鯉に餌を投ぐる池のほとりの萩さかりけり

◎萩　　弘前　秋元とし子
たゆらひてまたゝゆたひて朝まだき折らで止みけり白萩の花

◎猿　　弘前　今ちか子
いくさはてゝ屍横ふ霧野原月冴えわたり猿のこゑ

◎萩　　長野　堀とめ子
故鄕に我うゑおきし萩の原今年咲きぬと友いひこしぬ

◎萩　　和泉　奥野きぬ子
業なりて古里訪へば母上も美代子もあらず唯秋萩のさく

◎猿　　日本橋　宇田川りん
新墾の山畑十里日は暮れて寒けき月に猿のなく

◎萩　　本郷　齊藤はな
亡き妹の墓はかくれの顯はれぬ夕風渡る萩の一むら

◎鐵道　　和泉　柳下女史
夕まぐれ富士のね遠き碓山のレールの末のトンネルくゞる

◎萩　　大坂　河内歌子
なりてきて今ぞくやしき古鄕の垣まより見し秋萩の花

◎萩　　大阪　里見靜子
さをしかのよたゝ鳴つる野へみれば亂れにけりな秋萩の花

◎滊車　　牛込　近藤きそ

近きより遠きにめぐる小松原入日涼しき[illegible]窓かな

◉萩　静岡　中里美子

月見つゝ思ひを語る乙女子の愁の袖に萩の花ちる

◉萩　高田　平野ことぢ子

心なき賤とも見えず菅笠にかざす一枝の秋萩の花

◉萩　堺　宅さく子

虫のなく野邊の細道わけゆけば風にゆられて萩の花ちる

◉猿　奈良　米田しま

すゝびたるゐろりまどゐの此夕猿語す父老ひましぬ

◉猿　埼玉　林淡花

猿の友むつれする聲す[illegible]きうらゝろの峯を月のいざよふ

◉猿　上野　宮城しげ子

月影はいよ／＼冴える枯野原風に供なふ猿のこゑ

◉萩　本郷　堀口菊江

荒れ寺の閉鎖いかめしき門の邊に雨にしほれて小萩花散る

◉萩　群馬　細谷とみ

馬草を刈られし萩のまだ萌て花咲き出でぬ秋の末野に

◉猿　日向　紀藤榮子

猿の遠吠凄く有明の月かたむき夜はあけんとす

◉鐵道　神戸　中村きく

ふる里も都に近き心地してうれしかりけり黒がれの道

◉萩　土佐　高橋ゆき子

まくさかろうなゐのかまにかけられてはかなくかろゝ白萩あはれ

◉猿　陸前　渡野はな子

法の師の柩まもりて行き暮れし荒野にすごき猿のこゑ

◉萩　讃岐　勝田のぶ子

萩　葉かなく秋風の音きけばいよ／＼われも思なこそおもへ

◉鐵道　山梨　渡邊よし女

故郷にかへりて見れば裏山の裾野横ぎるレール幾線

◉猿　陸奥　川村秀子

まきがりの砲音絶えて霜枯れし深山淋しく猿のなく

◉萩　赤坂　青山翠子

そよ風に灯きえて丸窓の障子にゆらぐ糸萩の花

◉萩　長崎　古賀秀子

有明の月の光なおく露にやどしてさける白萩の花

◉猿　岡山　光石光子

おそろしき猿だにも君がすさぶふえにはぬるよ猿だにも

◉萩　日向　厚地廣子

夕霧に萩原の里うづもれてまだ家遠し山寺の鐘

◉萩　越後　小林靜枝

文にうみて窓おしあけし中庭に夕日うすれて萩の花散る

◉萩　安藝　富士井わき子

小女子の草刈りかへる村里の伏屋のまがき萩の花さく

◉猿　筑前　神谷克子

猿の吠ゆる山里と聞きしより嫁ぎし姉のなほ忍ばるゝ

◉萩　大阪　鹽谷てい子

敷越て萩日影さす白萩の亂れし花に胡蝶交れり

◉猿　四谷　菅田せい子

奥山のふもとの燈火一つ消え月に吠え立つ猿の聲

◉萩　磐城　内山房女

ふみわけてま萩折りけあかげやいづこ宮城野三里たゞ秋の風

◉猿 出雲 狩野とし子

迷ひ來し山路にいつか日はくれて遠く聞ゆる猿の聲

◉萩 越後 高橋直子

なく虫の涙の露にそみにけむ庭の秋萩色つきにけり

◉萩 備前 東松竹子

たむけがほに今を盛りとやさしくも直萩花咲くおしつきところ

◉鐵道 下野 神山ふみ子

窓ちかく寄せては返す女波男波眺めもあかぬ鐵路五十里

◉猿 下野 神山ふみ子

山松の梢にかゝる片われの月もの凄く猿のなく

◉萩 出雲 土谷ふじ

迷蹤のわけ行く谷の細道に白露重く萩のこぼるゝ

◉猿 出雲 土谷[illegible]

猿の遠吠え凄く聞ゆなりあけがた近き木枯の風

◉萩 三重 小池雅

川上に如何なる人の住むならん蝶と流るゝ白萩の花

◉猿 長崎 古賀秀子

猿の聲物凄くきこゆなり吹く木枯しの絶間〳〵に

◉猿 磐城 内山房子

荒城の麓一村秋くれてやみ夜はるかに猿のなく

◉鐵道 紀伊 高尾秋子

猛り狂ふ濤もひそみて西伯利亞の鐵道千里日は靜なり

◉萩 弘前 佳の江かほろ

去年の秋亡にし友の手すさびにうゑし白萩花さきにけり

---

◉猿 武藏 あほぎ女史

山の端のあやうく立てる岩角に弦月凄く猿のほゆ

◉萩 福岡 井上桂子

まふしさすさつを弓とる小手の上に亂れぞかゝる秋萩の露

◉萩 東京 みね子

ちかよらば露やこぼれんさりとてはわなる道なき野邊の萩原

◉猿 伊勢 河原芳子

行きくれて宿り求めし荒寺の燈は消えて猿のこゑ

◉萩 伊勢 河原芳子

萩は咲けど艦筵とります兄はあらずせめて露けき一枝手向けばや

◉萩 相模 吉村すみ子

秋萩の花の盛りに埋もれて庭の小路は通れざりけり

◉猿 神田 松寺緑子

風すさび月さゆる夜を猿の聲ものすごし森の一屋

◉萩 下谷 仙石豊子

幾度か臥猪のとこになりつらんうなだれふせる野邊の秋萩

◉萩 靜岡 中里延子

去年見てし小萩かもとを今日ふへはみ宿あたらし玉川の里

◉萩 靜岡 中里友枝子

ほろ〳〵と萩の散る垣のもとに手かひの駒の夢靜なり

◉萩 日本橋 清水君子

萩をめでゝけふもきのふもをとつひも同じ詠めのおなじ野に來つ

◉萩 麹町 淺井清子

ゆるやかにながれてすめる野の川にすがたうつして萩の花さく

◉猿 山口 笹尾千代子

猿のこゑもの凄き寂寞が野を果てしも知らず木枯の吹く

◉鐵道　常陸　渡邊富子

くろがれの道やひらけぬいざさらばくぬじあまれく旅まくらせむ

◉萩　常陸　海老澤すゑ子

萩の花しなだれ咲ける小柴垣車宿して命入れぶれる

◉鐵道　伊豫　渡邊茅花女史

淋しさも開くる十文字レールを長くしく花野かな

◉萩　下谷　水上春子

寺の庭に咲ける白萩折らばやと近より行けばふと蝶のたつ

◉猿　東京　吉田はる子

里遠きいほりに居ればか小夜ふけてものすらきまく猿のなく

◉萩　肥前　山中芳子

萩の花咲きみだれたる石の上に片羽根やれしきりぐくすなく

◉鐵道　名古屋　征野雪子

たゞひとり踏切あたりさまよへば夜は音もなしくろかれの道

◉萩　伊勢　宮田きみ子

亡き姉の墓はかくれぬ顯れぬ夕風わたる萩の一むら

◉猿　安藝　松坂梅子

かばれやく烟も今は消えはてゝ月影凄し猿のこゑ

◉萩　栃木　秋子

千草生ふる庭のまがきの萩の花むすべる露を玉と見せつゝ

◉萩　長野　山崎たと子

托鉢法師出て行く門に目はたけて垣根靜かに萩の花ちる

◉猿　熊本　宮川盈子

月さむく祖母かれおろしふくのべにすごの身にしむ猿の聲

---

◉萩　靜岡　芹澤きよ子

秋はぎの枝たわにおく白露はみれどあかぬまで萩そひにけり

◉鐵道　河内　大矢たれ子

汽車行きてまかぬ路一人とほくとかへるゆふへを秋の雨ふる

◉汽車　府下、　菅原まさ子

過ぎ行きし汽車のけふりの空に消えて旗ふるおきな歟あはれなり

◉萩　小石川　荒川豐子

ふりそゝくあめ心してとくはれよ小萩が上の露の玉見ん

◉萩　和歌山　秋子女史

石垣のあれくづれたる屋敷跡訪ふ人もなく萩の花さく

◉萩　高知　竹村淺子

去年までは折りて遊びし妹逝きぬ心ありてか萩の露ちる

◉萩　土佐　四森元子

なつかしき彼の友垣に送らばや露ながらなる庭のいほはぎ

◉萩　群馬　大槻ゆき

さらぬだに戀しき科に亡き君の手植の萩の花を見るかな

◉萩　、、、、、、

こん年はともに愛てんと植へ萩の花は咲けども妹は世にあらず

◉猿　大坂　田中瑜瑳子

かりうどに襲うたれたる猿の萩垣近く暗にさまよふ

◉鐵道　東京　吉野はる子

汽車行きつ夕萩嵐ふきおちて踏切まもるひとかげもなし

◉萩　埼玉　林溪花

燈籠の火かげうするゝ奥庭の秋萩の花に小雨そぼふる

◉萩　埼玉　林溪花

塵深き都のがれて今日二十日み山の奥に萩の庵とふ

◉萩　和歌山　池田榮子

おもしろく萩の花咲く裏庭に砂を洗びつゝ鷄のなく

◉鐵道　京都　三の宮露子

山をぬき谷をうつみて眞金路のひらけぬ里もなき世なりけり

◉猿　上野　矢島まさ子

あたらしきおくつき見えて小雨ふる枯野の原の猿の聲

◉汽車　東京　吉野春雄

夕つく日汽車のけぶりのきえゆきて旗ふる影あわれなり

◉萩　信濃　工藤かれ子

川沿の垣の白萩露おきて花もたわゝに月宿りけり

◉萩　岐阜　なてし子

しら萩に夕日淡き堂の庭歎思ふちごの屑うつくしき

◉萩　岐阜　林久子

きのふまて人のこえてし古寺も萩のさかりとなりにける哉

◉萩　下總　甲田貞子

碎に別れを告ぐる袖の雨にをはれし萩のみだれ散るかも

◉鐵道　下總　甲田汐子

くろかれの道行く車跡絶えて十里の烟たなびく

◉猿　河内　高野八重子

奥山に住むとはきけど世の中に猿と云ふ人もありけり

◉萩　京橋　加藤きみ子

庭もせの萩の初花咲き出てぬ亡き弟の靈にたむけむ

◉萩　神戸　柳田のぶ子

白萩は去年に變らて咲きつれど妹は世になし誰とめてなん

---

◉猿　相州　安西叔子

月かくれ風ものすごくさよ更けて猿はゆる山の下道

◉萩　伊勢　岸田ちゑ子

處女子の獨り物思ふ窓の外に小雨そぼふりて萩の花ちる

◉猿　甲府　伊藤うた

つまきこる響はたえて猿のなく音淋しき山ごこの道

◉猿　伊勢　岸田うゑ子

西伯利亞の千里の野原月冴えてなく猿の聲もの凄さ

◉萩　紀伊　上山みな

古池の水にうつりて咲きにけりすむ人もなき庵の白萩

◉萩　備後　平山成子

蜂と見し花野にかへす萩原は秋もつ蝶の余波見すらし

◉猿　備後　平山成子

片破月松にかゝりて枯草臥す曠の原に猿のなく

◉萩　和歌山　小池花子

水にさす影もゆられて白萩のそよぐ川べにはたおりのなく

◉猿　和歌山　井關しま

月かげはみ空に澄みて猿の骨かむ音の凄くもある哉

◉鐵道　新潟　行形よし

ひらけゆく御代の光は大山もつらぬき通ふくろかねの道

◉猿　河内　井藤久爾子

たきぎこるせこの歸り路暮れそめてま闇き谷に猿のほゆ

◉鐵道　京都　後藤總子

峨々し雲より出てゝ雲に入るロッキー山のくろかねの道

# 新體詩

文學士 中内蝶二君選

《第一賞》

## 露と虫

信州小縣郡上田町九〇三の一 春枝子

同じ草葉をよすがにて
さだめはひとつ露と虫
廣き野邊をば宿りにて
すくせはおなじ虫と露

露の光のさやけさを
音にも歌ふか虫の聲
虫のなく音の清けさを
色に出てゝか露の玉
されば夕ぐれ虫なきて
しづくは溢し露の玉
さればあけぼの露消えて
音は細りゆく虫の聲

評、材もやさしく、想もやさしく、調もまたやさし、辭簡にして情趣無限(蝶二)

《第二賞》

## 工女を哭す

伊勢國宇治中之切町 河原芳子

夕べやすめの笛の音に
惡魔の手より許されて
淋しき笑みに立ち還る
工女の群を何と見る。
悲しからずや少女子の
若き血潮の色あせて
罪に汚れしうすぎぬの
肌冷たきゝらぶれば。
酷き笞のかげなれば
世はこれ暗き谷の底
髪も眸もつやうせて
星の光の宿らぬを。
つむぐ糸よりいや細き
汝が運命をおもほへば
おぞき惡魔の迫害に
悶え苦しむあはれさよ。
あゝ幾万の少女子が
「いためる姿」、見る毎に
神の冥助の無き世かと
暮れ行く空に涙捧げつ。」

評、工女虐待の問題、やうやく世間に喧しくなりたる此頃、君がこの一篇を得、いと嬉しき心地す(蝶二)

《第三賞》

## 千曲川の秋

信濃國上水内郡柴村小林學く方 小林うばら

月に名を得し更科や、

千曲の川の秋の暮、
岸のせゝらぎ音も無く、
流は碧し水清し。

晨のこんの月の影、
さやけく水に映るとき、
下る筏の水馴棹、
浮寢の鳥の夢覺まし。

夕山寺の鐘の音に、
通ふ船唄面白く、
釣する子等の袖の上に、
散るや名殘の花紅葉。

底ひも知らず澄む淵に、
うつる岸邊の草の花、
七種八くさ咲きまじる、
中にも秋の寂ありや。

堤の松に風吹けば、
そこに自然の樂きこへ、
岩に流の咽びては、
永劫に盡きせぬ秘密あり。

あはれゆかしの千曲川、
いとゞゆかしき調べもて、
暮れゆく秋を送りては、
詩人の琴に觸るゝらん。

評、調べはやゝとゝなひたれど、想は平凡なり(蛛二)

## 秀逸

### 野人低語

伊勢國多氣郡齋宮村島村嘉一方　島村政子

野人の身をたとふれば、
そらを色とる夕榮えか、
時雨の後ににじの輪か、
つゆにひらめく稲妻か。

さなり笑ふも悶ゆるも、
いづれみぢかき五十年、
富をのぞみて何かせむ、
譽れがひてなにかせむ。

野よしさらば我はたゞ、
としつきなれし玉川の、
岸べのくさに埋もれて、
鳧と鷗とを友とせむ。

あしたに星の影をふみ、
ゆふべに深き露を分け、
岸べに出て小田を打つ、
そこに自然の慰藉あらずや。

### 姫百合

長野縣松代町同心町　小出雪子

(一)

足曳の山の姫百合
一本を掘こじ來まして
我背子の植ゑ給ひにし
袖かきの山の姫百合

(二)

去年のまゝ今年もさけり
なつかしの色に香に
今もなほさやかに匂ふ
あなうれし山の姫百合

(三)

この花に名殘とゞめて

歸りこぬ運命の道に
　ゆきませり我が背の君に
　　あなかなし山の姫百合

（四）

二人してなかめんものな
　別れては雌蝶の羽根の
　　おゝ露の雫に朽ちて
　　　見るも悲し山の姫百合

## 行く水

和歌山　はる子

里の小川に月落ちて、
眠る柳の下かげに、
恨むが如く泣くが如く、
水は咽びていひたりき、
咎めたまひそ岸の君、
一と夜の契り萬斛の、
深き情は忘れれど、
前途をいそぐ己が身の、
はかなき赤縄をいかにせん、
恨は瀬の音となり、
涙は淵をたゝふとも、
とゞまりがたき薄命に、
流の末はわだつみの、
からき憂世の潮にいり、
愛も希望も生命をも、
空しき涙に葬りて、
跡もあらずならんとき、
つらき歎きを君や見ん、

## 盲唖の吟

伯耆西伯郡崎津村大字大崎西松本方　皐月さなへ

盲人

み空に清く照る月も、
匂へる花も何かせむ、
調べ床しき鶯の、
聲を聞くこそ嬉しけれ。

唖人

水の囁きあるは琴、
笛の美音も何かせむ、
月雪花に垂乳根の、
面を見るこそ嬉しけれ。

盲人

錦の衣に綾の袖、
玉の光もわかぬ身に、
夫とかしづく吾妹子の、
面見ぬ眼にも涙あり。

唖人

衛士の篝火朝夕の、
燃ゆる思を吾妹子に、
告ぐる術なき吾袖に、
あつき悲哀の涙あり。

盲人

屍は碎け肉は裂け、
骨跳るなる現世の、
汚れし樣は露ほども、
見えざる身こそ樂しけれ。

唖人

不義の絶壁いや高く、
榮華の海は底知れず、
濁り果てにし世の樣を、
聞かざる身こそ樂しけれ、

## 秋宵怨

下野國下都賀郡中村大字下河原田　神山富美子

籬にすだくこほろぎの、
　聲よわりゆく秋のくれ、
　　衣かたしきひとりねて、
　　　夢むすばれぬ夜半さむく、
ふけゆくまゝに山松の、
　風のすゑにきこゆなり、

たれを忍ぶの里ならむ、
　まくらにかよふ遠砧。

あすのたつきと繩をよる、
　まとひ樂しき爐のほとり、
　　村のまつりの晴着とて、
　　　なさけあまれき新妻が。

幸多かれといのりつゝ、
　心をこめしつちのれの、
　　あかつき近くいよさえて、
　　　きくに堪へ得ぬ閨のうち。

すてし思ひの今更に、
　仇にきざして消えやらぬ、
　　うらみはながき黑髮の、
　　　みだれてものを思ふかな。

## 佳　調

### 曉の歌

伊勢　西井善子

夢より淡き殘月は、

### はつもみぢ

西のみ山に影落ちて、
光さやけき明星も、
いつしか雲に消え行けば。

うす雲迷ふひんがしの、
み空のあたり白みきて、
天地をこめし朝霧は、
山のあなたにうすれ倚。

こなたの白きいさゝ川、
彼方の黑き森の影、
自然のうすき墨の色、
あわれ何にかたとへんや。

千町八千町打つゞく、
はてなき背田芋の畝、
只白露の清くして、
迷ふ小鳥の影もなく。

向ひの岡の賤が家の、
軒端に昇る細けむり、
曉告ぐる鷄の、
聲麗はしゝ垣の奥。

（十六）

やがて日の神いでませば、
そこにいよ〳〵夜はあけて、
あたりは輝く黃金色、
あゝ曉の尊としや。

### そなれ松原

三河　本多たづ子

夕日の影に手をとりて、
我が背の君とさまよひし、
そなれ松原とめくれば、
浦ふく秋の夕風に、
松の露ちる砂の上。

龍の都の乙女子の、
手箱に秘めしものかそら、
梅の花貝櫻貝、
落ち散る貝の多けれど、
我は拾はじ忘れ貝。

白き砂路に下り立ちて、
沖べはるかに眺むれば、
ゆふべの海のしづかにて、
辺ふ白帆のかげもなく、
思ふけぶりのあともなし。

せめては淡き夕月の、
影を乘せくるみち潮に、
やさしき音を聞かばやと、
佇む我れが足もとに、
寄るもなつかし秋の浪。

## さすらひ

濱洲 濱 まつ子

雲に流れて明日はまた、
水に浮びてたゞよはむ、
はてしも知らぬ此の我が身、
自然のうちに世をさけつ。

あるかなきかの我が影を、
風の如くにさまよひて、
今日とくらして明日と過ぎ、
老にたどるよ、若き子は。

東を見つゝ西に行き、
南したひつ北に行く、
身にも覺えぬ、たそがれの、
わびしき雲のその色は。

## もだえ

磐城 內山房女

うれしと誰かいひ初めし。
さめて冷たき戀なるを。
たのしと誰かいひ初めし。
きえて果敢なき夢なるを。
花の赤きもあめ風の。
荒まぬうちの戀なりき。
數萬にあまる財寶も。
たゞうたゝれの夢なりそ。
位に迷ひ名に狂ふ。
心ぞ春の蝶なるよ。
あはれはかなき人の世や。
とはにさめずや春の夢。
もだゆる胸を地にふせば。
流れかすかに響きけり。
仰げば雲のきれ間より。
奇しき星は輝きぬ。

## 夕暮磯邊をさまよひて

長野 美村よし子

靜かなる空にかすして
背なみの深きを見れば
水底や果ても知られず
流れ藻のうきつ沈みつ。

瀬路ゆく白き帆影は
群をなす牧場の羊
綠なす海の面は
青草の野邊もさながら。

霞ゆけば舟もしたがひ
舟ゆけば霞もまた追ふ
空と水あい合ふかなた
もろともに今日のやどりへ。

岸近き村のそこより
船唄よのどかにきこへ
こゝかしこ藻をたく烟
たちまよふ海邊の夕。

うらふれし遊子の一人
悲しみて思にふければ
我小さき心を笑ふ
岸の波ひゞきかすかに。

## 刈田落水

三河 落 えふ子

嶺の松風いとさびて、
想ひ悲しき山旅籠、
つま戀ふ鹿の聲もなく、
秋にひゞく水の音。

畦路よりながむれば、
おく露寒き晩田に、
群れし小魚の影なくて、
蝮蛇寂びしく眠りけり。

夕杖とり立ちよれば、
み空いろどる紅の、
露宿しつゝ刈りし田に、
老の平和を語りけり。

清く落ちゆくこの水よ、
なれが情に稲の穂は、
くしくみのりて作人の、
今はまとゐのほこりごと。

山の苔井に生れ出て、
沼のほとりに終れども、
功なしとげしみほまれは、
とはにつきせぬ慰藉なれ、

## 幻影

信州 小林淼子

●蘆

小川に沿ふて生ひ茂る、
くさの中より山百合の、
真白きはなは微笑みぬ、
あけの希望のほしの影、
光りさやけき輝やきを、
うつせる露の香は高く。

あゝ其の清きしら玉は、
戀に燃えたつ少女子の、
小さきむれの懊悩をば、
覺さん爲めと神の子が、
かりに露とは身を成て、
宿りましけむ者ならめ。

●星

光りはにほふ天の香を、
謳ひしたひし楽しさは、
薔薇の宮となづけつゝ、
めでにし星も墜てけり。

こよひは清き愁ひより、
うるほひ開く影見れば、
百合の宿座と呼かへて、
ふたゝび空にあくがれむ。

迷ひふかきかゞやきぞ、
迷ふ我身のたよりなる、
さればよ照らせ飛螢に、
またやみ沈む雲かげに。

●虹

まひろの夢は空しくて、
望みたえたる若き子の、
深き愁ひをいだきつゝ、
此の世を去りし其夕べ、
雨か涙にしづむ日の、
遠きひかりも靜まれば、
朱、黄、紫、色和いて、
浮ぶよ淡きにじのくも。

## 野邊のむしよ

埼玉縣 林深花

眞如の月は皎々と、
白露繁き秋の野の、
草葉ふみ分け西東、
美妙の楽にふけり居る、
罪なき虫を捕へ来て、
籠にひさぐ我身かな。

思へば自然のその楽に、
我終身のその運命、
さゝげて殘す思なき、
清き心は秋の野の、
露の命のあはれ故を、

擣ふる音のつれなさよ、
あゝ吾がすそのぬれたるは、
少女にふさわぬ心もつ、
吾なうらむる涙かや、
そも汝が野邊にすだく音は、
無情の我をかなしむか、
あゝその聲の細くして。

さわれゆるせよ野邊のむし、
悲しきしらべきく身には、
そゝ擣ふるにしのびねど、
家には病める母ありて、
藥の代もあらぬ身を、
あはれとゆるせ野邊のむし。

## 明日の別れ

播磨　森脇つや

そらにも知るか村時雨、
雲の袖よりこぼれくる、
秋の別れをかなしとや、
ねにこそたてれ松虫の、
草のたもとの露になく。
ちぎりしことは夢にして、
つらき別れぞうつゝなる、
昔おもへば風寒き、
かの易水もよそならず、
死別にまさるこの別れ。

春は咲く花いみしきに、
夏は夕かぜ涼しきに、
秋は月影さやけきに、
冬は白ゆき清かるに、
語らん由も有らざるを。

あゝなつかしき吾友よ、
眞砂の數のつくるまで、
互の胸を語り合ひ、
明日の別れを惜まなん、
まぶたの露は重くとも。

## 幽韻

長崎　山崎倹

春。
神の使の若姫に、
若草萌ゆる里川の、
岸の菫は紫の、
ゆかりの色に匂ふ時。

姉。
酔へるが如き其花を君に捧げん術ななみ。
妹。
萠出づる若菜一つ籠に 友と摘まなんよしもがな。

夏。
流れも清き湖泉の、
夏草しげきそが岸に、
床しき百合の姿か那、
水に形をつくろひて。

姉。
何かはしらに戀しくて我血は沸きぬ頬熱く。
妹。
よし川水にぬれぬとも一本折らむ白合の花。

秋。
夕榮あびつ彼の君の、
やさしの御手に摘まれたる、
葡萄よ如何に幸多き、
やがて御口に含まれん。

姉。
葉かげに濃き紫の葡萄に似たる我身かな。
妹。
色うすれ行く夕雲のそれにも似たる我世哉。

冬。
寂しかりけり洲の蘆の、

花白う散る夕汐に、
　命し群れ立つ濱千鳥
　　その戀人は有や否や。
　姉。
されば末野の荒屋に獨り泣かなん冬の夜を。
　妹。
悲しき冬よ疾くゆきて 姉と若菜を摘む可く
なれや。　（完）

## 虹

河内　なでし子

湖邊山麓を行き廻り、
櫻柳にあくがれて、
塵にけがれぬうた人の、
出入る呼吸の凝れるか。

みどり紫はたあかき、
いと七色に染めかけて、
棚機まつる少女子の、
戀の息吹のかよへるか。

黑雲たなびく磯山の、
頂き高く根をしめて、
浪立ちさわぐ湖の上に、
靜かにかゝる虹の橋。



はつもみぢ

眞砂の霜にみづかきも、
裂くる如くや覺ゆらん、
蘆吹く風はこゝろなく、
つばさ寒けく通ふなり、
つまに後れて唯ひとり、
朽ちたる船の舳の上に、
とまれる雁の哀れさよ、
異ならぶるいけの鴛鴦、
友うち伴るゝ濱千どり、
ともに樂しく遊ぶ日に。



## かれ野

秋田　小西秀子

菫摘みにしをとめ子や、
眞萩分けにし手弱女の、
すがたや何處影もなし、
千草のにしき色あせて、
見渡す野べの枯尾ばな、
吹きしく風に靡きつゝ、
招けど更にひとは來ず、
おく霜白きふゑばかに、
むなしくのこる有明の、
つきかげすごく狐鳴く。

## 夕時雨

遠き山路もいとはれど、
寂しき野路も厭はれど、
寒さに堪てふところに、
ふるへるちごぞ哀なる、
戴へどうすき袖がさの、
やれ間ゆ漏りて今は又、
あらしにきほふ夕時雨、
はだへにしみて降出ぬ、
眠りし稚子も目醒して、
泣く聲いとゞ寒けなり。

## 殘れる雁

# 抒情文

塚越停春君選評

## （甲賞）

## 白露

伊勢山田古市一五　白井きの子

夜といふ黑い冷かな布が天から投げられて山も川も田も家も野も海も一面に包まれてしまうと青い御空のうちに圓やかな月がかゝる此時吾等は多くの友と共に其月の都を出で風に乘つて下界へ降りて行くのである

吾等が月の都を辭したのは丁度望の夜であつた下界は水のやうに澄切つてかすかな鐘の音が風につれて此處まで聞えてくる何か知らぬが黑い鳥が其の中を縫うて鳴きつゝ行くのが見える

吾等は多くの友と秋風に連れられて地面をさして降り初めたその心の愉快さは何とも言はれない

地上をさして下りつゝ吾等は友とこう言ふことを語つた吾等は地面に降りると何れ何物かの上に乘せられてあらうが吾は掃溜に下りるのはいやだ草の上はいやだと言ふそして或者は美しい花の上を望ましいと言ふ者もある或者は可愛い兒の袖の上を望む者もある或者は石の上はいやだ木の葉の上だなど言つて爭うた

その時秋風は靜かに吾等を制してそうして汝等は是から何處へ行くかも解らぬに好きな事を言つて何をさはぐのか汝等は人の世の爲めに神のめぐみを傳へ淸くたふとき影をあとふべきではないか世を厭へる人に望を與へ戀にやむ人を慰めねばならぬ汝等ではないか下界の人の子の爲め情と涙を以て盡くせよかし汝等よ吾はいつまで汝を守るてあらうと言ふて訓めた

そして吾等か地面に着くと等しく秋風の姿は消えて了つた

吾等は茫然として地面に置かれたまゝ今の秋風の言葉を考へ人の世の爲め盡すべきことを思ふて居たそのうちに段々東の空か白んで鳥か鳴き風かそよ〳〵と吹いてやがて暖かな美しい光を持つた日は華かに靑い空へ昇つた

吾等はその光に驚いて氣がついて見れば四邊は明るく

うるはしくなつたばかりか今まで冷かな黒い色であつた吾等の體から黄金の光を放つて菊の花の上に置かれてあつたのである
そしてかたはらに立つた美しい少女か吾等をなかめつつあゝ奇麗な露だといつた

評曰。語淺く意深く、中に一大教訓を寓す。稱して英想和鋒とも謂ふべし。

（乙　賞）

## さよあらし

茨城縣新治郡土浦本町　山口すみ子

夕凪の空いとなだらかなるまゝ、磯の香こもる濱風に面をうたせ、白き眞砂路に足痕刻みつゝ、妾は只一人波打ち際をさまよひ來りしが、燃ゆるが如き夕燒の雲にはかに失せ、紫色に輝きゐし横雲とみに光を失ひて、海面遠き巽の空に、怪しや墨の如き雲の舞ひ下がるは嵐の徴か、妾は恐しさに只管家路を急げば、怪しき雲は早くも空にひろごりて四邊おぐらく、碎けて散る浪のしぶきは夜目にも白う、平らかなる、高く聳ゆる、とがく\／\しき岩々は只黒く、打よする波、ひき行く浪、水に叫ぶ風の聲、山に響く木々のさやぎ、一聲に耳をつんざく物凄さに、全身の血は一時に冷え渡りて、さながら夢路をたどるが如き心地しぬ。よせてはかへす女波男波は一きは勢をなして、巖にたぎち碎くる音虚空に響けば、海面はいよゝ荒れ増りて空には一點の星だになく、宇宙の萬物は只黒く、おどろ\／\しき波のみ白蛇のうねるが如く、遠き彼方よりおしよせ來たりて、やがてこぞまた天地を震はす、後の山には魔神のたけり狂ふかとばかり、木玉返しに響く風につれて、折々聞ゆるけたゝましき聲は怪鳥の叫か、妾は氣も魂も身に添はず、恐る\／\前途を見やれば、あな怪し、さわだちて大きく手の脊に似たる巖頭に、身ゆるぎもせで立つ丈短き人、荒れ増る濱風の吹くがまゝに身をまかせて、恐しともせぬいぶかしさよ、人戀しき折柄とて妾は傍近う走りよりぬ。見ればつゞれの衣身にまとひ、寒げに肩すぼめたる十ばかりの可愛き少女、消然と佇むなりき。空には黒雲またくひろごりて、ばらばらと擲るが如き大粒の雨はふりきぬ。少女は猶もありしまゝなり。あはれ誰が家の子ぞ、この恐しき夜を岩にたちてと、妾は心にいぶかりつゝ猶傍近う進みよれば、少女も人ありと心づきて、なつかしげに妾が顔を見上げつ、「姉さまよ、

彼方に白う見ゆるは船ならずや」と指さすがまゝ見やるそなたは只黒暗々にて、折々白う見ゆるは山より高き大波のよせくるのみ、それらしき影も見えねば、「否とよ」と何心なう顔さしのぞけばあはれ愛らしき眼のうちより、露か涙かはら〳〵と頬に傳はる數點の雫、事ありげなる樣にそゞろ妾も涙さしぐまれつ、「如何にせしとてさも泣き給ふ、苦しからずば語り聞かせずや」と尋ぬるにいよ〳〵悲しさや增りけむ、とみにいらへの言葉もなく、犇とばかり妾の袖を握りしめ、只さめ〳〵と打泣くのみ、ごう〳〵と吹きくる風は少女の泣音をいづこの里に通はすらん、はら〳〵と落ちくる雨は憎くやそが涙をそえんとてか。「聞給へ」とあまり〳〵かほそき聲に語り出ぬ、「妾が父は去月の今夜、あさりせんとて出で行きしまゝ歸り來ず、母は重き病に明日をも知らぬ露の身よ、相知る人々は父は此世になき人とさとし給へど、妾親子はさりともとはかなき望みの糸につながれて、朝な夕なこの磯邊に佇みて待てどくらせど、それらしき影だに見えぬ悲しさよ、父の失せしも今宵に似たる荒模樣と聞くからに、空の恨めしうて、浪の憎くゝて、去りも得ならず」と後は涙に聲塞りぬ。さてはさる身にてありけるか、哀れの者よと覺えず犇とかい抱けば、はら〳〵と我手に落つる熱き涙、あゝ無情なる運命の神よ、いかなればこの清きこの優しき少女の胸に、早やも涙の味を知らしめしぞ、天國に行きしと聞きし父親もこの可憐の涙を見ば、必ずよ宇宙に迷ひて行き處あらざるならめと、そゞろ同情の涙に袖搾れば、またもや吹きくる夜嵐に二人のかほそき躰は吹き飛ばされなんばかりなり。

可愛き子よ、明日はよき物參らせんに、必ず我家へおとづれ給へ」と約しつゝ、行きがてにして見返れば少女の姿は闇に消えて、岸うつ浪の音のみぞおどろ〳〵と。

評曰。文致清婉。情趣可掬。

## （丙　賞）

### かりの詞

下谷二長町　嵯峨すみ子

花に別れ都の春をば跡にして紫匂ふうす霞ぬひつゝ雪の越路へと立かへるかりいと哀れなり。

やがて春さり夏すぎて秋の上風うら淋しく小萩の露のかゝる夕まぐれ琴柱立てたらんこゝらの友どち打連り

て霧をわけつゝ渡りきぬるはかくても猶むかしのやどを忘れざりけりと嬉しきまいて人まつ身には折節の初雁の聲きくにつけてもいよゝ思ひはまして彼大澤に牡羊飼ひし故事さへ忍ばれて彼方よりの鳥の跡のひたぶるにゆかしう思はるゝぞかし。

花橘軒端にふりしなつかしの我故郷立出てゝより茲に三年螢集むる窓の明暮さう〱しきまゝに流石戀しき心の斷えさぬにわきて悲しきは秋の夜なりけり萬籟聲なく氣澄渡り芭蕉葉に音訪るゝ風の音のみ聞ゆるに仰げば高き中央一痕の名月鏡を磨きたらんやうにて昔を語り顏なる折はた星影清き夜半をちの砧の聲に寢ざめて秋べのそゞろに露滋き折なんど友にやおくれけん親や見失ひけむ天涯遙に孤雁のなきゆくその聲。

評日。調高く情清し。

## 秀逸

### 過去の夢

金澤すみれ

哀れ夢なりけるよ三年の春秋、扨ても敢果なきものよ淡く消え行きし其夢、げにや春の夢のさめ易きかな、彼の折りよ、友の切なる頼み心強くも押し返して其儘に一日二日過ぎしが、一日友よりの文はとゞきぬア、友はいつの程よりか戀になやめるなりきあはれ神の子の矢の其胸深う貫ぬけるよ、「別卦知り給ふ御方なればよしなに取りなし給ひてよ、なめげなるは幾重にも御詫び申上候」あゝいかにせん此よし告げんか否〻彼の君は如何に思はさるゝならん、さればとて友の苦しみを他にせんか　おもひまどう心よいかならん先づ日見まゐらせし日いとうつくしき御顏の青ふ見えて力なきさましておわせしが今まふあたりに見えつ御心安め給へ彼君には君が思ひにたえかね給ふよし必ず傳へ侍らん。

思はるゝ君は兄上の親くし給ひし俊夫の君とて今年大學の業卒へ給ひしなり、兄君失せ給ひてよりは此君見まゐらす毎に母のいたうかなしみ給ふを、あはれと見たまひて近うはとひ給はず、ことしの春來たまひし折友も來りて言語かわせし事のありしを思ひ出てぬ郵便に托さんも心もとなしと思へば來給ふをまち渡りしに夏の夜おとなひ給ひし折手渡し參らせていぶかしがり給ふを是非にともたせまゐらせ、さて心もとなく

て一日も早く返り事のあれかしと祈りぬ。甲斐ありて其朝持ち來給ふを見れば「よしなに斷り給へ我は近きに人に物數ふべき務めある身なればと後に歌一つ書い付けありぬ、俊夫の君は戀し給ふ人のありしか、とく知らばかくと友にも告げ置かんものを知らざりき、友のかくと聞かばいかにかなしみ、いかにもだえん、さればとてこのまゝに打すつべきにあらず、其もだえ見んよりはと、うちふるふ手に消息かきておくりしも返り事だになくて。やがて秋のはじめつ方消息は來りぬ、彼の折よりおとづれ絶えし俊夫の君より、心得ずと封切りて見れば、さては君はかくまで妾に戀し給ひしか、罪深し、妾とは知らで友には云ひもせしに、今初めて知りては面なく、おほき〱罪おかせし心地のして、只二日三日は床のうちに過し、思ひわびぬ、飲み過したる朝頭重しとて四五日訪ひ給はざりし、夏の休暇になりし日よりもはや學びやにも通はざればとて程とほからぬ彼の家より朝な〱朝顏見んとて來給ふ君の如何にし給ひしと母上と語りし折は思ひ絶たんとてにてありしなり、あはれ〱かくも苦しみて居給ひしとは知らざりき、物の業とてたらはぬ勝の此身をさまでに思ひたまはりし事のかしこくて深き感謝は心の内にさゝげたりき、さはいへ其折あまりにおさなかりし妾は返事せん言の葉も知らず、そがまゝに打過ぎながらへすおに此戀のまどかなるを祈りき、

年新たまりての年賀に來給ひしときゝて胸とゞろきて、頭おもふなる心地のして文机のうちにもたるゝ折母上の呼び給ふに如何にせんと立ちつ居つ、又も呼び給へは詮なう立ちて彼の君の前に行きて頭下げぬ、かなたも頭下げしまゝ庭の小荻の風にゆらぐ見つゝ一言をも云ひたまはす、こなたも人げなくばと思へど、只何とも知らず深き〱處に落ち行くらん心地のして言ひ得ず其場をはべり出てゝ、おはしま近ふひやゝかなる月を見入りてありき、歸り行きたまひしあとにてきけば彼の君は近きに身分よき御方とえにし結び給ふとて今日知らせかた〱來給ひしなり其時の妾か悲しさたとへんにものなく其まゝ夜のふすま引かつぎつゝ明くる頃までもだえぬ人うらむべうもあらず幼なかりし妾の返り事もせざるに怒り給ひしか、あまりにもし給ふものかな、何くれと物語り給ひて心置かざりし人のかくも、とほざかりしさまにし給ふが殊更にかなしくて、

美くしき姫君むかへ給ふとて妾には言葉もかわし給はぬとはあまりに〳〵うらめしく、かの折人げなくば、先の日の御詫事をも數々云ふべきを、知り給はぬこなたの心、うたうらやまゐらするはなど思へどなか〳〵に起きもやられずたゞ風の心地とのみ過ぎぬ

桃の節句の頃美しき若き嫁君たづさへて來給ひし君は以前にまして口ひげ見事にかみなど美しう分け給ひき、思ひなやみて靑ふやせおとろえし妾まみえし時の心、頭より重き石のせられし心地し、ふし眼にのみしてありしよ

年浪の流れ早く彼の君には愛らしき姫君もうけたまひしとや

かの返り事きこえし後たえておとづれなかりし友は過し年人妻となりて今は樂しきホーム作りつゝありとか人づてに聞きぬ、あはれ妾一人もだゆるかはかなの夢や

評曰。文字生硬の所なきに非ざれども、詩思に富み、自分眞情の流露を見る。若し大に學ぶ所あらば一個の女作家たるに足るべし

## 寫眞

相撲楓子

今年はどういふ年であろう毎日〳〵雨斗續ひて今日も今日とて朝柄の曇天氣で氣もくさ〳〵してしまつた文机には寄掛つたが書は讀まうともしないで過去現在未來とかう色々の事を考作うつとりとしてしまつたすると後柄おばさんと誰が呼んだので驚ひて見たら妾しの大好きの好子さんてしたおばさん何して居るのと先づ好子さんの問てした叔母さんは今淋しくて淋しくつてしようがなかつたの好子さんが來て下さつて嬉しいよよ何か面白い御話を聞かせて下さいなと私が云ましたら夫ならあたしの嬉しかつた御話をして上げましようあのね何時でしたろうそう〳〵七月の六日よ丁度家の俊ちやんの初ての御誕生の御祝ひにあたしのお友達を呼んで上たのよ夫して母樣の仰しやるには紀念の爲に皆さんて寫眞を取つて父樣の處へ送つて上るんだつて夫柄着物を着かへてあたしの仲よしの政子さんや旭ちやんや其外澤山のお友達と母樣とあの渡邊へ行つたのよ其時の賑はしい事丸て學校の生徒の運動場にても行ようで嬉敷て〳〵堪まらなかつたのよ夫してね寫眞や

にいつて寫す時には俊ちやんや君ちやん忠ちやんなんかゞ替り替りに動くので大そう困つてよ漸と寫して歸つて柄皆なと一所に御祝ひの御飯を食べました其時のよふな嬉しい事はなかつたは夫柄毎日々々寫眞の出來るのを樂しみに政子さんなんかと指折數へて待つていましたすると其約束をした日に成ましたから家の爺やを取りにやりましたらばまだ出來ないつてあたし落膽(がつかり)してしまいましたはですけれ共明日はきつと出來るつて夫から其晩は明日が樂しみでねられなかつたのよすると何時か爺がお孃樣あなたのお樂しみにしていらしやつた寫眞が出來ましたと持つて來ましたからそうといつて見ましたらば夫は／＼あたし斗おかしく泣き出しそうな顏をして居る處が寫つたのでお母樣や爺が大そう笑たのであたし口惜くつて／＼わつと泣き出したのよそうすると其聲で目が覺めて見たら今のは夢であつてあたし嬉しかつてよ夫からまたねて明日の朝は寫眞が樂しみなので何時もよりも早く起きて學校に行きました歸つて來ましたらば今度はほんとうに出來ていました夫は／＼ゆふべの夢のようなのでなくてよく寫つていました其嬉い事は何共云へませんでした今度其寫眞を見せてあげましようか夫して父樣の處へも送つて上げたらば父樣からもよく寫つたと仰しやつて此寫眞の樣におとなしく母樣の云ふ事を聞かなくてはいけませんと御手紙か參りました夫れては家へ寫眞を取りに行つて來ましようと好子さんは歸られました嗚呼好子さんのあどけない面白い御話にくさ／＼した胸も晴て大層さつぱり致しました何時ても子供程よい者はありまん子寶とは能く申しました

評曰。あどけなく而も垢ぬけたる筆の跡、好子のあどけなきにも比すべし。

## 秋の夕ぐれ

米澤市明神堂町　馬場はる

葎の宿に秋早う來て美しき白萩はいつしかは高き色に咲き亂れ下行く水も匂ふめる其香に昔の俤ほのめかされて共にめでにし亡き友の上とみになつかしうせめてもと其一枝手折りて遠からぬ墳墓に詣でぬあはれ君が遺愛の白萩今年も亦美しう榮えて空しう手向の花とはなりぬあゝ清き白萩涙の露のおきそへぬ間に九泉の下静かに來りてめて給へや傾きし夕日射にそこらの人の

石ぶみの數々てらして松風高くまれに來てとふも淋しきおくつき所心ありてかおく夕露も殊に繁く懐ますほの糸薄誰招くにやと物凉しあゝかなたなる手向の桔梗は誰が紅涙に色あせけむとそゞろに露しらぬおだし人の上だに忍ばれてあはれなるを吁いかで涙のなくてやは。おもひ起せば四年の昔此花さきにし秋の頃いさゝか勝れずとて臥し給ひしが限りの旅とは思はざりき其程の事いはむもいとゞ苦しけれどいよゝ肋膜とやの恐ろしき病の名つきて臥し給ひし一日の夕ぐれいつになう安らかに眠り給ひし程君の母君のいと力なげにはゝのなかりし我不幸こそ醫士の語にあきらめたれげにいとしきは此手よりいぬる年み國の軍に父の斃れしよりは世にもあじきなき春秋を送らしめしよかゝらましかばとさすがにむせびいり給ひし程は我亦袂をしぼりにきあゝ其涙の言葉君の夢ぢに通ひけんかつかれし眼ふと開き言葉はなくて一掬の熱涙肉おちし頬をわたりし時の寂々たる唯室の中鐵瓶の音獨り高かりきましていまはと見しほどの心地げにいひしらすなむ朝の間は氣なほ確に母君弟君將た我に死をさとりてのいまはの言葉、ひくけれとつよかりしが尙耳に殘りて今更の樣になむかく朝にはや、頼みありし君の夕には其玉の緒刻一刻に迫り餘思絶え／＼なりしほどそこら枕べの人とり／＼に君をよびしも答なく又詞なく僅に六つなる弟君のよび給ひしあゝ姉上死に給ふか姉上との淸きみ聲の聞えてか光なき眼いと冷かに開き給ひしも望なく終に此君の楓のみ手もて乾けるみ口に捧げ給ひし一掬の水にいと安らかに限りなきあはれを止め春の海の如き望を殘して秋の露とぞ消え給ひしあはれ其折花瓶の白萩は淋しげの色あさましく亡き主の枕べに空しう凋れたりき思へばげに斷腸の念え堪へずなむあゝ君のさりしや昨日の如くて早や四年をすぎ此秋亦此花咲けど去り君は歸りまさず呼むとすれと言葉とゝかず秋の空徒に高う吹きいでし秋風は思にやせし身にしみて夕暮の鐘鴉の聲げにとうあつめてあはれにこそ

評曰。凄麗清婉

## 棹鹿の聲

信州下高井郡倭村大字柳澤四三番地　小林春子

三更の鐘の音遠き山寺にひゞきて、夜はいたく更けぬ閨の戸を洩る風を寒み、枕邊近ふさし入る月影ほの白

く、靜けき夜の水にも似たるを、折ふし後の林に栗の實の落つる音のみ冴えて、眠られぬまゝ起き出てゝや細りゆく灯をかきたつる折りから、遙かに聞ゆる棹鹿の二聲三聲…。あはれ汝もくれ行く秋の淋しさに、呼びも交すか棹鹿よ、つまの行方はしれざるか。

思へは去年の秋の末えつ方、ありし野分の名殘が濱の松が枝吹き荒れて、浪間に漂ふ有明月の影も寒き曉に、いとも戀しき背の君が、北のはてなる海の沖島に、砂金の產地を見出さんとて三週間を期して旅立したまいぬ。實にそは今宵の如き夜なりき、隙間洩る風は寒かりき、あはれ棹鹿の聲も聞えき。一日千秋の思にて待にまちし、期日の夕べ、今宵は歸り給はむ、と門に立ちて待ちつくせしかど、下弦の月の利鎌のごとく輝き出てゝ、萩の枯葉に風渡りしのみ、遂に其の夜も、其の次ぎの夜も歸りたまはざりき。

凩峯の木々さはぎて、世は末枯のうら淋しく其年も終に暮しかど、つまの音信はあらざりき。櫻の花の開きてより、野は陽炎のうらゝかに、心浮くべき春は來しかど、歸へり給はぬ君を待ち佗びて、結ぼれ果し妾が心は解けて浮ばむよしもなかりき。木々の若葉はいやに茂りて、清き流に棹さすべきは夏來りしかど、卯の花くだし五月雨るゝ夜に名乘る、不如歸の一聲、二聲に唯だ泣き明すのみなりき。去年打連れて湖のほとりに清き影を賞てし、中秋の月は再び空に輝きしかど、語はむ懷かしきのつまは、終に〳〵歸り給はざりき。

あはれ今健かにおわしますか、げに〳〵何處のはてに彷徨ひたまえる、北風寒く身に泌みて、浪いつ荒れむも謀はれざる此頃の空を、早や歸り給はずや。あはれ父上母上は、絕ぬ淚に瘦せ細り給へるに、あゝ懷しのおぶつまや。　君と一年紅葉の名所を尋ねむと、二十日餘りの歌枕を重ねつ、共に宿りし山寺に終夜行末の事とも語り合ひ、鴛鴦の契りの千代かけて變りはせじと誓ひしことも、或は一年連歌の席に出てゝのち、家路に志す道すがら徃の江の月にいたづき、多き身をうち嘆き打慰められつ、かたみに四つの袖を濕せし事も、今は早やいにし夢と消えにしか。あはれ朝の雨夕の月、共に樂しく賞でむとてこそ誓え、一人殘らむ身が果敢き思ひ出になれとは誓はざりしを。あはれ來ぬ年月の眺め誰れと共にか賞で語らはむ、思へば〳〵實にはかなの妾が身や、つまの身や。

思はずも夜はいたく更て寒さに瞬く灯も今は早や消えなむとする折しも、板屋をすぐる村雨にうち通りて遠ざかり行く、つぢ守の鐘の音も幽かになりて、梢をならす風の絶間に、又も聞ゆる棹鹿のつま呼び交す聲とこえなり。

評曰。鹿鳴より想ふて夫婿に至り、別離に到り、歸を待つに到り、曾歡に到る。筆致滑かにして能く纒綿の意を盡せり。

## 夕暮の逍遙

伊勢山田久世戸川上德一方　西井よし子

晝となく夜となくふりつゞきし村雨の空、今日は珍らしくも拭ひたるか如くに晴れ渡りて、夕日の影花やかに照りかゞやくに、四方の山々露の衣をぬぎすてゝ何となく床しき風情をあらはし、野べの景色も一入よくそよ／＼と軒音信るゝ秋風の、あつからず、寒からず中々に心地よきなど、日ねもす日がら雨に悩みゐたりし身のさすが氣も清々しくて、家に居たまらねば、いでや野外の景色に歌袋肥やさんも思ひ立ち、夕食もそこそこに家をいでぬ。

ひとり踏みゆく路の傍にはまだ咲きそめしばかりの萩の、うなだれたるいとしるく、ところ／＼に女郎花の黄にまじれるもをかし。よりて

みちのべに匂へる萩の花がくれ
　ところ／＼に女郎花さく

と拙き腰折一首口すさみぬ。

やがて五十鈴川の堤にいでてければ、かたへの柳の木影に立ちて眺むるに、彼方には朝熊の連山横たはりて谷間々々に紅葉の紅に染まれる最麗はしく、麓の方には鹿海の里の家々森の間に見えかくれつゝ、つゞけるも床しや。

聳えたつ朝熊の山のつくる處
　松の木がくれ家並ぶ見ゆ

目をそむけて右方を見るに、清らけき流れはくねりくねりて、末は小さき森に沒しつ、白帆の四つ五つ十分に風をはらみてゆく樣、さては橋の虹の如くに懸れるなど、何れか繪の如くならざるはなし。

水清く流れもゆるき五十鈴川
　眞帆に片帆に舟のゆく見ゆ

程なく日も山に入りはてゝ、鹿海の里は夕餉たくかまどの煙に包まれつ、夜のみ神は何處よりともなくくだ

り來りて、あたりはうす暗くなり塒に急ぐ百鳥、家路にかへる農夫など彼方此方に朧ろしく見ゆる、げに聖けき景なりや。

一すじの畑の細みちゆふ暮て
人の姿のたゞうすれゆく

折しも淋しくひゞくゆふべの鐘に歸途促されて歩をかへすに、いつしか月も山にのぼりて、草葉にすがれる露の一つ一つきら／＼とかゞやける、あはれそは黄金の玉か……非か……

評曰。叙し得て、景趣如畫。

## 賞外佳章

### 秋の夕くれ

信の　吉澤とみよ

夕空はれて秋風ふき。月影おちて鈴虫なく。思へば遠し故鄕の空。噫哉父母いかにおはす。

西むきの窓によつて、しずみゆく夕日をみおくつてゐた耳に、きよくやさししい聲にこうとふのがきこえた。からなほ耳おすますと、聲は一そうさへて、

落ち行く水に秋萩たれ。玉なすつゆは滸にみつ。思へば似たり故鄕の野邊。噫哉同胞如何に遊ぶ、

神々しくきこえたこの歌も、しまひの一ふしは無心なギツくりの音と共に遠ざかつて、やつときこえた位。聲はまさに少女。あゝ二年むかしの頃は、私たちなどもこういふようにうたつたであらう。あゝその時手をたづさへてあそんだ御友だちは、いまどこでとうてあろうぞ。故鄕の野邊ににたる野邊をみて同胞をおもち出すとき、このあわれなる姿も一所におもひおこして下さるであらうか。二年むかしの今ごろ城山でちかつたこと、わすれずにいて下さるだろうか。散る木葉の一つ毎にさむくなりゆくこの秋を、友は幸につゝがなくくらしておるでおらうか、別れてから別にくわしいたよりもないのであらうか。といふより外にいふことができない。それはなをさらくるしいのである。

もう日はとつぷりとくれて、星のかげがあつちの空にもきら／＼。こつちのそらにもきら／＼。

「夕空はれて秋風ふき」となにごころなくうたひつゞけてみたが、それさへつゞかずうつぶしてないた。おりしも山おろしがさとふひてきて向ふのいな田をなみうたせ、こつちの野ぎくをなびかせて、かりそめにつるしたむぎわらにくだけて、銅のつぼに馬蘭のつゆの落ち込むやうな美くしい聲をさせ、そのはてはいさいかまわず我居間へふきこんで、ありにちらされたる何文集何の詩藻のきらひなくひろがへすので、あわてゝ内へはいつて、なみだながらにかたづけやうとした。すると、弟のむしかごのなかのきり／＼すがせんだつて、こつちのくさむらですゞむしがなくと、あつちの木かげで松虫がなきくさつた。いけがきのかたへなどではくつわむし、いろ／＼の虫がいろ／＼に笑ふのやらなくのやら。

評曰。未た慣れさる雛なれど、詩味饒きを見るへし。

# 野分の朝

播磨　しづの江

影ほのぐらき行燈に灯なうつして、小屏風もて圍ひつ、そを守りて、夜すがら寢もやらず、さては立木の吹き折るゝ音ゝ、襟をちゞめ、さては瓦の剝がるゝ音に、耳をそばめて、只一すじに、早や衰へよかしと神を念ずる程に、よべより吹き募りしさしもの野分も、漸々衰へ來て、はては折々背戸の簾に訪づれて騷ぐやうになりぬ。今は心安しとて、暫しまどろまむとするうちに、いつになくさらぼひたる鷄の時告ぐる聲、四方に聞えて、東の方は白み初めぬ。

只ならぬ人の聲するに、何事にやと門邊に立ち出づれば、あさましや、昨日までは白壁いかめしかりし土塀の倒れて、道を遮れるもあり、昨宵までは逞しき馬蹄の音を聞き居し廐の倒れて、塀に倚りかゝれるもありて、あまたの人のそれらを片附くるなりけり。遙に清勝寺の方を見れば、銀杏の實などにや、あまたの子等の集ひて拾ひ競へるさま、いと忙しげなり。やがて、各手に攜さげたる六つ七つより十一二歳ともおぼしき一群の、誰か家は一抱もあるべき松の吹き折られて、そが爲めに納屋倒れたり、いなとよ誰が家の豚は殘らず昨宵の間に、行方しれずなりたりなど、口さかしげに語り合ひて、我門を過ぎ行きたるは、いづれ彼の寺に行くにやあらむ。

内に入りて裏庭を見まはれば、あさましとも淺まし、いつの程にか納屋の戸は外されて、臼、箕、さては鋤鍬より繩炭俵に至る迄、所せまく散らばり出て、そが上に落葉折枝、壁土、瓦の片など積み重り、さながら、軍の跡とも見つべし。漸々道をつくりて前栽にまはれば、こゝにも野分は免れざりしにや、宵に結び置きし萩の組とけて、雁萩、小萩、花もしどろに寢亂髮のごと亂れ伏しぬ。杖を力の翁頭は頭をうなだれ、葬の鉢は萎びて土にまみれ居ぬ。夕顔はと見れば咲き殘りたる花は半ば萎みながらに、さけて美しかりし姿も殘らずいと痛々し。折柄裏庭の方には誰やらむ、水汲みに來れる氣はひして聲高に噂せるも聞えぬ。築苑を垣などにくゝりて裏戸を出づれば、見渡すかぎりの稻葉は、露姿あらゝかに伏して、朝月の光淡くそが上にかゝり、豚などの小屋失ひたるものにやあらむ、哀れなる聲、いづこよりともなく聞え來ぬ。

評日。野分の朝の光景、眼見るか如し

# 病める妹

伊勢宇治中之切町　河原芳子

くすしの君のおぼつかなげなる答へをきくにつけても、いとしき幼妹の悶え苦しむ胸の内思ひやられて、みどりする母君、妾の、氣もほと〳〵に狂せんばかり、熱の昂まるにつれて眼は白くなり黑くなる痛ましさを、疊りし胸に抱きかゝへて、かたみに氷囊もて冷しつゝある苦しさ、神も哀れとおぼさずやなど呟かれぬるも、げにやむごとなき際なりけり。

かくて悶え苦しめる妹の、こはばれる舌をかつ〳〵に動かして、氷を、といふに、かれて、くすしの君の禁ぜさせ侍りし事ながら、いづれ助からぬ命なりせば、せめては乞ふがまゝに與へよとて、熱き涙を灑ぎかけつゝ、思ふまゝに食ふべよとふくますれば、幾塊となく食ふべ了りて、やゝ心地よくやなりけん、先よりは安らかなる樣にて眠り入りたるがいとしきに、もし、其の儘さめやらぬ事もやなど、瞬間なう見つめ居つゝ、只かりそめのいたづきとのみ思ひしはかへす〳〵も口惜しかり、とて、泣く音なしのぶ亂れ心よ。

忘れもせぬ、雪の夕暮。軒端の花のはら〳〵と散るを見て、妹は妾の袖に縋りつ、風なくば花もちらぬを、いかにもして風を止めてよ、と呼びしことありき。また、夕立ちのいみじう降出でゝ鳴る神さへおどろ〳〵しう鳴りはためきし時、妹は人形を抱きて余念なく遊び居たりしが、母君の呼び入れ給ふまに〳〵、蚊幮を潜らんとしてゆくりなく人形を落すや、小さき足は其の上に加はりて哀れ片手を折り砕きたるに、いなづまのおそろしさも打ち忘れて、ひたぶるにかい抱きつ、さぞ痛くやあらむ、苦しくやあらむ、許してたべ、許してたべ、と泣きし事もありたりき。秋の夜、くまなき月を仰ぎて、兎の餅搗といふことを思ひ浮かべたりけむ、折から遠砧の音のたぐへくるを聞きて、今宵は餅搗の音きこゆ、お月様にや配るらむ、と笑顔作りて告げしこともありき。冬の朝、氷いみじう張りつめしに、池の緋鯉の凍えやせんとて、湯を其の上にそゝぎしこともありたりき。」殊に唱歌はこよなき楽しみとして、しばしだに清期の譜をたちしことなかりければ、歌子と綽名せられしを、自ら喜び其の名を呼びし程なりき。あゝ今や露命旦夕に迫りて、其の胸の琴線は病魔の爲めに破られ、其の清く尊き歌口は苦悶の音に閉られたるはかなさ。あはれ、妹の心やいかに。あはれ、妹の運命やいかに。夜は更けぬ。蟋蟀の聲いよゝ冴えたり。軒端の竹に戦ぐ風の手、さと吹き入りて、あはや燈火は消えなんとするを、涙に濕りし袖もて覆へば、危きあほちは冷やかにゆらめきて、病うどの顔をもの凄うてらしぬ。折しも妹は夢路をや辿るらむ、不図紫色の唇を開きて妙なる唱歌の一ふしを謡ひ出でぬ。

あゝこの妙なる歌の一節は、妹が最後の曲にてはあらざるか。

あやし。床に飾れる風琴は鳴りぬ、妹が手馴れの風琴は鳴りぬ。極めてゆるく、幽かに。

されどそは、心の迷ひか、あらざるか。

評日。後半殊に、面白し。

# 夜半の月

在北越　藤澤白百合

夕日は今しも西に落てくちなし色にくれ殘る雲の枕に眠りはてぬまつ人の俤もまじる利根の夕波に浮び出たる如き常陸の岡は墨絵もて畫かれたり籬のもとには露にぬれたる七草の花既に盛をみせて秋を知せぬひとりつく〳〵物思ひ居れば入相の鐘の音微かに響きていとゞ物さびしきを天いはず地語らず我默して靜に暮れゆく此夕夢と過にし昔つら〳〵戀しきを心は亦も身をぬけてさまよひ出るは都の空いとしき〳〵我子のあたりに「こひわびてよごとの夢にかよふともしらでや子等のわれをまつらん」いてや人しらぬ此苦しき思ひせめては筆にうつさんともゆる心わきたつ思に熱せし紅涙を硯にうけて紙に向へば我子故のやみにわけまよふ小さき胸にあふれ〳〵たる愛の泉今はたくまん人もなきに滾々とわき出でゝ限りなき悲に悶へつゝかぎりなき空想の間にさまよひゆく我心白雲我前に漂ふあたりこひしき俤髣髴として目にうつれればいづくともなくまわらぬ舌に「あゝちやま〳〵」と我をよぶ愛らしき聲「ハツト」思ふ途端妄想の夢さむればかなしやうつゝにみしよの影もとゞめず殘るは手にせる寫眞のみゑまひゆだかに今紅蕾の唇を開きてまさに物いはんとす

思へば今はこぞの霜月九日われは夫の使命を帶びてふるさとに來りつるまゝさま〳〵なるかなしき心情を柵みにせきとめられて我は再び歸り得ず故山の空にさまよひてより茲に十ケ月しかもいとしきを子等を都に殘

く殘し置きて

今にして思ふもげに涙の種なれや置きてゆく母置かるゝ子等の恐みにまだ知らぬ其夜の夢の心にかゝり我れは涙に袖絞れば子は膝に縋りて片手に乳房探りつゝ唯わけもなく「あゝちやま〳〵」とよびては已れの小さき前掛のはしとりて我涙をぬぐひくるゝいぢらしさわれは今宵をなかてまつべきないひさとせば唯「ハイ〳〵」と答へてうなづくさまのいとほしさ我が乳はたまれり妹の方なる子をよびて膝にのすれば朝よりの忙しさに紛れて牛乳のみをあてがひ置し事とて珍しげに我面を眺めさも嬉しげにうちゑみしさまあゝ今も〳〵目の前にあり

かなしき胸ははりさくばかり思ひなやみてまどを押せば折から一流の銀河に空に冴へて屋影やさしくまたゞくあたり今宵十六夜の月のみ船は浮び出たり夜は更けぬ天地眠るか寂として聲なしあゝ我子等とく〳〵不幸の運命のもとに今宵もなれらをこひてなく母が涙夢にもそれとしるや否や

あゝ此光美しき輝き胸に思ひのうき雲なくてたのしきまどゐにいつかはめでんあはれ秋に殺る夜半の月影

評日。情致纒綿

# 教へ子

大阪市西區新町通り一丁目　實　とも

今しも滊車は悲しき笛の音殘して堺驛を離れぬ冬の朝夏の最中事ともせで日々通ひたりし滊車の道なから此日程の眺はしく名殘惜しく思はれし事あらさりきげにも此日は親しき友馴れし學校扨は愛らしき教へ子と惜しき袂を別ちければなり御惠深き友垣はしの學校などて別れの悲しからざらめやはされど〳〵妾の胸も張り裂く許なりしは教子なりき、噫可愛の少女等よ御身等は一び我校に入りしより智能乏しき妾を猶師と頼みつゝ神に似たらん清き誠心もて敬ひき内に少しの惱ありて忍ばんとすれど服はるゝ眉の顰みに御身等は敏くも認めて花の如き顏に早も憂ひの雲は掛りき妾の其を見るに忍びず强ひて笑顏を催せば御身等の無邪氣なる再び星の如き眼は輝き喜びの色はそが愛らしき頰に顯れぬ、嗚呼可愛の小女等よ妾の憂ひを御身等の爲に掃はれしはそも幾度そ時としては女浪男浪の高く低く寄せては返る濱邊に美はしき貝を拾ひつゝ共に岸打波を歌ひつ、小高き丘に登りて夕榮美はしく海を色彩り磯の松風輕く袂を掃ふ時沖行く白帆片帆を敎へて打興じ時の過ぐるをも忘れき、或は遠足せし春の朝菫摘みつゝ徐身等の姿を見央ひていたく胸を痛めし事もありき、げに御身等妾の命なりしよ、人ば花にあこがれ月に浮るゝ時も勉めて離らざりしは御身等ありし爲のみ、噫斯かる樂しき日何時の世にか又來らん、春の胡蝶の其なられとも唯夢の如くに纂せしを、妾は今より全身の愛を捧げ居たりし御身等を捨てざるべからず、御身等に別を告る時の妾の心の中や如何なりしぞ又しても塞がらんとする胸を押へて我と自から勵ましつゝ語りしよかの時鳥ならねど血を吐く思ひにて然れど御身等のよゝと泣き沈む樣を見ては兼ての覺悟も仇なりき女々しと人の笑はゞ笑へ慰めんとして能はず熱き涙は閉ぢたる瞼を押きて溢れ出でき、噫人の心は弱きもの哉、今は何事も思はじ云はじ唯願はくは少女等よ幸に健康にして學びの業を勉めよかし、白糸に似たらん清き心を永久に守りて塵汚れたる色にな染みそ、斯くても思ひに耐へ兼ぬれば立上りて車窓を開くに滊車は早天下茶屋近く來りしと覺しく阿部野神社の杜森蒼く立込めて塒を求むる烏の聲忙はしく野末の歸りか牛引ける農夫の緩やかに歩む樣、あはれ心行く眺なるべけれど、我目には唯教子の神々しき面わと

丹々とせし螢光はしきりポンとか目にとゞまりていとど物悲し、妾は又も窓を閉ざして遂に人の無きかまゝ心行く限り泣伏しぬ、折柄空もかき曇り軒端の雨子は早二滴三滴の露を宿しつ

評日。行文暢暢な缺く所なきに非されとも、眞情溢々、側踏人を動かすものあり。

# 友を懐ひて

伊勢國多氣郡齋宮村島村嘉一方　島村つや

哀れなつかしき靜子の君よ、別れて後の起臥はいかに情なき世の風塵の御心を破る事はなくてか、いかに胡めふを明かさせ給ふらむ、妾は君と別れてよりこのかた、月の夜は更なり、風月夜、はた星の夜、光芒を曳きて高く飛ぶ流星に思をよせて、君ゐます東の空を打ち眺めつゝ、いかにわびしく暮したりしか。

君こそはげに妾が無二の友なりかし、面を和らげて内に針持つが常なる人の世に、最とも冷かなる薄き情の世の中に、かくまで厚かりし二人が仲、人も我等な羨みぬ、げに我等は水魚の交もたゞならざりしなり。

其の君と妾、今は情なくも山河百里をへだてて、又相語ふことさへ能はざるにあらずや。

忘れずよ、去年の秋、君と明野ヶ原に遊びし時、「哀れ君と此秋の景色を見むことも、いよいよこれが限り」と宣ひし君が切なる旨の葉を。

「のう、君と別れて又相語らはむは、そもいつの日なるべき。」

「やよ靜子の君よ、又の會ふべき時はげに」と妾は答ふる言葉さへ出でざりき、胸はうち塞がり坐ろかなしくてはらはらと落つる涙は、野咲なる小萩が下のこぼるゝ露より繁かりけり。

あはれ此野べも今や再び哀れ深き秋を迎へつるに、さまよふものは妾只一人なり。いさゝ小川の流れもさながらにあるものを、流れにうつるは妾の姿のみにあらずや。

昔ながめし淀瀬の風光もさながらに、かの根上り松の緑は常盤なるを、霞ヶ浦には夜なく月もすむものを

あはれゆかりある明野ヶ原や、いさゝ小川の流れや、霞ヶ浦や、はた根上り松や、よも君は忘れはしたまはじ、さはれ君のこれ君のこれ等と相見え玉はむは、そもまたいつの日なるべき平。

評日。筆の運び確かに、辭旨通暢なり。

# ふるさと

福岡市荒戸町　脇山わか子

雁聲雲のあなたに消えて、明月ひりと中空に高し。あれたる庭徒に秋深うして、我かすかなる詩情いはむ方なうあはれに覺ゆ。なく虫おつる露いはずもがな。こゝはこれ故郷遠き羈客の窓下なり。なよやかなる萩の姿、なまめかしき女郎花の姿似たりやな故園の花野に。

あゝなつかしき故山の花野

親しき友と手を取りかはし、露ふかき野路かたどのつゝ、招く尾花やすがる萩あな面白の秋野のさまやとめでにしむかしは、いつの夢。

あゝいはじな、其むかし。父なく母なき故山の空、何に引かるゝ我が思ひなるらむ。秋夜幾宵、我心徒に故山の空にはせ行くとは。

いはじな、昔のたのしさ。見る日だになき越の山家も、なつかしの故山とし思へば、みひしさず心は狂はんばかり。

そもむかしの月の懐しきか。むかしの秋のこひしきか。あらず、げに我

はありし昔の我心のこひしきなり。物思ひなきむかしの心の。

温かき母の懐に眠りし時の心は今いづこ。前には青田遠く、後にはみどり山高く、かけひの水靜かなる山家に、我は十あまり三とせの春秋を送りしよ。明媚なる風光、質樸なる人心、我はいはむ、なつかしき樂天境と。

美しきは親しき友よ、貫井子の君よ。君は今此樂境に敎への鞭を取りつゝも、神の子にも似たらむ可憐の幼子を導き給ふとかや。尊き天職をつくし給ふ君うらやましや。

月は今し松の梢にかゝりつ。それよ蟲の啾々たる音、唧々たる聲いかに我が愁思を増さしむるか。軒端の吳竹疊の上に落つる影のいかにながきことよ。

さても故山を出てしは五とせのむかし、櫻花ちる朧月夜の宵なりしが、其時涙にくもりし月影、今は千里の山河を隔てゝ心づくしの空に見むとは。

なつかしき故郷を離れてよりは、流轉又流轉、變轉又變轉、たよりなき浮世の旅、楫とたのむは何。あゝむかしの無邪氣なる心は今いづこ、積るは徒に憂きと悔いのみ千草にすだく虫の音を我身ひとつに集めてぞ聞く。

故郷を忍ふの露、昔を忍ぶの草、つもりつもりて終に忍びに狂はんかな。一滴二滴又三滴、あつき涙は頰をつたひぬ。虫の音やみて月影うすし。あはれ淡雲にさえぎられしか。おつる涙にくもりしか。

評曰。情思多し。

## 理想の家庭

埼玉　服部えつ子

空氣清らかなるあたり、うつくしき構ならずとも、質素にしていやしからず、清らかなる庭ありて、四季の草木一わたりあらはほし、殊に薔薇は、心してしたてまほし。

家には花を散らすかせもなく、温き光みしていつも春のときうつらす、人々の心長閑にここを一つの樂園として、集りては、快樂を共になし、かたみに心をあはせ、たすけあひ、分れては、各本分を守りてはげみ、朝には鳥と共に歌ひ、夕には月と共に語り、ある時は花園に色花を愛で有益なる書をひもときて思想を練るもよからむ。殊に年老いませる父母には、一きは心やさしく事へまつるべく、女子のいとも重く大なる務第二の國民の養成には、心の限り身の限り天晴日本の國民として恥ざる人物をおほしたてむ。日々のいとなみはつゝましやかにし余財あらば、慈善事業に從事をもせまく、又折折は處々に物してみきをもひろめまし。

學びや補ひのあけくれに二なくむつびし友垣もすでに人の妻となり母となりにし後は、疎くなりもて行き遂に交りもたえはつる習ひなるこそ、實に本意なき業なれ。わが友垣には行末とほくひとつまとゐを設け、昔を忍び今を語り各經驗せし事どもあひ語はゞ、如何に益ある事ならまし、要の理想は斯こそ。

世の海波高しとは未だきゝしのみ、やがてこぎ出でむあかつきにはそもいかに、世の道ちまた多しとは云へ未だ旅せずやがて出でたゝむ夕べにはそもいかに。强風あらくとも、巧みにかぢとりて進まむ、道の八千またに踏み迷よはゞ、正義の燈火にてらして、むかはむ、松の操の變しぬ操なよ竹のなよやかぬれど節あるこゝろをもて、家が理想を實行し、天與の職女子の本分をつくさばや。

評曰。穩當なる望み、誰も斯くこそと望ましく候。

# 敍事文

## 秋雨日記

**甲賞**

播磨國印南郡大塩村八木方　高井志都

隣の老翁が米搗く音に夢醒むれば、今日も秋雨の音しほとほと枕に通ひぬ。

薄ぐらき障子の陰に朝餉を了へぬ。今日は佛の日なれば、花などかへ申さめと獨ごちつゝ、木鋏持ちて庭に降りぬ。草深き庵の事とて美しき花もなし、土の香高き茗荷畠、朝顔の花小さく咲き殘りたる垣根などめぐれるうちに、白き花を見出しぬ。名は知らねどこれにても進ぜばやと、しづかに剪りとれば、傘の雫にうなじの冷かなるも覺えぬ。

西濱なる友許訪はむと、八時すぎ立ち出づ、笹のそよぎに雨の音滋くなりぬ。天滿宮の御前を通る、鳥居前の茶店は常になく閉されて、淋しさ云はむ方なし。西濱の村に入れば、一構の瓦屋あり、幼な子のしめし干したる納屋の軒下には、雨に濡れたる鷄の餌を拾はむ氣もなきにや、物思ふとしてもなく佇立めるさま、いと哀なり。やがて友の家に訪れしに、折あしくも外出し給ひつる、後なりしかば、その妹君に言づてしてそこを出てぬ。

歸れば乳母は佛の御餉にとていそしめるにや、厨に柚味噌の香、洩れぬ。午餉たふべて後は用なきまゝ小椽に出てゝ、庭の石蕗葉に落つる棕梠の雫の音を聞きつゝ、物思ふともなくあたりの景色を眺め居しに、折柄奈良なる友より玉章は來ぬ。何方もおなじ秋雨の空とて、淋しさやるせなく、且は雨の町中をさまよふ鹿を友とし、夕は猿澤のめぐり淋しくさまよひて、限りなき思ひを西ゆく雲に寄せ侍るとの言葉なりければ、やがて返しの文を書きて送りぬ。

亡き妹のいたく愛でゝ、朝夕に水かひし秋海棠も、亡ねしを嘆ちてにや、いつよりは早う花落ちて今は見る影

もなくなやみたる姿、今更に口惜しき極みなり。夜に入りては人の聲も聞えず、只時折に一ざは音立てゝ降りしきる雨のみ夜半の莚に訪るゝなれは、淋しさいや増して妹戀ふ思ひのみぞいやまさる。佛に御燈を點して形見の品々ひろげ見るほどに、夜はいたう更けて、御燈の光も身に泌むよう、漸々細り來ぬ。隣の室には弟が寢返り打つ音して、時計の音もとゞまりぬ。あはれ長き秋の夜や。

評、用筆凡ならず、水至つて渠成るの概あり

## 湖畔の夕暮

乙賞　島根縣松江市横濱新道　佐々木とみ子

宍道の湖邊日は早や西の山端に沈まんとす夏の夕風靜に湖面凪ぎ渡りてさながら鏡の如し麗かなる夕日は黄と紅の影を水面にうつしつ青き空より遙に舞下る鳥は沖の餌物を求むるにや彼方此方にむれとび蒼々たる湖上白帆三つ四つ風にはらみて走れる等實に畵中の趣あり湖上遙に見渡せば天輪寺山の森鬱然としてそが木立の間より洩れて見ゆる燈火は玉手あたりの里よりならむ夕告鳥の聲勇しくとび行くにやと右の方を眺むれば龜田山の森蒼鬱として緑滴らんとする中に巍峩として高く聳ゆるは千鳥城にして其威嚴昔におとらず思へば其上我國主なる松平氏の永く籠られし事どもそゞろに昔をしのばれてなん折から聞ゆる汽笛に驚き見れば今しも汽船は嫁が島にかへり來れり船中の人々も此夕景を愛ずるにや甲板上にみち〳〵たる人々は西の方をながめぬ時しも美しく空にいろどれる夕陽は次第々々に傾きて嫁が島の常磐木に映ずる狀えもいはれずもし詩人歌客にながめしめなば何と歌はん又畵たくみなる人に見せなばさぞ美しき畵をうつさん妾は日頃此處に住めどもかゝる景色を見んは中々難し此絕景を親しき友どちと共にながめなばいと心許なく思ふほどにつれなき夕陽は早や西に入らんとする風情なるにいとおしく拙き筆をもかへりみずいさゝか是に記してましと筆とれば涼しげなる夏の夜の月今しも雲間をはなれて清光机上を照して光を我にあたへかほなるもうれしくて。

評、叙景畵の如し

# 東雲日記

丙賞

高知縣立高等女學校生徒　竹村よし

八月三日、空いとよく晴れたり、かねてちぎり置きつる事とて朝まだきに友をそゝのかして出てぬ、氣さわやかにして心地よし、師の君許とひまつりて正午にかへりぬ、それより女學世界の投書をかく。

四日、天氣よし、六時に床をいでゝ一家團欒のあさげ終し後縫ひかけの袴を縫ふ、午後二時頃より姉上と共に墓參にゆく、暑さやくが如くいと〳〵苦しくあゑぎあゑぎ山を登りゆきしに道のかたはらに女郎花のしたり顏なるもおかし、家づとにもとたづさへ歸りし時ははや花はしをれゐたるいとにくし、

五日、少しくくもりてむすが如し、今日はなすこともなければ教科書をひもどきつ、折からなつかしき友よりの手紙とゞきければあまりの嬉しさに直ちにかへし文したゝめて出しぬ、たそがれの頃よりはらからと共に端近く出てゝ夕涼しつゝうれしかりし事さてはかなしかりし事とも語らひつ長夜をふかしぬ。

六日、天氣いみじうよし朝早くより種崎町なる親族にさし花のけいこにゆく、歸りて女學世界をひもどく、七日の間まちにまちて漸く姉上と琴を習ふ。

七日、朝より雨やまず、此の頃の暑さを流すかとうたがはるゝばかりにいと涼し、端ちかく琴取出すなど其樂しさいはん方なし、この頃まれなる雨とて弟妹はよろこびてぬるゝをもいとはず庭をさまよひ、小池の水はあふれて金魚は心地よげにおよげり、雨は漸く小やみとなり遂に全く晴れて虹のあらはれたるも又うれし浴し終へし後庭にいすを出して涼むなど此世の外の心地ぞする。

評、簡潔にして要を得たり、

秀逸

## 秋深夜

岐阜　華子

今宵はまさに望月なれば池のわたり前栽の梢ともいかにおかしからんなど思ひやりつゝ文くりひろげゐたるに晝のつかれにや少し打ちまどろみしがふと目さむれば窓白うあからみてさながら夜の明けはなれたらんやうなり。やをら障子押し開らけば東の空赤くなり行き

て花やかにさし出でたる月影えもいわれず草の葉末に置く白露もたまどまごう計りになんありける秋は哀れなるにふけたれば誠にさみしくて目にみゆるものは千草の露にやどれる月影、耳に入るものは叢にすだく蟲の聲いてやかなる夜こそとて我と我身を勵ましつゝそこはかとなく讀み行けば夜はいよ／＼靜かに心はます／＼澄み渡りぬ折から程遠からぬ家に琴の音色さえさえと聲ほのかにまがきをもるゝ音もゆかし風流なる人の月を愛でつゝかきならすにやいと心にくしなど思ひすてゝ又學の林のおくふかく辿り入れば折しも風につれ遠く砧の音あるかなきかに聞ゆる心細さいはんかたなし。

評、淸凉なる筆つきといふべし、

## 里歸り

千葉ゆき子

妾は今日しも都の學びやに業終へて古里に歸れるなり、あゝいつも變らでなつかしきは故鄕の山川よ、鎭守の森は三とせの前に變らず圓心寺の芝山も昔に變らず、花あやめ折りし辨天池も、兄君の釣りの御伴せし氷野川の流れも、昔にかわらで水は溶々と流るなり、あゝなつかしの山川よ、

潮見坂の老松は今も常盤の色かへず、廣澤の野邊は今も七草の眺め美くしきなり、あゝかくも野山の眺望は昔の儘なれど、變るは人の身の上よ、

同じ學びの友なりし彼の豊子の君には、妾と年も同じなれど、最早やこぞの暮に嫁ぎ給ひしとか、さらば母様と呼ばるゝも程なき事ならむ、それに引きかへて妾が姉とも頼みし貞枝の君には、今も思ふ緣なくして、秋の夜を長しと歎ち給ふとか、あゝ思ふ儘ならぬは人の身の緣不緣にこそ、

かの松原の懸茶屋の婆は、今もすこやかに、取る年の腰に弓は張れども、日毎往き來の人に澁茶進むるとかや、されどそが爺は八十の高齡をもて、こぞ身まかりしとか、いかに八十の高齡なればとて、かの勢ひよき翁の亡き人の數に入らむとは思ひかけざりき、知れぬは人の命なるかな、あゝその時の婆の悲歎は如何許りなりしならむ、

あゝされど、妾に胸も張裂けむばかりの悲しさあたへしは、いとも親しかりしかの淸子の君なり、あゝ思はざ

りき、夢にも思はざりき、かの君の身まかり給はんとは、その此の四月花も散りゆく頃なりとや、あゝかの君こそは今も皆の心かわらで、親しく妾に物語りし給はんと樂しみし此のたびの歸郷も、かの君のあらでは甲斐なさよ、思ふ三とせの昔、妾の都に旅立つ折にはこゝの停車場に見送り給ひて、あゝゆき子の君よ、又いづれの日か逢はんとあつき涙に暮れ給ひしが、思へばかの折こそ永の別れなりしなり、あゝさる事と知らば又物語る事もありしに、今はせんもなしあゝうらめしや、

かの君の家は今も松田町に住み給ふか、あゝそが家をおとづれて母君を娯さめまゐらせむ、あゝ、されどされど又も思ひ出の涙に暮れ給はむことの氣の毒さよ、泣かせ參らせむ爲めに訪ふはえ堪へず、あゝ訪づれじ不實には似たれど訪はぬがましよ、

さらばみ墓に物して詫び言のべむ、場所は何處ぞ圓心寺か、あゝ妹よ、清子の君のみ墓に案内して給ひてよ、花は桔梗か女郎花か、あゝかの君の殊の外めで給ひし糸萩にせむ、吾が庭のも今や花盛りなるに。

評、故園の情うつし得てよし

# 小夜砧

奥州はる子

月の光の面白きに誰か打つらん絶えつ續きつきこゆる砧のこゑにあくがれ出てゝ露けき野路を辿りくればささやかなる草の屋あり月影白く半かたむきし軒端を照らして庭には蓬高く生ひ茂り蟲のこゑ／＼あはれをつくしたり破れたる籬のもとによりそひかいまみれば月隅なくさし入りたる南の端近く出てゝ女の布擣ちしきるなりけりはたちばかりにもやあらんまとひたる衣はいとそまつに髪など亂れたれど顔ばせいみじう美しく時々物思はしけに空うち眺むるけはひきたなくもの哀なりそが傍に愛らしき稚子のすや／＼と眠り居るもあらはに見ゆ折しも夢にやおびえけん稚子の一こゑ泣き出だせば母なんめり女は驚き槌うちおきていそぎかき抱き添へ乳するさまなりさもいとほしげに頭撫でやりつゝやよ坊よ今宵は遠き都の兵營にゐますなれが父上がりおくりまゐらせん夜寒の衣うつなるぞよ果つるまで今暫しの程靜にいねてたまはれよとやさしき聲していふうちに稚子はまたよくねいれり女は靜にはなれて衣かけやりなどしつく／＼とちごの面を打ちまも

りぬけるがまた空ゆく月を仰ぎみて胸の思ひやみだるらんいとも堪へがたきさまにてほのかなるこゑたえたえにあはれ我が夫よ百里の北なる城の窓にこよひの月をいかにか眺めたまふらん此頃の夜寒の風にもつゆ恙なくおはしてか習ひの軍などのあらんをりはさぞな霜さむき秋の野山に砲を枕に一夜をふしてあかしたまひやすらん去年の暮御國の爲と喜び勇みて君鎭臺に赴かせたまひてよりはあとに幼き人をひきまとひて晝はひねもす夜はよもすがら絲つむぎ布うちなどしつゝからくもつなぐ親子の命ひたすらちごを生ひたゝせてやがて三年の勤をへさせたまひてめでたくかへりきまさん日にあはん事をのみ樂みに過ぎゆく月日を數へつゝ待ち居るより外にまた思ひもわらず侍りのうわが夫よ御國の爲に心の限り盡しませや神も佛もわがつまを守らせたまへといひもはてずせきくる涙によゝとばかりむせびいりぬ垣の外におぼえず我れも袖をしぼりつ月もいり方になるまゝにいよゝすみまさりて遠くきこゆる松の嵐みにしむばかりなりをりからなきゆく雁のひとつらあはれさいとゞいはん方なし女はやをらおきなほりてあふるゝ涙おし拭ひ打つ槌の音またひとしきり高くひゞきぬ

評、筆に躁姿の嫌あれどすら／＼としてよし

## 夏の夜

靜岡縣　和田みさ子

さすがにながき夏の日影もいつしか三方ヶ原のかなるに落ちて空には星影三ッ四ッ家毎にくゆる蚊遣の煙いとあはれなるに、妹どもの散歩にと誘ふものから、宿打ち出づれば、風は涼しくはちすばの上を渡りてえならぬ香をさそひ、遠近にとびかふ螢はさながら暗を縫ふが如く、かしこの森こゝの籔かげよりもれ出る燈火も螢と光をきそふかと思はるゝいとをかし、あまりの心地よさに唱歌などしつゝゆくに田面の水きらめき渡る、さてはと思ひて東の方をながむれば松の梢に月の昇りしなりけり、げに夏の景色もかゝるはしや、一年を春と秋とにと某の云ひしもあながちさにもあらじとこそ覺えしさきの程より空高う音のみかすかに聞ゆるは遠き里の煙火なるらん、此の爲には月のなき方なかなかによろしと思ふらめど我は月の方のしたはしくて、あゝ心

地よき夜よ思ふまゝ更くるまで遊ばんといひしに、彼方ょり男子どもの何やらんのゝしりつゝ來るに急ぎ己が宿にかへれば、わたりはいと靜まりてひとり孤燈の影くらし

げに自然は妙なるかな春夏秋冬それぞれに、うれしき事も憂き事もあり、春の花、鳥、秋の月虫は云はずもあれ、夏の夜、冬の雪などとり〳〵にをかしからぬはなし、また、都には都の樂しみあり田舍には田舍の樂しみあり、あゝ自然のめでたきはひとり景色の上のみにやは。

評、淡冲。

## 賞外佳作

### 夕ぐれ路

淡州　濱　まつ子

とこしへに去り、あふ時しらに別れにし人待ちかれて、あはれ、さびしき日は、今日も亦暮れむとす。

早く〳〵家路をさしてかへらなめ。されど、あながちに思ひ捨てがたき野邊の景色かな。何となう見かへらるゝ野邊の心かな。

沈まむとしていざよふ夕日、山の端に力なき光を殘し、峰より下すか、野邊をふきこすか、身にしむとにはあらぬ夕風につれて、梢のしらべさびしく、亂れかゝる尾花が袖かろく、道のべ埋むる露のはら〳〵と散りしく色白し。さびしき野にさびしき夕ぐれの影おちて、心細くもそゞろおそろしく思はるれど、歸ゆきがてにして、今暫しとて立ち止まる我が耳に、かすかにきこゆる人のさけび聲。山風たゆむ折ふしに、いよゝ近づくか、其のこゑしるし。

良久しくして、左りてなる、我が立てる野邊のつきたる山かげより出で來るひとりの少女をみとめぬ。近づくまゝに打ち見れば、年の頃九つか十ばかりと見ゆるが、黄昏れなれば、縞目さだかにわかれども、所々につぎ目あるきぬの短きをつけ、足に穿ちたるあやしき履物も、露にそぼぬれて重げなるが、片手を顔におしあてつゝ、よゝとばかり泣き叫びながら、足早に歩み來るなりけり。

我が傍につきて、我が立てる道よこぎりて右の方なる小みちに入らんとしける時、しかすがに立ち止まりて、我が面をいぶかしげにうちながめぬ、泣くれしばしとゞて。

如何にせしぞ、いばらなどにて手足痛めしにあらずや、夕暮路のひとりさびしくてにやと、彼女が肩を控へてやさしく問ひやれば、しばしは物も云はて、溢るゝ涙拭ひつゝありしが、重ねて問ふに、涙にむせぶ聲かすかに、否とよ、今しがた、我が母君はなくなり給ひぬ。其の由をみよりの人に告げん爲め、次の村まで行くなりと云ふ。思ひもかけぬ少女が言葉に、何とはしれずあやしき思ひの胸にこみ上げて、二足三足思はず飛びはなれぬ。さなりしか、さなりしか、行けや〳〵片時も早う行けや。

由なき遁りごとしぬ。このわびしきみち、ひとり行かるゝは殊勝なり、泣かずに急げと勵ましやる心根、早や我れも涙に咽びぬよ。

母上にのこされ、姉上に別れ、夜とも晝ともわかぬさびしき〳〵道をたとりゆく心地して、からくも命つなげる我れ、彼女が心を思ひやりては、

心も心ならず、やがて彼女も我れの如く、秋野の中に佇みて、昔ながらの秋色に、昔を忍ぶことの出て來ぬべし。あはれやなど、思ひめぐらし居たりしが、何時しか少女の姿は見えず、暮の色またく地に滿ちて、あたり只暗く、きけば空ゆく雁の聲、汝れも戀しき母やある、悲しき人に別れてか。おぼろの月にむせぶこゑ。

あはれ、少女よ。我れと友垣結ばずや。友垣結びて、かたみに慰めつゝ、人生のけはしき道をわけ行かばや。少女よと呼べど答へはなくて、野邊を渡る秋風のこゑのみさえ、かすけき月の光に、うなづくが、萩の影白し。あゝ、とこしへに、秋風ふきつきざるか、日は暮れぬ。風さむし。美しき秋野も何せむ。歸らむ〳〵、歸りて温き床の中にこそ此の世を泣かめ。

## 窓の三十分間

下谷　白井すみ子

正午頃から降り出した雨の、夕立になつても止み相にもしないのに、あき果てた自分は、手許の暗くなつたを機に、ぬひかけの羽織袖を疊にして、起つて西側にある窓を開いた、そして外面を眺め渡したのである。

窓下は、二坪許りの明地で、自分手づから造つた眞中の植込には作男の與助が野原の歸へさに取つて來て與れた、萩や桔梗や鷄頭が、今恰度眞つ盛りそして其白紅紫の上に、雨が溜つて輝いてゐる樣子は、恰もエメラルドやダイヤモンドやルビーを、並べたかのやう。

植込の先は低い木槿垣に見切られてあつて、右手は隣の背戸、左手は町へ出る街道へ續いてゐる。

ア、今頃は、お天氣なら恰度あの向ふに見える隣村の檜山の邊に、金色の夕日が落ちかゝる時分たか、今日はもう一天灰色に包まれて、山も木もぼうつと夢のやう淡く〳〵見えるのが、油繪にそつくりである。

自分は何となく好い心持になつて、畫の中の人にでも成つたかのやう恍惚とした時、清い美しい聲の、謳歌が、窓下の葉蘭をたゝく雨だれのひまに聞えて來るので、メスメリズムから醒めたやう目を開いて耳をすますと　それは隣の背戸の桔槹の邊からなのである、誰てあろうと出來る丈け背のびして見ると、人は見えないで白馬が一疋、雨にぬれた質の邊な木槿垣の上顏現はして起つてゐるのであつた、大方聲自慢の隣の作男が市から歸て來て、足でも洗ふて居るのであろう。街道を越した向ふは大根畑で、其末は廣々した田圃につゞいて、將棋の駒を散らしたやうな藁屋が二三點、けむるやうな雨の足のひまから見ゆる、其雜木林に添ふてる一つは、此間、一人息子を失した、正直婆さんの家なので……お婆さんは此雨の夕べを、如何してゐるかしら、大方行末の事でも考へて泣てゐるであろう。

『しやん〳〵』とねむたいやうな調子で、街道を荷駄馬が過ぎた後は、最早何の音もしない。

『秋さん、あかしもつけないで何してゐるの……』

障子を開ひて、姉さんが仰しやつたので、吃驚して振りかへつて見ると、本當に最早部屋の內は眞つ暗。けれど自分は、何となく此雨の窓が離れたくない……あれ〳〵あの將棋の駒を散したやうな藁屋から、燈火が洩れてくる……嗚呼何んて好い景色であろう。

# 秋の朝

群馬　梅津きよみ

朝げの風のいはんかたなく涼しげなるに心ひかれて庭にと立ち出でぬ、きのう迄緑りしたゝらん計りなりし木々の梢もいつしかつや〳〵と染め出せし紅葉につゝまれ作の花かと見まがう程になりぬ、あたりには萩や桔梗女郎花などわれおとらじと咲ひ顔に咲きみだれ殊にうるはしきはまがきによりて露おもたげに咲きつる朝顔なり折りしも朝日の影高くさしのぼれば兄れ夢の花其の光にうつろいていともいみじく見えぬ、其下蔭をいと愛らしき乙女子そゞろあゆみ居けるがそよ〳〵と吹く風に一ひら二ひら紅つけたらん如き紅葉の緑りの髪にちりかゝりぬいとあはれに興ある事になん、

秋の月

空のいとう高く晴れわたりてちり程の曇もなく澄みし月のみ我が物顔に中空にかゝり露けき木々をてらしぬ、妾は此の明らけき月を見て千々の思ひに袖うるほしぬ此の月は古來いく萬年のおひだ同じ心にて貴きも賤しきもおしなべて照し給へるに見る人に因りてあるは喜びあるは悲しむ、多くの人の中には月見の讌などひらき琴、笙など己が好むまゝにふし面白う合せていと樂しく一夜をあかす人もあり又は同じ月を見て亡き人を思ひ故郷を思ひて悲しむ人もありなんさわれ此の満ちにし月も後ちにはかけあるは黑雲の幣にさいぎられて美しき光を失ふ事もあれば樂しき人とてもおごろなく悲しくとてもこらゑよ、樂しむも悲しむも己が心一つなれば、

折りしも叢にすだく虫の音の高く低くいと打ちさゑて聞ゆ、

# 秋の夕暮

伯耆　玉緒女史

桐一葉、露の戸をおとづれてよりこゝに五旬。枯木空しく秋をかこつが如く、嶺に啼く鹿の聲哀れに聞ゆる夕、われは門によりて獨、夕ぐれの美觀を賞す。

入相の鐘、空林を亘つて彼方の寒村にひゞく時、家路をいそぐ農夫の影細く長く地に引きて、夕陽今や西山に傾かむとす。千條の金線片雲を射て閃き、大空いやが上に高く澄みて、崇高の氣天地に充てり。暮雲飄々として四天にさまよひ、その重なるところ紅紫濃く、その疎なるところ橙黄朱藍の匂おざやかにして、彩雲たえず浮動して變幻極りなく、或は春の野ににほへる千草の花の互に色香を競へるが如く、或は天津乙女の徐ろに歩を移して翠袖紅裾風のまに〳〵飄るが如し。

やがて夕照の色次第にうすれゆき、見る村里淡靄罩めて、遥につゞく林並木も、炊烟あがる茅屋も、行手をいそぐ旅人の姿も、輕羅一重へだゝて見るが如く、長島の村落、燈光一つ瞬す。東天、太白星の奇しく光るにつれて、萬象またたく夜の世界に葬り去られぬ。

ほの暗き芭蕉の根元、遣水のほとり、月待つ虫の聲と共に、まどかなる月一輪、彼方の木の間より出づれば參差たる樹影明かに地に落ちて、天地皆その清光に浴しぬ。唯だ見る、物ぐらき鎭守の森に、夜の霞のつどいて、何物かの秘事を語るが如し。

# 魚と草

和歌山　秦　歌

## 錦魚

父君のいともめて給ひて今年夏のはしめつ方より小池にて養ひし愛らしき魚は錦魚にこそ初め池に入れし時は皆黒く小さくありつれど家人打より他愛もなく飼育しければ此頃はおどろくばかり大きくなりな色もいろ〳〵とかわりきて赤きもあれば紅梅絞もあり又まだらもあれば白きも黒きもあり夕方には妾が心計のさし水をするなり錦魚はよろこびてか浮びて餌をこふ樣愛らし餌には麩をあたふなりあたえなばみな一ッ所によりあつまりて食ふ樣又面白しとも愛らし

## 白萩

こよいはいつになく空はれ月は心よく我が庭を輝かしぬ妾は只一人椽端にたゞずみてすぎこし方の事など思ひつゝふと見れは垣にそひて今日咲きし白萩の月に輝らされて池にうつりぬあゝ思ゑは去年の今日にてありしよ我が親しき友は吹く秋風に誘はれてかへらぬたびへ行き給ひしは嗚呼彼の君のありにしひは今宵の如くさゑし月夜に小池の端をつたひ歩き面白く唱歌をうたひたのしく語りて共に笑ひしにあゝ今は友なく只一人月は眺め池を見るも何の面白みもなし眺めまじ思ふまじ月も友もいつ來給ひしか母上の來て早くいねよとのおゝせにしたがい臥戸に入りぬ朝つとにおきいでゝ垣根に咲きし白萩五本六本手折りて亡友のみはかに參りぬ。

# 筆のすさび

伊勢宇治中之切町　河原芳子

### ○うれしきもの

父の命せんとて招き狀參らせたる人々の、殘りなうつどひましたる。師の君の病癒えて、花野のわたりそゞろありきし給ふに廻り遇ひたる。野分の風の事なくて止みたる。ゆくりなくも初もみぢ見出てたる、折ふしはら〳〵と時雨したるなぞ何にたとへん。菌多き山狩、豐年祭のもてなし。

### ○いまはしきもの

それの學舍にもの學びすといふ少女子の、あさましき振舞したりとてもてはやされたる。我獨り物知り顏に醫書など大聲に打ち誦したる。壯士俳優の評など試むる、いみじう忌はし。男女同權よとしたり顏にほのめかして、夫を蔑にし。智事分別もなき幼兒をつれなう打擲するらんよ。わけて、酒など嗜み。煙草ども輪に吹きて、よろづ温順ならぬこそいはん方なけれ。夜遊びする人、陰口多き人。

### ○耻かしきもの

拙き歌の選に入りたるさへ有るに、色紙染めてよと強ひられたる。婚禮のむしろに侍りて客人に物問はれたる。まいて、結婚の巾打ち出てられたる際は、胸のみいたう騷きて、さうはゑ答えず、顏赤らめてさしうつむけは。あな、優しの姿なるを、誰が家の春に匂はんとはする理想のホームとやらんこそ、其の若き血もて描き出さるれなど、讃むれ給ふに。新婚の夜の樣思ひやられて、いよ〳〵耻かしうぞおのゝかれぬる。あて人の前にて物落したる。初冬の挨拶。

# 日記の一節

相州よし子

八月一日　快晴

珍らしく晴れたるに、けふせてはとて終日張物す、熱ければ手拭かぶりたるに、弟「ヤア姉様が茸賣りになつたといふ、なかしや、春と秋と初茸松露などもて來る女の常におのれがやうに手拭かぶりたるを覺え居たるなり

二日　小雨しと〳〵と降りくらす。

日すがら裁縫す。

夜に入り淋しきまゝ、昨年の此頃など思ひ出てゝ、母君どふたり語らひつゝ、いとゞ袂をうるほしぬ。何事も知らで愛らしき面に、笑さへうかべて眠れる弟、羨ましくもあはれに。

三日　昨日に同じ

庭にも下りたちがたきまゝ端近う出てゝながめ居たるに、姉「上の喜び給ふ事あり、あでゝ覗給へ」といふ、「さりとはあまり廣すぎてとり所がわからぬなり、片端聞かせよ、美事あてんに」といへば「されはよ、朝夕の風あまり烈しきからに秋風とや思ひたがへけん、越路の雁の」といふ。「さらば愛子の君よりの御玉章なりな」とてとりて見る、なかしき事細々とつられ給へり、いとうれしくて直ちに御かへりごとす。

四日　けふも、

裁縫にも惓みたる折から、母上「あまり徒然なるに白玉拵へばや」とのたまふ。妹、人形の衣縫ふに心をとられて出て來れば「手傳はぬ者は食べまじきぞ」といへば、庭の隅に泥玩び居たる弟、手も洗はて「僕も手傳はう」

五日　曇、

庭の隅にちとはかり作れる茄子胡瓜など始めてとりたればとて神前に供ふ「やよ父上、昨年まで父上が手づから作らせ給へる畑あらすまじとて、母上とふたり丹精したるものぞ、うけさせ給へや」と、心の中に念ずうけさせ給ひけんか、あはれ。

糸のやうなる夕月、櫻の木の間に見出てたる、めづらかにうれしく、いそぎて呼びたるに、「あわたゞしう何事ぞ」と、母上に叱らる。

# 夏の朝

長崎古賀秀子

曉告ぐる鐘の音に起き出て例の如く庭に出づれは四隣寂として聲なく只草影にすだく虫の音のいともかすかなるを聞くのみ大空に殘る曉月一輪は光次第に淡くなりゆきて東天の白むを見る折しも吹きくる風は冷かに衣の袖にたはむれやがては松尉に渉りて無絃の琴を弾じ音やめばいづくもなく裏の小川に流るゝ水はちよろ〳〵と自然の音樂を奏するが如しまがきに縋りて咲ける朝顔の花二三輪露をつくめる樣の優さしくも又哀れなり草を分け歩をうつせは草の葉末における露のはら〳〵とこぼれて冷かなる珠は我足に落ちて心地よき事譬ふるにものなし

嗚呼此絶美絶妙なる朝の景色こそげに神の作りし樂園なり

## 其日中

扇の風もむし暑き眞日中いづこよりともなく來りし蟬のなく音日頃は床しく覺ゆるもかゝる時は喧かしましくぞきく門邊をすぐる氷々の賣聲こそ實に万金にもまして嬉し

## 其夜

午睡の一夢さめて我にかえれば日は早や西山にかたむき夕日なゝめに松の梢を照せり日ぐらしの泣く音たえし頃湯殿はてゝ椽先に出ずれば涼しき風は軒の風鈴に通ひてチリン／＼と音たつるも愛らしく涼しげなり雲らし早しと思ふまもなくさつと降る夕立に木の葉より滴たゝる露の玉かずしれずおちる様の哀い惜しや、夕立の雲の晴間よりもれ出る月の光さやかに池の面に宿りて吹く風毎に長くみじかくゆら／＼とゆらめく景色實に夏の暑さも忘れてさながら秋の夜の心地ぞすなる

評、閑深

# 荒磯の一夜

西田はる子

西にかくるゝ日の女神、我が世のなごりとての夕ばえ色うつくしう輝き出し給ひしも、漸々にあはくうすれゆきて、丹き青き白き黄なりしそれさへ、やがて只黑く、み空に夕づゝのきらめきけるが、東に、西に、南に、北に、四つ五つまた六つ。

とばかりありて、いざよふ月は、波間に浮び出てぬ。あやしの風、皆ふきおちて、只そよふく秋風の袂にかろきが、漁火散る沖のふなうた歌せて、雄波雌波の上をわたり、清なる玉藻の花に觸れ、秋草あはれの妹を過ぎては、露を玉とちらし、やがて並木の松の梢に結べば、舞の袖を飜し〻天女や立ちにけむ、小琴のしらべぞさんざめく。

うまいする人のあくまで甘き夢を貪るが如く、あはれまことに、極みなき面影や、とそゞろ得がたきよろこびに打たれて、露に流れつ、水に浮びつ、はてしもしらぬさすらひの、我が身をも忘れてゝ、疲れし足をはげましつゝ、そこはかとなく海邊をさまよひ行く。

かくて、一二町が程續きしが、遂に、小高き丘の上にやすらひぬ。口には靜に、大なる慰藉や、そゞろ心ゆくながめかなとつぶやきつゝ。ふけ行く夜氣、うしほの如く身に迫る。鏡の如くすめる仲秋の月、空高くきしり出てつ。さえ渡るそが光に山も、水も、砂も、巖も、草も、木も、只ほの白き色にかゞやき初めたり。

雲は月を呑めり。

磯の香こもる濱風、なほ盡きず。

いぶかしや。ありしは皆、夜の色につゝまれてや、たゞ岩に碎くる波の音の、たゆむ折ふしに、たゆむ其の折ふしに、やさしき物の音ぞかすかに／＼きこゆる。思ひがけなきことに、我れにもあらず立ち上りつ。日ねもす温き春の牧場にはみ暮して、晩鐘ひゞく夕暮を、鈴音さやかに家路にたどる少羊の如く、何となう、なつかしき思ひにひかされて、ゆかしき音する方へと、眞砂路に、足跡小さくきざみつゝ歩み行きぬ。

月は雲間を出てたり。

あはれ、をゝしくも氣高き樂人の御姿や。目もあやに白ひやかなる少女の、大波小波くだくる岩の上に立ちて、ヸオリンおごそかに奏で給ふ。しかすがに敬虔の情にうたれて、足、波にけたるゝも打忘れて、ながめ入りつ。

巴がへし、渦がへし、岩下に碎くる大波小波、少女の身にちりかゝる白雪、白花。されど姿はかわりしまゝなり。音色も。

高く、細く、やがてかすかに。低く、太く、やがてせはしく迫り來り、夜目にきらめく弓は白蛇の如く、なだゝかに、七度の調律、五音の曼變、四つの糸たえまなくひゞき／＼て、音色は響きわたつみにひろごりひろごり、やがてぞきゆる。かくて失せ、かくてあらはれ、虚空にひびき、海底にくゞる。

海の音も、風のこゑも、皆あたりのコーラスをなして山なく、水なく、人なく、我れなく、世は只進みゆく極度の曲のみ。モビレか、マドリガールか、しらず。月は入りぬ。とこしへに入りぬ。山の端に。

## 秋夜の漫歩

長野　山崎倫子

朝来明よりうつとうしく降りしきりし時雨の、夕つ方なごりなう晴れ、山々に立ちこめしさ霧も拭ふが如くに霽けぬれば、霎時待まの程もあらせず、望の夜の月の最とも花やかに、浅間嶽のふんはりとたな引し煙の末にさし出でたる、いひ知らずおかしければ、妹を促しつ、そこはかとなくすぞろありきけるほとに、筧の水や増りけん、瀧の音一きは高く、池面を渡る夕風に、立に漣の月影の砕けて、さながら黄金の鱗を散らしたらんが如くおかし公園の植込のはたり、青葉の屋根朽し氷屋の屋簷のほとり、梧の葉、もみぢ葉などの散り亂れてもの寂し、並木の樫のは末に宿りし麗はしき露の玉はきらくく月にゐゝやくらむか得も云はれぬあざやかな眺めよ!、葉桐は折れ、廣葉は破れ、只頭をたるゝ蓮の實の夫が幾本ともなく立てる小さき池の畔を過ぎり、花屋敷の方に行き、先づ一番に白黒張交せの雨障子もておほへる菊花園に立ち寄れば、電氣灯の光まばゆくてさながら畫のやう、花綻、自晃、色光錦など遂見もせず名も知らざるが、丈にも餘る程より短きは尺ばかりのもの迄、顔よく植ゑなべられてうるはしとゆうるはし、水注ぐ翁の姿等にからかうも亦滑稽にこそ、いざ帰らんと福光館の前に來かゝれば明日の準備なるらん、談持つ藍豆絞りの手拭にはちまきしたる若者等が体の配列など忙しげに見ゆ、其軒並の蟲屋には、さまぐくの秋の哀な音に泣かせ、まつ虫ならねど人待ち顔である―思はづ夜も更けぬれば急き我家にと志し辻の角に來れば、『おでんかん酒』と記せし露店の行燈の火影うすれて爺はいねむり居りぬ、人通りは絶え果て、月かけのみぞ堀川にさいたる……裏町通をたどる折りしも、とある小さき柴戸鎖せし數奇屋の欄干に、年る頃千餘り三つ四つなる優しげなる女の童、忍び音に掻き鳴らす玉琴の妙なる節聞え、み空の目もしばしば隔ひ、つひぢを繞る遣水もあはれ淀まんばかりなれば、妹の手を取りしのびくに垣根に寄りそひぬれば、露の玉置きそふに萩の花亂れ、今迄泣きわびし鈴蟲の音俄かに絶えしかば、あはれなつかしの琴の君は、人やありつと驚き顔に琴かい抱き逃け入り給ひぬ、―餘り心惜さに、思はず

『忍び音に鳴く蟲ならねど垣の外に琴聞く袖は露に濡つゝ』かく誦じて立ち去らんとせしに、われと同じ心の人やありけん、植ゑごみの中より

『萩の露散りて亂るゝ垣の根に忍音に泣くその人やたれ』と口すさひつゝなり立つけしきの心惡くからねども、さすがに垣間見し事のうら恥づかしくも亦心苦しくて、得あはで歸りぬる社、口惜しう心殘りの極みなりき、家の柴戸に着きし折しも、門の柳のひまもりて、月を掠め江南に赴きゆく雁の一行、姿として夜はいよゝ更けわたりぬ…

## 紅葉狩

佐賀　山邊まつ子

久方の空のけはひ、吹き來る風の何となう夏にかわりて身にしみて、日頃手にしたる扇を忘れ、あるは萩のした葉色つくを見るも、門田に落穗ついばむ雀のこゑくくにも秋の景色で思ひ知られて、山邊の紅葉如何あ

らんと、常に篭りてのみありし妾も、今日の一日を遊さ暮さむとて、日比親しうする友達誰彼を誘ひて程遠からぬ紅葉の名所に比山に行きける。

霧吹きむすぶ朝風袖を拂ひて涼しゆく心地よろしく、四方山の話なしつゝ館につきぬ。眺むれば山のたゞずまひいとゆかしきに、かたへを走る谷川の水清らかに、紅葉の二ひら三ひら浮きつ沈みつ流て、川上の紅葉さこそと思はれ足の急くを覚えず。折りから向ふより謡うた可笑しゆ唄ひくる馬子の、曳く馬の背に負ふわする新柴に、なりそへたる楓の一枝誰に見せんの心づくしぞ。

ますゝ行きて山の中腹に至れば、向ふの山より谷川をはさみて此山の谷まで、今を盛りとうすくこく紅葉したる楓の生茂りたるが、下葉の殊に色づくは時雨もいたくもりやしけむ、其の間には松杉なゞの緑の色のたちまじりて、朝日の照り合ひたるいと面白し。

米のあなわには伽藍めるにや、紅葉のひまに塔の影見ゆ。谷川の彼方の岸には苔むせる巌の峙ちて、せかるゝ水の白く迸り其の傍の小徑には、旅僧にやあらむ墨染の衣きたるが、上り坂行く笠の上に四ひら五ひら風のまにゝ紅葉の散るなど、繪にもましたる眺ゆにて、みやび雄ならば落葉かいあつめて腰打ちすゑ、林間酒をあたゝめて紅葉や焼くなど、打ちぎんじて歌にも詩にも作るならんも、わらはの如きさるはさ知らざる者は作らん様もなく、たゞ塵の世をへだつる心地してながめゐる程に、日脚やうゝに傾きければ、家のいとなみもおもひ出でゝさらばと名残に一枝手折り、友達うながしてかへり路につきぬ。

# 朝色

東京　吉野春子

枕頭の燈火何時しか消え失せ窓漏る纖月は西山の端に落ちんとして星の清一つ二つ、簾を弄ぶそよ風に誘はれてしのぶ草の忍びにも似ず風鈴の涼しげに鳴るも手にとる如く聞ゆめり、池の汀に樹てる糸柳は遊ばんともせて吹てがまにゝに颺々たり折しもあれゴーンと撞き出す明の鐘の水に音して遠く長く餘韻を引て幽かに消え去らんとせし時立籠りたる曉霧の幕を破りて杜鵑一聲!!!

いりのころ月に酔して我か窓の
　硝子かすめてほとゝきす飛ぶ

又も撞き出す鐘の音に連れて鶏鳴曉を報ずれば東の空に茜さし旺洋たる我が園の池に黄金の漣麗はろしく夜はほのゝ明放れたり、天津日影の運きて木々の梢千草の葉末に至るまで宿りし露の玉美くしくそが上に眠れる蜂蝶は如何に安らけき夢地や辿るらむ、池の面を渡る一陣の涼風は木々草々の黄金の玉を惜氣なく打散らす事の増らしさよ、梢に囀つる鳥の音は楽底の翡翠と調和して山姫の音楽も斯くまでにはと思はろ、籬に咲ける朝顔の一輪はれは顔なるも愛らし築山より遙かに沖の方見てあれば風帆白帆遠く近く見へ初め勇ましき櫓の聲さては節面白き漁歌牧笛の寄せてはかへす金波に響きて幽かに聞へ快き事いはん方なし鐘を聞せば九重の奥の造り瑞雲瑠璃と共に御代の榮を祝ぐにも似ていと長こき眼にこそ

# 江の島夕照

東京　氏家玄子

鎌倉に懐古の涙を殺ぎ、由井ヶ濱に風光の美を賞せし姿は今し、名にし負ふ江の島の客となりて、をちこちを逍遥すべく、旅館を立出でしが、來るともなしに島が西岸に到りぬ。此處、臥牛の如き、蟠虎の如き、狂獅の如き、奔馬の如き、遊猫の如き、吠犬の如き千態萬狀なる大小の危岩怪礁亂立して。百花爛漫たる春の日も楓葉赫灼たる秋の日も、絶えず〳〵押寄する男波女波は、是等岩礁の青苔に滑なる、小貝に飾られたる頭を戀に惱めるうらぶれの少女子が忍び音の其れにも似たる一種の韻律を放して靜かに洗ふ。妾は此の波に追はれつゝ辛らくも滑なる岩礁の上を歩みて、いと高き巖頭に立ちぬ。見渡せば、終朱花やかに、潔よく、活快に、拔山の勇を以て、蓋世の智を以て、一世を驚かしたる、一代を驅がしたる大英傑が花々しき末路の其れにも似たる美しき夕照は、今そが名殘りの美はしき光りをもて、若草萌ゆる宏き〳〵牧場の如く一碧萬頃なる海野に金色の長蛇を漂はせ、妾が立てる巖角の麓に碎くる白波の沫泡を黄金色に疑じ、背後の斷崖に、蚪龍が雲を呼むで深淵を出でむする姿に似たる一本の緑滴る翠松の葉を金針に化しつ。あゝ美しの夕日の色よとたゞふる青葉の裡より夕陽更に傾きて、遙か海の彼方、煙波縹渺たる間に仄暗う霞みもて遙きたる長蛇の蜿蜒として横はるが如き伊豆の連山、其が右の方更に黒う更に高う仄見ゆる相摸の諸峰、さては畑の如き群山を脚下に、獨り巍然として天外に聳ゆる八朶玲瓏たる芙蓉の靈峯など、熟せる葡萄の如く紫色を呈しぬ。

分又分と過ぎ行く内に、相豆の諸山を彩りし夕陽が名殘の紫色は漸れ去りて、西天灰色と變じ行きつ。時しも名知らぬ水鳥二羽何處に塒求めむとてか、模糊たる夕靄に蔽はれて今や眠らむとする海面を掠むが如く飛りぬ。さる中に草緑なる牧場の夕、白き小羊が牧童の打鳴らす合圖の笛をたよりに集り來たるが如く、藍を溶したるにも似たらむ眞碧の濤邊に、白き眞帆片帆あげたる漁舟二艘三艘長閑けき平和なや欸乃の聲をのせて、彼處の岸につどひ來りぬ。舟水晶の眞砂が上に引上げられ、漁夫各自が苫屋へと歸行きし後は、海面前よりも寂然として靜に、彼方富士を始め伊豆の諸峰影夢の如く。安慰なる平和なる夜の神のみ手に抱かれて、今し金蛇を漂はしたる碧き海も、紫色を呈したる遠き山々も等しく眠りに就きつ。

# 日記の一節

滋賀　細野孝子

六月三日、

よべより雨なごりなう止みぬ、そよ吹く風茲一時間あまりは命の杖とも柱とも、さらへ殘りの歷史ひもとく、秋子の君歌會に誘ひ給ふ、不在中舊友閑子の君より玉章、中に

思ひれのよな〳〵夢に逢ことを
たゝかたときの現ともかな(古歌)

夕六時君子の君訪はる、ヴハイオリンの合奏、文學の話、知らず〳〵夜をふかす、夜一時電報夢を破る、兄君今香港へ若とのしらせ、一同安堵。

六月四日、

雨降る蛙の聲小川に高し。

六月五日、

雨ふらず、庭の若葉ごし薔薇の花ゆかしく咲く、矢車の喧ましき響き、鼎鐵の風に孕む趣味は何處。夕ぐれ叙事文に丈けたまひし友の黄泉の旅に趣かれしと便りあり、嗚呼其の紀行文はいつ見らるべきか。

六月六日、

天氣なれは野邊の散歩を試む、麥生は黒畑と變り、雲雀の聲かすかに聞へ、すみれ、あざみなど御春の名殘の覺えられていとゆかし。

六月七日、

晴、間近き家の雨戸あくる音に短夜の夢破られて、蚊帳を出ず、室掃ふ程に、うなりゐし蚊の影幽になりゆくも哀れ深し。朝顔の初咲いと珍らし、大さ四寸よ、紅のビロードとの名、にあはしからねば耕の将と名づく、花も世の進むにつれてといとおかし。夜さり秋子の君訪はる、月をあびつゝ四方山の話す。

## 花園

しま根　松なみ

朝の風涼しく秋に通ひて東の山の端漸う白み初むる頃朝露ふみしたきてあるゝに任せたる花園に我は過りぬ脛をも沒する斗り生ひ繁れる雜草のひまに打なびきたる薄いとあはれにかつ／＼咲ける白紅萩の花とり／＼に愛らしくさゝやかれども露重げなる樣亦風情あり其かみ御心盡しの程も著く目もあやに咲き競ひたりし草花の數々も父上の無常の風に誘はれ給ひてよりはいつくしき慕の親の堅の實のひとり淋しき旅路の御つれ／＼を慰めまつらんとてか一本枯れ二株うせ我も／＼とおあとしたひて枯れうせつかくて去年よりも今年と年毎に淋れ行く我花園よ朝に夕に四季折々の花の繚亂しく心地よく眺めしは數ふれば早や六年の昔となりにけりさるは御さがの好ませ給ひしのみにはあらで三年以來の御いたづき臥床におはする迄にはなきものからよしと見えつゝ日毎月ごとわるくなり行く此病を心靜に養ひ給ふ御すさびなりしなり六年昔の春の暮わけて御心かけて培ひ給ひて御なやみをもなぐさめ參りし色香妙なる深見草長かりし盛りも一夜の嵐にあへなく散り果てゝいとゞ淋しさ覺えたる我夜我なつかしき父上はも遂に／＼再び歸らぬ長き長き旅路につき給ひぬあはれ深見草かれはめぐみの親のやがて散り行給ふべき悲しき月見じとてとくちり果てしにか嗟や踏馴れ給はざる黄泉の旅の御さきつかふまつりしなるべしたのもしの花よ

培ひなかりし爲か將養の親の御徒然なぐさめむとてかおほかたは御あと慕ひて殘れるは指かゞなう斗りとぞなりにたる花よ心あらば今暫し此世に止まりて嘆の淵に沈みつゝ日毎淋しく過せる我心をも慰めれかしさはれ／＼此世におはせし時には二なくかしづきまゐらせし者共の數あるも一人としても御供つかふまつらむ者もなきを御徒然慰めむとて枯れ行きにゆかしめの花よ可憐の花よ汝らは又の世にても亦美しう妙に咲き出てゝかしづきまつるなるべし頼母しの花よ

あとにのこりてあれし花園に錦添へたる花よましして白萩よ汝等はいかに沈める我心を慰めしか嬉しきぞや謝するぞやさはれ／＼なつかしき父上は死出の山路を淋しく越え給ふべければ汝らも御あと慕ひを御供つかうまつるべし散れ散れとく散れかし散りて再びめぐみのおやの御かたはら近くかしづくこそ汝等が役目ぞやはた又我本望なれ

ひやゝけき風さと渡りて露重げなる仙翁白百合桔梗はゆら／＼と打ふるひてさながらうなづくが如く白露匂ふ萩の一本白き花びら二ツ三ツ露と共にはら／＼と袖にこぼれぬ

評日。纏綿せる文致なり。

# 消息文

文學士　大町桂月君選評

## （天）月夜他郷の病院より故園の友によする文

信州上水内郡榮村、住ヨ木　小林つね子

幾とせぶりに候はん望の夜の空拭ひたらん樣に月の桂の花紅葉も一しほうるはしくほゝゑみ居り候。お前樣にはいかに今宵を御樂しふ過したまふらん、此程迄やゝ樣のやうに存じたる御總領樣早ぬ今宵の月の三五にならせ給へるを思へば今更ながら御子達の御成人は御速かなるものに御座候。早くより御琴とり遊ばさるゝとて承り居りしがいつしか其道の奥がを究めさせ給事御當は更人なりお前樣の御喜び推はかり奉り候。今宵は定めし玉ほとばしる御爪音御たか殿のみ簾もるゝ御事と心ゆく斗りに候得共、それも夢ならでは承りがたき此身の上隨分御推察くだされたく候。さても御庭の紅葉、錦織るらん池の漣、八千草の花にやどせる玉の光などは御歌袋の料と存じ候。もし御筆の落毛など御惠みくだされ候はゞその嬉しさは草葉がくれに運命を嘆つ秋の胡蝶の果敢な身のあした旭に遇ひぬる喜びにも勝りぬべく候。此方にはかねてより御前樣方に笑はれ候ほど負けぬ氣がちの身にも、病てふ恐ろしの惡魔にはえたへて、此處なる病院の一と間にたれこみ候てより、送らぬ年は暮れ逝きて、迎へぬ年は廻り來て、いつしか三年にあまり思ひ候へどついぞ怠る樣しも無く何事にや此頃は終夜しばしのまどろみもならず、いとゞ胸のみ苦しふ思あかし候。さる人の申候に此處はありし世に時めきし長者が邸趾に候とや、さばれ今はしも殘る姿はなくてそのかみ一世の豪華を照らしけむ月も今日は空しく老ひたるかたみの松に昔の影をとゞめ、葉末の露は亂れゐへてこのもかのも啼蟲の聲いと悲しく秋風斗り身に入み渡り候。お前樣には今宵の月いか

につれなくいかに寂しき影をこの窓にうつし候やとおぼし給ふらん、月に泣く蟲の聲さへ我身にあはれを添ふるかとしも思はれ、同じ病に惱める人の呻吟の聲もあはれに込みあげし咳拂手にとるやうに聞くにつけ見るにつけ、いづれか袂をうるほし腸を斷つ種ならぬはあらず候。げに、我肺の病こそ病のうちの病と申候へばいづれの日を限ともわかず、あたら名醫の藥さへ只一日二日と末期の命をつぎのばす斗りと思ひきはめながらも尙迷ひとかやかよはき心のみだれみだれてはかなき限りに覺え候。さても末の露もとの雫後れ先だつ例しには洩れぬ人の身の上、つひに逝く道とはかねて知りながら、いかに來ん秋はいづこのいかなる月にはかなき影をてらさるべきや。かく認め居り候うちにも月の影いよゝさやけく照りまさり候程に心はます〳〵曇りゆく斗りに候。思ひ出で思ひかへし候ひては御懷しさやる方もなく候へば、たとひ一目なりともちか〳〵に御姿見せられたく候。ことに我儘の願には候へど御渡らせの節先つ頃うつさせられ候同窓會寫眞一葉賜はりたく、よろづあはれに幼馴染の人々のみ戀しく、思ひくらじ候。身の願はこれを限りにいたし候。折から夜やも更けぬらん、友に別れし雁一つ傾きかゝる月を掠め、故鄕の空さして鳴きゆく聲いとも哀れに聞こえ候。

あなかしこ。

〔評〕文うるはしくして、あはれ也。(桂月)

## (地)

# 友の不品行をいましむ

遠江國濱松町
大工 杉浦きよ子

春なほ淺き昔より、姉妹もたゞならず御交り申、御心の程もよく存居候へば、いづこなりともなく御身の上につきて、ならぬ噂のもれくるを耳にせし事もありしかど、いづれは口さがなき世の人の、餘り學びの道に勝れ給をねたましう思ふよりのしわざと、心にもとめずうちすぎ候ひしに、此頃は訪ひ來給ふ事もたえ〴〵になり行、其上日頃は雨風はげしき日も御休み遊ばされ候事なき御許樣の、昨日來給ねば、今日こそはと思ひ居りしに、其甲斐もなう、猶御影のみえさせ給はぬに、人々はたのしげにあそぶ晝の休みも、我のみは月なき夜半に立たる心地して授業するも物うく。其上に友人の誰彼樣君のあさましき噂せらるゝに、さながら我身のあざ

けりを受け候やうに覺え、口惜さとゞめがたく、なき事言ひて、人にぬれ衣着せ給ふなど、一時は云ひけさむと思ひ候ひしが、又靜に考へ候へば、火なき所に煙はたゝぬとか申すことわざも候へば、いひけさん力もなく萬一誠ならむには、一時もはやく御諫め申上ではと心も心ならず、歸宅致候ものゝ知らせ給ふごとく、病める伯母の私をのみまち居候まゝ、ふりすてゝ行むもさすがにて、本意なけれど、筆にいはせ申候。もしかゝる噂は皆根なし事にて、御許樣には、昔のまゝに清くゐらせられ候を、人の言葉をうかと信じてかゝるいまましき事申上候ものならば、其折は、此身の淺はかなる心は御笑の種となり候とも其は却てうれしく候。思へば去年の春故鄕をたちいでんとせし時。御母上樣は何と仰せ給ひしや。よもや御忘ればあるまじく存候。そをきゝ參らせし身の、其時は涙に袖ぬらし申候ひきかくまで切におもひ下さる御母上樣に、若しや風の便りに、この噂の御耳になどいりなば、如何ばかりなげかせ給ふらん、御かなしみのあまり、思はぬ病にかゝらせ給ふやうの御座候ては、如何になし給ふ御心にや。子をおもふ親の心の切なるを汲み知り給はぬ御許樣にはおはさゞりしに、いかなれば、かくも淺ましき心になり給ひしや。うらめしとも口惜しとも申すやうもこれなく候。一日もはやく業へて、御母上樣の御心を安めまゐらすることそ第一のつとめなるに、かくてはそれも叶はぬのみか、御行末もはかられずと口惜しく候。何卒御心を引かくし給ひて、四方に立ちまふいぶせき浮雲をとくとくうちはらひたまひてよ。それのみひたすらに念じまゐらせ候。この程より申きこえんとは思ひ候へども、何となうためらはれて、さしひかへ候ひしに、日毎にさわがしう申立つるをきゝては、よそならずとかくはくだくだしく申上候。憚さがしくにくげなるは、ひたすら君思ふゆゑと御ゆるし下されたく候。あなかしこ。

（評）文流暢にして、情到れり。（桂月）

（八）

# 海水浴場より友の許に

小石川柳町　稲吉てい子

君いはね、淸子樣。此浦に、待ちわびてゐる、貞を御忘れ遊はしたの。此頃は、うきを放しても泳げますよ。何ぜ、御出がありませんの。御勉强も、命あつての上で

すから、早く、ゐらつしやいましな。お好な、繆は、毎日綱の切れる程、地引に、かゝりますからね。清子樣。

（評）十五六の快闊なる小女の面目、紙表に躍動す。（桂月）

## 秀逸

### 都なる弟の許へ

長門萩奥玉江三五七寓　岩田章子

此間、堀の爺樣が都見物からお歸ての話、お前を歌舞伎座でも玉突場でも見たと。出京の折、あれ程誓つたお前、よもや、心からではあるまい、多分交際だろう。が、朱に交れば赤くなる、不思不知の間につい染まされてそふ物故、若い人は交際が一番大切よ。專門學校へも入つたお前さんの事、妾なんど申す事はありませんけれど、胸に手を措いて御覽、亡い父樣、燒けた家、辛い思をして娘の內へ懸つてお出の母上、お前の才や熱心を見込で、薄給を分て下さる義理の兄上、是等の幻が、走馬燈の樣に出ては引込、失せては顯れはせんか。ぱんにお思ひよ、歌舞伎座へ胡坐を組て涎をお流しの時、板廂傾た茅屋に、一子の成業を樂に苧繰らるゝ母樣を、血氣の櫻腕で弱い弓を射て得意がる時、鼠色の破袴に辨當提げ二里もある會社へ通ひ、薄暗い局內で務めらるゝ兄樣を。もうわの權さへ一人前になり、親は左團扇だに、お前何時迄母上に苦勞をかける氣なの、夫計りでない、家といふ重荷がお前の肩にはある。苟にも此事を考へたら、明い電燈の下には立て升まい。然、正さん、罪を悔ゐ、過を改むるは、善の最善とか、一度なまけたとてやけを起さずにどうか勉强しておくれ。姉の願とては　これ計り。此事は妾一人が聞いたばかり、今も手紙を書くのを、母上が御覽じて、正の許かと仰せられ體を大事にして吳れ、母は何時迄も辛棒して待つから追々涼氣も增す故袷を送ると。おつしやつた。母樣は、このやうに、お前を思つていらつしやるのですよ。

（評）氣がきゝて輕快、宛然世話女房の口吻也。（桂月）

### 旅中なる父か許に幼弟か寫眞送るとて

大阪　をちば

あつい〳〵と申暮しました夏も、何時のほどとにか過ぎまして、追がわ秋の朝夕は、餘程しのぎよくなりましたが、阿父樣は、そのゝち如何いらしやいますか、定め

てますます御壯健で、毎夕の御晩酌は、かゝないで、御座いましよね、宅もみな〳〵丈夫で居りますから、御安心遊して下さいませ、さて今日お送り申上ます英三さんの寫眞、これはこの春から、東京の叔母さんから歩くやうになつたら、是非寫眞をよこせ〳〵と、やかましいのでしたが、ついしつかりしないものですから、のび〳〵になつて居りましたやうやく此節では、あるくのも丈夫になりましたから、先月の二十日に撮りました。ほんとにむづかしい貌をして居りましよ。これは寫します時にかほを上げさせるために。寫眞師が頻とベルを鳴らしたのです。すると、英三さんは、驚いてかほを振り上げた所を撮られたのですから、こんな國旗なので御座いますが。下になつて御座いますからよく見えませんが、よく御覽下さいませ。左手に居りますのは、あの英三さんと極お仲よしのペチなので、御座いますおとなしいでしよ。撮る時にそれは〳〵困りましよ。英三さんかおとなしくして居ると、ペチが逃げだす。ペチがおつとして居ると英三さんが走りだすしいたしまして、やとの事でうつりました、此節はもういたづら計りいたしまして、阿母樣も私もほんとに困ちまう時が御座います。林の叔母樣が大すきで、いらつしやるとすぐ後へまはりして、あつち〳〵と申ていつも叔母樣をこまらせます。唯今は阿母樣と公園の方へあそびに行つて居りますから、ちよいと一筆申上ます。

（評）小兒と犬との樣なのぶるあたり、文章最も活動す。（桂月）

## 初めて逢ひし友におくる文

千葉ゆき子

この頃ははる〴〵こゝ許へ訪づれ給ひて、永の年月文の面にて御物語り致せしことのかず〳〵、問ひもし問はれもせしうれしさは、何にかはたとへ侍るべき。初めて御目にかゝりしこととなれど、その親しさの幼な交りの友にも增さりしは、これやさきの世に深きゆかりあるにもあらむと存じ候。いまだ逢ひ見ぬ折より、御なつかしう思ひし御許樣なれば、令かく御目にかゝり、親しう御物語りもいたしては、すぎし日にいく倍せる御慕はしさを增し申し候。されば御別れの折には、御名殘り惜しさに、御姿の見えぬまで、御見送り申し候。其の折の海老茶袴に深張傘の御姿は、今も妾の目にはちら〳〵と致し、朝夕に忘るる間とてはこれなく候。この後は、折り〳〵御目にかゝり、御話しも致したく候、

へど、山川かず隔てし里の、それも心にまかせず、唯思ひ音に泣くのみに候。あゝかゝる時しもうつしゑのあらば、又心をなぐさむすべもあらむになど、果敢なきくりごともくりかへされ候。いかで一葉めぐませ給へや永の年月御交り致し、親しう御目にもかかりながら、まだうつしゑの一枚もなきは、物たらぬことに侍るぞよ。妾のみにくきも、又近きに撮りてまゐらせむに、文机の隅にても置き給ひてよ。御許様には、この九月には、又も御出京なさるゝ御事と存じ候。妾も其の頃には、上京いたす積りに候間、其の折には又親しう御目にかゝり、御話しも致さんと今より、それのみ樂しみ居り候。先づは取急ぎ、拙き文もてかくなむ。かしこ。

（評）よくとゝのへり。（桂月）

## 妹の眼を失ひしと聞きて父母許に

大阪府中河内郡八尾村字八尾　吉岡延枝

きのふ病院より御歸りなされし由にて、早速御玉章給はり、いつもながら、今日はわけて花子の眼病いかゞかと開く間ももどかしく、いそぎ拜讀し參らせしに、思ひの外のかなしき文字に、跡はえ讀まで、さし置き申候。お手紙によれば、御兩親の一方ならぬ御心づくしも、名高き醫師の治療も、その甲斐なく、全く盲目となり終り候よし、本人はまだ幼き身の深くかなしとも思はざるべけれど、御兩親樣の御なげきさこそと推斗り參らせ候。私もたゞ一人の妹の不自由の身となりしかと思へば、何よりもかなしく、覺えず涙のみはふり落ち申候、されど昔とかはり開けし御代のありがたさには、盲啞學校などいふのも設けられ、たとへ不自由の身なりとも、志だにあらば、それ〴〵學ぶことを得べければ、あまり〴〵御力落し遊さぬやうくれ〴〵祈りあげ候。こゝまで認めし折しも冴けき月山の端をはなれて机の上に飾りおきしかれがうつしゑを清く照し候につけても、ありしことのみ忍ばれ、涙に筆もすゝみかね候。余は御目にかゝりてこそ。かしこ。

（評）親を思ひ、妹を思ふの情、簡にしてつくせり。末段情景悲し。也。（桂月）

## 夏の日友のもとに

信州　吉澤とみよ

三伏とは名のみにて、春の雨よりもわびしくふりくらし候ふかな。御地はいかならむ。雨勝ちの腐れ年かも

此の土用とは、新刊の芭蕉新聞に相みえ候が、まことにくされ年にて候よ。やりはなしにまきすておき候ひし朝顔の、自然の手にそだてられて、美くしき花、釣瓶つるやれ袖に匂ふは、あすか、あさてかとまちしかひなく、連日のあめにくちはて申候て、まことに／＼口惜しう、やる方なきうらみのかず／＼は、時々つるべのなはにあたり申候。

さすがに背戸の茄子畑のみは、一面にむらさきの玉をぬき、雨にみがゝれては又しほに御座候。あはれこその今ごろは、すゞ風に四つのたもとひるがへして、理想かたり候を、今年は互に山川をへだつる身と相成り、御もと様には、ます／＼志ざす方へいそぎ給ひ、こなたはます／＼失望のふちにしづみゆき、ただたゞ生きて息を致し居候様のみにも考へられ候。こむ事には、御卒業にしきさて來む春をまたせ給ふ君が御身こそ、うらやましう候へ。かしこ。

（評）簡淨にして、所謂女の愚痴をのべもつくせり。（桂月）

## 賞外佳作

### 月見にとて友の許へ

福岡縣筑紫郡住吉村　井上桂子

秋とはいへどまだ富士が根の雪さへ消ゆる此程の暑さに、御邊りには如何おはすらむ。去頃つひ人松虫の音に浮かされて、百草の花の紐とく秋の野に互みにま袖ふりはへつ、いたくもはじらふ女郎花を秋霧の中に手折らんとしては、穗に出て招く花薄に支へられ、むわ分鹿の影を見とめて跡追はんとしては、足もとにまつわる秋萩の哀れなる姿に心ひかれて、是非なく引返し候ひしより此方、荒れたる庭におひいづる藤袴を見ては先つ日の君の片見かと斗りいとゞ戀しう、さうとて繁き世のわざにせかるゝ身は峰の松風つやつやおんおとづれ申す事もえ侍らず、心ならずも只思渡り候折柄、今宵は胸ひきとむる望月の夜とて、さいつ程姫ヶ濱邊の妾が叔母の許より、かく斗りなしと思ふ夜を徒らにれて明さんも何んとやら、せめて心斗りの月見のまとひせまほしう思へば、御身にも是非心あひたる友どち二人三人打ちつれ、夕つけて藤の庵を叩かずや、申越候まゝ、ぞ[illegible]ようより待渡りつる事とて心躍る斗りうれしう覺え、歩みも空に[illegible]垣の露うち拂ひ、早も彼の鏧子の君をそゝのかし侍る者を。など御身にも御弟君共々萬づおんくり合せ、まげて一夜を美しきこの月の光に歌ひ明させ給はざる。今日はあしたより壓斗りの雲も隠らず今宵の月影さこそと推せられ侍るに、いかで所せき埒の内にのみ見やるべき。秋風に汐干の月の姫ヶ濱、浪立つ松の靜枝を蜘手にかけて霞みぞ渡る壹岐ノ松原のこまぬいて、紺瑠璃のいさごによするさゞら波物ば

むもあるは沖めかゝる雁金の影のまにまに舟放ちてさやけき月の歎波うち砕かんも、さては又秋萩の路ふみ分けて秋涼しき浦分衣を裾の愛宕山に翻へし、澄渡りたる荒戸の海の明月を招いて筵ならぬ東琴に、足柄山のふる事まねばむも、いとゞをかしう侍らずや。聞き給へ、磯山松を吹風は夏風楽を奏て、岩根によするさゝ波は青海波を調へつゝ、はやこてふに似たるものを、いざ給へ、蓬生の露ふみわけて。

　舞か濱波のまにまに舟うけて、
　　夜すから月にいさや歌む。

（評）たど〳〵しき節もあれど、文藻見るべし。（桂月）

# 夫を失ひたる友に送る文

東京市小石川區大門町
三十一番地中村方　木村貞子

八重の汐路隔つる程心苦しさは、先づかゝる折にぞ思ひ知られ侍る。小波だにも立ちあへざりし中川の淵に翅並べし鴛鴦の片羽の夢冷やかなるをみ歎きを、今日承り侍らむとは、神ならぬ身の露おもひよらざる事にて侍り。女子の身は親なき後は夫より外にたよる人なきを、背の君におくれさせ給ひし君が御心細さの程は、さこそと推しまつる。されど。ひたすら此の歎きのみ沈み給ひて病の床に就き給ふやうにては、それこそ大事侍れば、こなのみ深う〳〵案じまつるになむ、せめて同じ所に住む程にて侍には、先づ走りまゐりて御涙の川も我が衣手に堰きとめ參らするよすがも侍らむものを、千里を隔つる身をいかにせむ。汽車ある世も女の身にはかなはぬものにて、たゞに天翔る鳥の只管に羨やまれ侍りてなむ。さりながら忘れ形見の稚子も在しまし給ふ事故、何卒其生ひ先を力草におぼし給ひて、うら若き御身の御短慮など出させ給はぬやう、心雄々しく持たせ給ひ、天晴れ御子様御立派におほしたて遊ばされ、御あとつがせられ給ふ事こそ、こよなき御追善と存じ侍れ。此悔みはまうのぼりて聞ゆべきなれど、涙もろき身のさらぬだにぬらし給ふ御袖をぬらし添へ侍らむは、なか〳〵に忍びがたければなめげなれど、一先づ文にて聞え上げまつるになむ。心ばかりの御香資料、郵便爲替にて捧げまつれば、み靈の前にそなへ給ひてよ。あなかしこ。

（評）文うるはしけれど、たど〳〵し。殊に前後つじつま合はぬ節あり。（桂月）

# 妹の死を其友に報ずる文

みゆき

御手紙及び藥有難く只今とゞき侍りぬ。あはれ、君が折角のみなさけは親切が誠純の元に手向けん思し召しにはあらざりしならん。さあれ彼妹にして靈あらば、いかにか君のみ志を喜び侍らむを、君よ彼幸子の逝きしは昨早朝有明の燈つきなむとする頃に侍りき。二三日前にて侍りき、明日をも知れぬ身にて、のう姉君彼藥一日も早く服して癒なばいかにうれしからむと、ひそかに姉が袖擦るとも知らで、ほゝ笑むいぢらしさ、斷腸の思ひ致し候。あゝ彼幸子は虫の音に君を呼び、叶はぬ手に、君が寫眞握りしめ片手を姉が膝に置きて、……あゝ其も是も夢空蟬のはかなさよ。

これ妹の命毛たえ〴〵なる彼が手に認めし一首、字跡漸く意逝ばれと、妹が形見と末永く保ち給はゞ、我が喜び之に過ぎず、妹が魂もゆるがん。あはれ幸子は、父母を愛する如く君を愛し侍りき。あはれ、あはれ、心ははやれど、最早書くに忍びず。餘は幸に諒察せられよ。

# 秋山里より都の友へのかへし

大坂府 藤井登美子

折からの御消息うれしう拜しまゐらせ候。山里の秋の住居いかにと仰せられ候が、此山里の人となりて、なればつる身には、さにはさびしとも覺えず候へど、思へば去にし年君と共に秋の長夜の書窓、讀みあくまゝに、語りつゝはては、いつしか机にもたれしまゝにて、ね入りしこととも、幾夜なりけむ、あはれものにつけても、そゞろに思ひでられて、たゞ〳〵君こひしさのやるかたなくぞ侍るを、せめてはあはれとおぼしてとふらひ給はゞ、いかばかり嬉しかるらむ。昔の事ども聞えかはして軒端に明ろき月をも見給ひ、後ろの山に妻とふ鹿の音、近隣に打かはす砧の音をも聞あはすべく、一夜習ひたまはぬ旅寢もをかしからまし、また半日をこなたの持山にて、菌かり催せんもいと興あらむ。明日明後日の程に、畦の細道の露ふみわけて、とひ來給へ。御あるじまうけには、庭にちり、ほひたる栗ひろひとり、栗飯實てまゐらすべくなむ。こは今朝主人が裏の山にて、あさり歸れる松茸にて、少しばかりなれど差上候。御食膳にのほせ給はゞ、こよなき幸にこそ。かしこ。

# 蟲籠にそへて亡き友の母君に

東京下谷 原田照子

こゝろ無き身も秋とし云へば、何かは知らず悲しうて、徒に涙の種のみ多かるを、まして、御わたりにはいかばかりか、眺め勝ちにお座すらんと、いとゞお痛はしう聞え上ぐるになむ、今宵しも、限なき日影に催されて、一人、野面にあそがれ出づれば、蝶

れては、睦まじき二人が袖に、ひとしく〳〵かゝりけん草木の露の、いとつめたきに就けても、その當時のあたゝかき心の、忍ばる）にこそ。昔。諧共に歎ひし、「螢の光」、なつかしうて、こよひも物しぬれど、あの、ほがらなる御聲聞くよしもなく、常に好みし敷島の道、今宵もすさびぬれどあの濟き御心の泉、味ふべきすべもなく、唯樂しかりし、昔の夢をのみ繰り返しつゝさまよへば、はからずもなつかしき、松子様の御いしぶみに、接しまつりぬ。其の昔愛で給ひにし、桔梗の、色濃きを手向け、御わたりのつゝがなき事ども告げまつりつ。いざとて立ち上る草陰より、なつかしき、松虫の唯一つ、あわれに漏れければ、いとゞしくて、亡き人のおとづれ聞かん、よすがをも成りなむなど、よしなき事ども思ひつゝ、露ふみわけて求め歸り候ひぬ。折から、御わたりにも、此の月影に、いかばかりか、昔をしのばせ給ふらんと、いとたえ難きまゝ之れも手はなすに堪へぬ、いとしの虫、しびてしのびつせめてもの心やりとし給へかしとてなん。さらばさびしさはいとはすもありなんを。あはれ、この虫籠の御手にとゞかん折は、草のつゆもつきなんに、早う露ふかさ給へや。

# 秋草にうへて友の許に

下谷區 白井すみ子

おく露もしづ心なく、秋風もわきて身にしむ心地し侍る此頃を、いかゞすごさせおはしますらん。さても去年都のところせき住ひをわびて、此山里に家居うつし侍りしより、若菜につぎてまちわたりし秋草の花どもやう〳〵咲き揃ひつれば、春の花の頃契りまつりしごと、けふや見えさ

せ給はんずらん、明日や訪づれ給ふと、柴の戸たゝく風にだにおどろかされつゝ、待ちまゐらするかひもなう、御わたりにはいまだ秋のみ神のおとなひ給はぬとおぼへて、そよとの御たよりも待られば、なまめかしう咲き匂へる其風情を、一人眺めんが、いと本意なく侍るまゝ、虫のこゑ諸共、殊に咲きみだれたるを、一枝づゝ手折りてまゐらするになん。あはれは、君萩の上風御耳にとまる夜中もおはしまさば。待ちまゐらする此こゝろ。あはれとおぼし給ひて、一夜さ花野の露ふみわけつゝ蓬が宿をとぶらひ給ひなんや。此折すぐさば。山里はやう〳〵人目も草もかれはてゝ。落つる木の葉に。おとなひ給ふ道もうもれはつべくと思ひ侍ればなん。かしこ。

# つれなき友のもとに

長崎　福地篤子

陸奥のをたえの橋のゆき通ひたえはてゝよりは、わき〳〵越方の忍ばれ候て、身はいつしかに空蟬のもぬけの殻は残せとも、心は遙に君を慕ひ来て、文よみ給ふ窓の外に戀し戀しと鳴き暮すをは、哀れとは御思召すや。すゑの松山浪はこゆとももと誓ひし折も候ひしに、元より幽谷の花の都に時めき給ふ君に、此草の庵思ひ出て給へと申すこそ無理ならめ、狡兎死しては走狗さへ烹らるゝ世の中なれば。それと花子の君よ、一樹の蔭の雨やどり、一河の流れを汲みてだに、他生の縁と申候を筒井つゝ振分髮の昔よりも睦み交せし姉君のつらしとて、忘らるゝものには候まし。誠に今宵の月は更に深き記憶を呼び起し候。指折れば、みとせ以前の今月今夜君には都に登り給はんとて、其後のかたみにとうつしゑに筆染しく、たとへ留しは別るともと、松風ならぬわらはに殘しおき給ひしは、一時の戯とは思はさりしに、扨も替るは浮世の習ひとは云へ、斯まて情に厚き君の、この頃のつれなさは、必ず故ありてなんとは存じ候へ、共、去るものは疎しの諺も候へば、此なつかしき月にむかひて忘れ難きこゝろの程を、筆にのべ、哀れのものよと一言の御返し賜らん日を、波こやす貝待ち給ふ殿にもまして侍待入候。

# 新婚の友におくる

福岡市　脇山わか子

秋の初風萩の葉をわたる夕、さ霧のまよひに雁なきわたる朝、そゞろに淋しうながめられ候を、御前様にはなつかしの君と共に、伊香保の旅館の欄上、いかにながめ暮させ給ふにか、むかし〳〵諸共に寄宿舍の窓よりまどかなる日影をのぞみつゝ、理想の夢にあくがれし時に、たまへる理想の家庭をやがてはつくらせ給ふらむ。旦那樣には文學の御たしなみいと深うおはしますとか。定めし趣味深きたのしの御家庭の樣ならむと。親しき友の身にはたゞ〳〵うれしく存ぜられ候。さるにても蜜月の旅のいとながうおはしますことよ。此地をたゝせ給ひしは、蟬の聲聞えそめし頃なりしが、日々たのしき夢にあくがれさせ給ふにか、そもさる事ながら御たのしみはながく盡きせぬものを、早く歸らせ給ひて、日頃渴望せる理想の家庭を、妾等に示し給ひてよ。都も此頃は漸う秋深く、御手植ゑの我庭の萩人待ち顔に咲き揃ひ候を、御二方樣の御入來央々も待上參らせ候。御留守居の老夫婦がかこちごとも折々はもれきく候ものを、あまりに永き御逗留もいかがと存じ候。御歸宅の程指を折り數へて待ち居候。御心を引くたよりにもやと、露にぬれし萩の一ッ御好みのうす紫なるを參らせ候。あなかしこ。

# 母を失ひし友に送る

信州　豊子

遂に行く道とは豫て知りながら、昨日今日とは思はざりしを。いとも懸けられ候。いかなる病にて、かくは俄に逝ゝ給ひしや。先日の御文には、皆様御丈夫の由仰せ越されしに、など斯く俄なる御事承り候ふらん。遙からぬ事ならば、何事も打捨て參上致し、せめては御病氣の樣にても親しう承り、取敢めの御手傳なりとも致すべきに、汽車のある世も、女子には甲斐なき物に候かな。此里におはしませし頃は、毎日參上致し、何事につけても、厚きみ惠を受け、乍失禮、第二の母君と仰ぎ奉り、御別れ申して後も、朝夕の事につけ思出ぬ日はなかりし物を、こはそも夢か幻かと目もくれ心もまどい候を。況て御許樣にはいかばかりかと推し奉れば、胸もはりさけ、手も痺れて、筆の運びも知られず候。されど、又心を靜めてよく思ひ候へば、常に佛教に御心を寄せさせられ、生者必滅會者定離との事を口癖の樣に仰せられし事に候へば、御臨終如何にすゞしく御心安らかに渡らせられし御事なりけんと、せめては思ひ慰め候、誠に生者必滅の理に逃れ難き事に候へば、御許樣にも左樣御諦めなされ、御愁傷の餘り、御身害はれざる樣祈り居候。別封心ばかりの品、御靈前に御手向下され度候。あら〳〵かしこ。

# 細谷くめ子の君に送る文

仙臺　町田周子

慕なくてとの御玉章まち奉るも中々にて、幾重の山の西の空行く天津雁の信なたよりに、君が小草のあと追はせたる鳥文を、何とや見そなはすらむ。

さて御出で立ちの折に、瀧笛一聲、名殘りに殘る烟に、そぼふる小雨に秋風さへ蕭々として一際もの寂しく思ひ候ひしが、君九十九里濱あたりに渡らせられけんと思ふ頃、雨晴れて候ひき、されば太平洋に月さす雨後の景色、水戸あたりの夜の眺は言はずもがな、ほのぼのと朝日に拂ひ去られたる靄の彼處に現はれたる不二の高根は、如何に君の希望の高く潔きかを示し候ひけん。かくして事なう着き給ひし花の都に今頃は何をしてや御座すらむ、旅の御疲れを勞はり給へや。程よき宿は求め得られしか、叔母樣の知人には、早速はせ給ひしか、學校の首尾は如何にや。種々と心にかゝりて甲斐なき胸を傷めてこそ候へ。志す處につき給ひて事しげく暇御座さぬはさる事ながら、せめて父母樣に文奉られん其折には、只恙なくてつきぬとのみをだに仰せ下され給へや。他に友なき妾の心を推し量られてよ。かしく。

# 蓮の花に添ゑて友の許に

長崎　古賀秀子

其後は如何渡らせ玉ふや。たゑて御消息承られば心もとなくてなん。扨昨夜涼しき風もなきまゝ、月をしるべに西山なる叔母の許がり行き申候處、蓮の花まさかりとの知らせに、いざ眺めせんと庭になりたち候へば澄み渡る月は庭一面を照し、えならぬ先づ訪ひきて、心も爽かに相成り申候。足早に蓮池のほとりに行けば、清く美はしく開きし蓮の花の紅白浮葉の露に宿る月影は夜光の玉とも見えてしばしは此汚れなき樣になかめ入り申候。

さるにても思ひ浮ぶは、去年の事にて候よ。君の姉君と三人月の夕。此花を眺め語りし事を、げに泥の中よりぬけ出てゝにこりに染まず咲き出でし花蓮の清く美はしきそれのこと我等も此塵の世の塵にしむとも心のみは清かれがしと賴みし當時の忍ばれて、いとゝ悲しく、時ならぬ露に袂をぬらし候。されば此花一輪手折りて御墓前にさゝげなば、いさゝかなき姉君樣のみたまなぐさめまつるはしともならんかと、かくは御送り申候故、何卒御墓參のみぎり御手向け下され度願ひ上候。此頃の月、一人なかれるは本意なき事に候へば、御許樣にもぜひ〳〵御出で浮き遊ばされ度まち入り申候。かしこ。

# 嫁したる姉の許へ送る文

岐阜　高木にわ子

久しく御目に掛りませんが、御機嫌よろしいか、御尋れ致します。大分此頃はお暑うなりましたから、常々御弱ひ御身故、どうぞ御大切にして下さい。私方も皆まめて居りますから、御安心して下さい。國雄も大きう成人致しまして、何事ても人の云ふことをよく眞似するやうになりまして、誠に可愛らしう御座ります。御姉樣も一度來て下さつておんふして御覽なさい、きつと目方の增したのに驚きなさるてせう。內の雞十四羽雛が孵りました。其毛色が白と黑と半分づゝて、大へん奇麗て御ざります。玉をうむ樣に成りましたならば、二三羽差し上げませう。犬の子を寺町樣から貰ひましたが、是も可愛らしう御座りまして、國雄が喜こんでもて遊びますが、時々下駄をくはへて行くには困ります。二三日先にも國雄のぬいて置きました下駄が見えません、不思議〳〵と、大勢て探かましても有りませぬて、致し方なく新らしいのを出して、はかせました。其翌日叡の中から出て來ました故、犬がくはへて行たのであらうと、國雄が子供ながらに犬を責めました。琴稽古は只今迄は大垣の御師匠樣てしたが、其方は僅二日程しか願へません故、先月よりは岐阜て良い御人を賴みまして、四日の中にさむしろと蝶の夢とを習ひましたが、隨分面白うあります。あなたも御出になつた時に聞いて下さい。猫も又子を四つ生みましたが、其中て三毛が二つ居りますから、姉の樣所へ三毛を上げませう。姉さんの來て下さる迄には、御約束の花瓶敷を編んで置きます故、あなたも私の御願のりぼんを買つて來て下さい。どうぞ兄上樣へ宜しうおつしやつて下さい。外の事は御出ての時に申します。さやうなら。

# 師の君を送る文

近江長濱町
船山藤田方　白菊

一筆申上まゐらせ候。休暇以來は思ひの外御無沙汰にうち過ぎ。誠に御申譯もこれ無く候。この頃は殘る暑さもはげしく。ほと〳〵堪へ難く候へ共。先生には何の御障りもおはさず候や。平素は雨に風に露御いとひも無く。人を敎へて倦ませられぬずとも。斯る折には靜かに御保養ありて。日頃の御疲れをも息はせらるべく。妾等も今暫し家庭のまどゐを放に致し。やがて來ん學期には。再びあつき御敎を蒙らんものをと。指をりかぞへて樂しみ居り候。さるに思ひきや。今朝綾子の君より承り候へば。このたび先生には北海道の某學校に御榮轉と定まり。便船の御都合を以て四五日の內に御出立遊ばされ候由。まことに寐耳に水とやらにて夢かと計り打驚かれ。過ぎにし事などの忍ばれて。限りなう御別れの惜まれ候。思ひ廻らさば長の歲月。海山も數ならぬ御慈愛を受け。殊に御

持病のある御身を以て。聊か其勞を惜み玉はず慈母の兒をはぐゝむが如く。いと懇ろに御教訓下され候に付け。折々は同窓の君たちと相語りて。厚き教へにて學藝の進みたるを喜び。或時は御熱心の餘り御つかれも出てずやなど御案じ申上げ。哀れ先生をして何の恙もなう。此末ながく當校に御勤在あれかしと。呉々も祈り上げ候ひしに。其甲斐もなくて今より後は遠く海山を隔てゝ容易く御めもじも叶はぬかと思へば。最とゞ胸にせまりて悲しう存じまゐらせ候。さり乍ら遁れ難き公命。殊にめでたき御榮進にもあれば。妾等もいつ迄か徒らに歎き申すべき。此上は兼ての御をしへの如く。後に來玉はん師の君を先生と思ひまゐらせ。益々御教訓を守りて學びの道をはげみ候はんに。其邊は御心安う思しめし下され度候。何卒先生も彼地に趣かせられ候はゞ。氣候の異るあたりに深く御こゝろを用ゐられ。國家の爲御身を大切に遊ばされ候はん事を返す〴〵も願上げまゐらせ候。しかこ。

尙々郵便はがき三十葉。聊か御別のしるし迄に差上げまゐらせ候。何れ明日には同窓の君達と共に早朝より伺ひ上ぐべく候。

## 七草を贈られける返し

ひ　め　神尾幸子

秋雨寂しうふり暮して、昨日今日問ふ人もなき賤が屋に、今日はも御情深き御父に添へて、弟御様御手づから御摘みの秋の七草澤に賜はりいと〳〵嬉しう、伏屋も例ならで飾飾ると覺え申候。重雄事はかなく相成候てより、久しう御顔ばせも拜し奉らず、世を憂きものと過しが申候とこ ろ、はからずも御父賜はり、いつ迄も戀らせ給はぬ御情に、わが心あさましう覺え申候、倭武様殊に昔の契忘れ給はで、雄々しき御身に秋草など手折らせ給ひし御心の程、辱けなさに涙こぼれ候、重雄もいかに嬉しう存じ申べき事ならんと、さそく靈前に供へ申候。兩親よりもとく厚う御禮申せよとの事にて候まゝ、私參りて久々に御目もじも仕り御禮申上度候へども、とかく涙もろき身の反つて失禮致すべきかと、不敢取筥の文にのみかくはきこえ參らせ候、倭武様へも何卒よろしく御つたへれんじ上候何れ其中參上ゆる〳〵御禮申述べく、先は御返り言ばかりをかくなん、あなかしこ。

## 春の頃別れし友に

下谷　嵯峨淑子

いよ〳〵、昨日は御歸國あらせられたる御事東と存候。今はとてたのむの雁の別れだに止め難き花や月を、まして果敢なき此身に君が御かしますえ止めんとはかけて思はざりしかど、さりとて猶御別れ戀しうこそ覺え候へ哀れなつりしの君よ、濱名湖頭、落暉の夕べ、雁に別れ、花に別れ、更に友に別れにし家身を思起し給ふやいかに。忘れ玉ふな、御便りをば皆差のべてまつ者一人都にありと。

過る日の一日の隔ても分乘千歳相みぬ心して、御事はしさたへ難う云々の御玉章いふ嬉しう、御用多くおはすべき所を、態々別れ告こし給ひし御志自に余り、忝く存候、花をみすてゝ行雁を秋霜わけて渡りくるとか申侍ふめるに、まいて君にはこん作樂會迄には必再びとの御詞よ、いさゝか頼もしう心強くも思はれて、さはれ幾年の春秋山ある里を隔てゝ、夢路にのみ通ひにし戀しき父母の御膝下に之より送り玉ふべき御日よ、いかに樂しうもおはすらん。情厚き愛の御手に迎へられて、優しの姉上、いつくしの弟君と杜陰に郭公尋ね、小沼に螢おひなんどし玉ふ夕べより、

あゝ思へば御羨しき極みになん。さるに此身は相變らず淋しき戀に行く春を惜しては暮らし候に、昨日今日は殊に春雨降續きて書の卷々にもうみ、心も共にしめやかに相成り、いと侘しう候。其春雨の霧靄をおびたる花の顏泣きて別れにし人戀しにはひとり樋のふみには非ずとよ。扨も誠に君様とはいかなる過世にや候べき。去年の秋端なく御交り受てより、優しき御もなてしや、かしこき御方や、しるに付ても、そぞろ御なつかしうて、幾年か交らひし友にもまして、親しう思上げ申候、彼楽しかりし學びやの明暮いそしみあひし其折もはてしもなしとはいへ、又自づとはてありて、友千鳥理想を抱き希望を語りて、若渓のほとりを立離れては、又とあふべきよすがも稀に候はんに、せめてはなつかしの御寫しゑなりとも賜はりて、戀しき所の思出に致し度候、御手許にもおはさば惠み玉ひてや。紫緣の君達相變らず御交際下され候段、いと嬉しく存候。哀れ君様も兼ての給ひし如く、末長う愚の身を捨玉ふな。柳櫻をこき交し都の春も今や漸く老て靜心なく花の文よむ戀に 散かゝる なんど、物哀れに候。かくてやがては五月雨の降みふらずみ定めなき空にも相成べく候に、日頃余り强くもゐまさぬ御身よ、呉々厭ひ玉へと計り切に願上候。先日御約束の新刊二册今日御送り申候間御覽の上は又批評承るべくと樂みをり候

## 七草見物に誘ふ文

東京　みとり女

年毎に暑中よりは殘暑の方堪へかたくは候へ共今年はまたあまりなる暑さにて、唯あつし〳〵とのみ申しくらし居候夕つかたになり候へば籬の虫のみは、わづかに秋を知らせ候ものから猶吹き來る風のまれ〳〵なるはいづこに秋の立ち候やらん。御許さまには、此暑さを、いかに過させ給ふらん。こゝには、まづ事なうて侍れば、み心安う思せさせ給はり度候、さて今日廣尾なる親戚の許より、此頃は七草々やう〳〵氣しき立ちて、ふく風になびく姿の風情ありと、申し越し候へば、夕れ月出づる頃より

ゑみそめし花の千草の露分けて
すゝしき虫のこゑをきかはや

となん思ひたち侍りしをいかにぞや、一つみ心にましまさば明日の夕さり迄かし參らせんを、とかうのみけしき日らせさせ給へや、かしこ

## 扇を贈る文

東京　堀口まつ女

荒金の土さへさくてふ此頃の御暑さか如何に凌かせ給ふらむ。こゝには日にそひて賑はしき濱邊の樣に心ひかれ終日潮になづさひくらし侍ればおもての色なと、いたうこげゆきて今はまこと漁士もと見まかふばかりになり申すさるにても今年こそは、と兼て契り聞え參らせつれば、やがて御渡りも遠からじと指よび折りつゝ待上げ參らするを、いつ迄人に物思はしめ給ふ御心にてかと、かつはうらめしうなむ。燒やうしほなど言けけむも、中々に侍るぞかし。折柄よき便につけて、かくは怨じ聞えまつる、いかて、とう思し立たせ給ひね、添へて參らする扇一もと、こは珍しからねど、來ぬ人を待つほの浦のうら風をゆたかにこめて、封し參らすれば、やがて掌にならし給はん程は、露さそふ春風の猶それよりも嬉しきふしをや、傳へおこし給ふらんと、かくは、あら〳〵かしこ

## 友へのかえし

さいたま　ひろし

みどり吹きくる　風に衣袂はせて江戸川の清き流れに棹さし、露とみだれ玉と飛びかふ螢を捕へしなどまだ昨日今日の如く記はれ候、さても君となつかしき袖を分ちて互に文の林をたどらんと學の庭に赴きしは後はたゞ／＼手足を失ひたらん心地にて今は共に心をうちあけて睦まじく語りあふ友もなく獨り清き月を眺め虫の哀れに鳴く聲をきゝ雁のつらなり渡るを見れば君もさぞかし忍び給ふらん袖をからし申し候、さて今日の夕ぐれ美はしき御文賜はりそが上に優しき御寫眞をたまはりし嬉しさよ玉章と御姿を拜み參らせば御目もじ致して話受け玉はる心地せられいときなつかしく只君が錦きて歸り來まさん日をのみ指をり數へて待ち居り候かれてより歌を御詠じなさるは御得意と存じ居り候へしにまた／＼先月の女學世界にて君の御詠歌を見參らしゝに一入御上達にて誠に御うらやましく候、妾は母と共に君の御うはさ申さぬ日とてはなく只々涙にむせび居り候、あはれこれより後も御いとまには何とぞ折々御地の模樣など御知らせ下され候はゞいとも／＼うれしく候、まだ／＼述べたき事は濱の眞砂の數つきず候へ共又も後るゝ雁にと早々かしこ。

## 野分のあした友の許へ

伊勢　河原芳子

いづこも同じ夕暮の淋しさなど、霧迷ふ松原に消え入る鐘の音をはかなみし頃より、さと吹き渡りし神路嵐ものすごう、雨さへいみじう降りそひたるものから、庭に綾織る千種の花の、つれなき風におやめらるゝが口惜しうて、終夜露まどろまれず、おどろ／＼しかりし闇の板戸の、明方近うなりぬる頃、やう／＼心安うなりける嬉しさ、夕霧の大將の、紫の上をはじめて見給ひけんも、かゝる折なりけむと思はるゝに、荒れまさりたる萩の宿のいとはづかしうて、亂れふしたる女郎花のさま、まづぞ、あはれとほゝゑまれぬるに、廣きみ園生の内は、さぞ、眼覺しからんとおぼえられはべるなん、いと心もとなうて。

おとづれん言の葉さへもなきほどに
荒れし野分のあさがほの垣

## 歸省の中途より友の許に

茨城　山口すみ子

宵やみのおぐらさよ、今宵の程にもふり出てなむ空の色合と、獨甲板の上をさまよひつゝ眺め候へば、よせくる波をおし切りて進む機關の音にみ惑高う聞ゆる淋しさ、身は闇の中に何者かの翼に乘りて、遠く／＼走り去るが如き心細さに、またもや今朝波止場にて御別れ申せし時の事共思ひ出されて、御上戀しう、友の誰彼慕はしう、故郷へ走る船ながらも今少しくあゆみのおそかれかしと思はれ申候。

この一夏を打暮さば、やがてまた樂しき教の園にて御目にかゝる身にてありながら、などかくはかり胸の思ひの切なるらん。ありし寄宿の窓の思ひは、故郷の空なつかしう親はらからを慕ひしものを、今はまた學びの庭を戀ひ友の誰彼忍ぶ心の忙しさ、さても我儘なる姿の心よと、そゞろにおかしう存ぜられ申候。

余りのおなつかしさに急ぎ甲板を下り船室に入りて、御手づから賜ひし鉛筆の心がみつゝありしがまゝの走り書き、例のせゝかしき心笑はせ給へや、筆さしおきて見上ぐる空に、微なる星のまたゝきは怪しう此身を笑ふにやと恥しきに、さらばこの一夏幸多くて過させ給へ、やがて歸京の折にはおかしき田舍の事のくさぐさもたらして、文よむ窓の笑ひの種となし侍らむ。

あなかしく　とし

## ●故芳野芳陵夫人綱子

世には、德望家を以て稱せらるゝ婦人少かられど、中には、其名の實に副はざるが如きもの、亦た尠からざるべき乎、されど、又た無名の婦人にして、却て其德行の高きものあるを見る、故芳野綱子の如刀自き即ち其一人たるべきか。

芳野綱子は、文化七年二月四日を以て江戸に生る、魚商清水武兵衛氏の長女なり、其少にして生家に居りし頃は、家業を助くるの傍、一二の師に就きて、少しばかり讀書手習ひせしのみにて、別に更めて學問せしといふ程の事も無れど、其の能く家事に立ち働くを見て、人の之れを褒めざるはなかりしと云ふ、文化十一年、十九歲にして芳野金陵氏に嫁きぬ、氏は後ちに金陵先生とて名儒の聞え高き人なれども、當時は未だ書生時代にして、生活にも窮する程なりければ、綱子嫁ぎて以來は、自ら炊水の勞を取るのみか、暇あれば裁縫の事にも從ひ、節儉力行の精神を以て、一意家政を治むることに勉めぬ、爲めに、良人をして毫も家事の憂ひなく、專ら講學の業に從ふを得せしめたり、その頃良人金陵氏は、門弟を宅に集めて、漢學を講じ、人物教養の道に盡くし居れど、其門弟より得る所の謝金は、薪米の資を給するにも足らざる程なりし、斯かる境遇に在りて、悠々として學を講じ、以て他日昌平校の儒官となり、大學博士に榮任せらるゝの素養を爲し、又た門弟を教養するを得せしめたるのみならず、能く家業を仕上げて、一時は生活にさへ困りし境遇を轉んじて後ちには、万頃の田甫を大塚村附近に購ひ、巍然として素封家の觀を爲し、何一つ不足なき生活を送るを得るに至らしめたるもの、先生學德の高きに因るべしといへども、亦た夫人内助の力與て大なりと云ふべし。

今夫人の德行の一つ二つを擧ぐれは、先生の平生、門弟に對するや頗る嚴なりしも、夫人は、溫厚の心と、慈仁の情を以て門生を遇し、恰かも我子の如くにしければ、門生は、皆先生の威嚴を畏れ、夫人の恩德に懷きたりき、又た其晩年の頃は、退屈を慰むるために、時々杖を曳いて村閭を散歩し、途に窮民に遇へば、財囊より金を出たして與へ、または家に連れ歸りて、飮食を施して遣るなど、終始德行の事に勉めて倦まざりき、賢明にして且つ德望ある婦人に非らずんば、焉んぞ能く此の如くなるを得む、

夫人に女數人あり、いづれも優れたる人々なれども、中にも今の相續者世經氏の如きは、道義を尙びて、氣節なり、嘗て衆議院議員となり、また東京府會副議長等となり、侃々諤々の議論を以て、公共の事務に盡瘁し、頗る市民間の輿望を收むるものあり、また以て夫人の家庭教育法に宜しきを得たるを知るべし、芳野先生の門下、又た人物を出たすもの少なからず、現に官吏其他の職に就き居れば、夫人の本年一月十九日、九十三才の高齡を以て逝くや、皆其舊德を慕へて、吊祭の典を擧ぐ、祭文の如きも頗る多かりし中に、夫人と生前知交ありし某老儒の祭文、頗る要領を得て、且つ妥當なる頌賛と見るべければ、其の祭文中の一節を摘載して、本傳記の欠を補ひぬ。

孺人於婦道、比之古賢媛、毫無愧者歟、年甫十九、嬪於先生、方此時先生創開業張皇坫、孺人夙起夜寐、裁縫中饋、財用出入、躬親爲之、使先生得無所累而一意從事筆研、勞亦至矣、況當時家道未振、日月所入束脩潤筆、纔可以供炭薪、孺人節儉自守、推髻布衣、五日一浴、十一日梳、甚則典衣却笄以補不足、其用心之若、豈一朝夕之所能日助耶、又頗解文字、家政之暇、授句讀於子弟、其視子弟猶吾兒輩、在塾之士、莫不感其慈愛、後先生業日盛、名聲隆起、筮仕田中侯、補昌平儒官、任大學博士、晩買萬頃田園于大塚里、巍然如素封、是雖固由先生之學德之盛、且大而孺人内助之功與有力焉矣、洪範五福、以壽爲首、富次之、孺人始雖勤勞家事、終則得富與壽考、以悠々終年、安知不天之所以報吉人乎。

尙ほ夫人の遺骸は、谷中天王寺の先塋の側に葬れりといふ。

## ●大倉光子刀自

刀自は越後國新發田町の產にして明治の商傑大倉喜八氏の妹なり。妙齡にして他に嫁せしも不幸良人に後れ爾來今日に至るまで寡獨なりしが近年家兄の招ぎに應じて鄕里を立ち東京に來り向島に僑居せり、居常節儉にして身に奉ずる事極めて薄く斯くして數年の間に蓄儲せるもの萬金。近日家兄の發起せし大倉商業學校の義擧を聞きて大に感ずる處あり、平素の蓄儲中より公債證書にて壹萬圓を學校に寄附せんことを學校監督長石黑男爵に申出しかば、男爵は直ちに是を協議會の議に付し同會の決議を以て一昨月二十八日之を受領し學校資本金の内に加へ協議員列席に於て謝狀を渡されしといふ、女流にして平素節儉を以て貯金し之を公共の事業に寄附したるは誠に奇特の至りといふべし。

名流雜爼

# 工藤眞葛女史

石井研堂

天下皆太平に馴れて、奢侈と逸樂とに流れ、大名乃至小祿の臣まで、借財の爲めに町人に苦めらるゝ者は多けれども、銹たれども鑓一筋といふ士氣ある者は少く、まして婦人にありては、香奩情事の外聞くこと稀なりし寛政文化の世に方り、慨然として經世の志を發起し、餘憤を僅に著書に霽して其生を終りし、仙臺の女丈夫工藤眞葛女史の如きは、千百人中蓋し一人と謂ふべきなり。今瀧澤馬琴の文に見えし女史を經とし、齋藤竹堂及び仙臺史傳、女史の著書などに見ゆる所を緯とし、その小傳を試みんとす。

（一）、その父祖は如何。

遺傳といふとは、確的に其結果を見るべからざるやうなれども、瓜の蔓に茄子の實らず、蝌斗の鯉魚にならざるは慥にて、家庭の感化力と、父祖の遺傳性とは、無言の大敎育者たるを疑はざるなり。

眞葛女史の先は、播磨野口の城主長井四郎左衛門に出で、天正年中に名ありけるが、子孫零落、長井大雲（大庵？）に至り、紀州公に醫もて仕へぬ。大雲に男子三人ありけれども、當時のお抱醫師は、圓顱長袖、幇間と相距ると遠からざりしかば、大雲謂へらく、これ祖先を辱しむるものなりと爲し、其子に武術のみを學ばせたれば、柔術にさし矢の射手に、各々名を得たりき。

眞葛女史の父工藤平助は、大雲の三子にして、仙臺藩醫工藤丈庵の嗣となりしものなり。名は球卿字を元琳といひ、醫術を義父丈庵に、漢學を服部南郊に學び、長じて伊達宗村重村齋村三公に歴仕し、亦父の志を受けて、

圓顱長袖を耻ぢ、俗體にてあり、名をも平助と稱しぬ。嘗て嘗見錄といへるを著はして、當世の急務を論じ、重村公に厚く用ひられて政務に參り、小姓頭出入司諸職に進み、才量益著はれけるが、只其所論概ね時俗に合はず、多く實行しがたきが一失なりしといふ。性又健訟赴難を喜び、食客常に家に滿てりとぞ。

仙臺の奇傑林子平も、嘗て平助に寓せしが、平助もと海防の憂を懷き、私議する〻少からず、子平の、海國兵談、三國圖說を著せるは、平助の言に因ること多しといふ。其著述數部、何れも國禁に觸る〻もの〻みなりしかば、子孫奇禍を恐れて、敢て人に示さず、因て、世人、子平を知りて、平助を知らざるもの多しとなり。寛政十二年六十七歳にて歿しぬ。

斯の如く、女史の祖先は、一國の城主に出て、祖父も二人の伯父も時俗に異りし人、殊に父は、一種の半醫半政治家にして、著作さへある先憂の奇人なり、此の胤を受けたる女史の、稀世の才を得しは、所謂瓜の蔓に茄子の實りしものに非ず、寧ろ當然の結果と謂ふを得べきなり。

## （二）　その兄弟

か〻る祖父、か〻る父の胤に生れたる同胞七人ありて、長女は綾子所謂眞葛女史にして、次を工藤太郎といひ、才子の聞えありしに、父に先たちて身まかり、次二人は女子にて、これもよすがもとめて後早世し、その次を源四郎元輔といひ、和漢の才子にて詩歌を善くし、醫術も拙からざりしに、惜むへし短命にて子なかりしかば、僅に名跡のみ遺れり。その次は女子にて栲といへり。年來越前侯の姫君に仕へたりしが、姫亡くなりて後も、比丘尼となりて萩尼と稱し、鐵砲洲の邸內にあん。手跡に巧にして和歌の道にも通じたる人なりし。その次も亦女子にして、ある醫師に嫁きしが、亦早く世を去りしとぞ。

七人の同胞才も貌もとり〴〵なりしが、末のかよ子が宮仕に參るとき、兄元輔、能く勤めよ、兩親の惠みの露は同しくして、心の各たがへるは、かの七くさてふ花に似たりとて、

巳がじゝに匂ふ秋野の七くさも、露の惠みはかわらざりけり、

と詠みて贈りたりけるを、後に綾子の聞き知りて、よくも誡めしものかな、さらばその七くさの花にたとへんとて、太郎は藤ばかま、楮子には萩、自らに名を分ち、其次なる女は朝がほといふやうは葛ばなと定めたりければ、これよりして、物には眞葛とも記したり。

かゝるめでたき同胞なりしも、何れも七草の秋をも待たで、靑春の間に枯槁し、たゞ眞葛萩の二女のみは、文化の末まで、繁霜冷雨頼る蔭もなき荒園中に、其餘生を永らへぬ。

（三）、少時の敎育。

七人の兄弟各其匂ひを爭へるが中にも、眞葛女史のみは、特に幼時より常に異る志ありしものゝ如し。明和壬辰の江戸大火の時は、僅十歳ばかりの小娘なりしが、物價暴騰して細民窮に泣く由を聞き、いかなれば、商人の心の鬼々しきよ、われ民の父母たる身にしあらば、かゝるとは爲せじものを、女に生れしとの悔しさよと、獨り歎きしとありとなん。これよりは、我は必ず、女の範となならんと志を起して、身を愼み行ひを勵み、女史はおもてこそ肝要ならめと、愛敬つきたらんやうにもしつ、又漢學を修めたく思ひしに、父いたく禁めて、女の博士ぶりたるはわろし、假名文見よといはれしかば、源氏伊勢などを常に枕の友とし、歳十六の時、始めて一頁ほとの和文を物せしに、父の平助、之を當時の和文家村田春海に見せけるに、痛く激賞して、師なくしてかくまでに綴れるとの才女よとほめたりとなり。女史は、只、伊勢を手本にして綴れるに、譽められけ



ることのけやけさに恥ぢて、この後は親にすら見せざりしが、尙善くせんとの志は止まざりき。

手跡は、伯父なる人、(紀藩山本忠右衛門ともいふ)瀧本流の能書なりしかば、その手を習ひて大方は究めけるが、晩年、右の腕の痛む病を獲てよりは、若き時に劣りしといふ。

又ある時は、弟元輔に、四書の講釋をさせ、只一度聞くことを得、孔子の敎は、すべてかゝる筋ならんと、頼もしく思ひしとなり。

女史の父は、假名書を讀むことを勸めき。弟は和歌漢詩に長じ、伯父に能書家のあるあり、加ふるに女史の天性多才にして、所謂一を聞きて十を知る少女なりしかば、巾幗社會の尤物と爲れるも、敢て因なきにあらざりし。

(四)、奉公と結婚。

これより先き、女史年十六七にして、仙臺侯の館に宮仕することはなれり。由來宮仕には、同儕間の陷擠猜忌など忌はしきことのみ行はるゝものなるが、女史の始めてこゝに入るや、奉公は、われ獨なりと思ふこそよけれ、多くの同役ありとも、勤むるは我獨りなりと思はゞ、心安からんと覺悟したりしが、果して、朋輩にも惜まれず人の怠を咎むる心もなくして安かりしといふ。この、人に責むること薄くして、自ら責むること厚き覺悟さへあらば、朋友間にありても、家族間にありても、其他如何なる場合に處しても、適くとして不可なることなく、自ら人間處世の大旨に適合せり。

かくて奉公のこと終りて宿に下りしことは、母なる人果て、幼妹を後見る人もなかりしかば、三十餘歳を過ぐるまで、家事の取締に身を委ねたりしが、父平助常にいひけるは、多くの女子の内一人を、國勝手なる人の妻とせば、元輔の爲めにも末善からんとなり。されども、われ仙臺に赴かんといふ者も無かりしに、女史のみは、父のみ志、何をも厭はじ、兎も角も善きに計はれよといひしにぞ、父喜びてそれ〴〵口をかけおきけるに、當時江戸勤番なりし只野伊賀といふ(祿千石)人の、後妻に恰好ならんとて、仲人之を伊賀に謀りしに、伊賀依違として日を延しぬ。女史即ち和歌二首を詠じけるが、其一に

かきおこす人しなければ埋火の身は徒に消えんとすらん。

とありしを、伊賀傳へ聞て其才情を喜び、聘を厚うして迎へしとぞ。何ぞその加賀の千代女が新婚の際に「澁かろか知れねど柿の初ちぎり」の句を詠みしに似るや。さても女史は仙臺城の二ノ丸に近き、只野氏の屋敷に赴くことになりしが、之を聞きて諫めし者のありしに、女史答へて、「それ父の志なり、何條己の心をもて、父の志に背くべき。われ三十六歳を一期として死せりと思はゞ、恨みも悔もなし。仙臺は最も厭はしき地なり。且つ聲だみてむくつけき男に歸き、話相手もなき宿を終生守らんは、素より望む所には非ざれども、宿世惡くして地獄に墮ち、鬼の呵責を受くるにはまさらん。」となり。其あきらめ方の尋常なるを見ると共に、本邦婦人の榮なきを憐むの情に堪へざるものあるなり。

（五）、著作と文章。

女史は、心ならずも父の志に任せ、仙臺只野氏に嫁しぬ。後、間もなく父平助は歿しぬ。良人伊賀も歿し、嫡子圖書の世となりぬ。家風は、思に染まぬとのみ多かりしも、繼母たるの故を以て、何事も得言はず、そが爲すまに〱せざるとなかりしが、同胞はすでに多く世を去り、父も良人も亦彼の世の人となりにしとなれば、悲しひ歎くこと一方ならず、われ、始め女の範と爲らんと志せしをも、成し果てず、よし、人に異る書を著はして世にも知られ、祖先の名をも遺さんと思ひしに、當時は旗下も大名も其臣隷も皆、士風廢頽、財政窘迫の世にして、諸侯は債主の爲めに苦められながら妻妾の費を節すると能はず、或は官位を望みて、其の周旋者の食物となるを知らざるの類、時弊頗る多かりしかば、濟世經濟の冊子三卷を著して「獨考」と名つけぬ。時に文化十四年冬十二月、女史の年五十五歳といふ。古來、閨秀の著書少きには非ざれども、時弊を矯正し、風俗を改善せんとのものはいと少し。而して今「獨考」の出でしは、稍突飛の觀なきに非ず。されども、其父平助は、「管見錄」を綴りて時弊を摘發したる人、「海國兵談」を作らしめて、世人の熟睡を覺さんとせし人、其持論は多く時俗

と合はずとて惜まれし人なり。此親の志を志とせる女史、文學の趣味を解せし同胞中に人となりし女史が、今この種の著書あるも、敢て其因なしとせざるなり。この他、奥州ばなし、磯つたひ、七濱巡覧記、松島紀行、紅蓮尼傳なと、地理史傳の書と、昔がたり、問はずかたり、秋の七くさ、筆のはこびおと、祖先のよ、同胞のよなとを記せるものあり。

女史は、幼時より、源氏伊勢を愛讀したりといひ、十六の時に始めて和文を作りしといひ、漢書を讀むよを禁ぜられたりといふによりて見れば、其文章の原つく所知るべし。其の文を行るや、他に奇とすべき節なしと雖も、勉めて難解の古文に擬せんともせず、平易流暢意到り筆到れる點は取るべきに似たり。今、「奥州ばなし」の中の一節を抜き出して、左に例すべし。

　高尾かとと。

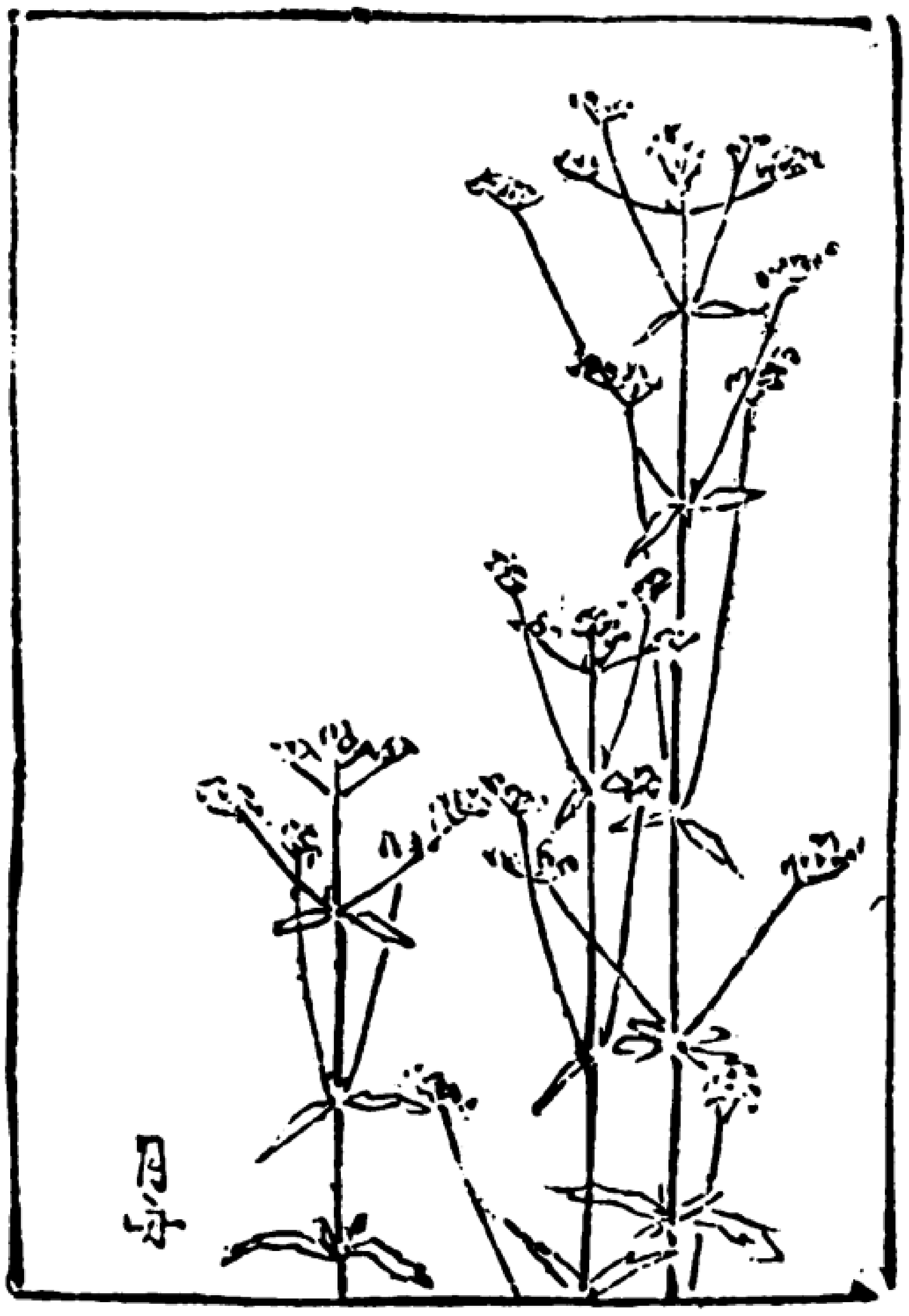
むかしの國主、高尾といふ遊女を、こかねにかへてくるわを出し給ひて、御たちまてもめしいれられず、中す川にて切はふらせ給と、世の人思へるはあらぬよ也。是は歌上るりに、おもしろくとそへて、作りなせしが、やがて誠のよく成しもの也、高尾はやはり、御たちにめしつかはれて、のち老女と成て、老後跡をたてくたされしは、番士杉原重太夫、又新太夫と、代々かはるく名のりて、(祿玄米六百石)今日付役を勤むる重太夫、則ちその末也、只野家親近なる故、ことのよしはしれり、杉原家にても、世人あらぬよをまことしやかに唱ふるは、をかしと思ふべけれど、我こそ高尾が末也と、名のらんもおもたゝしからねば、おしだまりて聞ながしをるよとなりき、又白石の女あだ打とて、宮城野しのぶなどいふも、またくなきこと也
此兩説は、作りもの世にひろこりし也、

以て一斑は知らる。殊に和歌は其得意にして晩年は優に一家を爲せりとなり。其才憐むべし。

　(六)、瀧澤馬琴との文通。

文政二年の春、女史、妹の萩尼に托して「獨考」の原稿三巻と手紙とを、遠く瀧澤馬琴の宅に致さしめ、添削を請へり。馬琴見て其見識の非凡を愛せしも、其の牴牾

に、只「馬琴様、みちのくの眞葛と」書けるを禮なしとて斥けしに、こたびは、父祖同胞のことより、おのが身の上、此書を綴れるゆかりまで、詳に筆に言はせて懇に請ふ所あり、「こゝには話相手とてもなく、只明け暮れ物を考へ見ることの癖となり、病ともなり侍れり、さて思ふやう、何の爲に生れ出つらん、女一人の心にて、世界の人の苦みを助けんと思ふは、爲し難き爲とは知りながら、只この事を思ふが故に、日夜安き心もなく、無益に苦めり、今はやもめにもなりつるに、なげきそのこさんとてもなし、息の通はん限りは、この歎きやむ事能はじ、今の此身は、たとへば、小蛇の物に包まれて、死もやらず、生もせず、むなしき思ひのこるに等し、君雨となり風となりて、志を引き助け給はらば、もし天に顯はるゝことのありもやせん」といふやうなる志を述べ、且つ戯號の馬琴を書きすてにせしも、決して他意なきを陳謝しければ、馬琴も、今年の末までには果し參らせんとの答す。これより幾たびか文の交通あり、毎に梂尼の手にて取りつげり。



かくて、その年の暮に、馬琴は、かの原稿の、假名と本字との誤を正したるのみにて別に、「獨考論」二卷をかきて其の論旨を辨正し、之を陸奥に送る時、いつまでも交らんは素より望む所なれども、男おみなの交りは、頭の雪を冬の花と見あやまりて咎むる人もあらん、李下に冠を正さず、瓜田に履を入れざるに如かず御交りもこれ限りと思召せなどいひ遣りたれば、その明の春に、女史紙、筆、埋木の栞など、數々の土産を贈りて、其勞を謝したるを限りに、文の通ひ路は中絶えき唯この後三とせばかりの間は、人しく馬琴が家に寄贈

丸を買ひにやり。消息をよそながら探らしめしといふ。馬琴その後、「眞葛の嫗」の一編（兎園小説第十一編にあり）を綴りて、詳に女史の素性より文通の顚末を述べけるが、そが中にも「これよりの後、まとろまぬ曉毎に思ひ出て、そのあけの朝消息さへ取り出しつゝ見る毎に、涙は胸に滿潮の深きなげきとなりにたり」など記したり。繾綣の情言外に溢れて、いと濃なりしを見るに足れり。女史が、「獨考」の稿本を馬琴に送れるにつきては、「書き果てゝ後に、誰に精けを頼まんかと、久しく思ひ煩ひしに、かゝる人に見せよと、兼て信仰せし岩不動の御示しありし」といふに過ぎず。唯章句の末に耽り、無用の閑文字を弄するものならんには兎も角、世を濟ひ人を救はんとの經濟論、意達すればこゝに足れり、何ぞ特に遙々書を寄せて斧正を請ふを要せんや。今之を忖度するに、女史が特に馬琴を撰びて其草稿を見せつるは、唯に字句上の修正を得んとには非ずして、當時小説壇の牛耳を執り、しかも毛色の一種異りたる此の著作家に因緣したらば、わが著書を世に弘むる機會もやあらんなとの考なりしやも圖られず。果して、世人が女史の名を知りけるは、馬琴の筆に紹介されしが多し。當時、馬琴も、女史の草稿を、友人に貸して見せしめしは、「奥州ばなし」の末に「乃者又一本を製して貸進の料と爲す」と跋し　又馬琴の友默老が、「獨考」を借覽したる禮狀の現存するなどにて明なり。又馬琴が、書肆に謀りて國禁に觸れざるものゝみを、上木せんとの志ありしは確なりしが、其事は成らずして止みき。兎まれ角まれ、女史が、「風となり雨となりて、助け給へ、もし天に顯はるゝとのありもやせん」と請ひしとの、徒勞とならざりしぞ幸なる。

（七）、　批評と紀念。

女史が人に責むると薄うして、自ら責むると厚かりしは、すでに述べたるが如し。又男まさりの魂ありて、天下の憂に先たッて憂へ、性を男に稟けざりしを憾めるともすでに述べたるが如し。又、母の歿後は、代りて幼妹の世話に任じ、嫁して後ち、「前妻生む所の兒を愛育するに尤も力あり、全家親睦闔落其婦行を賞し」（仙臺

史傳の語)たるを見れば、家庭に於る女史の一斑をも窺ひ知るに難からず。たゞ馬琴は「いたく癇症にて尊大の風ありしを、己聊高慢の鼻をおさへしとあり」(奥州ばなしの奥書)といへり。これ始めての手紙に馬琴樣と書放されたるが癪に障りての言なるべけれども、たゞこの一事を以て、直に尊大の評を下すは酷ならずとせざるなり。まして女史が此事の分疏には「たとひ老いたりとも、男に物言はんに、懇ぶりたらんは艶げなるべしと思ひしより、禮なしと見られにけん、露ばかりも輕しめる心あらば、人にも見せぬ草稿の直しを賴むべきや」とあるぞ誠なん。却て馬琴自らの尊大を證するに近しとす。

この稀世の女丈夫も、空しく大志を抱いて事志に順はず、文政八年六月廿八日年六十三にて其家にて歿し、幾種の著書のみ、永く此世の紀念とはなりぬ。若し女史をして明治の今日に生れしめ、其言はんと欲する所、其行はんと欲する所を、自由にせしめたらんには、必ず一世を動すに足ると有りしならんと信ず。生れし時に遭はず、われ女史の爲めに惜むこと深し。

(完)

## 書籍

書籍は少年を誘掖し老年を樂ましめ無聊を慰め徒然を殺し人事の煩累を忘れしめ心配と情慾とを和げ失望の積鬱を散す吾人若し社會に出て、生者に交際するに厭かば退て書籍に向して死者を訪問せよ死者は其交際對、中に毫も傲慢の色を顯はすとなく城府を設くるとなきものなり

コリア

書籍は吾人の最良教師にして而して吾人に鞭韃を加へず吾人を怒罵せず又吾人に金錢衣服を要せざるなり試に書籍に接近して其容貌を窺へ其常に孜々として疑問に答へんと準備しつゝあるを知らん故に汝若しこれに問ひ毫も隱蔽する所なかるべく汝若しこれを誤解するとも毫も不平を唱ふることなかるべく汝若し無識なりとも毫も汝を笑ふとなかるべきなり

僧正リチヤアード、デ、ビウリー

# お春の受けたる教訓

枯川學人
多摩樓主人 合譯

## 其一

お春は加留牧師一家中のいたづらものであつた。兩親が彼の話しをする時には、何時でも「困つた子だ」と云つて顔をしかめはするもの丶、其愛らしい處を見ると、惡戲なぞ爲さうにも思はれぬので、亦微笑を浮べるのが常であつた。

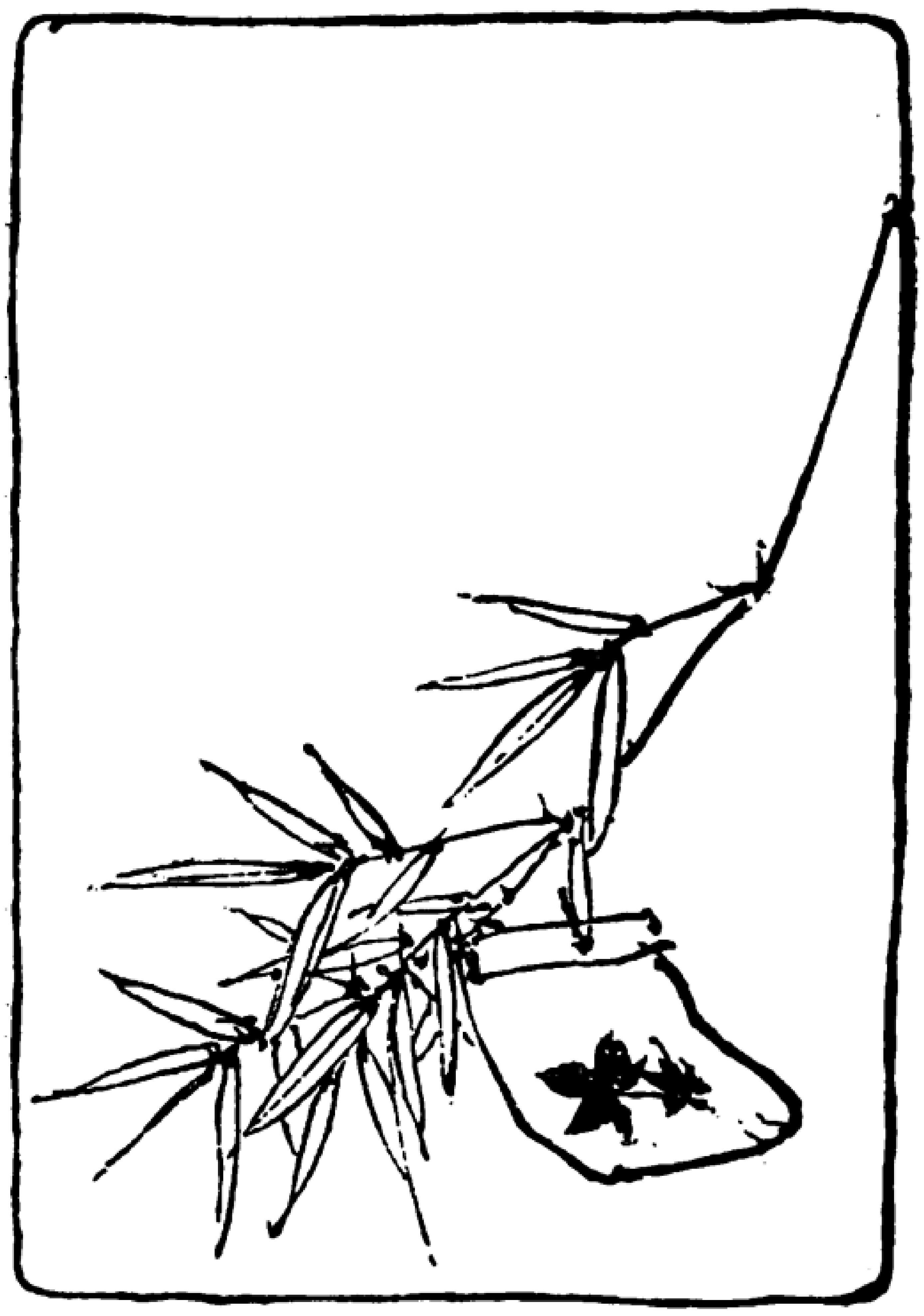
他の小兒なら打棄つて置いても、大丈夫大人しく遊ぶ年頃になつても、お春は兎角人に面倒をかける樣な事ばかり爲でかすのである。極小さな時でも、一寸と乳母が目を放した間に寢床から轉がり落ちた事もある。二歳位になつた時、大鞄の蓋のあけてあるのをいぢくつて、其蓋の落ちる拍子に自分の指を食はれて、千切れこそはしなかつたが、其ふとつた肉に深い凹みを拵へた事もある。それから少し大きくなつてのことである．が、弟の赤坊の生れた時、人形の眼を押へて引込ませたと同じ樣に思つてあぶなく、其赤坊の眼を押しつぶす所であつた事もある。又お母さんが近處の子供を集めて園遊會をさせてやつた時、小さい男の子を苺畑の中へ衝き仆して、其顔にさん〲突き傷を拵へさせた事もある。それから又、日曜學校では、庭の梨の木に登る第一の名人で、いつでも惡るいたづらの隊長であつた。

併し惡戲を見つかつた時には、兎ても叱ることの出來ないやうな愛らしい調子で、「お母さん、どうしよう、私そんなつもりではなかつたのよ」「お父さん、私、眞實に忘れてたの、御免なさいよ」「乳母や、私お前に約束するわ、私もう屹度爲ないからね、堪忍してお呉れ、エ」、と云ふのがお定りであつた。そして美しい愛らしい娘で、これがいたづらで、我儘で、云ふ事をきかぬ抔とは、兎ても眞實とは思へぬ程であつたが、實の處は矢張りいたづらと我儘とを兼ねて居たのである。

或時お母さんはお春に斯う云つたことがある。「お前はどうしてさうだらうねエ、眞實に氣をお付けてないと、

何時か屹度取返しのつかないやうな事を爲出かして、一生忘れられない樣な辛い目にお逢ひだよ、それは私は出來るだけそんなことの無い樣に氣をつけてはあげるけれど、能くお前も覺えてお居てよ。エ、好いかエ、好い兒だからね。」

お春はこれを忘れまいと心掛けたが、其心掛は無駄であつた。そして終にお母さんの言の全く事實となる場合が來たお春が丁度十二の歳であつた其處の領主の櫻井伯爵と云ふが死なられて、暫くすると其甥御が新主人として外國から歸て來て、其處に住はれる事となつた。此事を聞いて加留牧師の家の小兒達は大變に喜んで居た、と云ふのは、新主人の櫻井伯爵に小さいお孃樣が一人お居でなさるからである。すると或日曜日に、櫻井伯が奇麗な奥樣と丁度お春位なお孃樣とを



伴れて敎會にお出になつた。お孃樣は白い洋服に大きな帽子で、丁度小兒達の思つて居たやうに、クリスマスの時の繪に見る樣な美しい方であつた。其日の午後になると、お春と妹のお雪とは、何方がお孃樣とお友達になるかと云ふ事で喧嘩を初めた、お雪は、「お孃樣は十歳で丁度私と仝年だから私がお友達になるのよ」、と云つたが、お春は、「お孃樣はお雪さんよりは大きくつて居らつしやるし、只た一人のお娘さんて大人ばかりの中に居らつしやるのだから、屹度年上の者がお好きですよ、だから私がお相手をするのよ」、と云ひ、此爭ひは終に涙を見るに至つた、お雪は「お春さんは自分勝手だよ」、と云ひ、お春は又「お雪さんは不親切だよ」、とまで云つたが、お雪がとう／＼泣きだしたので、お春は「よし／＼それてはお孃樣にはお雪さんにあげる

よ」と云つた。其言葉通りにする積りでもあつたらうが、希子孃が中々好き嫌ひの烈しいお子であつたので、女教師に連れられて牧師の家のお茶に呼ばれて來た時に、直に誰よりもお春が一ばんの好きになつて、二人で小さな手を腰のあたりにかけあつて、庭の芝原を散歩しながら睦じい事を話しあつた。

「私お友達が澤山なくつてよ。私一人きりだから、若しか病氣にでもなるといけないつて、母さんが始終心配して居らしつて、眞實にやかましいのよ」。

「私だつて澤山はありませんわ、それでこんなに仲好しになつたのでせう、ですけれどお雪も好い兒ですよ、私は斯う思つてますの、若しかあなたがあの娘と一度お遊びなすつたら、私よりかも彼女の方をお好きなさるだらうと」。

「そんな事私知らないわ、私只だあなたが一番好きよあなたは眞實に善い方ですわねえ、それにあなたの眼の淸しくつて奇麗だこと」。

お春もなべての女のやうに、此お世辭、と云ふよりは寧ろ眞心から出た此褒辭を嬉しく思はずには居られない其れが爲めに自分の心を此新しき友に傾け盡さずには居られなくなつた。そして二人は何時迄も何時迄も仲好くしやうと約束した。

## 其二

希子孃の云つた樣に、櫻井夫人はその獨り娘の友達に就ては極て嚴重であつたから、希子孃は多少淋しく其日を暮した位であつた。それで大丈夫間違の無いと云ふ見込の付く迄は　お春等の親である加留牧師の家族と親しくする事を急がなかつた。然し、夫人は其後しとやかなる牧師の妻の澄子に逢つて、色々と話もして見て、其子供達の躾が能く行屆いて居て、卑しい口もきかず、惡い癖もない事を確に見極はめてからやうやく安心して、「希子も時々遊びに差出すから、どうかお春さんもお雪さんも太郎さんも遊びに寄越して貰ひたい」と云ふ樣になつたのである。

澄子はお春が櫻井家に行く事が心配でならず　夫に向つて度々斯う云つた。

「私は、お春が希子様に何か悪い事でも教へなければよいがと、それが氣になつて、彼女が櫻井さんへ行く時には、何時も身慄ひがする程です」。

すると牧師は何時でも笑ひながら

「希子様は嚴しすぎる程皆なが能く氣を附けて居て、此家に入らつした時でも、あの女敎師の輕部さんがちつとも眼を放さない樣にして居るではないか、尤もそれも其筈で、たつた一人のお孃さんだからではあるが、まあお前の樣にさう心配しなくとも宜からう」と云ふのであつた。

母親の心配も強ち取越苦勞のみではなく、お春は櫻井家に行つて多少の失策が無いではなかつた。一度は希子孃の玩具の茶道具のコップを毀し、一度は歌を謠つたり步いたりする人形の機械を毀して、只がちや〳〵とより云はぬやうにしてしまつた事もある又輕部孃の手筥を卓子の上から落した事もある。併しお春の爲めに是と云ふ程な大きな害が生じた譯ではなかつたから輕部孃は只最後の自分の筥を落された時に、櫻井夫人に向つて、

「私はお春さんが遊びに來ると何時でも心配でなりません、快活な愛らしい娘ではありますが、眞實に世話が燒けてなりません。太郎さんは男の子で御座いますから、隨分亂暴も其筈で御座いますが、それでもお孃樣と遊びます時には能く氣を附けて居りますのに」。

と斯う云つたのみであつた。

扨斯うは云つたものゝ、輕部孃も、其次にお春が櫻草を籠一杯摘むで駈けて來て、其中の一番大きな束を呉れた時には、あんな事を云ふのではなかつたにと大に後悔したのである。

兎に角にもお春と希子孃とは、大の仲好しとなつて、一生仲好く暮すこと、大きくなつたら隣り合つて家を持つこと、そして小兒が出來たら其子供等を矢張り友達とすることの三ヶ條を、大きな丸い字で石竹色の卷紙に書いて、互ひにそれを取交した。其お祝ひとして、お春は希子孃に可愛い猫の子を贈り、希子孃はお春に小さな白い日傘を贈つた。

それから數日の後であつた。加留牧師は外から歸つて來るや否や、育兒室にその蒼ざめた顏をつき込んで、其處に居た妻の澄子を外に呼びだして、

「澄さん、實に困つた事が出來た」。

と云つて太息を吐いた。

澄子は夫の言に何とは知らず恐しさを感じた。

「ど、何うしたのです」

「大通りに惡い病氣が出來てね、あの清田の家でやり初めたのだ」

澄子はもう小兒の事が心配になつて來た、恐怖に聲をふるはしながら、

「あなた、若しや傳染病ではありますまいね」

牧師は少しく躊躇つたが、やがて口を切つた。

「極、性の惡るい猩紅熱だと云ふ事だ。私は行つて見はしないが、滋田に逢つて聞いたのさ。これが他の家だといくらか心配も少いが、あの不取締千萬な清田の家だと云ふから實に危險だよ」と云ひながら、妻の蒼ざめた、悲しげな顏を見て、「併し現在ではマアさう騷ぐ事はないと思ふ、無論村に往來してはならぬが。私は下男共に能く云つて聞かして置くから、お前は小兒をちよつとも庭から外へ出さんようにして下さいよ」

「ハイ」と云つて、澄子は育兒室に入つて、乳母や小兒達に其話しをした。そして年上の三人には、村の人達と話しをしたり、教會の庭から外へ出たりしてはならぬと、殊に嚴重に云ひ聞かせて置いて出て來たが、澄子の心配は自分達の上から他人の上に移つた。

「あなた、櫻井夫人にお知らせ申したら宜いでせう。平常からお孃の事では大變心配して居らしやるから」。

「フム、手紙を上げるとしよう。彼の方達は何れ近々倫敦に行かれるのだし、それに此處らとは違つて塲所もかけはなれて居るから、今の處お騷ぎなさる事もないとは思ふが、兎に角お知せ申して、村にお出での事だけはお止め申さねばならぬ。それからお孃樣を此家にもお寄越しなさらぬ方が好いだらう」

櫻井夫人は加留牧師の手紙を見て、直ぐにも倫敦へ引移らうとせられたが、新宅の準備がさう急には行屆か

ぬのと、今の住居が村から一里近くも離れて居て、猩紅熱が蔓延しない中は、出來る丈け用心をしたら、希子孃の爲めに左程傳染の虞れもあるまいと云ふので、準備の出來る中は此處に居るとして、成るべく早く倫敦へ行かうと決心せられた。

## 其三

淸田は其姓とは全く反對で、穢い家として名が通つて居る。妻は極氣の好い無性者で、小兒等は皆顏立は惡るくはないが、垢に汚れた腕白共で、どれか其中の一人は何時でも何かの病氣に罹つて居て、一通りの母親なら大騷ぎをやつて居る程に惡るくつても、その母親は風が吹かうが、雨が降らうが、雪が降らうが、一切お構ひなしで戸外で遊ばせて置いて、そして着物や食物には少つとも氣を付けてやらないと云ふのであるのである。からして、此村で痲疹なりインフルエンザなり、何か病氣が流行らうと云ふ時には、此家の者が先づ第一に取付かれるのである。 此村の多くの人は――例令淸田を憎んで居ない人でも――若し淸田が此處を立退くと云ふ事を聞いたら、それは非常に喜ぶ事であらう。

今度も矢張り猩紅熱と云ふ白羽の矢は、先づ此家の棟に立つて、第一に人身御供に上がつたのがお圓と云ふ惣領の娘である。醫者は招かれて來たが、その家庭の不潔な有樣を見て、其筈だとも言ひさうな顏付て、相當な藥を與へてソコ〳〵に立去つた。お圓は前に云ふ通り垢にまぶれた腕白娘であるが、何う云ふ譯か此村の小兒等には人望があつた、尤も其母親達は一人も此娘を善く云ふものはない。お春も此娘を好いて居た。それはお圓が何時もお春の着古しを貰つて着て居る事と、お圓が競走には何時でも勝ち、又高飛びにはどの娘よりも一番上手であつた事との爲めである。それでお春はお圓が熱病になつたと聞いた時は、可哀さうだと思つたが、お圓はだん〳〵快くなつて、今度は其下の兒に傳染つたと聞いた時には、嬉しく思つたのである。が、澄子はひどく心配して、夫に向ひ

「他の人に傳染らぬ樣にして吳れば好いが。あの人はよしんば消毒劑を貰つたつて、消毒なんかしないんで

せうし、そして乾度小兒は構はず戸外に出すてせうから、私は眞實に恐ろしくつて」。

「フム、併し幾許か好いことには、直ぐ隣りには小兒がないし、その隣りは空家だから。さう心配しないが好い、大丈夫だ」。と牧師は保證するにやうに言つた。

牧師は常に其妻を慰めては居たが、澄子は一向晴ればれせずに、始終安心の出來ぬ樣に見えた。で、牧師は妻も小兒と一緒に馬車を驅つて村の外に遊びに出たり、時々は近邊の海濱にでも行つて遊んだら、いくらか慰めになるだらうと思ひ付つた。いざ出掛よとと云ふ日の朝になると、兼ねて備ふて置いた馬車は來たが、澄子は頭痛がするからとて、小兒と乳母だけ連れて行つて貰つて、自分は今日一日家にじつとして居たいと云ひだした。

「それは困つたなあ、ぢやアお前は家で休むが好いが一人ては淋しからうから、子供を一人置いて行かう」

子供等は母の側にも居たいけれど、海邊で一日遊ふのは又格別な樂みてある。然し、かゝる時お春は決して自分勝手な考へを持たぬ。それて一番に口を切つた、

「お父さん、私が家に殘りませう」

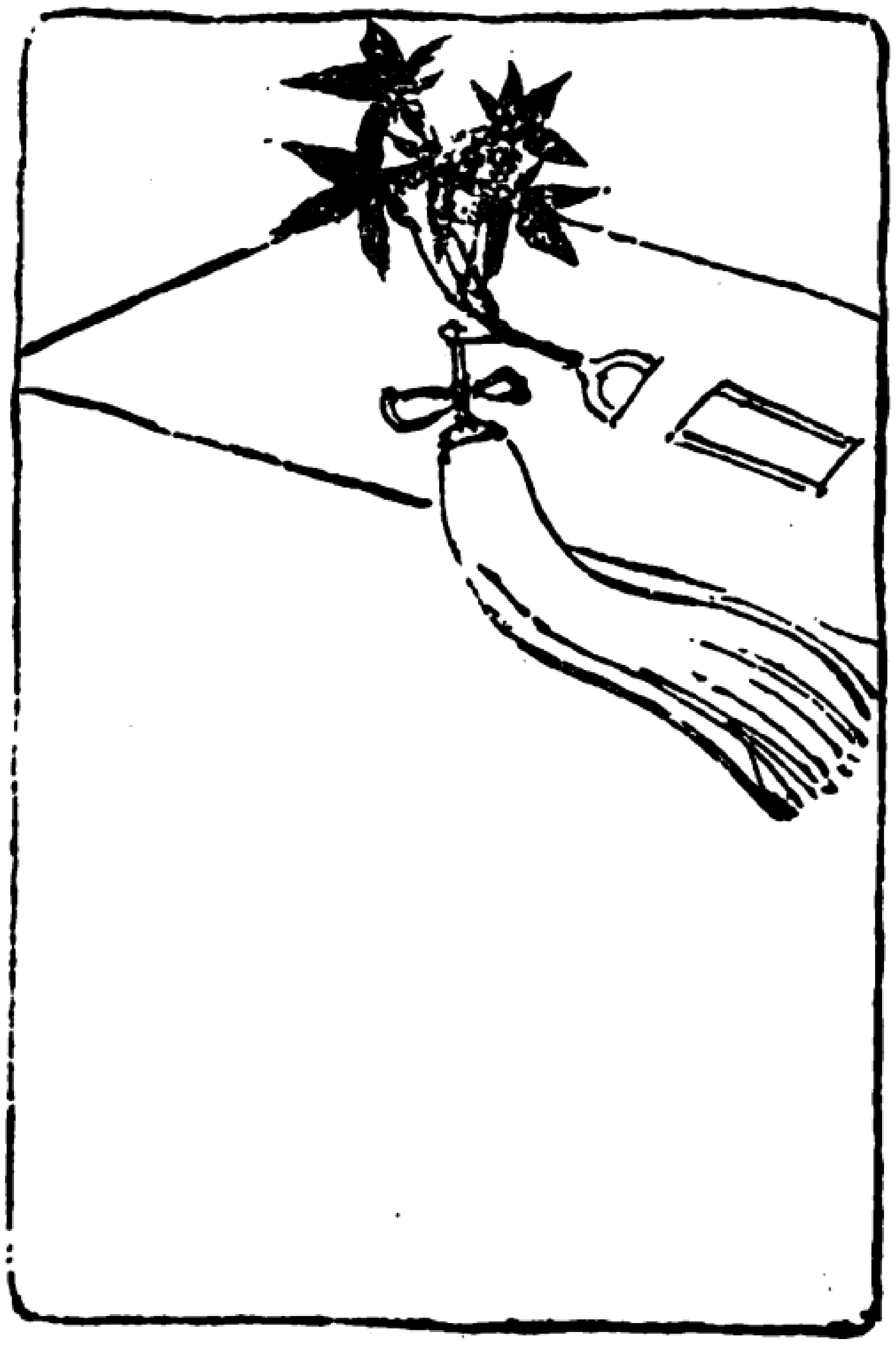
澄子はこれに不同意であつたけれど、お春はとう／＼殘された。

澄子は美しい絹の布て人形の衣服を拵へてやつたり、お晝飯には好きな御馳走をしたりして、折角の今日の樂みを失つたお春を慰めた爲めに、お春は自分が何か善い事をしたやうに、心嬉しく感じて、他の者と一緒に海に出てボートに乘つたら、どんなに面白いだらう杯とは考へもしなかつた。お澄は其いぢらしさを見て、實は家中て海邊に行つて、暫く滯留しようと云ふ企てのある事、それて今日は牧師が室を借りかた／＼出かけたのてあると云ふ事などを話して慰めた。

其日の午後になると澄子の頭は破れるやうに痛んて來た、て、「少し私の寢る間、庭て遊んてお居て」とお春に云つた。

お春は自分の花園に仕掛けた事のあつたのを思ひだして、走つて行つて玩具の熊手と鋤とを持つて、一心に働

いて居た。すると咽喉が渇いて來て、何か旨い物が食べたくなつて來た、お春は不圖斯う思つた、蜜柑水を食べたのは何時であつたかしらんと。蜜柑水は村のお幸と云ふ婆さんが製造へて居るのであるが、お春はこの菓子の事を思ひだすと同時に、自分の巾着に白銅が一つあることがいよいと胸に浮んだので、手にして居た鋤を投り出して、帽子をしつかと冠つて、村の大通りに續いて居る小路に一散に走り出た。



お幸婆さんの店先に近いた時に、町に出ることを止められて居た事を思ひだして一時はひどく不安心になつた、

「私はすつかり忘れて此處まで來て了つたが、構ひはしないだらう」と云つて自分で慰めやうとしたが、その小さき良心は此處に來たことの宜しくないことを語つた、けれどもお春は之を打消さうと力めながら、赤や黄色の壜の列んで居る菓子屋の前へと急いだ、が、店には一人も人が居なかつたので、其入口に立つて居ると、若し自分が菓子を持つて居るのを見付られゝば、此家へ來た事が知れるであらう、さうすればお父さんにどんなに叱られるだらうと云ふ考へが不意と胸に浮んだ。すると急に恐ろしくなつてもう菓子どころではない、店を飛び出して家の方へ跡をも見ずに走つた。お春は幸に誰にも逢はなんだが、大通りの端近くに來た時に、「アラ、お孃さん」と云ふ聲が聞えた。振向いて見ると清田のお園が門の側に立つて居たので、我知らず立止つた。

お園は色蒼白めて痩せ細つて居た。お春は靜かに其傍に立寄つて、

「お園さん、マア、快くなつて好かつたことね」。

「お孃さん、有難う、私大變に惡るくつて、永い間誰にも逢はないんだので、もう眞實に退屈して了いましたよ」

「さうでしたらうねえ、お園さん、だけど、私永く此處に居て、お話しする事は出來ないわ、何だか恐くつて」

と、云ひながら巾着から白銅を摘み出して、

「之を上げようか、お園さん、お菓子でもお買ひなさい」

「有難うよ、お孃さん」

と、云つてお園が前に手を延ばしたので、お春は白銅を手渡しゝた。

「鐵さんと若さんが今度は惡いんですよ。お母さんはモウ弱りきつてます。そしてお醫者さんはさう仰有つてよ、順々に皆なに傳染るだらうつて」

「どうかそんな事の無い樣にねえ、お園さん、左樣なら」

と、ちよいと頭を下げて、お春は自宅の方へ急いだ。そして以前來た小路に出で、庭に歸り着いた時に、やつと安心して胸を撫下した、が、投り出して置いた遊び道具は見返りもせずに勝手の方へ行つた。

「お鍋や、未だお茶を入れるには間があるかい」

「どうなすつたの、お孃さん、あなたやつとお晝飯が濟んだばかりではありませんか、ですけれど、今牛乳を煮立てましたから、上げませうねえ、珈琲を入れて」

と、云ふとたんに小間使が入つて來て、

「アラ、お孃さん、此處にいらしつて。私方々搜してましたんですよ。あの希子樣が輕部さんと一緒に入らしつてね、奧樣は少しお加減が惡るくつてお寢みなすつて居らしやいますと、さう申しますと、お孃さんあなたにお目にかゝりたいと仰有いますから。」

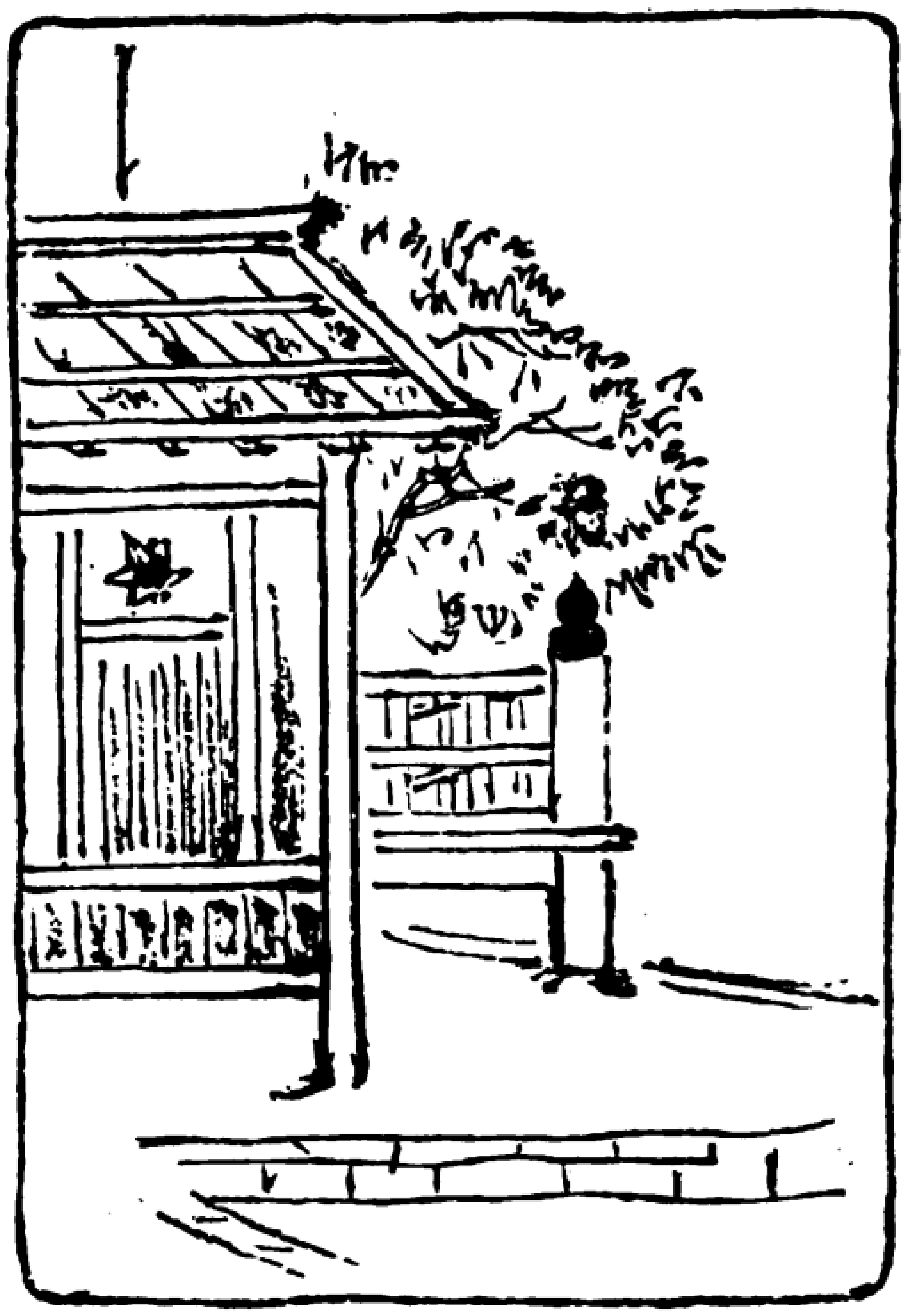
お春はコップを投り出す樣にして、客間へ駈け出して行つて、久振りで逢つた嬉しさに、いきなり希子孃に抱きついて接吻した。輕部孃は

「お春さん、あの私どもは愈よ明日倫敦へ行くことになりましてね、あなたのお母さんには夫人のお手紙を持つて參りましたが。希子孃があなたにお別に入らつ

しやると云つて、とうしても御聽きなさらないものですから、それて漸うして上りましたの」と云つた。

「まあ、好く入らしつて下さいましたね」

と云つたかと思ふと、お春と希子孃の二人は、暫く逢はずに居て、又此後幾ヶ月か逢はれぬのであるから、考へた事、見た事、聞いた事、嬉しかつた事、悲しかつた事抔取交ぜて頻りに話しはじめた。輕部孃は澄子は寢て居るし、二人が親しげに話しをして居るのを手持無沙汰に聞いて居たが、少々退屈して來たのと、櫻井夫人から成るたけ早く歸る樣にと云はれて居たのとて出來るだけ早く切り上げる事とした。夫れて二人は互ひに抱き合つて幾度か接吻して別離を惜んだ、がやがて希子孃の馬車が走り出すと、お春は見えなくなる迄門に立つて手を打振つて居た。そしてお圓と話しをしたことはもうすつかり忘れて了つて居た。



### 其四

猩紅熱は次第に蔓延して來たので、牧師の家族は海濱に行く用意をして、最早出發の日取りもきまつて居た。お春は、或る晩牧師が、清田の家では、まだすつかり癒らない子供を戸外に出して居るが、傳染せねばよいが、と云つたのを聞いて、自分がお圓と話しをした事を思ひだして頗る不安心になつた。それて晩の祈禱の折に「他の人に傳染つては大變ですから、どうか私を熱病にならぬ樣にして下さいまし」と神に祈つた。

それから一朝二朝は起ると何時でも、先づ自分の胸をひろげてボツ／＼したものが出來ては居ないかと思つて見たが、何にもなかつたので恐ろしい事は忘れて了つて、頭腦の下には乳母と一緒に海邊に行く考へばか

りが充ちて居た。兩親は難儀な人達を助ける爲に跡に殘つて居る事になつて居たのである。

出立の二日前の朝、加留牧師は袋に定紋の付いて居る一通の手紙を受取つた。お春はそれを取次いだので、櫻井伯爵から來たのであつたことを知つて居た。

「アヽ、これは乾度今度來た留守番の事でだらう、伯爵は乾度其事を私に相談なさるのだらう」

と、澄子に向つて言つたが、他に急ぎの手紙があつたので、その手紙を直ぐには開かなかつた。

お春は早く父が櫻井伯爵の手紙を開けば善いと思つて居た、それは希子娘の事が何か書いてありさうにも思はれ、又自分に對して希子孃からの言傳がありさうにも思はれたからである。で、最後に牧師が其手紙の封をきつた時に、お春はにつこりとした。が、牧師が何かものに打たれた樣な聲を出して、お春の方をちらと見て、默つてその手紙を母親に渡したのにひどく驚かされたのである。

「是はマア、奧樣の御心配が察しられる」。

と云つた澄子の眼には涙が一杯であつた。牧師は低い聲で、

「小兒にも言つて聞かせようか。お春は譯けも知らずに心配して居る樣子、殊にあれほどの仲好しであつたから」。

澄子は輕く點頭いたが、口をきくことも出來なかつた。

「あのね、希子樣が熱病で、餘程お六け敷いと云ふ事だ。さぞお前達もびつくりするだらうね」、と牧師は云つた。

「アレまあ」、とお春は叫んだが、忽ちワッと泣き出した。牧師は妻に向つて、

「どうしてこんな事になつたらう、私は實に不思議でならん。日取をくつて見るに、丁度出立なさつた其日位に傳染なさつたのではあるまいかと、私は考へるよ」。

「あなたも知つて居られるでせう。出立の前日此家にお別れに入らしつたが、あの時に村へいらしつたらうとも思はれませんし、それかと云つて家では皆な變りもないし、ほんとに不思議ですねえ。これで見ると大

分其所いらに病氣が擴がつて居るんでせう」。

「お孃樣が今日明日に急な事がなければ、一應伯爵は此所へ入らしやると仰有るから、其時善く伺つて見よう。私は空氣から傳染つたかと考へるが。斯う云ふ事は誰にも判然とは分らんものさ。兎に角どうも御氣の毒な事だ」。

お春は此時忽ち泣き止んだ。澄子は自分が背を擦つてやつた爲めだと思つたが、實は其爲ではなくて、希子孃に熱病を傳染らしたのは、自分ではなかつたらうか、と云ふ恐ろしい考へて此時フト胸の中に浮んだからである。

## 其五

其日一日、お春はこの新しい考へに惱された。そしてお圓と別れて直ぐに希子孃に逢つたことも、お圓に觸れた手で希子孃と抱きあつた事も思ひだした。何もかも思ひ出すと同時に、是まで病氣の傳染に就いて聞いた事を考へ合せて、今更に恐怖を增した。若しお春が之を母親に話したら、若し自分の子供が櫻井伯爵の愛孃にこんなことをしたと知らせたなら、そして若し希子孃が死にでもしたら、牧師夫婦は如何に感ずるであらう?。

お春の顏は血の氣がなくなつて、如何にも惱ましげに見えた。澄子はたゞこれを友達の病氣を悲しんで居るのだとばかり思つて、平常よりは一層柔しくしてやつた。澄子は平常から小兒が健康で幸福であることばかり祈つて居るのであるが、常はどんな事でも直に忘れて了ふお春が、始終自分の周圍にくつ付いて居て、熱病のことばかり聞いて居るので、可哀相でならず、いつそ云つて聞かせねば善かつたと思つた。

お春が寢床に就いた時には、其苦しみは募るばかりであつた。お雪はとうの昔に眠入つてしまつたが、お春は「お助け下さい、神樣。希子樣をお助け下さい、どうぞ、どうぞ、神樣、希子樣をお助け下さい」。と何時までも〳〵繰返して居た。

實は未だそんなに遲くはなかつたが、お春は眞夜中でもあらうかと思つた頃、入口の戸を靜かに開けて、ふ

るへる手に燭臺を持つて澄子が入つて來た。お春は眼を閉ぢも眠たふりをして居たが、澄子が燭臺を下に置いて、徐かにお春の上に覆ひかゝつて、額に接吻した時に、お春は母親の首に兩手をかけて、しつかりと抱きついた。若し此時お春が其實情を母親に打明けたならば、まあどうであつたらう！、がお春には云ふ事が出來なかつた。

「好い兒だねえ、可哀さうに、お前の頰には涙が流て居るよ。もう好いから、そんなに心配おしてないよ」。

「お母さん！」、お春はやッと斯う云つたが後は出ない。

「好い兒だから、お眠なさいよ。お母さんが暫く此處に居て上げるからね」。

お春は苦しげに、

「私どうしても眠られないの。私それればつかり考へて居るのですから。お母さん、希子樣の快くなるやうに神樣にお願ひ申して下さいよ。よ、お母さん。お願ひ申して下さいな、ね。それから御祈禱をお父さんにお願ひ申してね。ア、私明日が日曜だと好いけれど、さうだとあの倉田さんに御祈禱して上げて快くなつたやうにねお父さんに會堂で御祈禱して頂けるんだけれど」。

澄子は微かなる笑みを口のあたりに浮べたが、

「靜になさいよ、お雪か目を覺ますといけないからねそれ御覽な、動いて居るぢやないか。それはお前の云ふ事なら私共は皆で御祈禱しますさ。そして希子樣も乾度快くおなんなさるだらうから、もうそんなに心配おしでないよ」。と云ひながら我知らずお春を抱きしめて「お母さんがもつと此處に居てあげやうか」。

「ハア、どうぞ、お母さん、手を持たして居て下さいな」。

お春はヤットの事で眠に入つたが、翌朝目のさめた時には、直にモウ前夜の心配が胸に浮んで居る。それでお春は閨衣をぬいて衣服を着ながら櫻井伯爵のお出になる前に、お父さんに何も彼も皆打明けて了はねばならぬ。と堅く自分に決心した。

## 其十八

お春は疲れ〳〵て眠つたので、起きた時にはモウ朝飯が初つて居た。其まぎれにお春は父親に話す機會を失つた。そして食事の間、殆んど何にも食はず、平常の生〻とした樂しげなお春とは打つて變つて、色は蒼白て愁ひに沈んで居るので、兩親はヂツと心配さうに見入つて居た。お春は早く打明けてしまいたいとあせつて居るが、あせれば何更言ひ惡くなる、度々人が來ては邪魔をする、とう〳〵お春の打明けやうと決心して振ひ起した勇氣は壓迫られて了つた。で、他の人の滅多に來ない會齊に行つて、其處で父の來るのを待つて居るのが一番宜からうと考へた。それて書齋に行つて待つて居たが、次第に氣臆れがして來て、父のやつて來る跫音を聞いた時には、殆んど迯げ出さうかと思つた位で、胸の動悸は早鐘のやうであつたけれど、今心を弱らしてはと思ひなほして、胸をしつかりと抱いて更に勇氣を振ひ起した。牧師が書齋に近づいて來る時に、玄關に案内の鈴の鳴つて居るのか聞えた。やがて父が玄關の戸を開けた時には、父は誰かに物を云つて居る。誰にてあらう？、今度は其人が返辭をした、其聲を聞けば櫻井伯爵である。ア、櫻井伯爵！、二人は一緒に書齋に來るてあらう、そしてお春の居るのを見るてあらうが、お春は其時に何と云ふてあらうか。父が戸を閉めた音が聞えた。二人はだん〳〵に近づいて來た。迯出しても見つかるし此處に居るのも恐し、どうしたものであらうと進退谷つて、よい隱れ塲はあるまいかと見廻した。長い〳〵どツシリとして居る窓懸を見つけて、是ならばと思つて其後に踞んでやつと隱れおふせた。

併し此處に隱れて居る恐ろしさに、二人は何を言つて居るのやら、お春の耳にはたゞゴロ〳〵云つて居るやうに聞えた。若し父が見つけたら何と云ふてあらう。事そ先つきに飛出せば善かつた。それならば、何故此處に居たと云つて叱られもしなかつたてあらう。然し、さうすれば櫻井伯爵にお目にかゝらねばならぬ、握手もせねばなるまい、それが何だか恐かつたのである。今は只、櫻井伯が早く歸つて下さればよいと思つで居る、漸く少し落着いて、話が聞分けられる樣になつたけれ

ど、其話は留守番の事や何かで、希子孃の話しはモウ濟んだのてあるか、まだてあるか、少しも分らぬ。さうする中に櫻井伯爵は立上られた。加留牧師は

「今日はとても御繰りなすつては下さいますまい」。

「いや有難う、これから一寸と楠本に逢つて、そして二時十五分の滊車て歸らねばなりませんから。御覧の通りて、もう一刻も早く家に歸らねば心配て堪りませんからな」。

伯爵の聲はお春にも分るほど變に悲しげに聞えた。

「御尤もです」

「私は彼女が何處て傳染つて來たかと色々考へるが、どうしても分りません」。と云つて伯爵は暫く躊躇して

「輕部孃はすべて妻の命令通りにしたと云ふし、私も其時此處に來ることには同意したのて、あれが惡かつたらうとはどうも思はれませんが。あの時には此方のお娘御にばかり御目にかゝつたと云ひますが、其方は其後何ともありませんか」。

「ハイ、其子はお春と申すので其後何の變りも御座いません。あれは何でもまだ小い時に極々輕いのを一度やつた樣に覺えて居ります。今度も精々注意は致して置きましたので、仕合に皆なまだ無事て居ります。然し伯爵閣下、追從を申すてはありませんが、お一人子のお孃樣の代りに、寧そ内の小兒が惡かつたらと、私共は思つて居ります」

牧師の聲は如何にも柔しく響いた。お春が病氣の時に、父がいろ〱母に話をするのは何時も此通りな柔しい聲であつた。それを思ふと、お春は咽せかゝる樣であつたが、やつと飮み込んで了つた。牧師は言をつゞけて

「それにお春はお孃樣の御病氣の事を聞きましてからと云ふものは、ひどく心配して、夜も碌々眠ないと家内は申します」

「いや、皆さんの御親切は難有く感謝します」。伯爵の聲は殆んど泣くが如く、お春には聞えた。大人も泣く者てあらうかとお春は思つた。

「私は娘の苦しみを見ると、慄然としますよ。隨分氣を付けるが上にも氣をつけて、色々と手を盡したので

すが……。これて若し嬢が亡くなりでもしたら、マアどうすれば宜いかと私は思います。第一妻が可哀さうて……」

伯爵は終にむせ返つて泣き出した。お金はあるし、好きな事は何でも出來て、不幸なぞは知らん人てある筈の此伯爵が終に泣きだした。

「閣下、私共は神に祈つて居ります」。

二人は固く手を握つて打振つたてあらう、伯爵は出て行つた。お春は書齋の戸の開いて閉つた音を聞いた。父は伯爵を送つて出た。長く抑へ付けられて居たお春の嗚咽が、今は一旦に込上げて來た。痺れた足に立上つて暫く考へて居たが、お春は急に決心ずる事があつて、四尺もある窓の側に駈寄るが早いか攀ち登つて戸外へ飛んて出て、門の方に一散に走つた。



黄金色の毛を肩に振亂して、涙に汚れた蒼い顔をして、青い衣服に白の胸掛をして居る小さな娘が、いきなり投付けるやうに飛びついて、櫻井伯爵の歩みを止めた。伯爵は驚いて、

「おや、お前はどうしたの」

暫くお春は無言てあつた、が、やがて涙で充ちて居る双の眼をあげた。其の容態は如何にも哀れげに見えた。伯爵は加留家の小兒を一人も見知らなんだが、今牧師の話に聞いたのでこれがお春てあらうと思つた。櫻井伯爵は餘り小兒を好かぬ方てあるが今は尚更てある、一刻千金とも云ひたい位てあるから。が、お春の悲しみは全く自然のもので、伯爵も仝情を寄せずには居られなかつた。

「お前は希子のことで心配して居なさるのか」。と柔しく云つて、其顏をあげさせやうとした。

お春は默頭いた。そして伯爵の握つた手を引はつて花園の方に進んだ。伯爵はこれを迷惑には思つたが、多少可愛く思つて、引かるゝまゝにとある腰掛の上に腰を下ろして、お春を抱きよせて、

「お春は希子の樣子を聞きたいのかえ」

「いゝえ、さうではありませんの」

と、伯爵が首を前に傾けてやつと聞取つた程、低い〲聲で答へた。が、伯爵と向ひ合つては懺悔の語は容易に出ない、たゞもぢ〲と前掛をいぢり初めた。

「ぢやあ、何のお話」

と問うて見たが容易に答へがない。やゝ暫く待つて居ると、やがてお春は顏を上げて伯爵を打まもつて、

「殿樣、私が惡かつたので御座います」

「お前が惡かつた?、私には何の事だかちつとも分らん」。

もう皮切りが濟んだので、後はすら〲と云へるやうになつた、

「それは誰も知りませんの。お父さんやお母さんに云はう〲と思つても、私どうしても云へませんでしたの。此間私お母さんの云ひつけに背いて村の大通りに行きましたの。ですけれど知つてゝ爲たんではありません、つい忘れて居たんですもの。私其時淸田のお圓さんに逢つてお話を爲ましたの。そのお圓さんと云ふのは其時熱病で惡くつて、まだ戸外へ出てはいけなかつたのです。そして私家へ歸りますと、丁度お孃樣が入らつしやいましたので、直ぐと私がお圓さんの病氣をお孃樣に傳染しましたのです。其時には私はそんなことにならうとは一寸とも知りませんでしたの。私は近處の子供達が病氣にならぬ樣に、何時でも祈つて居りましたのに、其私がお孃樣に病氣を傳染さうとは……。殿樣、どうぞお許し下さいまし。若しお孃樣がお亡くなりなさる樣な事がありましたら、私は兎ても生涯樂しく暮すことは出來ません。私がお孃樣の代りになれるものなら、私は、私はお孃樣をお助け申す爲なら死んで

も構ひません」。
世上には櫻井伯爵の事を彼是惡く云ふ人もあつたが、お春は死ぬる迄、櫻井伯爵は眞實の基督教信者らしい紳士であつたと云つて どこ迄も世評に反對して居た。それは左の次第故である。

### 其七

伯爵はお春の言葉を聞いて暫く默つて居た。お春は定めし伯爵が烈しく怒つて、叱られる事であらうと思つて、やゝ暫くジツと待つて居たが、伯爵は何とも云はない。で、恐る〱顔を上げて見ると、伯爵はジツとお春の身を打戍つて居た。其顔は如何にも悲しげで、情けないことをしてくれたと言つて居るやうには見えたが怒りの色は少しも見えなかつた。のみならずずつと手を差出されたので、お春は其手を摑んで、父にでもするやうに、自分の顔をその上に載せて、すゝり泣きをしながら接吻した。伯爵はお春の髪を撫でながら、たゞ「おゝ可愛さうに」と云つたばかりである。伯爵は宥してやるとは一言も云はなかつたが、お春は此言葉で自分の宥されたことを覺つた。それを覺つて涙は一層烈しく溢れて、胸は後悔の念で張りさける樣に思つた。
「善くお前は話して呉れた。私は嬉しい。それで今度は私がお前に賴みがある」。と伯爵は云つた。お春は熱心に見上げた。此場合例令どのやうな事を云はれたとて、恐らく、それは無理だとは思はなかつたであらう。
伯爵は、
「私は、よしどのやうな事が起らうとも、お前に此事を默つて居て貰ひたいのだ。お前のお父さんやお母さんが、若し眞實の事を知つたなら、どの位苦しみなさるか知れん。お前が私に話して呉れたのでもう充分だ。又お前はモウ過ちの報ひを充分に受けたと私は思ふ。それでモウ何も善いから必ず心配せずに、誰にも此事を話すのではありませんよ。サア好い兒だ。私にはモウ緩くりして居られないから、左樣なら」。
「オヽ殿樣、私はあなたの御情は一生忘れません」。
伯爵は立去つた後に、お春は跪いて祈禱を初めた。そして又と再び自分の不注意から不幸な人をこしらへる樣

な事のないやうに、生れ變つた樣に違つた者にして下さいましと　繰返し〳〵神に願つた。するとお春を捜して來いと云ひつけられたお雪が、お春さん〳〵と呼びながら、芝生を走つて來たので、やつと立上つた。そしてお雪に伴はれて母親の前に出た。澄子はお春の泣き腫して眞紅になつた瞼や、涙の流れた痕のある頰を一目見ると驚いて、自分の部屋につれて行つて、いろいろと慰めた。お春に取つては、かく柔しくされるのに、打明けずに居るのはなか〳〵に辛かつた。が、櫻井伯爵に約束をしたので、苦しい思ひをしながら秘密を守つた。自分が希子孃を病氣にして置きながら、自分が希子孃の爲に親切に心配して居るとばかり思はれて、柔しく母親に取扱はれるのは、お春の樣な正直な心を有つて居る娘に取つては、實に心苦しさの限りであつた。それをも堪えて終に秘密を守つたのは、これも隨分嚴しい刑罰であつた。

希子孃は永い間惡くつて、やつと生命だけは取止められたが、再び此地に歸つて呉れた時には、それは〳〵痩せ細つて、以前の姿は思ひも出せない程であつた。此樣な次第で、お春は心に受けた敎訓を忘れやうにも忘れられない。こんな過失を二度と再びすまいと云ふ決心は、束の間もお春の胸から離れたことはない、お春の氣質は次第に變つて來た。

「希子樣の御病氣以來、お春は全然違つた人間になつた。」と其兩親は云つた。が、何故さうなつたかはとうとう知らなんだのである。

お春は一時其顔にいき〳〵した所がなくなつて、以前程に愛らしくなくなつた。併しそれも次第に舊に復つて、其氣質のよくなると共に其身も幸福に成人した。そして娘盛りの新しい美しさと、持つて生れた何とも云へぬ愛らしさとの爲めに、多くの人に愛せられて居た。お春は何時迄もお春であつたが、併し、其の溫順な、柔しい、考深い仕打を見ては、母の澄子は何時でも驚いたやうに「お春は全然生れ變つて了つた」と斯う云つて居つた。（完）

# 光明皇后の母君

須藤求馬

三千代刀自は、縣の犬養の東人の女なり、人となり聰敏にして忠實、文才ありて和歌を善くせり、天武の朝に仕へて命婦となり、粟隈王の嫡男治部卿兼攝津の大夫三野王に嫁ぎ、天武の白鳳十二年に至りて葛城王(橘の諸兄)を擧げたまひ、その後又佐爲王を生みたまへり、三野王天武の朝に在りては、撰史の事に與り、文武の大寶元年に及びては、正五位下を以て造大幣司の長官に拜せられ、累進して治部卿兼攝津の大夫に遷り、和銅元年に卒せし人なり、三千代刀自は、如何なる事情のおはせしにや、その由知るべからずと雖も、二子王の御座すにも關はらず、三野王家を去りたまひぬる不幸に遭ひたまひぬ、容色未だ衰えず、寡居すべき齢なりとも覺えねば、改めて大織冠鎌足公の男藤原不比等に嫁ぎ、その繼室と爲りたまへり、刀自は如何なる資格を以て、藤原家に適きたまひしか、父は從四位下にして、家は壬申功臣の一人なるへし、思ふに刀自は、獨り博識のみならすみめかたちも亦優れたまひし歟そはその御女光明子の容姿美麗はしきにても推しはからる」。

當時三千代は、持統の朝に仕へ、女帝の御事とて、一層の御親任を蒙りて、重用せられたまひ、宮中に於きて、一箇の勢力ありし命婦たりしと疑ふべくもあらず、そは天平八年、葛城王の上りたまひし上表にても推知し難からず、曰く、臣葛城が親母贈從一位縣犬養橘宿禰は、上は淨御原の朝(天武)を經、下は藤原の大宮(文武元明)に逮ぶまで、君に事へて命を致し、孝を移して忠となし、夙夜勞を忘れ、累代力を竭す、云々」と、されは不比等は此の頃より昇進の勢を得、持統の朝に於て判事となり、位は直廣貳に進められたり」。

さはあれ父大織冠の勳功は天下雙びなかりしかとも壬申の亂後は、政權全く親王諸王の手に在りて、曾て臣下に委ねられす、況して近江の黨をや、抑々壬申の亂は皇位繼承の爭として、古今未聞の大動亂なり、取るは逆なれど守るは順なりしとはいへ、我か國古來の習慣を

打破し、我か國歴史の上に於きて、異例を開きし者なりけり、故に天武の天下を御するや、亦異例に依りて人心を壓服せんと欲したまへり、先つ近江の朝廷と共に、子孫世襲する執柄の臣族を一洗して、新に氏族の制を立てゝ姓氏を賜ひ、壬申の功臣を賞するに當りても、沙上偶語の徒なしと雖も、亦一人の大臣以上に上りし者あらし、然かのみならず、帝の御治世十有五年の間、曾て一人の大臣を置かす、庶政を親自ら總攬したまひ、政權大小となく、悉く皆之を皇室に收め、十皇子の多き御座ましければ、以て之を輔翼したまへり。

かくて帝崩じさせたまふに臨み、位を皇后持統に讓りたまひ、草壁皇子を以て皇太子となし、遺詔して曰く。

凡そ天下の事。大小を問はす。悉く皇后及ひ皇太子に啓せよ

と、かく位を皇后に讓りたまふ慣習は、この朝に始めたまひしにはあらじ、推古皇極の後漸く熟成したるものにして、皇太子として政務に習れしめ、威望を得せしむるの階梯となしたまへり、其の名を皇太后に讓り、而して實權を皇太子に收め、其の羽毛長し翅翼成るに及ひて、之に天下を授けたまふ、善い哉其の計を爲すや、然るに持統即位の三年に、皇太子草壁薨したまひ、高市皇太子となりたまへり、而して高市皇子も其の十年に至りて亦薨したまへり、因て草壁皇子の第二子文武尚ほ幼冲なれと之を立てゝ皇太子となし、之に皇位を讓りたまふ事となり、忍壁穗積の兩親王を以て知太政官事となし、以て大權を親王の手に收め、敢て之を臣下に委ねす、是に於て「親王政治」とも稱すべき躰裁を形造れり、斯る情勢なるを以て、不比等當時に在りては、亦何等の勢力も有ることとなし、殊に近江の朝廷を助けし者を一掃せし後とて、擧る所も少き不比等、只幸にして壬申の亂、不比等尚ほ幼にして、年僅に十六歳なりしかば、近江の朝廷を援くるともなく、又吉野に黨するともなく、怨を兩黨より受くるともなかりき、かくて天武の御宇に在りては、不比等は纔に直廣肆に止まれり、其の姉二人天武の夫人となり、一は皇女但馬を生み、一は皇子新田部を生み奉りしかども、夫人の勢力は、させる

藤原氏の助とはならざりしが如し、然るにその後不比等は、爰に一箇の有力なる內助をこそ得たれ、そは天武の朝に命婦たりし縣犬養橘宿禰三千代といへる婦人是れなり。

却說持統が皇孫文武に位を讓りたまふに當りて、文武は御年僅に十一歳におはしませしが、三千代は直に不比等の長女宮子媛を以て夫人となせり、之れと同時に妃を異姓中に求め、紀朝臣の竈門娘、石川朝臣の刀子娘を以て妃とせられたれど、夫人と對比すべくもあらず、后妃多くは皇族中より撰ふの習なり、當時皇族中に於て女王を求めば、何とか其の人なからん、天武の十皇子の御女中には、必ず適當なる御方もおはせしならん、然るにさはせざりしは、全く三千代の勢力あるに由りしなるべし、宮子媛は文武の即位五年(大寶元年)に於て、早く既に皇子聖武を生み奉れり、不比等三千代夫妻の喜び、而して後知るべき也、かくて不比等はこの時まで直廣貳の位にて律令を撰するに與り、中納言なりしが、皇子の生るゝに當りて、正三位を授けられ大納言となり、始めて內閣に列するに至れり、是れより先文武の三年に於きて、三千代も不比等との間に於て一女子を擧げたまへり、體貌姝麗、光耀あるに似たり、故を以て光明子と稱せしとぞ、重ね重ねの慶事かな、不比等固より才學あり、律令に明にして詞賦に長ぜり、其の技倆才識を以て、文武帝の寵遇を得たるなるべし、況んや其の女宮子は夫人たり、其の室三千代は內命婦たるに於てをや。

文武帝崩れさせたまひて、皇太后元明位に即きたまふに及び、親王には穗積親王の知太政官事たるあり、勳舊には石上麻呂の左大臣たるありと雖も、不比等の勢は、益々加はりて旭の昇るが如し、幾もなくして正二位に進み、右大臣に拜せられたり、元明帝は、女主にましませば、三千代內命婦を以て最も親任せられ、恩寵甚だ敦し和銅元年十一月廿日は、天下擧りての大嘗會なり、三千代は天皇に大嘗に供奉し、奉り又二十五日の御宴に、群臣に宴を賜はり、諸公卿に御陪食仰せ付らる、天皇は今に始めぬ三千代の忠誠を嘉みしたまひ、御盃

に浮べる橘の花瓣を賜ひて曰く。

橘は果子の長上。人の好む所なり。柯は霜雪を凌ぎて繁茂し。葉は寒暑を經て凋まず。珠玉と光を競ひ、金銀と交りて以て逾々美なり。是を以て汝が姓に橘宿禰を賜ふ。

との優詔を蒙れり、是れ三千代が橘宿禰と稱する所以なり。夫妻共に寵遇を專らにせしこと此の如し。

和銅七年、聖武御年十四にして立て皇太子と爲りたまふに及び、三千代は直に光明子を以て東宮に納れ奉れり。光明子は時に年十六歳なりき、光明子玲瓏玉の如し絶世の美人なり、史に稱す、「體貌妹麗、光耀あるに似たり、天資慈仁、志濟物に在り、妾御を攝引し、皆その歡を得、雅と禮訓、閑ひ、敦く佛道を崇ぶ」と、是に於きて不比等三千代は、既に其の二女をして宮中に納れて勢力を得せしむ、この二女こそ實に藤原氏の基を開く時於て大に勢力ありしものなれ。かくて明年養老元年光明子皇女（孝謙）を降誕したまふ、三千代夫妻の歡喜の程は如何ばかりか、因りて三千代は從三位に叙せられたり。

不比等は、實に此の如き基礎を定めて、元正の養老二年に薨じたまへり、同五年正月、三千代は正三位を授けらる、既に夫に先たれたればにや、三千代は佛道に歸依したまひ、五月に至り入道せるに緣りて、食封をも資人をも、皆之を辭せしかども、優詔ありて聽るしたまはずこゝに三年を經て皇太子は、禪を受け位に即きたまふ、聖武帝是れなり、改元して神龜といふ、同四年十一月光明子皇子を降誕したまふ、即ち立てゝ皇太子（夭薨）と爲す、三千代等の喜は言ふにや及ばん、帝の御感悅斜めならず、百官史生以上を引きて、皇太子を太政大臣の第に拜せしめ、五位幷に无位諸王以上に宴を賜はり、文武の百僚に物を賜ふ差あり、因て從三位藤原夫人光明子に食封一千戶を賜ふ。

不比等既に薨ぜし後は、三千代既に佛道に歸依しつれば、數珠を爪繰り、念佛三昧に後生を願へるかと思の外この老刀自意氣益々壯にして、不比等薨後も尚ほ十餘年間世に在りて、この間に於て、三千代が藤原氏幷にそ

の宗族の爲めに力を盡せし者亦甚だ大なり、そは長子武智麻呂は、累進して中納言に任ぜられ、正三位に進み二子房前は從三位に進み、聖武即位の後正三位に進み、三子宇合は、唐より歸朝して、房總按察使となり、正四位下に進み、式部卿に遷り、神龜元年持節大將軍となりて、蝦夷を討ち平げ、四子麻呂は從五位下に敍し、左京大夫となれり、是れ即ち不比等の薨ぜし後、其の四子の昇進せし也、不比等の時に在りては、武智麿は從四位上近江守に過ぎず、房前は從四位下に過ぎず、宇合は從五位下を以て遣唐副使たるに過ぎざりき、然るに爾後其の昇進此の如し。これ素より其の才識の致す所なるべしと雖も、宮中には宮子光明の二姉妹ありて、而して家には三千代の隱然たる勢力あり、終に能く四子をしてかく昇進せしめたる所以ならんか、三千代の藤原家の興隆に大功あること其れ此の如し。

然り而して三千代は、特に藤原氏を隆盛ならしむるを以て足れりとせず、更に進みて己のが生家をも盛に榮えしめんと計れり、聖武の神龜四年十二月、すなはち奏請すらく。

縣犬養連五百依、安麻呂、小山守大麿等、是れ一祖の子孫にして、骨肉甚だ親し、請らくは共に天恩に沐して、同じく宿禰の姓を給はらんことを。

と聖武帝詔りして之を許したまへり、蓋し三千代は、この時少くとも六十以上の老婆たり、飴を含みて孫を弄する年齡なり、六十以上の婦人、何ぞ殊更に自己の姓名を出して、獻議奏請するを要せん、然るにこの老刀自、之を自ら奏請して、其の志望を達したまへり、其の勇氣も亦いみじかりしと見ゆ。

天平五年正月庚戌の日、內命婦正三位三千代刀自薨じたまふ、從四位下高安王を遣はして喪事を監護せしむ、葬儀を賜ふと散一位に准す、命婦は皇后の御生母也十二月一品舍人親王、大納言藤原武智麿、式部卿藤原宇合、大藏卿鈴鹿王、右大拼大伴道足を遣はし、縣犬養橘宿禰の第に就きて詔を宣べて、從一位を贈らしむ、別に勅して食封資人を收むること莫らしむ、天下以てこよなき面目となせり、天平寶字四年八月、勅あり正一

位を贈り大夫人と爲す。

かくて三千代が最初三野王に嫁して生みし所の葛城王及び佐爲王も、亦只人にはあらず、葛城王その後天平八年十一月に至り、元明帝より嘗て其母三千代に賜はりたる橘姓を奏請し承けて名を橘諸兄と改め、正一位左大臣兼大宰帥までになり玉ひし人なりしが、三千代の時に在りては、從五位下に敍し、馬寮監に補せられたり、蓋し亦三千代の勢力に據る歟、要するに三千代が一世の女丈夫たること誰かまた疑はん、三千代嘗て元明帝の大御前にて、かしこまり奉つる事ありて、御稜威を頌し奉りて。

天雲のほろに踏みあたし鳴る神も今日にまさりてかしこけめやも

されば藤原氏の勢力は、持統、文武、元明、元正の四朝を經て、愈々隆盛に赴き、聖武の朝に至ては、親王政治は殆ど名のみの姿となりき、而して藤原氏は之に反して、聖武の天平六年に於て、武智麿右大臣となり兄弟（房前、宇合、麻呂）、四人、內閣に上班を占め、天下の政權は、この兄弟の手に在り、親王も諸王も、其他の諸姓も、皆後へに瞠若たらしむ、然に天平九年は如何なる凶年ぞや、痘瘡大に海内に流行し、死者勝て計ふべからず、武智麿等兄弟四人も同時に皆疫沒せり、一時廢朝を爲すに至れり、是に於て政權頓に他に移らんとす、この間に乘じて興る者出來れり、即ち橘諸兄是れなり、諸兄舊と葛城王と稱して、三千代が先夫三野王との間に設けたる長子なり、即ち彼れは諸王たり、然るに彼れ親王諸王の勢力日に衰零するを見て、却つて臣族に下りて政權に參與し、以て繁榮するの勝れるに如かずと思惟し、天平八年に至り、其の母三千代が、嘗て元明帝より賜はりたる橘姓を繼ぎて、以て臣族に列せんとを弟佐爲王と共に請願せり、即ち表を上りて曰く。

臣葛城、幸に遭時の恩を蒙りて、濫りに九卿の末に接す、進むに可否を以てし、志忠を盡すに在り、身降闕に隆にして、妻子家に康ず、夫れ王に姓を賜ひ氏を定むること由來遠し、是を以て臣葛城等、願くは橘宿禰の姓を賜ひて、先帝の原命を戴き、橘氏の殊名を流へ、萬歲窮まることなく、千葉相傳へん。

と奏しければ、太上天皇(元正)今上(聖武)及び皇后(光明子)共に非常に御滿足に思召され、すなはち詔報して曰く。

王等情深く謙讓して、志親を顯はすに在り、皇族の高名を辭して、外家の橘姓を請ふ、所執を尋ね思ふに誠に時宜を得たり、一はら表に依りて、橘宿禰を賜ひ千秋萬歲、相繼ぎて窮ること無らしめよ。

とあり、因りて三陛下は、之れが爲めに加宴を設けたまひて、諸兄等を召し賜へり、元正帝は殊に橘を愛て玉ひて御製を賜はる。

橘は實さへ花さへ其葉さへ枝に霜おけど益常葉の樹

時に諸兄の長子奈良麿、詔に應じ左の如く答歌を奉れり。

奥山の眞木の葉凌ぎ降る雪のふりはますとも地に落ちめやも

姓氏を賜はる詔の意を承けて、元と皇族なれば、年は經るとも、なりは下だらじといへる心なるべし、揶々皇

后光明子は、諸兄に於ては、異父妹に御坐し、諸兄は又皇后の妹多比能媛を以て其妻となせり、(不比等三千代を娶りて二女を生む、長は光明子にして二女は多比能されば諸兄は異父妹を娶りたり、當時の習、今を以て律すべからず)されば諸兄は、此に因りて大に親を皇室に得たり、其明年天平九年に至りて、藤原氏の兄弟四人皆沒せしかば、斯く臣族に成り下りたる諸兄は、直に執柄の補欠とし進級せり。

この時鈴鹿王は知太政官事たりと雖も、これ全く辨髮に過ぎず、而して藤原氏の子孫は多かりしと雖も、尙ほ幼稚なりき、因りて諸兄はこれより累進して、天平十一年には從二位右大臣となり、十五年に至り從一位に敍し、左大臣に任ぜられ、藤原氏の內閣に立つ者、只豐成一人あるのみ、而してこれ尙ほ少壯にして政治家として、また未だ世の信用を得るに足らず、縣犬養石次さへ內閣に列せしめ、當時政治の表に立て、萬機の衝に當るは、また只諸兄一人なり、諸兄は資性溫順謙讓なる耆老にして、幸を太上天皇に得、皇后の御兄君として常に宮

圖に出入し、深く天皇の親任を得たるは、固より其所たりと雖も、此に至らしめたるは、亦三千代の勢力大に與かれりといふべし、當時爲壽左大臣橘卿預作歌とて萬葉集に

古へに君が三代へて仕へけり吾が大王は七世まをさね

諸兄の母、三千代刀自は、天武、持統、文武の三代に仕へ奉りし故にかくいへり、君は天皇をさし奉る、さて大王は諸兄なり、もと葛城王なれば、おほぎみといへり、諸兄は今より七代政申し給へと、ことほきてよめる也。

天平寶字元年四月勅あり。

縣犬養橘夫人の、天皇御世重ねて、明き淨き心を以て仕へ奉り、皇朕御世に當りても、怠り緩むことなく助け仕へ奉り、加以にあらず、祖父大臣の殿門荒し穢すことなく、守りつゝあらしゝことを、いそしみうむがしみ、忘れ給はずとしてなも、孫等一とり二たり治めたまふ、又大臣として仕へ奉つらへる臣たちの子等、男は仕へ奉つる状に随ひて、種々治めたまひつれども、女は治めたまはす、是を以て念ほせば男のみ父の名負ひて、女はいはれぬものにあれや、立ち並び仕へまつるし理りなりとなも念はす、父がかくしまにあれと念ひて、おもふけ教へけん事、過たず失はず、家門荒さずして、天皇が朝に仕へ奉つれとしてなも、汝たちを治めたまふ。

是れ等の詔勅に由りて觀つるも、刀自が如何に上皇室に對し奉りて、心を盡し忠勤を抽でられしか、はた下家門の爲めに、力を竭して苦慮經營せしやの跡は、推量らる、げにいみじき事ならずや。

あはれ婉柔の姿を以て、健氣の志を奮ひ、進みては命を致して忠を盡し、數朝に歷仕して寵榮を蒙り、退きては家門を興隆せしのみか、己のが生家をさへ盛んならしめ、又その先嫁の所生をも榮えしむ、身は皇后を生み家は數人の大臣を出せり、所謂人間の名譽と幸福とを以てその一身に集む、誰かその幸運を認めざる者あらんや、抑々その才識優長の致す所なりと雖も、亦以て刀自忠誠の至りにあらざるよりは、何どか能くこの地位に至り得べけん。（完）

トルストイ伯童話

# 新竹取物語

武田櫻桃

## (一)

むかし露西亜のある所に一人の靴屋がありました、此靴屋と云ふのは根が貧乏で、百姓小屋の一間を借りて、其處で靴の修繕をして居るのですが、何分にも仕事の忙がしい割には賃銀が餘計とれません、お神さんと子供と自分との中にたつた一枚の上着があるばかりで、それもぼろ／＼になつて居ますから、これから二年の内に什麽かしてお金を貯めて、新らしい上着の一枚も拵へたいものだと思つて居ました。

其中に冬が來ましたが、什麽も一枚の上着では親子三人が凌ぐ事が出來ませんから、靴屋はお神さんの貯めて置いた六錢ノお金と、村方の者に懸けだまりの少しのお金をあてにして、いよ／＼上着を購はふと其村を出る事になりました、其躰裁と云つたら、お神さんの黄い綿布の肌着を引掛けて、上から自分の古い上着を被ぜたと云ふ、ポンチ畫じみた服裝をして、陰袋へお金を突込んで、杖をついて、夕飯をたべて出て行きましたが此時靴屋はかう云ふ事を考へて居たのです、『まづ／＼これで新らしい上着が購へるやうになつた！

そこで靴屋はもう上着を購つてしまつたやうな氣で、てく／＼村へ出て來ましたが、懸だまりのある百姓家へ行つて見ますと、其處の主人は居ません、で、お神さんが出て來まして、『今は主人が留守ですからお前さんの云ふお金は此次にお前さんの家へ屆けるから』と云ひますので、靴屋は其處を出て、別の百姓家へ行きますと、此處では靴の修繕賃を十錢くれたつきり、『お金がないから、もう少し俟つてくれ』と云ひました。方々歩行いて見ましたが、皆仝じやうにお金をくれませんから、靴屋は目的が外れてしまつて、今度は服屋へ談判して、上着を借りるより詮方がない、とある服屋へ行きまして、前の通りすつかり話し、少しの間上着を貸してくれと頼みましたが、服屋は靴屋の服裝を見て中々承知してくれません。

服屋『お前さん上着が入るんなら、お金をもつといで、お金さへもつてくりやア、好きな上着を上げらア、どうしてお前、お金をよこしもしずに、上着がやられるものか！

と云つて忽ち斷られましたが、お金と云つては御神さんの貯めた六錢と、先刻百姓から貰つた十錢ばかり、什麼して上着が購へませう、『ちやアまた來るから』とすご〳〵其處を出ましたが、もうこうなつては自分の不幸をしみ〳〵思ひまして、『えい一層お酒でも飲んでやれ』ととう〳〵十錢だけお酒を飲んでしまひました、折角手に入れた十錢はお酒になつてしまひましたが、調法な事には、此お酒を飲んでから大層暖かくなりましたから、其勢で杖を揮りながら歩行いて行きましたが、醉つたまぎれに獨言にこんな事を云つて居るのです

『暖かい！　暖かい、上着なしても寒くない所が妙ぢやないか、たつた一杯のお酒がから身躰中馳け廻るんだからな、して見ると上着は入らないよ、おれは正直なのだが他人にはおれの正直が解らないのだ、なアにこうなりやア上着なんか入るものかおれはおれで生活すのだ、なに氣取るに及ぶものか、だが嬶アが可愛想だよ、おれが酒を飲んでしまつたと云つたら、どんなに思ふだらう！

靴屋はこんな事をくど〳〵云ひながら、小さなお寺の前へ來ましたが、不圖見るとお寺の壁の處に何だか白い物が居るやうです、これが晝間ですと能く見えませう、今は丁度夕方の薄暗い時ですから、さて生躰が解りません、多分白い石が置いてあるのだらうと思ひましたが、こんな處にそんな物の置いてある筈がない獸物ではあるまいか、頭は人に似てるけれども、人にしては白過ぎる、よしんば人にした所で、什麼してこんな所に居るだらう、靴屋は氣味が惡くなりましたが、固より其前を通らなければ家へ歸る事が出來ませんから恐々歩行いて行きますと、其白い物は全く人間で、しかも裸のまゝ壁の處へ凭かゝり、生きてるとも死んでるとも見えませんから、さては誰かゞ人を殺して、裸にしたまゝ

此所へ持つて來て捨てたのだらう！、恐い事〳〵とさつさと通り越さうとして、振廻つて見ると、其裸の人は座り直して自分の影を見送つて居るやうですから、慄然として足が竦んだやうに思ひましたが、根が醉つて居るのですから、「一番行つて見てやらうか何か話をして見てやらうか、おれが行つたら彼奴がおれを什麼するだらう、おれが若し彼奴の側へ行つたら乾度飛びついて來るに違ひない、その時はどうして逃出さう、さうかと云つてもし彼奴が飛つかないとした所が、何と云つたものだらう、裸體の乞食に關りあつて物でも失しては大變だ！、靴屋は急いで通り越してしまいましたが、急にまた立ちどまつて、自分で自分を叱りました『何をしてるのだい、他人が苦んでる、死にかけて居る、それを恐がつて逃げるとは酷いぢやないか、それも金でも澤山もつて居て、彼奴の側へ行きやア取られると云ふ事もあるが、それもないのに、他人の難義を見拋てると云ふ事はない、なア、シモン！そうぢやないか！

靴屋のシモンはかう云つて前の處へ歸つて行きました

(二)

シモンは近くよつて其人を見ると、未だ若い丈夫な男ではありますが、眼を閉いて、死んだやうになつて居るのです、急いで側へ行きますと、其人は不意に動き出して、眼を開いてシモンを見ましたから、あはてゝ靴を脱いて、上着も引脫いて、身を固めて其側へ寄らうとしますと、其人はまた周章て停めて『まア、早く來て下さい』と云ひました。

シモンは其人の肘へ手を懸けて立たせて見ますと、唇の色も異つて居なければ、身體も綺麗で俐口さうな顏をして居ます、何しろ裸體の事ですから、早速自分の上着を脫いて着せやうとしましたが、袖をとほす力がないやうですから、ぐるりと卷きつけて、股引てからげてしまひ、さて、自分の破れ帽子をとつて其人の頭へ冠せましたが、かうなると自分は寒くて堪りません、『さうだ、おれの頭は禿げてるから、帽子がなくつては寒くて堪らないが、此人の頭には髮が澤山あるから寒い事

はない、帽子は返して貰つて、靴を穿かせてやらう』一反冠せた帽子を取返して自分の頭へ冠り、今度は靴を穿かせてやりました。

『什麼だえ、兄弟、暖かくなつたらう、なァにおれは別に寒くもないから、遠慮する事はない、だがお前は歩行るかえ。

其人は立ち上つて、シモンの方を見ましたが、未だ何にも口をきく事が出來ません、

『何故お前は返事をしないのだえ、おれは此寒いのに此處で寐る譯にやァ行かない、ちッと歩行けるやうなら、其處におれの杖があるから、それでもついて歩行いて御覧、確固しなくつちや困るぢやないか！

其人はシモンと一緒に歩行き出して、道のある方へ來ましたが、

『よし、よし、其位歩行けりやァ結構だ、だがお前は一躰何處から來たのだえ？

『俺ですか、俺は此處らの者ぢやァないんです、

『おれも此近所にやァ見懸けない人だと思つたが、一躰まァ什麼してあんな所に居たのだえ？

『そりやァ、申上げられません

『一寸見た處誰かに酷い目に遇はされたのぢやァないかね？

『酷い目に遇つたんです、けれど人ぢやァない天から酷い目にあはされたのですよ

『そりやァ災難と云ふものは、天から來るに違ひない、だが、お前は一躰あれから何處へ行く了簡だつたのだえ？

『別に行く處もないんです

シモンは種々と聞きましたが、其人はちつとも判然した返事をしません、自分の事を云ふのが可厭だと云ふ風が見えますから、シモンも後を聞かうとしません。

『別に行く所もなければおれの家へ來るがいゝ、少とは暖かくなるかも知れない！

から云つて一緒に家の方へ急いで來ますと、風がびゆう／＼吹き出して、薄着のシモンを遠慮なく吹きます

から、シモンは寒くて堪りません、『オ、寒い〳〵！新らしい上着はこんな時に欲しくなるんだ、だがおれは新らしい上着を購ふ事が出來なかつたのだ、て、こんな裸体の乞食と一緒に家へ歸つたら、婦アがまア何て云ふだらう、定めしぶん〳〵怒る事だらう』と種々な事を考へながら、不圖お寺の前で始めて裸体の人を見た時の事を思ひ出しますと、寒さが一層身にしみて、思はず知らず足が委縮むやうな氣持がしました。

（三）

シモンのお神さんはシモンの留守にすつかり仕事をしてしまつて　森へ行つて木も伐れば水も汲み、赤ン坊に乳を飲ませて、自分も御飯をたべて、さて考へて見ますると、もう明日の麵麭が少ない、もしシモンが歸つて來て、御飯を食べなければ、それで濟むし、食べるとすると明日の麵麭がない、麵麭を拵へやうと思ふと今度の水曜日までかゝる、『あゝ、什麼したらよからう、それはさうと上着はどうしたらう、うまく買へたかしらん、家のシモンは正直だから、村方へ行けば乾度お錢をくれたらう、お錢さへあては上着は買へたらう、若し買へないとすると、此冬を凌ぐ事が出來ない、河へ行つたりなにかするのに、シモンは妾の上着を着て行くからいゝけれど、妾は一足も戸外へ出る事が出來ない、どうかまア醉はずに歸つてくれゝばいゝが！

から考へ込んで居る內に、戸外へ誰か來たやうですから、戸を開けて見ますと、シモンは帽子も靴もない穢ない乞食と立つて居ました。

それもいゝがお神さんの鼻を突いて匂ふのはお酒の臭ひですから、話を聞かない中にお神さんは『とう〳〵上着を買はずにお酒を飲んでしまひ、こんな穢ない乞食と一緒になつたに違ひない、あんまり馬鹿〳〵しい！』とは思ひましたが、歸つて來たものを締め出すわけに行きませんから、自分の居間へ通しました。

て、シモンを能く見ますと、自分が貸してやつた上着はなく、それを乞食が着て居るのですが、乞食は始終俯面いて、挨拶も碌々しません、お神さんは其風釆を見て、これは悪い人に違ひない、てなければこんなにびくび

くする筈がないと考へながら、側へ行つてこれから那麼事をするだらうと瞻て居ますと、シモンはお神さんの方を見て、

『マーザ、何かあるだらう、何か一つ食はしてくれ

お神さんのマーザはシモンと乞食の顔を彼方此方見比べて居ましたが、シモンが今何か出せと云ひましたので、さア困つてしまひました。

『何か拵へないか、お腹が空いてしまつた』

とせつきますので、有繫のお神さんも怒らずには居られません。

『妾に料理をしろつて、お錢もない癖によくもまアそんな事が云へたもんだ、多分お酒を飲んでるから何が何だか解らないのだらう、上着を購ひに行つて、上着も買はずにお酒を飲むやうな人に、誰が料理なにかするものか

『よし／＼、まア始めつからそう怒つちやアいけない、酒を飲んで、此人を連れて來た理由を聞いてくれ

とこれから前の事をすつかり話して聞かせますと、マーザも有繫に哀れにも思ひましたか、

『まア殘つたお錢を此方へお出しなさい、だが、そんな裸の乞食に食べさせる御馳走はないから、さう諦めて貰ひませう

『そんな事を云はないたつて、おれのいふ事も聞いてくれと云ふ事に』

『聞きましたよ、はい、哀れなお話は伺ひましたよだが、妾は腑に落ちないからね、泥醉者！　上着を買いに行つてお酒を飲んでくる人があるものか』

シモンが種々と辨解をしますけれども、中々聞くことぢやアありません、散々毒ついた擧句の果が、シモンをこづき廻して、着て居る上着をとつて、突然戸外へ飛出さうとしましたが、さて乞食の事も氣がゝりで、その何者であらうと云ふ事が聞きたくて堪りません。

（四）

お神さんのマーザはかう思ひましたから、直ぐ立ちどまつて、

「ねい、此お客は屹度よくない人に違ひない、裸かで襯衣つきりだもの、もし素性の正しい人なら何處からお連れ申したか云さうなものぢやアないか？

「だからよ、今も云つた通りお寺の前から一緒になつたのよ、考へて見るがいゝ、此寒い寒中に襯衣一枚であんな所に居て、若しおれが通りかゝらなけりやア、此人は死んでしまふ所なのだぜ、え誰だつて默つて通り越す事は出來まいぢやないか

マーザはまたこゝで毒つこうとしましたが、ひよいとお客の方を見ますと、默つて俯向いて、手はちやんと膝へ置いて、眼を閉いて、おとなしくして居ますので有繋氣の毒にもなりましたか、少し默つてしまいましたから、

「マーザ、お前は可哀想と思はないのかえ？

お神さんのマーザはシモンにから云はれてお客の方を見ましたが、急に何だか可哀想な氣がしたと見えて、戸を開けて出て行つたと思ふと、やがてそこへ御馳走をもつて來ました御馳走と云つてもほんの家で拵へたものばかりです、

「さア、おあがんなさい！

「これは御馳走だ、さア兄弟、此方へ來るがいゝ、

シモンはもう麵麭を裂いてスツプの中へ入れて食べ始めました、お神さんのマーザは椅子の端へ腰をかけて、お客の方ばかり見て居ますと、其樣子が奈何にも憐れなので、どんな人が零落てこんな姿になつたのだらうと、そこは女だけに餘計な事まで思つて居ます中に、お客もまたやさしい人とでも思ひましたか、思はず莞爾いたしました。

「お前さんは一體何處から來たんですえ？

「俺は此處らの者ちやアないんです

「何だつてまたお寺の前なんぞに裸體で居たんですえ？

「それは申上げられない理由があるんです

「誰かに什麽かされやしないの？

「神さまがこんなにしたのです！

「裸體で居たつて、どうしてまたこの寒い晩に裸體

て居たの

『全く裸體て居たんてす、其所へシモンさんが來て扶けてくだすつて　こうして御馳走にもなつたわけて、乾度神さまから御褒美が出るに違ひないと思ひます！

マーザは起き上つて寢衣をお客に渡しながら

『さア〳〵お寢みなさい、こんなきたない寢衣ですが、寒いからこれでも着て下さい

と云ひますと、お客は其通り着かへて床の中へもぐり込みました、シモンもお神さんのマーザも床の中へ這入りましたが、マーザはどうしても寢る事が出來ません、一體此お客は何だらうと思つたり、先刻御馳走を出した時何故自分を見て笑つたのだらうかと考へて居りますと、シモンも寢られないと見えまして、もぢ〳〵して居ますから

『モシ〳〵、未だ起きてるの

マーザはこう云つてシモンを起しました。

『お前さん、先刻其お客さんと二人て、折角取つて置いた麵麭を食べてしまつたから、もう明日のはないんてすが、什麽したらいゝでせう、お隣りのアメリアさんにてもさう云つて借りる事にしませうか

『さうさな、何の道さうてもしなければ詮方があるまいな

お神さんのマーザはまた其お客の事が氣になつて堪りません。

『此人はまア善人でせうかね、何故自分の事を聞いても云はないんてせう

『おれもさう思つては居るがな、あの調子ぢやアとても話すまいよ

『妾達は他人に何か聞かれると洗ひ浚ひ饒舌つてしまふのだが、彼の人は何だつて云はないのだらう

『なアにいつか話をする事があるだらう、ま、それより一寢入しやうじやないか

三人はとう〳〵ぐつすり寢込んてしまひました。

（五）

明日の朝になりますと、シモンは早く起きましたが、お

神さんのマーザは麵麭を借りにもうお隣りへ出掛けて行き、子供は未だ寢て居ります、お客はと見ますと、床の上に起き直つて、茫然上を向いて居る、其顏はまた昨日から見ると餘程元氣がいゝやうです。

『お早う！　まア今に衣物も着せれば麵麭も來るがお前は一體何處の者だか、それから聞かうぢやないか

『俺は少とも知りませんよ

『知らない？　知らないて、お前、これ程心切にしてやつてるのに、何をした者だ位云つてもいゝぢやないか

『人間は働くものに生れて來るんですから、俺も何か働いて見ませうよ

『一體お前の名は何と云ふのだね

『ミチールと云ふのです

『ミチールか、好い名前だ、が、まアお前の素性を云ふ事が出來なければそれまでだが、これからおれの家に居るとすると、何か仕事をしてくれなけりやア困るぜ

『それはどんな事でも致しますよ

シモンは側にあつた靴を縫ふ革紐を指に卷きつけて、捻つて見せて、

『什麽だえ、こんな事位出來るだらう

『ま、やつて見ませうよ、餘り六ヶ敷いやうでもありませんね

ミチールも其革紐を指へ卷きつけて捻り始めましたが直ぐに覺えてしまいましたので、今度は靴の中を打つ事と周圍を縫ふ事を敎へましたが、それも直ぐに覺えてしまひました、底縫から仕上げまですつかり敎へてやつた通り覺え込んでしまひまして、三日目からもう眞個の仕事にかゝるやうになりました。

て、ミチールの働らく事と云つたら、朝から晩まで休みなしに働いて、仕事をしまふと、默つて座り込んで天を瞰て居るばかり、偶々戸外へ出て行く事がありましても、要事が濟むと直きに歸つて來るし、戯言も言はなければ笑ひもしません、笑つたのはシモンの家へ始めて

連れて來られた晩、お神さんが御馳走を出した時つきりです。

（十八）

それからと云ふものミチールはシモンの家に居て、仕事をしてましたが、其仕事が大層うまいので、近所の評判になりました、何でも靴を賴むのならシモンの家にするがいゝ、彼所には上手な職人が居ると云ふので、どし〳〵賴みに來ましたから、シモンは大層金持ちになつてしまいました。

或冬の事でしたが、シモンとミチールとが窓の側で仕事をして居ますと、鈴をつけた三頭の馬が向ふの方を通りますから、二個は不思議に思ひまして窓から覗いて見ますと、丁度馬は家の前で停つて、馬車から立派な人か下りたやうです、お神さんのマーザは急で戸を明けますと、そこへ上つて來たのはその人で、餘り立派な風采をして居ますから、シモンはもう吃驚してしまつて、默つて立つたまゝ口も碌にきけないのですが、其人は以細關はず上着を脱いて、腰掛けに腰を掛けましたが、

「此處の家の主人は居ないのかな

「へえ、私が主人のシモンと云ふのです

シモンはおづ〳〵、紳士の前へ進みますと、紳士は家來を呼んで、

「おい、俺の包みをとつて來い！

家來は入口の方へかけて行きましたが 今度は大きな包を持つて來ました、すると紳士は忙しそうに、

「持つて來たか、直ぐに開けろ

家來が中を開けて見ますと、中には一杯柔皮が這入つて居ました。

「什麼だ、こんなに柔皮があるのだが、いゝのだか一寸見てはくれまいかな

紳士がかう云つて出しましたから、シモンは手にとつて、

「大層結構な柔皮でございます

と云ひますと、紳士はさも得意さうに、

「結構な柔皮だと云ふかえ、そりやア當然さ、お前な

んざァ生れて始めて、こんないゝ柔皮を見るんだらう、これはな獨逸皮で、二十ルーブルもするのだ
『左樣でございませう、餘程結構な皮と存じますので、この皮で靴をお拵へにならうと云ふお考へでございますかな
『さうさ、これで靴を拵へやうと思ふのだが、俺の氣に入つたやうな靴が出來るかな
『出來ますとも、充分お引請け致しませう
『えッ請合つてくれる、それは有難い、だが、此柔皮を少しも無駄にしずに、出來るだけ綺麗な靴を拵へて貰ひたい、て、注文通りに出來れば十ルーブルをお前にやるし、もし皮の一片でも失すとか、一年の間に出來なければ、お前を家へ連れてッて、捕虜にしてしまふが、それでもいゝかね
うつかり請合つたものゝ、かう云はれると少し心細いやうな氣もしましたから、何と返事をしていゝか解りません、仕方がありませんから、ミチールの方へ向き直つて、
『ミチール、どうたえ、御注文通り行くだらうかなと劍呑さうに聞きますと、ミチールは沈着いたもので、
『うむ、出來るとも、お請合ひ申すがいゝ
其處で愈々靴を拵る事になりました。
『では足形をとつてもらはふ
紳士は家來の肩へ凭かゝりながら、自分の左足の靴を脫いて、シモンの前へつきつけました、シモンは口で紙を裂いて紳士の半袴下を捲くつて足の尺を計り始めましたが、腓の處をとらうとしますと、紙の尺が足りなくなつてしまひましたから、紙をつぎ足してとらうとしますと、
『氣を注けてやつてくれ、此處が狹くなつちやア、折角靴が出來ても穿けない事になるのだから━
シモンは紙をとりに次の室に這入つて行きましたが、紳士は半袴下を捲つたまんま、足の指をぴく〱動かしながら小屋の周圍を見廻はしますと、隅の方にミチールが座つて居ました。
『お前は一躰何者かね

『これは家の職人でございますので

この時紙を探して再び這入つて來たシモンはかう云ふてミチールの方を見ますと、ミチールは別に紳士の方を見やうともせず、反つて隅の方に誰か居るのを見つけたやうな顏をして、目を据えて居るのですが、何が可笑しいか急に笑ひ出して、沈み切つて居た顏までが何處となく嬉しさうになりました、紳士はミチールが急に笑ひ出したものですから、

『何だ、什麼してそんなに可笑しいのだ、笑ひ事ぢやアない、靴の注文を間違へないやうにするがいゝ、愚物め！

するとミチールは押かへして

『御安心なさいまし、お請合したからにやア決して間違へるやうな事は致しませんよ

紳士は半袴下を捲き下して、靴を穿いて、上着を引摺りながら戸の處まで出て行きましたが、店の處で振かへりながら乾度頼んだぞと言葉をつがへてゆツたり／＼と出て行つてしまひました、其影が見えなくなると、

シモンは急に大きな聲で、

『彼奴は飛んでもねい事を云ふやつだ、あんな奴は木槌で叩き殺してやつてもいゝのだが、口惜しい事をした！

と云ひながら、頭を戸へもつてツてぶつけて見ましたが、もう其時には紳士は何處へ行つたか解りませんでした、するとお神さんしマーザは側から口を出して、

『眞個に憎らしい誂へ方ぢやないか、あんな大風な事を云ふやつに限つて、碌な事はありはしないよ

大層腹を立てましたが、什麼も仕方がありません。

（七）

シモンはそこでミチールに謂ひますには、

『まア御覧！　随分大い仕事ぢやないか、柔皮は馬鹿に好い品だが、紳士の腹が惡いのだから、出來損つたらどんな事をするか知れやアしない、お前は目がいゝし、己よりも腕が達者と來て居るから、柔皮の切方へ廻つてくれ、己は履頭の仕上げの方へ廻るからな

ミチールは早速承合つて、柔皮をとるが早いか、卓子の上へ列べて、づん〳〵切り始めました。

お神さんのマーザはさア心配で堪りません、其處へ來てはミチールがどんな事をするだらうと見張つて居るのですが、幾年か靴屋をして居るだけに、靴の拵へ方は詳しいもので、惡くすると亭主のシモンもかなはないやうな事もあります位ですから、間違のないやうにと、かうして眤と見張つて居ますと、ミチールが切つて居る柔皮は靴でなく上靴のやうに出來てしまいましたので少し變だなとは思ひましたが、紳士の誂へを自分で聞いた理由でもありませんから、ミチールが間違ひをする氣遣ひはない、なアに安心なものだと思ひ返して其儘何にも云はず見て居ました。

するとミチールは柔皮を殘らず切つてしまひまして絲をとつて縫ひ始めましたが、其縫ひ方はまた靴を縫ふ通りに二條の絲を使はず、まるで上靴の縫ひ方ですから、マーザは氣が氣でない、もうさう〳〵安心しては居られませんのです。

ミチールは丁度お晝時分まで仕事をして居ましたが、シモンはもう何の位出來たかしらと、自分の手を休めてミチールの縫つた皮を見ると悉皆上靴の格好に出來て居ましたから、驚くまい事か、長い間自分の家に居てこれまで一度でも仕事を間違へた事のないミチールがこんな面倒な約束をした仕事に、飛んだ間違をやつたものだ、それも少しの金でこれと同じの柔皮が購へれば、やり直した處でわけはないが、己の財產でこれだけの皮を買ふ事は出來ない、什麼したらよからうと心配で堪りませんから、

『おい〳〵ミチール、お前にも似合はない事をしてくれたぢやアないか、お前がこんな間違をしたお影で、己は貧乏しなけりやアならない、紳士は靴を誂へて行つたのに、お前の切つた皮は皆上靴ぢやアないか、什麼して言分けをしたらいゝか、ほんとにまア飛んでもない事をしてしまつた

恨みを云つて居ます、すると二三日して誰か戶の外へ來たやうですから、開けて見ると一人の男が馬へ乗つ

て來て、其馬から今下りて居る處です、これは此間紳士について來た家來で、

「今日は！

と云つて這入つて來ましたから、

「今日は！何か御用でもありますので、

と聞きますと、家來は氣の毒さうに、

「此間の靴の事て、奥さんから傳言があつて來たのだよ

「今更何の御傳言でございませう

「少しお前には氣の毒だけれど、もう彼の旦那がお誂へになつた靴は入らなくなつたのだ！

シモンは何だか烟に卷かれたやうで、

「えッ靴が入らなくなつたと被仰るのですか

「まアそうさ、旦那はお前逝去つてしまつたよ

『御戯言被仰つちやア いけません、旦那が逝去つたなんて、そんな筈があるものぢやアございません

家來はブツと眞面目で、

「いや眞事だよ、旦那は此間お前の家へ來た返りに橇の中で逝去つてしまつてよ、それをまたお邸へ還るまで知らずに居たものだから、さア橇から出さうとすると、いゝゝゝ、しやちこばつて什麽しても出まいぢやないか、それをやつと擔ぎ上げてお房へ入れたのだが、時が距つて居るから、もう什麽する事も出來ない、とうとうお逝去りだ、だからもう靴の御用はなくなつたのだが、奥様は折角頼んだものだから、せめて死骸に穿かせる上靴でも拵へてもらうやうにと云ふ事て、態々來たのだが、上靴に代へてくれる事は出來まいかな。

何と云ふ幸せな事だらう、ミチールは早速机の斗抽から柔皮の切たのを掻まとめて、出來上つて居る上靴と一緒に其處へ出しましたが、前垂て一寸はたいて家來へ手渡しました。家來はから早くものが運ばうとは思ひませんから、暫時くシモンやミチールの方を瞻めて居ましたが、

「何と云ふ早い手廻しだ、ぢやア左樣なら、乾度たんまり金になるに違ひないよ！

から云つて家來は其上靴を持つたまゝ、また馬へ乘つて歸つて行つてしまいました。

（八）

それからまた一年と二年とたつてしまつて、ミチールがシモンの家へ來てから、もう五年になりましたが、ミチールは用の外は戯言一つ云はず、眞面目に働いて此五年の間に笑つたのは、たつた二度しかありませんそれは始めてシモンの家へ來て、マーザが御馳走をした時と、靴を誂へに來た紳士が仕事場の椅子へ腰をかけた時ばかりですが、職人の中では手も利きますし、今更素性を洗ひ立てする事もありませんから、シモンはたゞミチールが一日でも長く奉公して居てくれゝばいゝと思つて居るのです。

ある日マーザは竈の前を炊きつけて居ますし、シモンは窓の側で道具を纏めて居る、其側でミチールが踵をカチ／＼云はせながら仕事をして居ますと、腰掛けの上で遊んで居た小兒は、突然ミチールの側へ馳けて來ましたが、肩の處へ手をかけて、窓の外を指しながら

『ミチールのおぢさん、何處かのお神さんが二人兒を連れて家へ來るんだよ、ヤア一人の兒は跛だ！跛だ！

と云ひますので、ミチールは窓の外を覗いて見ますと、成程一人の婦人が二人の女の兒を連れて、シモンの家の方へ來るのです、驚いたのはシモンで、ミチールは五年も自分の家に居るのですが、未だ一遍も窓の外を覗いた事がない、それが今急に思出したやうに一生懸命に瞻めて居るのですから、これは何か理由があるに違いないと、自分も矢張り窓から首を出して覗いて見ますと、小兒が云つたやうな婦人が二人の女の兒を連れて居るのですが、婦人の服裝も綺麗ですし、二人の女の兒も一寸とした上衣を着て、頭からショールを被つて居るのです、婦人はシモンの家の前へ來ますと、階子をトン／＼と上つて來て、鐶を撥ね上げて中へ這入つて參りました。

『いゝお天氣でございます！

『能くお出でになりました、何かお誂へでもござい

ますか

婦人は卓子の側へ座りましたが、二人の女の兒は立つたまゝ、婦人の膝の所へくつゝいて居るのです。

『この兒のね、春穿く靴が拵へたいのですが、拵へて貰へませうか

『宜敷しうございます、手前共では未だお子供衆の靴を拵へた事はございませんが、折角のお頼みですからお引請け致しませう、お靴は橡皮で飾りませうか、リチンで飾りませうか、あすこに上手な職人が居りますから、どちらでもお好み通りに拵へませう』

シモンはかう云つてミチールの方へ振返りますと、ミチールは仕事をよして、小さな娘ばかり瞻めて居ますから、シモンは不思議で堪りません、何程少女が可愛いからと云つても、仕事を廢してあんなに瞻めなくつても好さゝうなものだ、あれでは宛然知己のやうだと思ひましたが、其中に價を極める事から婦人と話を始め、價が極まると小女の足形をとる事になりました、小女は黒目勝の、活潑な、にほやかな、いかにも可愛らしい兒なのです。

婦人は先づ跛の娘を抱き上げて、

『さア、此娘のからとつて下さいまし、この娘は御覧の通り跛なのですからね、靴は一つでいゝのですよ、こつちの娘には一足、ですから都合で靴が三つあればいゝのですよ』

『何とまアお可愛想に、どうしてまたこんな事におなりなすつた、貴婦人のお子樣ですかえ？

いひながらさも哀れさうに跛の娘に目を注けました。

シモンも有繫哀れになりまして、かう云ひますと、

『いゝえ、この娘はね、妾の實の兒でもなく、なんの因縁もないんですがね、什麼云ふものか可愛くつてね、かうして自分の子のやうにして居るのです、妾の實の子も一人あつたにはあつたんですが、神さまがお指揮でもありませうか、實の子よりもこの娘の方が可愛いゝのでございますよ、

『へえ、御自分のお子さんではないのですか、ちやア

何處からお貰ひになりましたので？
シモンもミチールもマーザも皆不思議さうに婦人の顏を瞻めました。

（九）

種々と聞かれますので、婦人は此娘の素性をすつかり話す事になりました。

『思ひ出せば六年前の事ですが此二人の娘は一週間の中に親なし兒になつてしまつたのですよ、此兒のお父さんと云ふのが—貴公—火曜日に死りますと、お母さんと云ふのがまた其金曜日に死んだので、因果な事には此子がまたお父さんの失つた三日目に產れたのですから、それこそお父さんの顏もお母さんの顏も知らないと云ふものです、丁度其頃妾は亭主と一諸に、田舍に居ましてね、此娘の家の隣家に居たのですが、此娘のお父さんの云ふのは貧乏な水呑百姓で、片手間に樵夫をして居たのです、するとある日森の中で仕事をして居ますと、大きな材木が頭の上へ隕ちて來て、骨が出る程の負傷をしたものですから、漸く匍ふやうにして家へ歸へて來ると間もなく、息を引きとつて、三日目にお神さんが雙子を生んだと云ふ騷ぎ、子供は二人まで一諸に產れる、稼ぎ人は逝つてしまふと云ふので、其心配は見るも氣の毒のやうに瘦せてしまつて、お產の蓐に臥たまんま、此娘のお母さんもとう〱失つてしまひました

其翌る朝妾が行つて見ますと、お母さんと云ふのはもう冷たくなつてしまつて居る、それはかりならいゝのですが、死ぬ前に大層苦しがつたと見えまして、ごろ〱轉げた故で、可愛想に赤坊の上へい、い、のしかゝつて、とう〱此娘の足を挫ひてしまつて居たのです！

妾は吃驚して村の人を呼びましたから、皆まア近所の人か寄つて來て、後の仕末をしたのですが、困るのは二人の赤ん坊！　其儘置けは死んでしまふばかりですから、妾は思切つて其子を引とつて、これから三人の兒を養育むやうになりました、妾の

家と申した處で、左程お金持ちと云ふのではない、隨分苦しい方でしたが、御方便なもので、どうにかかうにか三人の子供を養ふ事が出來ましたが乳をやるにしても、兩方の乳を二人に飲ませて居ますと、一人は俟つて居る、何方か一人のお腹が一杯になりますと、また後のに飲ませると云ふわけで、隨分苦勞をしましたが、妾の實の子は二年目に死んでしまひました、で、此二人の娘を養へとても云ふのですか、神樣はもう二度と妾に子を產ませて下さらないのです、今ちやア妾も磨車の商人で、相應な暮しをして居ますから、こんな娘がなかつたら寂しくつて仕方がないのです、それにこの娘達も今じやア妾を親のやうに賴んで居るのですからね

かう云つて婦人は自分の側へ跛の娘を引つけて、右の手で淚を拭ひて居るのです、マーザもこの話を聞くと哀しくなつてまゐりまして、

『昔の人が云つた事にそつはありませんね、人間と云ふものはお父さんやお母さんはなくつても、どうかかうか育ちますが、一日も神樣がなくつては育つものではないと云ふのは、眞個にさうでございますね！』

で、マーザと其婦人とこんな事を云つて居る間シモンの家は急に何となくさゞめき渡つて來ましたが、隅の方を見ると其處にミチールが兩手を膝へ懸けて、天井を見ながらにこ〳〵笑つて居ました。

（十）

婦人は子供を連れて返つて行きました、ミチールは腰掛けから立上り、仕事を片つけて、前垂を外しまして靴の繕ひ人とマーザとを階下へ連れて來て云ひました。

『餘り急な事ですが、私はお暇を願ひませう、もう神樣が私の罪をお忘れになつた時間ですし、貴公方にしても、私がどんな罪をしたかと云ふ事をお忘れ下すつた時分ですから、

見る〳〵中にミチールの身體から五光が映しました、丁度シモンもミチールの只の人間でない事を知つて居ましたから、此時下りて來て、

『オイ、ミチール、お前は只の人間ぢやァない、だから己はもうお前をとめない、また何にも聞きもしないが、お前が始めて家へ來てマーサが飯を出した時と、紳士が靴を誂へた時と、婦人が二人の娘の素性を話した時と、此三度ばかり笑つたが、あれは何が可笑しくつて笑つたのだね、これだけ己に話してはくれまいか、

と云ひますと、ミチールはうなづいて、

『成程私は三度笑つた、これは神様の命令を果したからで、私は固神様から三つの難題を出されて、この難題が解つたら、還つて來いと云ふ仰せでしたから、一々それが解る度に笑つたやうなものです、始めに笑つたのは、此所へ來て御膳を戴いた時で、次ぎは紳士が靴を誂へに來た時、一番終局は婦人が二人の娘の身の上話しを聞いた時でした

『何だつて神様がお前を罰したの だらう、また其三つの難題と云ふのは何の事だらう

とシモンが聞きますと、ミチールはさも云ひにくさうに

『私は神様に背いたから罰せられたのです、何を隱しませう、私は天使なのですが、神様の仰せを聞かなかつたばかりにこんな事になつたのです。

ミチールはまた言葉をついで、

『で、私は今も申す通りの天使で、神様から婦人の靈魂をとつて來るやうにと吩附けられ、眞ぐに下界へ飛び下りて見ますと、丁度一人の婦人が雙子を生んだばかりの處でした、雙子は一生懸命に乳房へ縋らふとするのですが、其婦人はもう子供に乳を含ませる力がありません、婦人は不圖眼を開いて私を見ますと、眞ぐに神様の使だと云ふ事を覺りまして、『天使樣、貴公は私の靈魂をとりにお出でになつたのでございませう、が、私の亭主は森の材木に撃たれて三日前に死んだのです、私の靈魂を差上げても宜敷うございますが、御覧の通りこんな小さな兒が産れたばかりです、何卒もう少し、此兒が大きく――人並になりますまでお見免し下

さいまし、兩親が失くなつては此子は育ちません、何卒もう少し御勘辨を願ひます』とさも哀れに云ひますから、私も可愛想になりまして一人の子を乳へつけてやり、もう一人の子を抱かせてやつて、さて天へ返りましたが、神樣の處へ行つて、私にはとても婦人の靈魂はとれませんと云ひました、すると神樣は大層お怒りになりまして、どうしても其婦人の靈魂をとつて來い、そうしてお前は三の難題を解るやうになつて來い、これが解らない中は天へ還る事はならないと被仰つたので、難題と云ふのは『どうして人と云ふものがあるだらう、人は、何が一番大切だらう、人は什麽して生きてるだらう』この三つの難題です。

そこで私は二度下界へ下りまして、思ひ切つて其婦人の靈魂を取りますと、赤ん坊は乳を吸つて居ましたが、お母さんが死んでしまつたので、咬へて居た乳房を放して、ばたりと落ちました、するとまたお母さんはウヽムと云つてごろりと轉がりましたから、可愛想に一人の赤ん坊の足を挫ひてしまつたのです、可愛想とは思ひましたがどうも仕方がないので、私はまた靈魂をとつて天へ還らうとすると、大風が吹いて來て、私の羽が役に立たなくなりましたから、靈魂ばかり神樣の處へ投り上げて、自分はまた下界の道側へ落ちてしまつたのです。

シモンもマトーザも今迄自分達と一緒に居た者が、天使てあつたかと思ふと、急に恐いやうな嬉しいやうな氣がしまして、一生懸命にミチールの話を聞いて居るのです。

（十一）

ミチールはまだ饒舌りつゞけて、

『で、私は下界へ落ちて、裸かで廣い野の端れに居ました、其時は未だ人間と云ふものゝ慾とか、貧乏とか、饑餓とか、寒いとか、暑いとかと云ふ事を知りませんでしたが、さア人間になつて見ると、お腹は減く、寒くはなる、それも什麽したらお腹が一杯になり、身體が熱かくなると云ふ工夫がつきません、

不圖野の端れを見ますと、一つの御堂がありましたから、其處へでも行つたら、また何とかなるだらうと、御堂の處へ來て見ますと、生憎く戸が締つて居て這入ません、仕方がないから、壁の所へ凭かゝつて、風を除けて踞んで居ました。

すると夕方になつて、日はどつぷり暮れて來る、さア御腹が減く、手足が凍える、什麼する事も出來ません、一生懸命に寒いのを我慢して居る中に道側を通る跫音がして、其處へ一人の人が來ましたが、何だか酷く驚いたやうな樣子でしたから、自分は態と身をかはせてしまひました。

其通りかゝつた人と云ふが、また、『あゝア什麼したら此冬を過せるだらう、什麼したら此冬中女房子が養へるだらう！』と獨言を云つて居るではありませんか、そこで私の考へましたには、私も今現在寒いのとお腹の減つてるので困つてるが、あの人も矢張さうなのだ、あの人も暖い上衣と女房や子供に食べさせる麵麭を探して居るのだ、とこう思ひますと、何だか心細くなりました。

不意に後へ返つて來る人があるやうでしたが、先の人が來るのだらうとは什麼しても思ひませんでしたが、見ると今通りすがつた人で、先に見た時には死んだやうな顏の人が、今度は蘇生つたやうに活々して、そして其顏には確かに神樣がお宿りになつて居るやうに見えました。

運のいゝと云ふのでせうか、其人は自分の側へ來て、親切に着物を着せてくれて、家へ連れてつてくれましたが、其處の家のお神さんは大層邪見な人でして、私を寒い處へ投り出さうとしたのです、眞個にあの寒い所へ投り出されたら、私は凍えて死んでしまつたでせう、すると不意に其御亭主がお神さんの心へ誠を含めましたから、お神さんは急に變つて親切な人になり、私に御馳走をしてくれました、これも邪見な時は死だやうな顏をして居ましたし、心が變つてから生々して宛て神さまのやうになりました。

さア私が神樣から出された難題の一つを解く事が出來ました『どうして人といふものはあるだらう！』この難題が解けたのです、人と云ふものは愛と云ふ事で立つて居る、愛がなかつたら人は無いと全じだと云ふ事を思ひ出しまして、亦神樣から吩咐つた一つの難題が解けたから、思はず笑つてしまつたのです。

ミチールは段々乘氣になつたと見えて、

『それからお前さん逹と、かうして一諸に住むやうになつてからも、どうか一日も早く後の二つの難題を解きたいものだと思つて居る中に、いつか靴を誂へに紳士が來た、彼の時紳士の後には私しの朋友の天使がついて居て、紳士の靈魂をとらうとして居たのです、これは私の外に見たものはない、が、確かについて居たので、私は夕方までに此紳士の靈魂はとられるだらうと思つて居ました、人間と云ふものは兎角一年の貯へをするものですが、今死ぬと云ふ間際まで何にも知らずに居るのです

神樣の次ぎの難題、『人は何が一番大切だらう！』それは一番大切なのは命で、どんな剛い人でもこれには勝てません、私は自分の友人に遇た事と、此難題が解けたので嬉しくつて、つひ笑つてしまつたのです。

二つの難題はかうして解きましたが、まだ一つ殘つて居ますから、私は氣が氣でなかつたのですがどうも仕方がありませんから、其時の來るのを俟つて居ました、すると六年目に彼の婦人が跛の娘を連れて來たのを見ると、それは昔し自分が靈魂をとつた女の雙子で、兩親が逝つて他人の手に育つたのを見ました時に、成程人と云ふものは親がなくつても育つものだと思ひまして、神樣の終局の難題、『人はどうして生きてるだらう！』と云ふ謎が解けました、神樣と愛とがあつてこそ人は生きて居るのだとかう思ひましたら、すつかり難題がとけてしまつて嬉しさに思はず笑つたのです！

（十二）

衣服がミチールの身體からつるりと脱け落ちますと、とても眩しくて見えないやうな五光が颯とさして、其顏と云つたらミチールの顏とは見えない、天から映つたやうに見えて、其神々しさは何とも譬へやうがありません。

『人間と云ふものは愛を除つたら生きて居られるものではない、親はなくつても人間の愛につながりさへすれば、他人の手でも育つて行くし、また人間と云ふものは、朝靴を誂へて晩に死ぬ事を知らないものだ、私が此處へ來てからでも、私は愛の爲めに助けられ、愛の爲めに養はれて、今日までを過ごしたのだ、自分が此處の家に來たと云ふのも、雙子の親なし兒が他所の人の手に育てられたのも、皆愛があつたからで、私はかう云ふ事を發明した。

**人間は愛で立つて居る、人間は神樣の庇蔭で立つて居る、神樣は愛である!!!**

ミチールはもう天使の姿になつて、神樣への讃美歌をさも美しい聲で歌ひましたから、小さなシモンの小屋は其響きて動搖るやうでした。するとシモンの家の屋根がぱつと二つに割れるかと思ふと、大きな火柱が眞直ぐに立ちましたから、シモンも、マーザも、子供も皆轉がつてしまひましたが、見るとミチールの肩から綺麗な羽が生へて飛んで行つてしまひました。

* * * * * *

シモンがはつと氣がついて眼を開いて見た時は、割れたと思つた家根はちやんとなつてまして、自分と自分の家族の外に誰も居ませんでした、ミチールは天へ還つて行つてしまつたのです。

（完）



# 美人と英雄

千山萬水樓

人生婦人の身となる勿れ、百年の苦樂他人に因ると、才子多病にして美人多くは薄命なり。月花の好配、天常にこれを嫉んでその久しかるを得せしめず、英雄と佳人の好配もまた常にこの如くしてその終りを完ふせしもの世に稀れなり、支那の古へ虞美人あり、楚の項王に歸く、項王百萬の兵を擁し力を鼎を扛ぐるの勇ありて終に漢王の爲めに垓下に圍まる。これぞ英雄と美人が、相得てその命數のはかなきを嘆ずる一例、誠とに千載の好話料たり。本朝にては九郎判官義經に靜御前あり、判官は智謀軍畧古今獨歩の人にして其の終けまことに悲慘なりけり。英雄と美人相合ふて相袂かる天涯地角千萬里、その怨み綿々として絶ゆる時なし。扨又爰に新田左中將義貞あり、南朝の忠臣、源氏の名冑を以て勾當の内侍所におもひをかけ、後醍醐天皇の叡こき憐みによりて絶世の美人は遂に義貞が掌中の珠となりぬ。さりなから、無虧の月は雲に蔽はれ、全盛の花は嵐にいためらる、英雄はその心を任せたる佳人とともに、一朝のあらしに隔てられ、遂に風雨慘憺の末路を見ることこそ哀れにも又果敢なけれ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

抑も爰に勾當の内侍所といふは如何なる人ぞ、これは頭の大夫行房卿の女にして建武の始め後宮に召されて内侍となり、後醍醐天皇に仕へ奉りて寵を受く、當時新田左中將義貞北條氏を鎌倉に亡ぼして建武中興の業を翼贊し奉りし功に依て上野、播磨の兩國の外分國數個所を賜はりて主功第一に錄せられ武將の頭領となり内裏の警衛を仰せ付られたり、義貞が勾當内侍を見初めたるは實に此時なりし、太平記の記者是を記して曰ふ。

或夜月涼しく風冷かなるに勾當の内侍半簾を卷きて琴を彈じ給ひけり、中將その怨靜に心引かれて覺へす禁庭の月に立ち吟ひあやなく心あこかれければ、御簾の傍に立ち紛れて伺ひけるを内侍見る人ありと物佗しげにて琴を彈かずなりぬ、夜痛く深けて有明

の月の隅なくさし入りたるに類ひまてやはつらから
めと打詠じて萎れ伏したる氣色の折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなん玉篠のあられより尙あだなれば、中將行末も知らぬ道にさまよひぬる心地して歸る方もさだかならず、淑景舍の傍にやすらひかねて立ち明かす、朝より夙に歸りても微かなりし面影の猶こゝもとにある心迷に世のわざ人の言ひかはすことも心の外なれば、いつとなく起きもせず、寢もせで夜を明し日を暮して若し知るべする海人だにあらば忘草のおふといふ浦のあたりにも尋ねゆきなましと、そゞろに思ひしづみ給ふ

流石は多情の英雄にぞある、義貞東國に人となりて未だ荒夷の心は失せずと雖も、舊名門の裔、華胄の家に生れて都の手振を解しぬ、殊に義を重んじてよく朝紳の心を得、且つ仁心あつて深く士卒の倚る處となる、かゝるめでたき大將なれば金閨上臈の艶なる姿を垣間見て徐ろに心を動かせども、しばし高根の花と打詠めて仇にあこがれむもひを焦かすばかりなるは荒くれたる軍さ人にも似ず可憐といふべし、語に曰く英雄の心膓みだれて糸のごとしと、左中將千思万想して遂に人を以て書を致さしめ、けるに端なく事天聽に達し、君叡感あつてやがて內侍を下し賜はりたり、太平記は此時の樣を記していふ。

義貞あまりに詮方なきまゝ媒すべき人を尋ね出してそよとばかりを知らすべき風のたよりの下荻の、穗に出づるまではなくともとて

我袖のなみだにとまるかげとだに
　　しらで雲井の月やすむらん

と詠みてつかわされたりければ、君の聞召されん事も憚ありとして、よに哀げなる氣色に見へながら手にだに取らずと、使歸りて語りければ、中將はいとゞ思ひしほれていふべき方なくあるを憑の命ともおぼえずなりぬべきを、何人か奏しけん、君等閑ならずと聞召されて、夷心のわく方なきに思ひそめけるも理りなりとあはれなる事に覺召しければ、御遊びのついでに左中將を召され、御酒賜はらせけるに內侍を

ば此盃につけてとぞ仰せ出されたる、左中將限りなく忝なしと悦びて、翌の夜聽がて牛車さはやかにしたてゝかくと案內、させたるに、內侍もはや此年月の志に、さそふ水あらばとおもひけるにや、さのみ深けすぎぬ程に車のきしる音して中門に轅をさし廻せば侍兒二人妻戶をさしかくしてのめきあへり、中將は此幾年を戀ひ忍びて相逢ふ今の心の中、優曇華の春まち得たる心地して珊瑚の枕の上に瑤臺の夢長くさめ、連理の枝のほとりに驪山の花自から濃やかなり。英雄一たび美人を得て萬里征戰の機を忘れ、玉の腕に起き臥して金閨の夢獨暖かなりける、扨ても建武の中興は鎌倉を攻め亡ぼして一旦政ごとを朝廷に歸へすと雖も間もなく後門の虎は翼を生じて東國に據り、京畿の地も又物騷がしく、やがて再び兵馬の巷となるや、朝敵四海に群がり起り、主上は叡山に二度の臨幸なり、芳野へ落させ給ふなど これより、南北兩統の爭となりて國中の大亂となりしかば勤王の將士諸國に馳せ交ひて征戰年を重ねて歇む時なし、新田左中將は南朝の總大將にして、足利の勢を兵庫に迎へしも、運拙なく戰ひ破れて北國に走り、越前、敦賀、金ケ崎の城に立籠りて敵の大軍と數度の合戰に及びけるが、戰ひ常に利あらずして延元三年の八月、足利高經との手合せに打破れ、藤島城の此方なる畷手道にて流矢に中り空しく戰死を遂げぬ。一度び英雄と相逢ふて百年の契りを許したる美人勾當の內侍の歎きは如何ならん、行輿間關の情又察するに餘りあり。

扨もあやなく迷ふ心の道、諫める人もなかりしかば、去ぬる建武のすゑに、朝敵西海の波に漂ひし時、中將此の內侍に暫しの別れを惜みて征路に滯り、後に山門臨幸の時寄手大嶽より追ひ落されてその儘寄せば京をも落さんとせしかども、中將此の內侍に迷ひて勝に乘り疲れを攻むる戰を事とせず、果して敵の爲めに國を奪はれたり、誠に一たび笑みて能く國を傾くと、古人の是を戒めけるも理りなり、中將坂本より北國へ落ち給ひける時は、路次の難義を顧みて內侍をば今堅田といふ所にぞ留め置かれたりける、かゝ

らぬ時の分れだに行くには跡を顧みて頭を家山の雲に廻らし、留るは末を思ひやりて、泪を天涯の雨にそふ況んや、中將は行末とても頼みなき北狄の國に趣き玉へば、生きて再び廻りあはん後の契もいざ知らず、又内侍は都近き海人の磯屋に身をかくし、給ひければ、今もやさがし出されて浮名を人に聞かれんずらんと一方ならず歎げき給ふ、翌年の春又行房朝臣、金崎にて打れ給ひぬと聞えしかば思の上に悲をそへて、明日までの命も何かせんと、歎き沈み給ひしかども、さりかに消へぬ露の身なれば起居の袖をほしわびて二年あまりになりにけり。

京都既に兵亂の巷となりて敵の據る處となれば、味方の輿頽散り／＼になりて南朝の人の身を寄すべき家はなし、嘗て金屋の裡に粧をこらし、鶏障の下に媚を深ふしたる絶世の佳人も、今は寄る邊汀の捨小舟、蜑が伏屋に身をかくして辛ふじて露の命をたもつ、さるも猶父を慕ひ、夫を慕ふて遙／＼行きつかんと思ふにも、征途路遠くして風雨に隔てられ、千里兵戈の巷を踏んで空しく行路にゆきなやむ。榮々たる孤客の情、況んや羅綺にだも堪へざる深閨の人に於てをや。

中將も越前に下り着きし日より、軈て迎をも上せばやと思ひ給ひけれども、道の程も輙すからず、又人の言思はんずる所ろ憚かりあれば、只時々の音信ばかりを互に殘る命にて年月を送り給ひけるがその秋のはじめに、今は道のほども暫くしづかになりぬればとも迎の人を上らせられたりければ、内侍は此三年が間、暗き夜のやみに迷へるが、俄かに夜のあけたる心地して、頓てまづ杣山まで下り着き給いぬ。折節中將は足羽といふ所へ向ひ給ひたりとて、此處には人もなかりければ、杣山より輿の轅を廻して、淺津のはしを渡り給ふ處に、瓜生彈正左衛門尉、百騎ばかりにて行合ひ奉りたるが、馬より飛びており、輿の前にひれ伏して、是はいづくへとて御渡り候ふらん、新田殿は昨日の暮に、足羽と申す處にて討たれさせ給ひて候と申しもはてず、涙をはら／＼とこぼせば、内侍の局こは如何なる夢のうつゝぞやと、胸ふさがり、肝消

へて、中々涙も落ちやらず輿の中にふし沈みて、せめてはあはれ其人の討たれ給ひつらん、野原の草の露の底にも身をすて置きて歸れかし、さのみは後れさきたゝじ、共に消へもはてなんと泣き悲み給へども、早其輿かき返せとて、急ぎて叉杣山へぞ返へし入れまゐらせける。

南北兩統の戰、實は新田、足利兩黨の爭ひなりける、足利尊氏後醍醐天皇に叛き奉りて以來味方の軍勢は新田左中將義貞を總大將として、何所の戰にも全軍の統領とあがめ楠、名和、宇都宮、其他の武將。公家方は唯一方の大將たりしのみなりけり、されば義貞の戰死は南朝方に取ッて大切の首を失ふたるが如くこれが爲めに味方の軍氣は大方ならず殂喪し、遂に南風競はずして世は足利の天下となりしもの第一に義貞の歿落に在りけり、扨ても義貞が此の度の戰陣は足利高經の立籠れる足羽の城を攻落さんとて延元三年閏八月越前國中の官軍を驅り催ふしその勢三萬餘人を得たりしかば、義貞朝臣大に喜び、この勢を以て足羽の城を攻め屠り、それより北國一圓打從へて京都に攻め上り天皇を迎へ奉らんと。一族三十餘人を率ひて河合の庄といふ處へ陣を張り自からは赤地の錦の直垂に脇立ばかりして威儀ある裝ひこらし遠侍の座上に座して、雲霞の如く集り來れる軍勢を遙かに見渡し、一々目禮を行はれしかば、外樣の人々いづれも情けある大將かなと感嘆し、足利の天下を奪ふて世を王朝の昔に返へさん人は必らず此の大將なるべしとぞ思ひける。去る程に戰の手筈は定り三萬餘騎を七手に分けて七の城に對陣せしめける、時しも平泉寺の衆徒のこもり居たる藤島城、殊の外いろめき渡りて軈がて落城と見へたりしかば數萬の軍勢は是れに氣を得てまづ對陣の沙汰をさし置き塀につき壕につかりて喚きさけんて攻め戰ひける、此時大將は燈明寺の前にひかへて手負の實檢をなし居たりしが、藤島の戰強くして官軍やゝもすれば追立らるゝ體に見へしかば捨置がたしと思ひけん、馬に乗りかへ、鎧を着かへて纔かに五十餘騎の勢を相從へ路をかへ畔を傳ひて藤島の城へ向ひける、折しもあれ敵の一將細川出羽守

藤島の城を救はんとて三百餘騎にて横畷を廻りけるに出合ひ、否應なく對ひ合ふて戰ひける、此時敵は歩立にて楯をついたる射手多かりしかば深田に走り下り楯を衝きならべて鏃を支へて散々に射立たり。然るに味方は射手の一人もなく、楯一張だも持せざれば、前にありける兵、大將の箭面に立塞かりて只的になりて射られける。斯る有様なりしかば郎等の一人義貞に目配ばせし、千鈞の弩は鼷鼠の爲めに機を發せずといふ事あり、大將たらんものは速かに此の處を脱かれ給ふべきなりといふを、義貞聞きあへず、可惜好武夫を討たせて奚んぞ我れ獨り免かれんやと、いひつゝ猶も敵の中へ懸け入らんと駿馬に一鞭あてゝ進めば、堀一つ越す處ろにて五筋まで射立られたる矢によわりけん乘りたる馬はさながら屏風を倒す如くに岸の下へところびける、義貞左方の足をしかれて起きあがらんとしける時、白羽の箭一筋飛び來ツて眉間の眞中へ立ちたりける、さすが英雄も急所の痛手なれば忽ち目眩らみ、心惱亂し、所詮起つべくもあらじとおもひ、拔きたる太刀を左の手の手に取り直し我れと我が首かき切りて失せぬ。一族三十餘人の總大將、關東武家の頭領、南朝の柱石と頼まれし人の終焉誠にはかなき最後なりける。軍散じて後敵の郎等氏家中務之丞、義貞の首をかき切りて鋒先に貫きて、大將高經の前へ參りける、元より泥田の中の討死なれば、首は血泥にみだれて何人とも辨へざりしが、死體に掛かゝりし金襴の守嚢と金銀にて作りし二振の太刀とを撿ため見るに是れや源氏重代の重寶、鬼丸、鬼切といふ銘の刻みあるこそ擬ふ方なき左中將の片身なり、即ち腐にかゝりし守嚢を開きて見れば、これぞ尊とき帝の宸筆にして朝敵征伐の御頼みを囑せられたる大切の御記念なりける。依て首をば朱の唐櫃に入れ氏家中務宰領して京都へ上せられける。

斯る事とも知らずして遙々京より越前へ下りつきし勾當内侍は途中より中將の戰死を打聞きて夢かとはかり、驚ろき胸ふさがりて手足も立たずなりけるが、扨あるべきにあらざれば、新田一族の立籠れる杣山城まで引かへし、此所にて霎時やすらひ、その節義貞の住み捨

てられし跡にこもりて、形見の色紙など取り出して懐舊の涙にくれそれよりまた京へ歸り、遂に剃髪して尼となりて嵯峨の奥に住ひける。

是ぞ此程中將の住みたまひし所なりとて色紙押し散したる障子の内を見給へば、何となき手ずさみの筆の跡までも、唯都へいつかとあらまされたる言の葉をのみ書き置き讀みすてられたり、かゝる空しき形見を見るにつけても、いとゞ悲のふかくなり行けば心少しも慰むべき方ならねど、中將の住捨たまひし跡なれば、爰にて中陰の程をも過してなき跡をも吊はゞやと思しけるに頓て其邊も騒かしくなりて、敵の近づくなど聞えしかば、城の麓はあしかるべしとて、頓て又京へ上せ奉り、仁和寺のあたり、幽かなる宿の主だに、すまずなりぬる蓬生の宿に送り奉る、都も今は却りて旅なれば、住所も定まらず、心うかれ袖しほれて、いつくにか身を浮舟のよるべもあるべきと、昔見し人の行末を尋ねて、陽明の傍へ行き給ひける路に人數多立さわひて、あなあはれなんといふ音するを何事にかと立ち留りて見給へば越路はるかに尋ね行きてあはてかへりし新田左中將義貞の首を、獄門の木に懸られて、眼塞り色かわれり、内侍の局是を二目とも見給はずして、傍なる築地の陰に倒れ給ひけり、知るも知らぬも是を見て、共に涙を流さぬはなかりけり、日已に暮れけれども、立ち歸るべき心地もなければ、蓬が本の露の下に泣きしほれておはしけるを、其邊なる道場の聖、餘りに御いたはしく見えさせ給ひ候とて、内へいざない入れ奉り其夜やがて緑の髪を剃り下し、紅顔を墨染にやつし給ふ、暫しかほどは、なき面影を身にそへて、泣き悲しみ給ひしが會者定離の理に、愛別離苦の夢を覺まして厭離穢土の心は日々にすゝみ、欣求淨土の念時々に増りければ嵯峨の奥往生院のあたりなる柴の扉に、明暮を行ひすましておはしける。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

嗚呼憐れむべきかな佳人の末路、一たび英雄と契りてその末を完ふする事能はさりけり、さしも仁あり、智あ

る勇將も武運拙なくしてわはれ勁敵の爲めにその命を殞す、千里雲隔つと雖も戀々の情日夜にかよひ、天涯地角相慕ふと雖も、思を遂ぐる事能はずして骨肉黄土に



委し、紅顏空しく緇衣にうもづる、風嫉むか、雲妬むか、嗚呼何んぞ天の月花に幸するを惜むの甚だしきや。

# 精神家の日記

鈴木冷露

世にすぐれたる才能ある人の心行ひにこそ閑中忙あり忙裏よく閑あらめこれは分けても行き足らぬ身に人知れぬ重きつとめさへ擔ひて夜を日にかねてあえき渡る程は五月雨しきる軒のしのふの露斗も心易からずいとせめて老後の思ひ出草にもがと日毎に出てあふ事くさ有のまゝになさいとま見出てゝかひ付くる筆のみだれにいかで文あり章あり得ん夫をだに清書して見せよとある人の御詞の重さには數々耻斂ふし嗚呼かましき言の葉願みあらたむるにいとまあらずはた又さては人の御心にそむくを思ひて推してとり敢ずる可し

山よりもいや高き父のみの掬育敎養十八年間の御心盡しに聊か酬ひかましき行ひも得せて後れ參らせしより早くも十返りの御忌日に當れるけふ六月

▲十八日　といふ日はすがらに思ひ出る事繁くていはん方なく悲しなつかし一切の俗事をすてゝ籠りくらす

▲十九日　月の第二の酉の會催さるゝなり例の事とてとり分けて何の心構へもせず

酉の會とはかねて此家のあるじが十數年來中も忸こけれども　皇室の御威稜をいやか上に發揮し奬へたる神州の精氣を鼓吹して要は國躰の本領を世界の上に明らかにせはやの一念に驅られて熱狂苦慮せられし此年月の眞忠に同情する人々一先づ此宿に集り會し御國の處すべき道すしより何くれに付けて議り玉ひしか恰もかの大内山に五日間鳥狩の御事ありし最後のかつ酉の日に相當せしかば故こそあれとてかくは名け給ひつ主の君か朝夕毎に身を潔めて行業とらるゝ風呂水まだきに起きて汲み湧より一切の炊事洒掃例の如し三人の幼き子達も續いて入浴する淸素なる一汁一菜の朝げ降りなく濟みて午前七時といふに連雨始めて晴れたれはまづはと思ふいとまもなくまたもはら〱と芭蕉葉の若ばをたゝく音たかし

三時てふ約を違へす金原明善氏まつ來ませり粟田の大

臣にたとへ申さんも處からの異様なれどけふのみはと思ひきや折から生憎に降り増る雨を犯して車にも召されす例の手織の衣の裾高うかゝけて御袴の包み提けおはす道といふ一文字の爲めに飽まて忠實に驕侈淫逸に競ふて世と身とを忘れはてたるいまの世にまたあるまじき長者の俤おやにけ高し續いて河野廣中、大井憲太郎、福地源一郎、外知名の數氏次々に參り集はれ給ふ千家尊弘、平田盛胤、血脇守之助、千坂高雅の諸氏はさはる事俄に出來或は病氣にて不參の爲め昨日通知參りきしめやかなる軒の玉水打しきる蛙の聲に心すまして隔なく而かも嚴肅に日暮るゝまて語らひ給ふ

赤坂新坂町に魚を商ふ石丸千五郎といふ人あり、敬神の志飽迄深く國をおもふ念燃る斗なり。子七人もたるが皆其親の心をもて心としたれば揃ひに揃ひて謹直溫厚に朝またきより心合せて父母を助け業ひを勵むもあれば、幼きは學びの道にいそしみて家庭の美をそへぬれは、知るしらぬ皆こぞりてほめけり、此人ふかく主の君の言行に感激し、滿二ヶ年の今日迄日々朝夕ことに必ず來訪ひて敎へをきゝ、其業ひの日に〱榮へ行くにつけても信仰の賜なりと確信して、實踐躬行ます〱勵み淨き餘財を時々に献納して、此家の淸貧に資し來つて倦まず、信薄く僞多き此頃の世にとにもかくにも類ひまれなる人となりを、主の君もいたく愛で用ひ給へるか、けふも魚河岸の歸るさ立よりて神酒何くれの器物など外にかもじをもそへて捧げ行く。

もとより精神をもとゝせる會なりければ、此眞心よりせる饗膳を人々皆山海の珍味と愛で給ひ、且つ我が夜べ一よ徹してぬひ上げたる木綿の單衣と、綾錦とも嬉しみて朝より分けて機げんよく遊び居られし幼き子達が、燈火かゝぐる頃よりらうたき聲そろへて、亞細亞の海に横はる日本島根の國を見よと節おかしく歌ひ出たるに、一同しばし手拍ちやまずまたるきものに聞きはやし給ふ、「聲や雲井にひゞくらんと納めたればいまはと來ん酉の日を期して散り〱立あがれ給ふ去りかけに風呂敷包の中より一品とり出でゝこれ後に先生に進めくれよとて金原氏の殘し給へり、學生諸氏は猶殘り

て主の君の講話とも承り十二時の響きに驚かされて散ず、何くれに勞れつれど猶其處此處掃ひ清むる程に、いたく更けてやがて二時に達す、さらでも明けやすき夏の夜のもはや打ちぬる程もあらじと、消え殘る燈火のかげに文とも繙く主の君も其まゝ例の採筆をやし給ふ折々墨すり流す音聞えたり。

▲廿日　午前四時半起ちて風呂其他の用事例の如し子達まで入浴。

はかなき手業に辛ふじて得たる廿錢の財は終日の糧の代なり美味は希ふても進め參らすべくもあらず生みの母君は近きわたりに在し乍らゆるさぬ事情ありといふ爲めに來てだに見まさぬ御心强さを年長なるは、如何斗り戀しふもなつかしふも思しめ賜ふらんと色にだに出さで甲斐なき我をまたなきものに馴れしたわせ賜ふ愛らしさ、よく粗衣に安んじ不自由になれて而かも猶錦衣玉食の時めく家の子達にもまさりて、氣品高く肉付ききびくしふ生し立ちますも育てまゐらす身の慾目にはあらじ、定めの日課はてゝ後は我も幼兒になりて遊ふ。

二階より召されたれば主の御前にかしこまり申す昨日金原氏の持て來ませしものはこれぞ見よとなり

　文官不愛錢武官不愛死則天下泰平也

と筆蹟美しふ認められたり天龍川治水の大工事を一身に擔ふて巨萬の産を擧げ傾け時の內務卿大久保公の荒膽を挫きし氏が當年の面かげも忍ばれてなん。

終日の活動にいとよく勞れて今宵は例よりも早う床に入りにし花の樣なる子達の、寢顏打詠めつゝ枕べに物認む十二時就床無心の採筆を妨げ參らせじと思へば例のうしむまよりも申さず。

▲廿一日　けふ故里なる熱田の宮の御祭日なり三時半離床心身を淨めて遙に拜み奉る廻る月日のいと早さよ去年のけふかねて新たに成れる市役所の樓上神聖なる會議の公席を血にけがし切つて棄ても矯むべき道は他にありけんを身を忘れ世をわすれて一片報國の素志の上におのが信を斷行して恐れざりし人の身のなる果ては、今更ながら痛ましくはた草薙の御劍を時折にふれ

て發現まします高き御靈威は今に始めぬかしこさながら、扨も彼のかからぬ前はありとある罪名醜聞を一身に被き一朝刄の露とけぬれば嘗ての敵も味方よりも轡を揃へて惜しみ痛いはばおのが血に御拔池上墓畔の苔に入にし人の魂魄いま何處にか睡る二百の錢に窮して縊れしといふ誰やらんが今はの際の筆そめて

死んだならたつた二百といふならん
　生きてる中は百もかさねど

と書き殘せしと聞くも思ひ合されてなん實に情にもろき社會の皮相なる制裁は、常に間接に世を死の淵に誘導して止まず、さなきも苦痛不如意の最上の隱れ家と信ずる薄弱なる人類が死に對する迷想は爲めに一層强まりさると得ざるを如何。

門近く笑ひの聲聞ゆ幼き人何事やらんといふに出て見れば十七八斗なる女の學生綾羅の袖ゆたかに朝風にはらませ。海老茶の袴裾長うひける一群れ隣りの軒に物乞ふ兒の姿のあやしとてさゝめくしけりげにやもとの雫梢の露いづれば一つ御空の惠みの滴りにてあなるを、如何にぞや、彼か一日榮花の飲食の料には此れう一家數月の命をも支へ得べきを、猶且道もせ人の門に犬猫にも劣れる辱しめを被るべし、人世の不平等運命の不平均、抑も此世の成り出でにし昔は淸く輕きか天となり、重き濁れるは地と滯ぬと聞くを、今は黄金白金の重きをもたるは、穢らはしき分際も、高う浮世の階級をふみ上り、これなくて深きは時に日に下り沈みて底止あるなし、逆になりぬといふは今の世の樣とこそいふらめ。

此程は犯罪者殊の外夥しく、未決檻内千有數百の人を收容すと聞けり、哀れ此等の罪惡は如何の邊より來るなるや、心して日夕都大路に物商ふ人の賣り聲に耳とむれば、先の頃まで豆富賣豆と節長閑に歌ひ渡りしは、いつしかなれぬ饂飩蕎麥に呼はひかへ、自然をおのが生計の種と露の干ぬ間の花賣る翁やがては人を運ぶ車の揖にすがるぞかし、朝げの料にと日に一度賣りありきししゝみ蛤家々の蚊遣りの烟に咽びつゝ、夕暮毎にまた來る也、所謂文化漸く進みて驕侈の風またく俗

をなし、物價いや昇りに騰りてければ、細民の窮困たとふるに物なく、さても猶辛く生活んとするが爲めの悲しき現象ならすとせんや。而かも一部の社會には人世の快樂恣に、慾念の燃るに任せて叶はす得すといふ事なし、見るに聞くに目眩まさらんや、心迷はすといふを得んや、羨望のはては盗みもせん、自暴の極は殺人強竊も物の數かは、左迄ばなきもなまし惜しむべき名も譽れもなき身を夜を日にかへて、粉に碎き猶食ふを得ず、食はしめ能はずば如かじ口にこそ美味ならぬ座ながら三度の飲食に事かゝず、家主の居催促に面皮失せずも、一生働きに終はるとも住み得まじも今樣の煉瓦造りの大厦の下に、雨露を凌ぎ暑さ寒さの折にふれては、洗ひ立ての衣程々に着て、心傷めず籍面汚しだにせば、入監してこそ人がましく生命もつなげ、况して濡ぬ先てそ露とも いとへ、一び穢せば迚も一生ぬぐひ難き身の耻を二びするも三びするも同じあふれの身なるをやとおのかし。造り出る罪惡が暗處の底に集合す、いかて此間に淸きもの正敷事の生ふし立ち得ん、扨は數百の戒護者何にかせん日曜毎の敎誨もいはゞ是れ燒石に水のたとへのみ、櫻田門外雲を凌ぐ建築も、つひに處狹くやならまし、よしや罪人なりとて積み重ねても置得ぬに、囚屋の棟如何に増し加ふとも事足りぬべき理りかは、當路の人思ふなく省みるべき處に省みられさるもの、かくて久しからはあはれ此間の消息を如何。

思ひ沈む頃幼き人々庭に下り立ち足拍子面白く「桃から生れた桃太郎」と蹈歌の聲高く聞えたり漸う我も世の外に引出されて無我の境に一時間を消す、名高き高德の觀化承るにも靜座古人の敎誡を讀みもて行くにも幾入まさりて精神の修養を得るは此時にこそと嬉し主の君謝より何もたうべ給はす、一念を筆に注いて例の如し、此夜を徹して法律新聞に送るべき原稿を認む。

▲廿二日　三時を聞く起ちて薄粥調へ、二楷に持參す、久々にて箸を横へ梅干鹽等にて三ツ程きこす、右の二品は十數年來類ひなきものにもてはやし給ふ、午前七時半頃、頃日來の書類にやあらん數多一括して曾禰荒助君を其官舍に訪はる、凡そ數の年月小息みなく認め

玉ふか中に、たま〳〵窺ひ得る其一端は天候氣象の事多き樣なるか、中にも何と感し玉ふての故か、時の大藏大臣の姓名を連記さるゝものいと多き樣なり、如何の理りにや我も人も知らす。

幼きは今朝元氣殊の外よろし、家の外へは我身付添ひ參らせては一歩も出さる慣はしも、よからぬ子等に交りて其風習に染ませしと思へはなり、引かへて家の内の活働は常に其心任せたれは、梅雨の頃乍ら露斗りもいふせからす、伸々と遊ひ玉ふ、三ッにならるゝか見るもの聞くものゝ何之れに付けて山は如何にして出來しや、石は何より成るものそとまわらぬ舌もて引もきらす問ひより玉ふに、一々答へ參らすも學なく識淺き身にはすきたる業なるを、時刻來ぬれは棄置かたみ、着古しの衣とも屑屋に拂ひて、若干の代にかへ、米味噌醬油なんととり〳〵求めて、煮炊く線香花火のはかなき光りをよひやみにいとよき樂みと見はやして握ぎ〳〵の出來るを待ち玉ふ愛らし。

▲廿三日　三度の食事も心至らぬ時は更に手にとり給はすたま〳〵たらへましても箸だに下ろせば直に二楷の書齋に七五三繩ゆひ渡せる中に端座して凡そ人世の慾情一切に無念なる主の君、けふのみは如何ありけん幼き人達の朝げの後の唱歌幾日振にやあらん靜かに打聞きて嬉しけに見えさせ給へるが珍らかなりしのみにて終日無事。

▲廿四日　例用の外夜まてぬひものに終る

廿五日事情よく知りて深く同情せる人あり明日よりは此腫の心配させしと誓ひ行しが其待わたる便遲し債鬼の來迫るもの二人斗り一人〳〵あつく禮もて謝しかへす二楷の子達に要なき聲聞こゑしと心を痛む。

數ふれば早くもこゝに八年餘り、若し夫れ及はぬ乍ら信する道ととる處の主義の爲めに、身を犧牲の覺悟の上より淸貧に安んするの念なかりせば、如何に長き年月世にある甲斐もなく明しくらすものそ、己れを欺き、一念を矯め、一つ下くる頭たにあらは、人なみ〳〵に花を戀ひ月にも醉はめさなくもいと幼きか一人たにおはさずば、身も輕く心も適ひて過さし年の樣に霜夜の虫

の音に合せ、夜なく〳〵辻占ひさまても衣食の料には事かゝせ參らせしを、またなきより處と傍へ離れぬ足手まとひに夫すら叶はぬ心苦しさ、まして足らわぬ文筆の料か何斗りの助けならん、唯夫も是も主の君が十年一日のごと其非尋常の學識と、凡ならぬ卓見、はた燃る火の熱誠を抑へ褁みて滔々名利の世に逆らひ、爲めに當時に疑はれて下獄三年の憂愁の中にも、寸も已れを枉けず其所信を傷けず、終始一貫せる至誠烈直にはさしも懷疑深き司獄官の心をも溶解し得て、ゆるされて一獄則の身を拘るあらず役をとずら鬚髯を剃るを拒みおほせ、剩へ監內に筆硯の常備をさへ許可されて、一心專念其主義を發揮するにヨ夜これ勉め得たるが如き、凡そ世ありて以來監獄ありて此方東西に例しなき特躰を得、爾來今日迄誤解交も起れども些の辨明を試むるなく、超然自若寸刻も其靈の上の働作を止めず、時に食を斷ち眠を廢し、恩愛を去り、世に隱れて要は一切を公義に貢獻して 露も私念私慾なき類ひ稀なる高節に勵まされ、言はぬ桃李其ほとりいつしか蹊をなすの日を

樂しみ、將た幼子連のすぐよかに生ひ立給ふを其母君に見悅ばせ參らせんの外望みなき我世の折節に、上なく厭はるゝを籬の彼方なる梅の實の色つきぬるを見るに付けつゝ、天つ日の照さん限り露の惠みの絕へせぬ極みいつかはと下またるゝになん。

夕暮方より子達伴ひて平河天神の緣日參拜に參る、植木屋數多各其丹精の艶を競ふて不自然なる自然に、乾燥せる都人の眼を喜ばすぞかし、色よきに眩惑され、實を結ふ事多きに垂涎して、價惜ます買ひもて來れば、根なくして幾程もなく枯るゝがありと聞く、大路は人をもて埋め立てられたれば、おのかして宙をありきて推し推さるゝ樣目さまし、塵埃のたつに任かせたれば賣り出でたる飮食物如何に汚れにけん、まして彼のおでん煮賣りものゝ類ひは其原料なるつめ溜りを蕎麥天麩羅屋鰻屋なとの使用し食し殘せるを値安く買取りたるものゝよしなれば、如何ヨり不潔汚臭の甚しからん、菓子餡類は時節柄腐敗に傾けるも多からんを、唯眼に見て美しく食慾を喚起するに余りあるが爲めに盛んに人

の口に上る、心あるものは之を唯肉身に害ありとしてのみ非難すれども人類食物の及ぼす處か如何に靈魂の上に大なるやといふものあらず、試に見よ一杯の酒は人の動作行爲を平生と一變せしむるにあらずや、また憂愁を含める親の乳は寧ろ心なき兒の悲鳴を増さしむるを、脊戸の畑に芋菜堀とり清水流るゝ柳の蔭に洗ひ淨めて親子兄弟一つ鍋圍みて團欒する片田舎の人の心は昔作らに朴直なるを、之に反して泣き叫び血と流さしめて毆打撲殺せる牛豚の肉を洗ひもせず、淨めもやらず、口に味よからん限りは責任なく信切なき樓婢酌婦の手に打見は躰よく持出されたるを、舌皷して得々滋養衞生を唱ふる人、あるひは彼勞役に汲々して胃膓は瞬間も空虚ならしめましき袋、または器物の樣に心得手當りまかせに葬り去るを常とせる都會下層社流の間に、何ぞ嫉妬怨恨盛んに殺氣暴横の充滿するの甚しきや、主の君深くこれを思ひ彼を想ふて自らは勿論發育盛りなる、幼子達にも始めより肉食は勿論獸乳卵類の世の稱して滋養とするものを斷禁し而かもいまた嘗て一度びも病を得ることあらず、肉色筋骨の尋常にまさりて逞しくすが〱しく生ふし立ち行く姿を己れが主義の動かし難き實證の一つにはし給ふ况して塵埃の汚氣を受けたる食物は如何に美事なりとも露すゝのさる例なればかゝる場所に出てゝは物ほしとの給はず五厘の線香花火を求め歸る。

▲廿六日　けふまたなく芽出度事あらん、風呂を淨め湧かし大前に神酒とり捧げ國旗出せよとなり三時離床湯は程なく湧きたれと他の今に始めぬ無心の命に思ひなやみしかいとせめてはかなきものどもとり集め、さるべき方に運びて僅かに神酒一合を求め歸りて苦心の奉供大御心に叶ひしや否や幼きは君が代歌ひて珍らかに賑々敷朝飯終りしは午前七時少前なりき、而かも何故めで度やを知らず我宿斗り軒にひらめく日の御旗異樣に感ず。

午後三時頃に至り號外の聲四方にしきり、喜びの氣天地に滿つ、果然嗚呼果然第二皇孫殿下安々と御誕生被遊しと傳ふ、一同幼きは分けて躍り立ちて喜ぶ思へば

けさ萬歳を唱へ奉りし頃は恰も其時刻なりき主の君の靈感に恐惶す。

さるにても雲の上の御喜びや如何斗りなるらん年々にいや、次々に繁ります畏きあたりのおぼへ榮えいつの世にかゝるめで度例しやはありけん、分けてもけふといふ日は彼海の外なる異國の帝戴冠の御式擧らるゝとて其準備なみ〳〵ならず、我國よりも宮家扨は數多の人々わざ〳〵出立たせて言祝ぎ申させ玉ひしを生憎に帝御氣色常ならずとて上下かず〳〵の心構へも空しく延引あらせられしと聞く、國人の失望如何斗りなるらん、引かへ此方には降つゞく梅雨の御空に日影仰ぐよりも猶待久しかりし御あれましも、遉がにけふとは思ひ設けざりしを、特に御母殿下の御降誕日と承る、此曉の天が下の光とゝかえを御身一つにとり集めさせて綠茂れる青山の御所深く天降らせ玉へる王御子殿下の御生ひ先は思ひやり奉るも愚かなりや、萬民の喜び申も盡し得んや。

石丸千五郎氏河岸よりの歸るさ、常のこと立よりて何事もいはずまづ嬉し泣にむせぶめり、金一圓を捧げ去ん。

釜元の烟りけふ珍らかに賑ひてお好みの豆を煮て參らす。

午後より縫物及び洗濯にくる、夕げの後は例の打つれ參りて門外散歩す

▲廿七日　曉深く起ちて窓推せばほとりはまだ暗きに雨雲八重に立かさなりて大路の燈火消がてに遠近の雞の聲聞えたり軒のべ田畠のくろ日ねもすあさりくらして優遊自適する片山里のとりの聲に目醒むる朝明けは命も伸る心地なん。するを、これは明日が日けふの暮るゝも待たで割かれ刻まれぬべき我身とも知るや知らずや、狹き籠の内に限られたる食事にかつ〳〵活きてあるあはれさ都に聞く其鳴音にはおのづから悲調深く何とはなしに身に染む心地すさるに付けても今更になつかしの故里やしのぶにけふる軒の五月雨、けふもまた晴べくも見えねど空はやうくほの〴〵と明け離れぬ。

けふ巣鴨監獄署に田中正造氏を訪ひ慰めばやと朝げの

用事とく仕舞ひて、幼き一人を伴ひ出立つ、九段坂の上にてふと感ずる事あり、招魂社を拜して其まゝ歸宅す、下六番町東山堂の主人、主の君が靈性の上に顯る世態調査の必要上とりて見らるゝ十三余種の新聞紙の價數ケ月滯り居るを心にもとめずいといたく同情寄せてけふも何くれと來慰めらるゝぞ嬉しき。

▲廿九日　幼き人々の日課と認めものに事なくくる卅日降りつゝく雨のあしけふ幾日にわたりて猶小息なきはすぎし半歳の程に犯せる罪とがをさ乍ら祓ひ淨めよとの神の御心か、ともかくも一同御入浴例よりも心して子達の垢流し參らす。

先の頃二度斗り雇ひし車夫年まだ二十歳にたらぬか苦心の末漸く濟上りし中學も半途に廢して、一家の事情に驅られしかく〳〵と物語りしを哀れと聞しか足に底豆てふ煩ひ出來て藥の代は扨置き、糊口のすべもたえ親同胞は古郷遠く況して洗ふが如き赤貧にいひやるも心なき業なるを、助け給へと倒るゝ樣にいひよりぬ、之れもまた　陛下赤子の一人なると、如何になもして病癒ゆる迄養ひやれよとの命あり、緣しあればこそあれよしとかくは己が身を削りてもと思ひ定めて、此新來の客人を迎ふ。

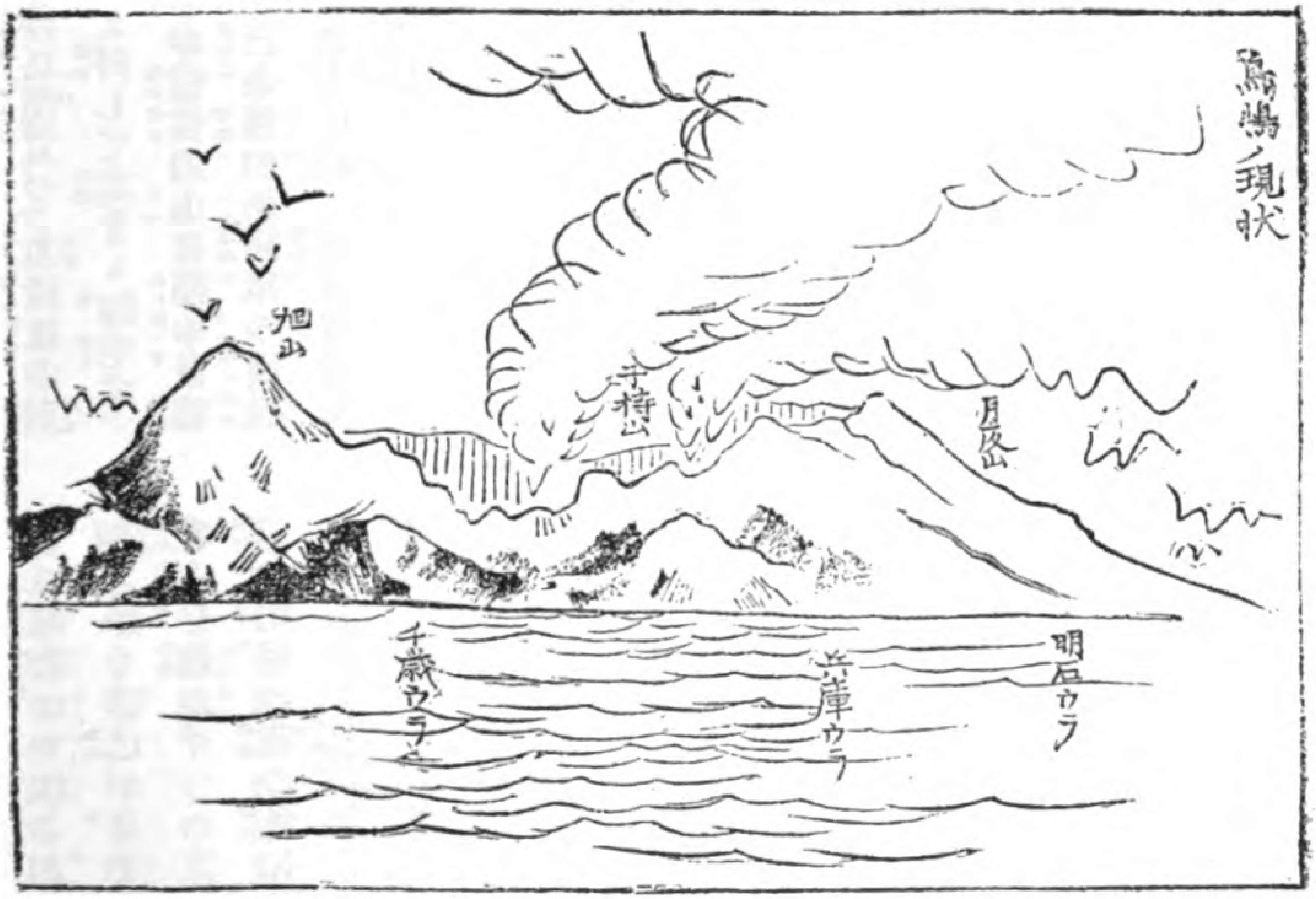
庭の柘榴の花の色にもまさりて、燃る心をいかゞをさえん、來ん後半期はとやせんかくやと思ひ渡る、晝過る頃より債主次々に來はたる、恰も水の低きに就くが如し、而も皆よく主の君の事情も知りて快く後日を期し去る、伏見の雪になやめる常盤がしふねき敵の設けし關の彼方に事なく越へ得しならば、我が今の心地やしけん、ホッと斗胸落居し頃債主の一人なる藤村屋の代理者淺井某これはまた殊更にいとよく同情しくれられ寧ろ何くれの世話見んとて老ひの足引きつゝ來ませり分けても彼の三ケ月まで滯り居る家稅も、嚴しき催促だもせずよく信じよく待ちくれたる志しに對し如何にせずやといへば、さらば我身自ら參りて斷り申さんとて快く去らる。おのが來れる理由はよそにして主家處をかへたる氏の振舞嬉しとも辱し。（完）

## ●鳥島噴火の探檢

### 兵庫丸乘組各新聞記者の報告

郵船會社小笠原定期船兵庫丸が鳥島噴火の情況を報告せるより内務省は軍艦高千穗の外兵庫丸を傭ひ入れ内務省參事官有吉忠一、大學教授田中館愛橘、同大森房吉の兩理學博士、その他警視廳、東京府の吏員諸氏に之が探撿を命じたるを以て京濱の新聞記者十一名幷に遺族等之に便乘し八月廿二日横濱を拔錨し翌二十三日午前十時八丈島三根村沖に到着二一行は直に上陸して島廳に到り八月七日前後の天候の如何ん及び地震等の有無を調査せるに當時八丈島の沖山爲一なるもの鳥島に出稼し居たるが彼は變事前八丈島へ歸る友達に向ひ鳥島にては三ヶ月以前より鷄鳴かず温泉の温度非常に高まり今春櫻花滿開後間もなく葉は紅葉となり花と共に落葉したる等不思議の事多ければ或は遠からず天災來るやも知るべからずされば今度の勘定を取り次第便にて歸島すべしと語りたる由を傳ふるものありたりしも是とて呑ん氣なる島人の物語りとて左程重きを置くに足らず結局學術上是ぞといふべき特徴を得る能はず

▲**鳥島到着** 人夫十三名(重に遺族)上陸用として漁船一艘、カノー船二艘を搭載し午後五時八丈島三根沖出帆翌廿




四日午前二時スミス岩を右舷に望み午前六時には早くも鳥島を船首彷彿の間に認め漸く進むに隨ひ十哩にして明かに噴烟を認め得るに至る午前九時三十分鳥島明治浦沖約一哩の所に漂ひて甲板上より望見すれば島の北、東南三面に中部子持山の爆發火坑より噴出したる火山灰及岩石等を以て覆はれ明治浦附近より落崎初寢浦に掛けたる西部に僅かに靑地を認むるのみ沿岸は一面斷崖絶壁より崩落したる砂石を以て滿たされ先づ人間は愚か蟲一匹の生存すら覺束無きを思ひ一行頗る落膽す

兵庫丸は漂淵の懸念のため汽笛を續鳴し生存者に注意を與ふるも答ふるものは岸打つ濤聲と風の吹き廻しに依り時々甲板上に硫黃の惡臭を送るの外何物も無し殊に最も懸念したる千歲灣即ち玉置村の有りし處は新月形の灣頭總て土砂崩落して少くも四十度の傾斜を以て灣内に直下し恰も摺鉢を縱斷したると同一形狀となり居れり

兵庫丸船長が去十六日一周したる際も既に島狀の變化甚しかりしも千歲灣に並べる漂流里即ち洞屋の在る處にして或は避難者あらんも知るべからずと一縷の望みを屬したる箇所は原形を存し居たるに豈圖らんや何時の間にか海岸線より竈形に間口凡そ三四十間奥行五六十間の小灣と化し去り居たり流石の船長も是には只驚くの外無かりし

一行は取敢へず上陸の部分署を定め午前九時四十分先づ田中館、大森の兩博士大學學生四人と共に八丈島より來れる十三名の遺族及び人夫玉置の番頭山田多惠次等を先導とし ボートにて明治浦に上陸間もなく左の大森田中館氏報告を本船に送れり

小官等山頂視察に赴く危險無きときは日章旗を揭ぐ 明治浦附近捜索の爲め人夫警官の上港差支無きものと認む

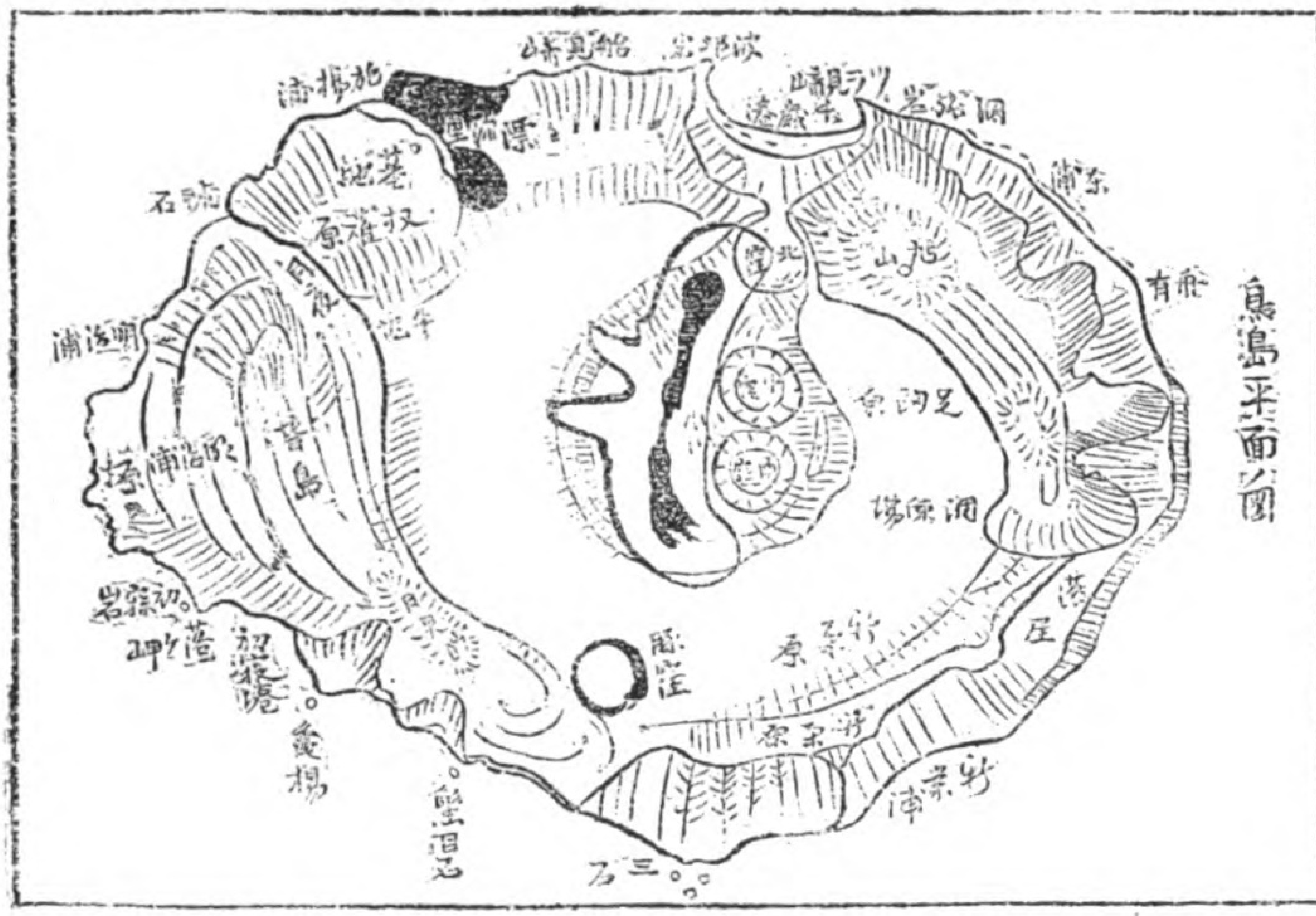
▲上陸　右の報告に依り有吉參事官、松井警視等漁船にて上陸約一時間にして月夜山上に日章旗を立つ 次て便乘者一同相前後して明治浦に漁船寄す 明治浦と云ば甚だ穩なる埠頭の如く聞ゆるも實は屛風の如く列りたる熔岩の僅に十二三間程入込たる迄にて上陸せんとせば一人宛熔岩に取附き攀ぢ上るといふ始末なれば其困難一方ならず 前後上陸を終りたるは漸く正午なりき時に寒暖計八十六度海水溫度八十二度一行は各自船中より齎したる一握りの飯とラムネ瓶に容れたる二合の水を力に道無き草山を思ひ〳〵に分け入りたり

▲噴火口の現狀　噴火口は月見山の麓に在り同島にて第一の高き所なる子持山は三分の二崩壞して鋸狀を呈し北窪より中窪に至る南北五町朝日山より月見山に到る幅二町餘は宛然藥研の如く陷落し深さ二町餘に及びて底は砂地處々に硫黃色を認め就中北窪に當る處及び其奥の都合四箇所に於て今尙は凄じき噴火を認む

千歳灣と明治灣との間に更に一の新港を生ず形U字の如く幅百間、奥行二百間、水三尺程を噴き上ぐ

千歳灣には初め波打際を入る四間の處に崖あり上に四十の家屋、百二十六の人口あり且つ十馬力の蒸汽船を有せしが今回の慘禍によりて地盤陷落し家屋人口悉く地底に埋沒せるは慘といふべし

▲青ヶ島住民の談片　青ヶ島又たの名を鬼界が島と稱す 鎭西八郞鬼退治を以て其名凡に著はる 島中昔時男性多く八丈島昔時女性多し 故に島民家を高處に構へ常に八丈を望むを以て樂みとす 島中處々に瓦斯を蒸發す 池の澤と稱する所噴出最も甚だし地下を掘りて薯蕷を埋むる數分時ならば熟煮し食ふべし 此地は所謂天明年間噴火の火口原にして危險無きにあらず 然れども住めば都の諺の如く島民は年を追ふ每に歸住するもの漸く多しといふ 兵庫丸の同島に寄航するや八丈島々廳靑ヶ島出張所書役小島忠吉氏小舸を飛ばして兵庫丸に來る 倉山島司問ふに七日以後の情況を以てす 小島氏言ふ 十日午後九時頃南方に當りて一聲の音あり地を搖ぐるが如く感ぜられたり 十七八日頃鳥毛海上に浮びつ 漂着す 二十三日軍艦高千穗西海岸に漂蹰す 二十五日一個の箱漂着す 開



き見れば鰹節一個釣道具一式小兒の菁腹懸一枚男子の白地單衣一枚女子の單衣袷衣各一枚麥一升粟二合毛布の襤褸一片在中せり同尸木の根の如きもの一根漂流し來る其他異狀なしと嗜ヶ島は鳥島を距る海上百餘浬の北方にあれども黑潮に依つて或は遺物の此島に漂着し來ることあるを慮り急に害役をして該箱を齎らさしめ山田某をして之を撿せしむ然れども一も鳥島住民の遺物と認むべきものなかりし

●英學新報　津田梅子女史の主筆なる同誌は方今世に行はるゝ英語習字雜誌中最も有益にして且つ最も廣く讀まるゝ好雜誌なるが八月十五日發行第十九號には日英婦人同盟の一擧と題し英國女學生と日本女學生と書簡上の交際を開始せる二種の書面を登載したる頗る斬新奇抜の趣向なり外に本文英語研究法、時報逸話より紅葉山人著金色夜叉の譯夏の雨、武士道の註釋等趣饒味多にして習學上便益なる材料を以て充さる（發賣所東京堂）

## ●女學生の不品行に就て

日く女學生の墮落、日く女學生の賣淫、日く女學生の腐敗、日く何、日く何と都下の各新聞女學生といへる題號の下に種々なる惡德記事を掲載するもの少からず、是れ甚だ厭ふべき事なり、女學生果して墮落せるか是れ眞に悲しむべし、然れども世間所謂女學生の墮落と存するものは是れ眞の女學生の墮落にあらずして從來世に横行せし墮落婦人が女學勃興に時期を利用して自から女學生と稱しその容態風采を女學生に擬して世を欺くものに外ならず、世の新聞紙はこの物態を見て直ちに女學生の腐敗と稱す猶と薰とを辨へざるもの甚しきものといふべし

## ●蝦茶袴の濫用を禁ず

女學勃興の勢に乘じて蝦茶袴の流行都鄙甚だしく至る處の工女、酌婦、雇い女、ころづき婦人、賣淫婦、子守、義太夫語り女俳優、其他すべて素性の確かならざる婦女子の輩が蝦茶袴を穿ちて白晝公然市内を横行し以て自から女學生を粧ふものありこれ甚だ惡むべく厭ふべき現象なりかくの如き現象あるを以て女學生なるものに直ちに下卑なるものと人に思はしめ世の新聞記者や、口惡るき輩の爲めに女學生墮落の口實を作らしむるに至れり眞誠なる女學生の爲めには甚だ氣の毒の至りなれば何とかして社會道德の制裁上、蝦茶袴の濫用を禁じたきものなり

---

**每月一回五日發行**

**定價表**

| | |
|---|---|
| 一冊（紙數二百八頁）‥金二十錢 | 郵稅 |
| 四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢 | 一冊 |
| 八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢 | 二錢 |
| 十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢 | |

内（定刊數……十二冊
増刊四回‥三、六、九、十一月價格同一）

**廣告料**

| | 二十四字詰一行 | 半頁卅二行 | 一頁六十四行 |
|---|---|---|---|
| 特等 | …… | …… | 割引三十三圓 |
| 一等 | 四十三錢 | 十三圓七十六錢 | 割引二十七圓 |
| 二等 | 三十五錢 | 十一圓二十錢 | 割引二十二圓 |
| 三等 | 三十錢 | 九圓六十錢 | 割引十八圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

**注文略規**

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

不許複製

明治卅五年九月十五日發行　第貳卷第十二號

編輯人　松原岩五郎
發行人　内山正如
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

# 博文館各雜誌發行表

## 定價

| 雜誌名 | 定價 | 郵税 | 發行 |
|---|---|---|---|
| 太陽 | 一冊參拾錢 | 郵税參錢 | 毎月一回 |
| 少年世界 | 一冊拾錢 | 郵税壹錢五錢 | 毎月一回 |
| 中學世界 | 一冊貳拾錢 | 郵税貳錢 | 毎月一回 |
| 女學世界 | 一冊貳拾錢 | 郵税貳錢 | 毎月一回 |
| 文藝倶樂部 | 一冊廿五錢 | 郵税貳錢五厘 | 毎月一回 |
| 太平洋 | 一冊六錢 | 郵税五厘 | 毎月曜日 |
| 圖書世界 | 一冊參錢 | 郵税五厘 | 毎月一回 |

## 九月發行日

| 雜誌名 | 號 | 發行日 |
|---|---|---|
| ●太陽 | 第十一號 | 五日發行 |
| ●中學世界 | 第十二號 | 十日發行 |
| ●女學世界 | 第十一號 | 五日發行 |
| ●文藝倶樂部 | 第十二號 | 一日發行 |
| ●少年世界 | 第十二號 | 一日發行 |
| ●圖書世界 | 第二號 | 廿五日發行 |
| ●中學世界秋期增刊 秀蘭芳菊 | 第十一號 | 一日發行 |
| ●女學世界秋期增刊 初紅葉 | 第十二號 | 十五日發行 |
| ●太平洋 | 第三十五號…… | 一日發行 |
| | 第三十六號…… | 八日發行 |
| | 第三十七號…… | 十五日發行 |
| | 第三十八號…… | 廿二日發行 |
| | 第三十九號…… | 廿九日發行 |

## 廣告料

| 雜誌名 | 一行一回 | 活字 |
|---|---|---|
| ●太陽 | 金四十五錢 | 五號活字十八字詰 |
| ●少年世界 | 同 金四十錢 | 五號活字廿四字詰 |
| ●中學世界 | 同 金三十錢 | 五號活字廿四字詰 |
| ●文藝倶樂部 | 同 金四十錢 | 五號活字廿四字詰 |
| ●女學世界 | 同 金三十錢 | 五號活字廿四字詰 |
| ●太平洋 | 同 金四十錢 | 五號活字廿二字詰 |
| ●圖書世界 | 同 金十五錢 | 五號活字廿四字詰 |



(後付の一)

# 日用百科全書 女學書類

大判洋裝紙數一冊二百卅頁以上
正價一冊金貳拾五錢
郵税一冊金六錢ツヽ

日本婦女子の淑德令操を養ふには本邦特絕の學術工藝を以てせざる可からず徒らに西洋の流行に眩し國風を破り良俗を棄る如きは大に注意を要すべきなり且つ方今各所に多くの女學校設けありて女子教育の道盛んに行はるゝは國家の爲め賀すべき現狀なれ共女子は外に在つて成規の教程を履むの傍ら家庭に在つて淳々學藝を修むること最も必要なり況や幼齡未だ父母の膝下を離れず高尙の學問を修むるの年齡に到らざる令孃は家庭教育の力最も與つて効あること言ふを俟たざるあり今茲に日用百科全書中より婦女諸君が學校以外の修養として欠くべからざる禮式生花家政家事手藝一切の要册を撰びて御購讀の便利に備へんとす請ふ御高覽あれ

▲和洋禮式……大橋乙羽君編
▲茶の湯と生花法……博文館編輯局編
▲實用料理法……藤本藤蔭君編
▲家政案内……岸上操君編
▲琴曲獨稽古……博文館編輯局編
▲衣服と流行……博文館編輯局編
▲裁縫と編物……吉田調子君編
▲住居と園藝……博文館編輯局編
▲勤學と處世……桐生悠々君編

（後付の二）

（後付の三）

華族女學校學監下田歌子女史著
（帝國婦人協會長）

# 家庭文庫

定價　壹冊金三拾錢●三冊金壹圓●六冊壹圓九拾錢●全部三圓六拾錢●郵税一冊六錢宛

下田歌子女史學東西を究め一種超凡の新智識と新卓見とを以て現に子弟敎育の道に從事せらる本書各編皆な精實を極む故に他の空論と異り上下を通じて一般社會の家庭上に適用するは勿論なり全部拾貳冊皆是れ著者が多年の實驗上より出てたるもの如何に在來の家庭書類と其趣を異にせるかを驗せられよと云爾

## 女學生

### 女子書翰文

書翰は先づ自己が云はんと欲する所のものを意の如く筆に寫し得られんとを務むべし、本書は此趣旨に依り丁寧懇切に書翰文を説明せられたり。

### 女子普通禮式

▲讀賣新聞評　本書は此等の俗書と異なりて最も斯道に智識經驗深き下田歌子刀自が古今東西の宜しきを制し一々挿圖によりて丁寧に陳述したるものなれば其圓滿完備にして斯道の指南車たると言を待たず。

### 詠歌の栞

本書は類題歌詞材料作例書式等に至る迄其現今に行はるゝものゝ中最も必要なるべきを取り出て初學者のたづきとなさんとす、詠歌の栞として本書の右に出づるものなけん。

### 料理手引草

夫れ料理と献立とは新たに家を持たる婦人は勿論學校にて之を修めたる人と雖も困難を感ずる所なり、故に本書には專ら其實踐を裨益すべき事を示して其衛生と經濟との注意を主として年若き主婦が參考の一助とす

（後付の四）

# 必讀之寶典

## 婦女家庭訓

此編には其母たるべき人の注意衛生の點より幼兒が漸々發育して小學に在る程の事及其翫具遊戯の有益なるものをも丁寧懇切に擧げ示さんとするなり。

## 母親の心得

此編には其母たるべき人の注意衛生の點より幼兒が漸々發育して小學に在る程の事及其翫具遊戯の有益なるものをも丁寧懇切に擧げ示さんとするなり。

## 家事要訣

本書は衣服の取扱方裁縫洗濯染物等の簡易法及び住居の選定構造に就きてその注意殊に室內裝飾清潔法及び金錢出納家事經濟の概略を詳述せり

## 女子手藝要訣

蠶桑裁縫刺繡押繪編物等凡て我邦の女子に欠くべからざる手藝は一々圖解して詳密なる說明を施し之れを讀めば師に就かずして各種の工藝自ら悟了するを得べし。

## 女子普通文典

浩澣難解の文法書は世其選多しと雖も、以て專門の學生に適すべくして以て日常家庭の用に供し難し、此書は煩を避けて簡に失せず最も女子日常の用に適合せるものなり

## 女子作文の栞

本書は先づ文章は如何にして作るべきものぞと云ふことを示し、且つ種々の場合に望みさまざまの題を探りては、斯うやうの材料に成り立たしむべきものぞと云ふことを教へたり

## 女子遊嬉の栞

本書は專ら女子がものする幾多の遊嬉中其體育に將た智育に益多くして害なかるべきものを選びそが心身の發達を助く又鼇頭には我國太古よりの遊嬉の沿革を記したり。

## 泰西所見 家庭教育

其國異なれば風俗又別なり我國外邦に交際する今日又婦女の彼國婦人と交際するの必要尤も多しそが第一に心得べきは彼國家庭の如何を詳かに知るより急なるはなし本書之を詳記せり。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

# 女子作文

▲日本大文典　落合直文先生著　正價一圓七十五錢郵稅十八錢

▲中等教育文法教科書　落合直文先生著　正價四十五錢郵稅八錢

▲女子普通文典　下田歌子女史著　正價卅五錢郵稅八錢

▲日本大文學史　大和田建樹先生著　全五冊各一冊四十錢郵稅八錢

▲中等教育國文軌範　落合直文先生著　正價廿五錢郵稅六錢

▲吉野拾遺詳解　中村秋香君校訂　正價廿五錢郵稅四錢

▲校註土佐日記　佐々木信綱先生校註　正價十錢郵稅二錢

▲校註竹取物語　佐々木信綱先生校註　正價十二錢郵稅二錢

▲校註伊勢物語　佐々木信綱先生校註　正價十二錢郵稅四錢

▲古文讀本　大和田建樹先生選　全六冊一圓六十錢各一冊郵稅四錢

▲校註更科日記　佐々木信綱先生校註　正價十二錢郵稅四錢

▲校註方丈記　佐々木信綱先生校註　正價八錢郵稅二錢

發兌元　東京日本橋區

（後付の六）

# 必要資料

▲歌まなび　大和田建樹先生著　正價一圓五十錢郵稅十六錢

▲詠歌自在　佐々木信綱先生著　正價七十五錢郵稅八錢

▲新撰歌典　落合直文先生著　正價四十錢郵稅八錢

▲竹柏園集　第一編　佐々木信綱先生編纂　正價卅五錢郵稅六錢

▲竹柏園集　第二編　佐々木信綱先生編纂　正價卅五錢郵稅六錢

▲百人一首講義　佐々木信綱先生校註　正價二十錢郵稅四錢

▲新體詩學　大和田建樹先生著　正價十五錢郵稅四錢

▲歐米名家詩集　大和田建樹先生著　正價三十錢郵稅四錢

▲作文寶典　大和田建樹先生著　正價二圓二十錢小包四百匁

▲作文良材美辭寶典　西村眞次君著　正價卅五錢郵稅六錢

▲中等教育作文法　萩野文學博士著　正價三十錢郵稅六錢

▲作文組立法　大和田建樹先生著　正價十五錢郵稅六錢

本町三丁目　博文館

（後付の七）

大好評全部出版完成

# 世界冒險譚

櫻井鷗村君譯述《文武堂藏版》口繪寫眞版挿入

## 第壹編 金堀少年

少年の一團隊が險を冒し難を衝いて砂金採取に出掛た譚だ金堀少年は數十年前米國大陸を旅行する時の因難な狀態を勇ましく述べたものである。

## 第貳編 遠征奇談

英國の二少年が商船に投じ世界巡航の途、原野に海島に歷遊し暴風巨浪を凌ぎ猛獸を斃し山賊と戰ふ等勇烈以て少年子弟の志氣を興奮躍起せん。

## 第參編 二勇少年

二百年の昔、愛蘭土と英吉利との戰爭に敵と味方の勇少年親友の義を結び戰酣なるに互に助け助けられ萬死の中に一生を完ふした美くしい物語。

## 第四編 續遠征奇談

遠征奇談の快絶なる續編に入り、二少年が太平洋の航海に熊海狩賊珊瑚島あらゆる危險を冒して遂に目出度世界一周の大航海を了はる奇譚壯話。

## 第五編 決志少年

剛膽なる田舍少年、志を決し大都會に出て奇策を施し競走射擊に功名を博し遂に亡父の仇を報じ義に奪はれたる家產を復す立志的大冒險譚なり。

## 第六編 漂流少年

歸省途中の二少年圖らざる船難事に逢ひ辛くも生命を拾ひ荒野に漂着して徒歩故郷に急ぐ間種々雜多の冒險の末父母に相見るを得た壯快な物語。

## 第七編 殖民少年

濠洲無人の原野を開き大財產を造らうと遙々英國から出かけ意外の變事て目的破れ幾度も死にかけたを天運に遂に大財產家となる壯快な物語。

## 第八編 航海少年

北は寒帶氷山の海南は熱帶蠻人の地に少年と船長とが海賊海馬氷塊暴風難船等に出逢ふ冒險事實は千變萬化思はず快哉を絶叫するは此航海少年。

## 第九編 不撓少年

惡漢の爲めに乞食ヶ群に入り不撓不屈の精神を以て艱難を凌ぎ人を救ふて其恩顧を受け醜類を倒し遂に先祖の財產を恢復したる教訓的の冒險譚。

## 第拾編 朽木の舟

野蠻未開のオリノコ河の洪水て船を失つた一行朽木を拾ひ船となしまた筏に乘つて漸く上流に至り新に船を造つて歸帆したる艱難辛苦の物語り。

## 第拾壹編 俠勇少年

兄弟の少年アラスカに叔父を穿鑿せし爲め深山に彷徨ひ意外にも王城あり叔父は其大臣たり恰も亂あり太子を伴ひ共に故郷に遁走する珍事異聞。

## 第拾貳編 絶島奇談

英米に評判高きアリヤツト船長の冒險小說なり老船頭の義俠一家族の厄難を救ひ無人島に漂流蠻奴との苦戰、老船頭の經歷談等悲壯痛快を極む。

壹册正價金參拾錢郵稅六錢

發兌元 東京 博文館

（後付の八）

女學世界
每月壹回五日發行
第貳卷第拾貳號
（明治參拾參年十二月十五日 第三種郵便物認可）
（明治參拾五年九月十五日定期增刊）



 秀英舍印刷

**監修**
**小山静子　KOYAMA Shizuko**
**京都大学大学院教授**

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑭
明治35年9月（第2巻第11号、第12号）

2006年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2960-X　C3321